

# パーソンセンタード・アプローチとの出会い

南山大学人間関係研究センターのミッションは、「多様なあり方を尊重する、人間性豊かな社会を創り出すために」です。そのための研究の目的として、「広く学際的視野にたった人間関係研究」として、人間関係に関する理論研究、人間関係へのアプローチ方法の実践研究、人間性豊かな関係性と社会の創生に向けた応用研究、に取り組むことを掲げています。人間性豊かな関係性や社会の実現に密接に関わる領域が人間性心理学であり、その中でも、本号の特集のテーマになっている「パーソンセンタード・アプローチ」（以下、PCAと記します）とは深いかわりがあります。

PCAとは、C. Rogersが好んで用いていた言葉であり、彼のカウンセリングやエンカウンター・グループなどのアプローチが含まれ、個人の成長への可能性を信じて促進していく支援のありようが重視されています。最近では日本語として市民権を得た、「ファシリテーター」という言葉も、元々はRogersが好んで使い始めたものです。特集では、センター研究員の坂中正義さんによる企画のもと、「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」というテーマで、日本のPCAで著名な先生から5編の貴重なご寄稿をいただきました。また、2019年度冬に南山大学で開催した公開講演会「PCAの道一源流をたどる」の講演録も掲載されています。日本におけるPCAの歩みの英知が結集された記録として大きな価値がある本号を発行できることに誇りを感じるとともに、ご寄稿・ご校正いただきました諸先生に感謝申し上げます。

PCAの実践者・研究者の坂中正義さんが南山大学に赴任し、人間関係研究センターの一員となったのは2013年度からでした。その後、青木剛さんも加わり、2019年度からは当センターでPCAの公開講座もスタートしました。ラボラトリー方式の体験学習の研究と実践をしてきた当センターにとって、坂中さんが加わり、PCAの公開講座や公開講演会が開催され、本号で特集を組まれたこと自体が、当センターにとって「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」なのです。PCAもラボラトリー方式の体験学習も、「人間性豊かな社会を創り出すために」という目指す方向性は同じであり、歴史が異なる2つのアプローチから、「教育の革新」が生まれる可能性があります。

特集以外には、Articleが2編、研究ノートが1編、実践報告が1編、資料が1編、掲載されています。研究ノートと実践報告は、オンライン授業での体験学習や実習に関わるものであり、コロナ禍の2020年度におけるオンラインでの当センター研究員の試行錯誤の成果を是非お読みください。

2020年度の当センターの諸活動は、20周年イベントや公開講演会の中止、多くの公開講座の中止と人間関係講座のオンラインでの実施と、新型コロナウイルスの影響を大きく受けました。2021年度前半に開催する予定の講座もオンラインでの実施を予定しています。TグループやPCAの講座が開催できるのは、まだ先になりそうですが、いつの日か必ず再開をしますので、もうしばらくお待ちください。

# 人間関係研究 vol.20(2021)

## 巻頭言

パーソンセンタード・アプローチとの出会い ..... 中村和彦

## 特集「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」

公開講演会

～PCAの道：源流をたどる～ ..... 村山正治・畠瀬直子・飯長喜一郎… ( 1)

私の歩み (This is Me) ..... 田畑 治… ( 39)

私のPCA ..... 野島一彦… ( 53)

自己の居場所を求めて ..... 安部恒久… ( 59)

フォーカシングと私～狭間での巡り逢い～ ..... 池見 陽… ( 67)

PCAと他学派との狭間を生きる ..... 伊藤研一… ( 77)

日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関わる出来事 ..... 坂中正義… ( 85)

## Article

ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討

—2018年春の修養会の実践報告と検討を中心に— ..... 丹羽牧代・楠本和彦… ( 87)

被災地の復旧・復興に寄与するビジネスリーダー達のポジティブ・ストーリー

—AIM2Flourishによる事例研究— ..... 中尾陽子… ( 131)

## 研究ノート

ラボラトリー方式の体験学習における対面形式とオンライン形式の学習成果の比較

..... 池田 満・土屋耕治… ( 153)

## 実践報告

オンライン授業に対応したワークの開発：私をあらわすオブジェ作り

..... 青木 剛・市川紗里奈・山崎綾介・坂中正義… ( 167)

## 資料

日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2020) ..... 坂中正義… ( 181)

事業報告 ..... ( 207)

# The Nanzan Journal of Human Relations vol.20(2021)

**Commentary** .....Kazuhiko NAKAMURA

## **Special Issue : History of Person-Centered Approach in Japan**

Open Lecture

Tracing back a streamflow of PCA in Japan through retrospective dialogue by three great contributors..... Shoji MURAYAMA, Naoko HATASE, Kiichiro IINAGA... ( 1)

This is Me ..... Osamu TABATA... ( 39)

This is my PCA..... Kazuhiko NOJIMA... ( 53)

On searching for my way of being ..... Tsunehisa ABE... ( 59)

Finding focusing on the trail to becoming ..... Akira IKEMI... ( 67)

Being between PCA and other psychotherapy schools.....Kenichi ITO... ( 77)

A chronological table of Person-Centered Approach in Japan  
..... Masayoshi SAKANAKA... ( 85)

## **Article**

An inquiry into significance and challenge of church retreat workshop:

A case study of 2018 CRC retreat .....Makiyo NIWA, Kazuhiko KUSUMOTO... ( 87)

Positive story in areas devastated by the Great East Japan Earthquake:

Appreciative Inquiry for business as an agent of world benefit.....Yoko NAKAO... ( 131)

## **Research Note**

A comparison of learning outcomes between face-to-face and online formats in experiential learning with laboratory methods..... Mitsuru IKEDA, Koji TSUCHIYA... ( 153)

## **Practice Report**

Development of online exercise: Creating art objects that represent self

.....Tsuyoshi AOKI, Sarina ICHIKAWA, Ryosuke YAMAZAKI, Masayoshi SAKANAKA... ( 167)

## **Short Report**

A bibliography on the Person-Centered Approach in Japan (2020)

..... Masayoshi SAKANAKA... ( 181)

**Reports** ..... ( 207)

## ～PCAの道：源流をたどる～

村山正治氏×畠瀬直子氏×飯長喜一郎氏 公開対談

日時：2020年12月15日（日）14:00～16:00

場所：南山大学 D棟DB1教室

講師：**村山正治**

（九州大学名誉教授・東亜大学大学院教授）

**畠瀬直子**

（関西人間関係研究センター代表）

**飯長喜一郎**

（国際医療福祉大学大学院臨床心理学専攻特任教授）

---

### 司会（坂中）：

それでは、定刻になりましたので、「南山大学人間関係研究センター2019年度第2回公開講演会～PCAの道：源流をたどる～」、村山先生、畠瀬先生、飯長先生の公開対談を始めさせていただきますと思います。

司会を担当させていただきます坂中と申します。よろしくお願ひします。（拍手）

簡単に企画の趣旨を少しお話しさせていただいて、きょうの全体の流れ、こんな感じでしていきますということをお伝えさせていただいて、先生方のお話に入っていきたいと思います。

きょう、ポスターなどにも企画の趣旨を載せているのですが、PCAというのは、「パーソンセンタード・アプローチ」と呼ばれるものですが、このパーソンセンタード・アプローチというのは、日本の心理臨床に大きな影響力を持ち、心理臨床だけではなく、教育とか福祉、産業、コミュニティなど、援助や人間関係に幅広く、そして奥深い影響をもたらしてきました。

その歩みというものがどのようなものだったのかということをしっかり見ておくことは、とても大事なことだろうなというふうに思っております。そういうこれまでの歩みみたいなものを振り返るという企画は、あまりこれまでPCAの中でもなされてきていなかったのではないかとということで、そういう歩みをしっかり見ていきたいということが企画の趣旨の一つです。

それからもう一つは、その歩みというのは人とともにあると思うのです。ですから、このPCAの発展とともに歩まれた3人の先生たちの「This is me」、私はこういう体験をしてきたというようなことをお聞かせいただくことで、ま

た聞いている人間一人一人の歩みみたいなものに思いをはせ、そして一人一人がこれからどうやって進んでいくのかみたいなことを考えていく、そういうきっかけになればというようなことを思い、こういう企画を立てました。

ロジャーズが「This is me」ということをよく言うわけですが、この後ちょっとお話ししますが、『ロージャズ全集』にロジャーズの言葉が幾つか書いてあるのですが、ここに「What is most personal is most general. (最も個人的なことは最も一般的なことである)」というような言葉があります。ここに登壇されている先生方の個人的な体験を聞くことは、一人一人の体験を振り返る、そしてこれからを考える、そういう意味でのgeneralな体験になるのではないかと考えていますので、そんなことで企画を立てたというわけです。

まず、先生方の紹介をしたいと思うのですが、あまり私が先生方の紹介をし過ぎちゃうと、先生方が語るものがなくなっちゃいますので、簡単にご紹介させていただきます。

きょうは、こちらから順番にお話をいただくというふうに考えております。飯長先生です。国際医療福祉大学大学院臨床心理学専攻特任教授でいらっしやいます。次にお話しいただくのが畠瀬先生です。関西人間関係研究センター代表でございます。そして、3番目にお話しいただくのが村山正治先生です。九州大学名誉教授・東亜大学大学院教授であります。

この順番にお一人20分ずつ、ご自身の体験、そしてご自身の歩みみたいなものを、PCAの歴史と絡めながらお話しいただく。その後60分間ありますので、先生方の話を聞いてこんなふう思ったとか、こんな経験もあったということをお互いにお話しいただき、また会場の方からも、ここをもう少し聞きたいとかということがあるかと思っておりますので、そういうことを出していただきながら、後半はこの会場全体がエンカウンターグループみたいになるといいかなと思いつつながら、司会というかファシリテータとして動いていきたいと思っております。全体の流れはそんなところで、ご一緒に16時まで過ごしていきたいというふうに思っています。

## 日本への導入

私からお話しするのはそのくらいにとどめようかと思ったのですが、最初に、日本にPCAが入ってきた導入期、どんなことがあったかというようなことを簡単にお話しして、先生方のお話につなげていきたいと思っております。

まず、日本の導入のときに、茨城キリスト教短期大学というところにシカゴ時代のロジャーズの教え子であったローガン・フォックスという方がおられました。このフォックス先生からロジャーズの話を聞いて感銘を受けたのが友田不二男先生という方です。友田不二男先生という方が1951年に『カウンセリングと心理療法』、これはロジャーズの本ですが、この翻訳を『臨床心理学』というタイトルで出版されました。これが本邦初のロジャーズの翻訳本というこ

とになります。

このころ、後で話があると思いますが、正木先生、伊東 博先生、井村先生という方もロジャーズをご自身の本で紹介されたりもしています。

それから1955年、さきの友田不二男先生とか遠藤先生らが中心となって、フォックス先生の協力のもと、茨城県の大甕（おおみか）町でカウンセリング・ワークショップというものを実施されました。

その後、55年から57年にかけて『カウンセリングと心理療法』とか、『クライエント中心療法』、ロジャーズの中心的な著作ですけれども、その翻訳が『ロージャーズ選書』として翻訳刊行されます。全5巻です。このときの翻訳者が友田不二男先生、伊東 博先生、堀先生、村瀬先生、佐治守夫先生が翻訳をされました。

このころから、日本のカウンセリングとか心理療法業界でロジャーズの理論が浸透し始め、1961年にロジャーズが初めて、初めてというのはちょっと語弊がある、ロジャーズは大学時代に日本に一遍訪れているのですけれども、心理臨床の先生としては 1961年に来日しています。このときワークショップも行われて、日本にロジャーズの理論がさらに浸透していくということがありました。

それから、1966年から1972年にかけて、先ほど言いました『ロージャーズ選書』というものの翻訳者に加えて、畠瀬 稔先生とか、登壇されている村山正治先生が編集に加わり、『ロージャーズ全集』全23巻が刊行され、ロジャーズ理論というのは日本における心理臨床の一つの大きな勢力として確固たる位置を占めるようになった、というのが導入期のざっとの歴史ということになります。

この後のお話が、登壇の先生方からいろいろ語られることになるかと思いません。

それでは、飯長先生、畠瀬先生、村山正治先生の順番にお話をいただきますけれども、歴史的な流れで言うと、まず飯長先生が東京グループの歴史の流れを中心にお話しになられます。それから、畠瀬先生がロジャーズと非常に親密な関係をお持ちですので、ロジャーズとのこととお話しただいて、もちろん畠瀬先生は京大のグループの流れですから、京大のお話もさせていただきます。最後に村山先生、京大の流れ、そして京大から九州大学へという流れがありますので、そのあたりのお話を中心にしていただくことになるかと思いません。

それでは、まず飯長先生からよろしく願います。

### 飯長喜一郎先生

飯長です。よろしく願います。ここに居させてもらうのは、随分感慨深いものがあります。長く生きるものだなというふうに思っております。

最初に一言、いまここに至るまでのきょうの話、もともと私、最後に話すはずだったのです。実は世代的に村山先生・畠瀬先生と私で別れるのです。年齢は村山先生・畠瀬先生が非常に近いです。でも、このパーソンセンタードの

歴史で言えば、畠瀬先生はお若いときからそうだったのですが、私はもうなまぐらもいいところで、ずっと後になってパーソンセンターだとカミングアウトしたというような人間です。

村山先生は紛れもない第一世代で、さっきの『ロージャズ全集』の訳者でもあります。だから、私がこの業界に入ったときはもう村山先生はいっぱしの先生で、畠瀬先生も立派なお方で、私なんかうろちょろしている、と思ってここに来たら、着いたとたんに「あなたが最初だよ」と。早く来なきゃいけませんね、焦りました。

この写真は、新潟の上越市の高田というところの桜です。この山は妙高山という郷里の山です。ここからSLに乗って上京しました。1年浪人しています。

ちょっと年表を、いまご紹介がありましたけれども、歴史的にいくと、私は昭和20(1945)年9月生まれですので完全に戦後世代です。団塊の世代というのはちょっと後から、もう2年後くらいですね。

『ロージャズ選書』というのがまず出ている、これは私が10歳のときです。で、ロジャーズが来た、私は何にも知らない時代です。その時16歳、高校生ですね。で、上京します。東京オリンピックのときに国立競技場に行きました。女子の80メートルハードルを見ました。

大学に入学した翌年に、『ロージャズ全集』23巻が刊行されました。私は何にも知らなかった。そもそも心理学をやるなんて思ってなかったのです。大学紛争、学生は「大学闘争」と言います、もう皆さんにとってはレジェンドの話です、歴史のかなた。ストライキによって授業中止、4年生の6月までしか授業がなかった。だから心理学は何にも勉強しなかった。それで大学院に入った。

ちょっと飛びますけれども、1983年にロジャーズが来日しました。私が38歳のときです。これは3回目の来日でワークショップをいろいろやりましたけれども、会えないじまいだった。私は就職が決まり、うれしくて車を買ったばかりだった。5月3日、東京の外側の国道16号線で、3~40キロ先まで行こうと思った。混んでいて行き着けなかった。途中で食べ放題の焼き肉屋へ入って憂さ晴らしして、泣く泣く帰ってきた。そのとき、合理化をやるのですね。「おまえはロジャーズに会えな」と、もともと個人崇拜みたいな感じも抱いていたので、気に染まらなかったのですね。でも、勉強のためには会わないわけにいかない、これが最初で最後だろうと思って行ったのです。でも、やっぱり「会わないでおけ」という声が聞こえたことにしているのですけれども。

年配の方はご存じでしょうが、国立大学で臨床心理学を勉強するには教育学部へ行かないといけなかったのですね。教育学部の教育心理学科です。

1949年に文学部の教育学科から教育学部が独立して、そこで教育心理学科というものができているのです。

そのときに、赴任された方が沢田慶輔先生でした。沢田慶輔先生というのは、

日本の「生徒指導カウンセリング」の先駆者です。そして、米国教育使節団の影響もものすごくあったのですけれども、日本で生徒指導の講習会をリードした方です。このときに、もう実はスチューデントセンターや生徒中心という考え方はあったのです。

日本のカウンセリングの一番早いのはこの辺から始まっているわけです。戦前ですと「厚生補導」です。この言葉は戦後もあるのですけれども、もう全然、戦前の考え方と違います。そういうアメリカの心理学の影響、それからアメリカから講師がいっぱい来て講習会をやって、わら半紙でガリ版刷りのテキストです。昔調べたことがあるのですが、うっかりするとボロボロとなるような酸性紙です。大学の地下倉庫まで行って、読んでみた。非常に先進的で、いま読んでもなかなかだなと思います。

それから、ご存じないと思いますけれども、三木安正先生、戦後の文部省におられた、今で言う特別支援教育、当時の特殊教育、障がい児の理論家というよりも実践家だったのです。徳川家のお家が東京にあって、そこの当時のお子さんが知的障がいがあったのですね。その面倒を見てくれというようなご縁があって、その辺から始まっているのです。

それで、練馬のほうに「旭学園」という学園を高等部まで作られました。今でもあります。ご存じかもしれませんが、東京学芸大学の名誉教授である上野一彦さんは私より2級上ですけれども、やはりここで実践研究をなさった方です。それから、1955年に依田新先生、この方は先般亡くなられた依田明先生のお父様で、非常に人格者だったそうです。依田新先生は教育心理学です。

と同時に、このときに佐治先生が非常勤講師で来られたのです。ただ、佐治先生はあまりロジャーズ、ロジャーズと言わなかった人です。私が大学院生のころ、ほとんどロジャーズという話はされていません。後年、佐治先生に「先生は誰を尊敬しているのですか」と聞いたら、ハリー・スタック・サリヴァンと言っておられました。ロジャーズとはおっしゃらなかったです。

1967年に佐治先生が教育心理学科に、最初は助教授で赴任されました。1984年までおられました。この辺ずっと私もベタに大学にいたのです。佐治先生が60歳で定年退職するときに、私は9年も助手をやっていて、もうこれ以上いられないと思ったら、ほかの大学に呼んでもらいました。助かりました。

それで、入れ違いに近藤邦夫先生が赴任された。生徒指導や教育心理学の先生です。ICUから東大の大学院へ行って、それから順天堂大学や千葉大学教育学部の教育心理の先生になられていた。エンカウンターグループなどでも随分お世話になって、かわいがってもらいました。

近藤先生は3年ほどでお辞めになって、代わりに村瀬孝雄先生が入られた。村瀬先生はお若いときから、内観などに関心があって、必ずしもロジャーズではなかったのです。『ロージャズ全集』の一部を訳されたかもしれません。ジェンドリンのフォーカシングの本を最も早く訳された方だと思います。その翻訳



がわりあい難しいのですよね。私は2回ぐらい挫折しまして、後年、授業で話さなきゃいけないというので、必死に読み直した覚えがあります。

それからその後、ご存じの下山晴彦先生、下山先生は学生相談や青年心理学から始まっていたのですが、だんだん認知行動療法にかわっていった人です。実は私は佐治先生とは違う人間だと、当たり前なのだけれども、持ち味が随分違うということで、結構悩んだのです。私は20年も一緒にいてかばん持ちみたいなのところもあったので、「おまえは佐治守夫の弟子だろう」という話になるのです。もう面倒くさいから「はい」と言っていますけれども。「お世話になったな」と、だんだん年をとると思うのですね。でも、その当時はあまりにも持ち味が違うので、むしろ「ああはなるまい、ああはなれない」と思っていた。だから、私は屈折しているのですよ。

## 学部時代

私の話ですね。大学に入る前の話というのは、先般出させていただいた「私とPCA」にも書いてありますからやめます。入学してからは心理学研究会というのに入りました。当時私は社会的なことに関心があった。社会学とか社会心理学です。見田宗介の「現代日本の精神構造」は面白かった。

3年になるときに教育心理学科へ進学した。何を専門にするか全然決まっていなかった。なかなか傾倒、コミットメントができない人なんです。今でこそ、こんな顔をしていますけれども、何にもコミットメントはできなかった人です。もう一生モラトリアムかというぐらい。

文学部心理学科の授業を受けに行きました。知覚心理学、学習心理学、社会心理学など。他学部聴講だからさぼったら悪いと思って一生懸命出ました、教育心理の授業より休まないで。そのころの基礎心理学の知識が多少あったので、その後、いろいろなところで助かりました。

それで、卒論は「疎外感と知識」という、高校生の調査です。社会心理学です。「疎外」という概念を勉強するために、マルクス、エンゲルスから読んで、マルクス、エンゲルスと疎外と何で関係があるかというとお調べください。そんな話をしているとまたここで10分過ぎてしまう。

調査研究ですね。例の大騒ぎしているときですから、卒業が6月15日付です。私は履歴書を出すと、よく事務の方からは「何かお間違いでは」と来るのですね。私だけ遅いのではなくて、みんな遅いのです。

そのときに、伊東 博先生の『カウンセリング』なんていうのもこのころ、入口として読んでいました。ただ、ロジャーズの「ロ」の字も知らない。だから本当に後発なんです。

## 大学院時代

大学院へ行って、外部に開かれている教育相談室（現 心理教育相談室）に

所属したのですけれども、中身は何もなかった。もう先輩はみんなやめちゃっているし、行っても修士1年と2年だけで「どうする?」と。「ケースをひきうけるということはどういうことか」なんていう議論を始めると、延々と続いてしまって、実際の実践に移れないわけですよ。「そもそも論」で行っちゃうから大変です。

何もないので、まず子どもを知らないで教育相談も何もないだろうと行って、近所の公立幼稚園に行かせてもらいました。「教室の後ろで何もしないでいてくれるのだったらいい」と言われて、みんな後ろで本当にこうやって、そうすると「お兄ちゃんどうしたの?」とか、みんな来るわけです。「しーしー、あっちへ行って遊んで」と。そんなことやって。でも、私は最初の臨床実践はこのやんちゃな男の子のプレイセラピーというご縁もあるので、飛ばします。

修士論文は発達心理学です。それと並行して臨床心理学は勉強していました。いわゆるお勉強です。あまりそういう分野に関心があったわけではないのです。でも、勉強しなきゃいけないから、『ロージャズ全集』というものを読み始めて、輪読会をやりました。

あとは精神分析なども勉強したり、読めない難しい英語の『宗教文化論』みたいなものとか、そういうのを勉強した。あるいは当時一世を風靡した『反精神医学』と言われる分野、R.D.レインというイギリスの人ですね。あるいはT.サズという人たちの本を勉強していました。だから、全然実践にいかないのですよ。大学の授業とカンファランスはありましたけれども、まだ私はうろろろしていました。

そのころの諸先輩で、先ほど出ていた村瀬先生、山本和郎先生、越智浩二郎先生、野村東助先生、この辺は私の世代と10歳ぐらい違うのですけれども、一緒にマージャンをやって、酒を飲んでということで、お人柄にはよく触れていました。

26歳のときに、これはそこに書いてあります、立教大学のキリスト教教育研究所(JICE)のラボラトリートレーニングに出ました。私の最初のグループ体験です。杉溪一言先生という日本女子大におられたカウンセリングの先生が、お金を出すから行ってこいと。この写真の中にいろんな人がいるのですよ。これは中堀仁四郎先生です。それからこれは星野欣生先生です。隣は私です。

もう一人ご存じの方がいらっしゃるのですよ。これは平木典子先生です。考えてみたらすごい陣容ですね。これは構成的エンカウンター・グループともいう、あるいはTグループに近い揺さぶられる。みんなで泣いたりわめいたりしました。

なぜクライエント中心療法にひかれたか、だんだん臨床心理学でやっていくしかないかなとは思っていたのですが、その中でやっぱりクライエント中心療法は魅力的だったのですね。というのは、それしか学べなかったというのが一

つあるのです。現在でしたら認知行動療法、がたくさんありますが、当時はごく初期の行動療法しかない。せいぜい系統的脱感作、オペラント条件づけ、そんなものしかないのですね。それではやっぱりおもしろくないでしょう。「セルコン」という行動療法の分野でセルフコントロールというのもあったりしましたけれども。

精神分析というのは全然実践的な話が出てこないのです。河合隼雄先生の話なんか読んでおもしろかったのですけれども、河合先生はどうやって面接しているか、ご存じの方いらっしゃいます？ほとんど知らないですね。「よくよく話を聞いていますと」と言うだけです。そうすると、クライアントはこんなことを言います。黙って聞いていると、「そして、なおもよくよく聞いていますと」という感じなんです。よくよく聞いているんだと思ったら、後年京大出身の知り合いに聞いたら「いやあ、河合先生の隣の部屋にいたときに、隣から河合先生がいっぱいおしゃべりするのが聞こえてきたよ」と。もちろん集中講義などでもたくさん勉強させてもらいました。

それから、もうこれも当たり前ですけども、民主主義的な発想というのはやっぱり大学紛争の世代ですし、ベトナム戦争やヒッピーの時代です。人間の価値とか平等とか自由意志とか、反権力、反権威、こういうのがキーワードになる。そうするとロジャーズの考え方が非常にフィットするわけです。やっぱりさっきの全集というのが非常に大きい影響があった。ロジャーズのその他の著作にも啓発された。村山先生あたりが一番お若い世代だけれども、先輩たちが一生懸命活動していた。いまから30年ぐらい前ですと、学会でアンケートをとると、8割方、クライアントセンターだと言うのですよ。今とはえらく違いますね。それで、精神分析が少し。あと残りは折衷と、そういう時代です。

一見シンプルな原理、原理としてはわかりやすいです。それから、科学主義というのは当時の私にはよかったです。私は佐治先生に「飯長、一緒にロジャーズの小さい本をつくるぞ」と言われて、はじめてロジャーズを系統的に勉強したのです。この仕事がないと私はそんなに勉強しなかったと思う。

で、その後も私はずっと放浪しています。長い間目先のこと、目の前に与えられた仕事に気持ちを奪われていました。そういう他人志向、アザーオリエンテッドな人間なんですね。そう見えないだけで実は、ごまかして生きてきているのです。

保健所の心理判定員を12年やりましたが、これもいろいろ、この話は長くなるからやめます。日本の小学生の調査をやれと言われて、これも勉強になりました。こんなので本を書いたりしています。

それから、縁のあった家庭教育研究所というところで研究する。そうすると子育て支援とか親子関係とか、そういった方向の研究が中心になるのですね。結局、心理臨床のエッセンスというものは全然わからなかった。そもそも臨床心理学を一生の仕事にするかどうか、心が定まらなかった。そして、だん

だんロジャーズがスピリチュアに傾いていくのに、距離を置きたかった。今はそうじゃないですよ、いまはだんだんわかるようになりましたけれども、当時はヤバイなというふうに思っていました。

それから、繰り返しになりますけれども、何事にも傾倒できなかった、傾倒したくなかった、エンカウンター・グループもそうです。エンカウンター・グループは、大事な分野だとは思っていますけれども、個人的にはあんまり関わらない。何だかんだと引っ張り出されるのですけれども。

いい意味でも悪い意味でも、バランスよくというふうに思っていたのです。だから何かに傾倒できなかった。またPCA的な感覚とは遠かった。それから、障がい者やその支援者等との出会いがあって、私は嫌だ嫌だと思って、そういう縁をつくらなかったのだけれども、障がいのある人との縁が少しずつできてきて、そこにかかわる人たちがいかにリベラルというか、開かれているか、差別感を持っていないかというのに接して、随分勉強になりました。自分の底にある差別感というのがじゃまになって困りました。

それから、「反臨床心理学」という動きもありました。不登校のときに何で個人の問題に還元してそれをサイコセラピーでやろうというのだ、学校とか教育というものをもっと問題にしなきゃいけないとか、社会の考え方を変えなきゃいけない、そういう人たちとのつき合いがものすごく私は居心地が悪かったのです。居心地が悪いけれども、そこにいないと自分は勉強にならないと思って、本当に嫌でした。私が責められているようなものです。

でも、だから勉強になりました。あるいはエンカウンター・グループもそうですけれども、さまざまな場での人々との出会いの中で、平等のまなざしというのはどういうことかというのをいろんな諸先輩に教わって、体験して、なるほどなと思いました。

PCAへの傾倒は、個人的体験と切っても切り離せないように思います。私の場合には自分の病気の体験が大きく影響しています。40代に腎臓を壊しました。52歳から人工透析を受けることになりました。透析は60歳で臓器移植を受けるまで8年間続きました。

当たり前の話なのでしょうが、この経験から、「人間はなりたくて不幸になるのではない」ということを思い知らされました。「人間は同じ素質を持って生まれるのでない」「望んで障がい者になる人はいない」「だからこそ、人はみな平等に同じく価値がある」

こういったことを身に染みて感じるようになることによって、私の人に対する思いや接し方が変わったように思います。

これには娘の障がいからも大きな影響受けましたが、ここでは省かせていただきます。

私は自分がいろいろな方に受け容れていただいて来ました。それで生かされてきたと実感しています。私はあまり大きいビジョンを持っていないのですけ

れども、やっぱり人間社会の生き方としてのPCAということ、理念的だけでなく、自分が生きていくその場その場、職場であれ、近所であれ、家族であれ、そういう中でパーソンセンタード的な生き方って何だろうということを考えたり、実践したりしていきたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

司会(坂中)：

ありがとうございました。

それでは、畠瀬先生よろしく申し上げます。

### 畠瀬直子先生

畠瀬です。よろしく申し上げます。私は源流の源流というか、ロジャーズさんという方の雰囲気というか、人となりというか、そういう雰囲気を皆さんに伝えることができたらと思って、きょうはやってまいりました。なぜかという、直接ロジャーズさんを知る人がもうどんどんいなくなっているのです。ロジャーズさんがいま生きておられたら120歳ぐらいですし、一緒に活動した人がもう天国に行っちゃいまして、村山さんと私はまだ元気にこうやっておりますが、それで伝えたいと思ったのです。

私自身がどういう歩みをしたかというのは、いろいろなところ書きまくった気もするので省略します。1967年、オリンピックも終わった後で、ちょうど50年ほど前、日本がやっと研究者を外国に送る経済力がついたのです。それで、夫の畠瀬 稔が京都女子大学にいたのですけれども、京都女子大学が半分、文科省が半分出して、先生を外国に送るという制度ができました。世界中どこへでも行けたのですけれども、ロジャーズ、ロジャーズという畠瀬 稔ですので、ロジャーズさんのところに行くことにしました。

私の率直な驚きなんですけれども、「あれっ、世界的著名人が偉そうにしてないぞ」という率直な印象がありました。ロジャーズさんと出会って、何か新しいパラダイムというのですか、いままでのパラダイムではないパラダイムがあるという感じがしたのです。つまり日本でなじんでいた権威ある人の雰囲気、50年前の日本の男がどんな権威的態度をとっていたかというのを、皆さんご存じないですね。ご存じないことがとってもうれしいと思いますけれども。それで、本当にびっくりしました。ああ、こういう人間のあり方もあるんだというのを肌で感じたのです。そういう雰囲気で帰ってきて、2年してまた京大に帰ってきたわけですけれども、まわりの人がかなりびっくりしたようでした。

それからもう一つ、あるときロジャーズさんがしみじみ話されたのですが、「僕は静かな人だと思われていてね」と。何かの目標に猛烈に取り組むと、ワーツと絶対目標を達成する方なんです。臨床の人たちがちゃんと職業人として食べられるようになるために、APA(アメリカ心理学会)の会長になってそういう制度をつくったのですけれども、そのときももう皆さんがすごくびっくり

したみたいなんです。ロジャーズさんというのは静かで、うん、うんと、人を受け入れているはずの人ですから。それで「びっくりしてしまうんだよ、何しろ僕は開拓者魂で育てられているからね」と。

ロジャーズ家というのは、大西洋を渡ってアメリカにやってきたような、アメリカでいえば名門中の名門ということになるのですかね。そういう子孫です。それで私、「開拓者魂ってそれ何ですか」と言ったら、「ガラガラヘビに気をつけろ。おれを踏みつけにする者は許さないというのだよ」と。ガラガラヘビというのはかまれたら死ぬんですってね。アメリカ開拓時代にはアメリカ中にガラガラヘビがいたのですかね、それと「俺を踏みつけにする者は許さない」、これはやっぱり大西洋を渡って、新世界をつくったピューリタンの方たちの心意気というか、誇りというか、魂ですね。私はこの「踏みつけにする者は許さないんだ」というそこは、本当に大切なことだと思います。PCAの原点はそこにあるかもしれません。

障害があるからって、「私は福祉の力で生きているから」と、しょぼっとしなくちゃいけないのですか。堂々として、人間として生きる。この豊かな社会でそれらの人たちを守る社会でないとおかしいですよ。そういうふうな踏みつけを許さない、伸び伸びと自分自身というものを開放して生きていくのだ、これがPCAの原点だと思います。

## スライドとともに

スライドがありますので、ロジャーズさんそのものをちょっと感じていただくと思います。スライドをお願いします。

【スライド1：La Jolla 1969 [ロジャーズ家の庭。ロジャーズと登壇者を含む3名がベンチで談笑]】

1969年、これはアメリカから帰るときに、ロジャーズさんの家を写真に写そうということを畠瀬 稔が言い出しまして、あちこち写していて。私がここでしゃべっていたのですけれども、「稔はうちのバスルームの写真を日本のみんなに見せるよ」と言って笑っておられました。

それから私は「カール」と言うのです。あるときロジャーズさんが、研究所が近くですからしょっちゅう会ったのですけれども、私をつかまえて、「Call me Carl. (僕をカールと呼んでくれ)」と言うのですよ。それで最初は驚いて、日本の縦社会の説明を、ややこしい英語で伝わったのかどうか知りせんけど、説明してお断り申し上げたんです。そして1カ月ほどしたら、また「Naoko, Call me Carl.」と。そのとき初めて、あれっ、これは笑い話じゃない、本当にこの人は私と平等な人間というのですか、日本にはなかった異次元ですよ、新しいパラダイムですよ、そういう関係をつくりたいと願っていらっしゃる

るわけで、「郷に入れば郷に従え」という日本のことわざがありますよね。1ドル360円時代に、畠瀬 稔のお父さんにまで援助を仰いで我々はアメリカで生活していたわけで、これはやっぱり「When in Rome. Do as the Romans do.」というのですか、「カール」って呼ばなくちゃいけないと自分に言い聞かせまして、「カール」と言うようになりました。

それで、それは一回やり出したらとまらない。日本にお招きしたときに、突然「ロジャーズ先生」とか言って驚かすわけにいかないでしょう。それで「カール、カール」と言っていたから、それを聞いた日本の方たちが、びっくりなさったようにちょっと聞きました。「畠瀬直子、傲慢じゃないか」みたいな批判が起こっていたという話を聞きました。

【スライド2：The first EG workshop in Japan 1970 [1970年の日本最初のエンカウンター・グループ・ワークショップ関係者13名の集合写真】

これは、日本でのワークショップです。これご存じの方おられますかね、ここに小野さん。それから住友銀行の重役までなさって、カウンセリングルームのトップをやっておられた、もうすごく親しかった人がいるのですけれども、この人です。京都女子大学で通いで2週間のワークショップをやったのですけれども、終わった後1カ月くたびれがとれなかったそうです。それぐらい、肩書きに縛られていた中で、それを取っ払って人と接するということはものすごくくたびれることだったんですね。

【スライド3：The first forum in Mexico 1982 (1) [大きなバースデーケーキを中心にしたフォーラムの1シーン】

これが82年です。ロジャーズさんのフォーラムがありました。1902年生まれの方ですので、ロジャーズの80歳を祝う「パーソンセンタード・フォーラム」が開かれました。結局これがずっと続いていくことになるのです。これに行かねばなるまいと思って行きました。その当時、飛行機が40万円とか、ともかく夫婦2人で働いている人でないとこれは行けへんぞと思って行きました。

【スライド4：The first forum in Mexico 1982 (2) [ロジャーズ、バースデーケーキを食べながらの談笑】

これがロジャーズさんです。こういう雰囲気の方で、最初の写真はロジャーズさん65歳でしたけれども、80歳です。もう大分おじいちゃんになっていたのだけれども、結構若々しかったですよ、元気でね。

【スライド5：The first forum in Mexico 1982 (3) [ナタリー・ロジャーズ、ブライアン・ソーンを含むフォーラムの1シーン】

これはナタリーさんです。これブライアン・ソーンなんですよ。若すぎてちょっとブライアン・ソーンに見えないかな、今は世界中で、ロジャーズ的な活動をなさっている方たちです。

【スライド6：P.C.A. workshop with Carl & Natalie Rogers 1983 [カール・ロジャーズとナタリー・ロジャーズを日本に招いて行ったワークショップ参加者の集合写真】

それで、次の年にアメリカのワークショップから日本へ帰ってきて、「日本で何かやりたいね」と言っていたら、大須賀登蔵さんという我々をいろいろ指導して下さった方ですけども、「直子さん、すぐ呼べ、死んじゃうぞ」と。いや本当にそうですよね、85年には亡くなったわけですから。

それで、アメリカ人は太っているし、血圧も高そうに見えるし、心配だからナタリーさんと一緒に来ていただきました。ナタリーさんはナタリーさんで、いろいろな芸術的な活動を取り入れた活動をなさっていて、日本の人もナタリーさんに本当に刺激されていい経験になった人もおられると思います。この会に飯長さんが渋滞で来られなかったという、そういうことですよ。

【スライド7：P.C.A. workshop staffs with Carl and Natalie 1983 [同ワークショップスタッフの集合写真】

これは世話人一同です。野島さんはどっかにいるね、これが野島さんかな？心理臨床学会の会長とか、すごく活躍されている。こういうワークショップからすごくいろいろな人が生れたと思っています。

【スライド8：P.C.A. workshop with Carl and Natalie 1983 (3) [旅館にて布団に入って笑顔のカール・ロジャーズ】

これは、大須賀さんが、「講演だけするのはだめだ、楽しんでもらうように。何か日本へ行ったらしたいことないか、直子さん手紙を出せ」というわけですよ。そういう手紙を出したら、「ジャパニーズイン（旅館）に泊まりたい」というのと、「インランド・シーに船を浮かべてみたい」。「インランド・シー」って何やろうと思ったら瀬戸内海でした。

それで、どうですか、海が入り組んだように見えます？大陸の国の人から見たらそういうふうに見えるんですね。私たちは4つの島があるように見えるの



ですけれども、アメリカ人から見ると、インランド・シーに見えるようです。それで京都で旅館を探したら、1泊3万5,000円とかそういう返事が返ってきて、研究会の費用では賄えないので、ちょうどインランド・シーに行く姫路で、うんと安く、目的を達成していただきました。すごく満足そうですね。これが一番満足していただいたかなと思います。

【スライド9：P.C.A. workshop with Carl and Natalie 1983 (4) [西本願寺の飛雲閣でのロジャーズ親子】

それで、西光先生という仏教カウンセリングのほうで活躍なさった先生がいるのですけれども、その先生が西本願寺の飛雲閣とって、なかなか入れない国宝のお庭です。そこを招待してくださって、だから、日本芸術の粋（すい）を見ていただけてよかったなと思っています。

【スライド10：P.C.A. workshop with Carl and Natalie 1983 (5) [姫路城を背景にしたロジャーズ親子】

これは姫路城です。私は後から行ったのだけれども、あのお城の階段ってすごく大またでないと登れないのに、畠瀬 稔がよく押し上げたなと思いました。それで、私はちょうど下りてこられたときに会ったのですけれども、「ヨーロッパの人がこのお城を見たら、自分たちのお城を恥ずかしいと思うだろう」と、直訳したらそういうことになるのですけれども、そういうふうにおっしゃったのです。そうかなあと思って、私たちにはヨーロッパのお城のほうがロマンティックに見えますけどね。へえーと思っていたら、世界遺産になったので、ああ姫路城はたいしたものなんだと後から思いました。

【スライド11：Forum in Greece 1995 (1) [書道を楽しむフォーラム参加者】

これで、フォーラムがずっと世界中で続きました。

【スライド12：Forum in Greece 1995 (2) [日本人のフォーラム参加者：会食シーン】

これはそのフォーラムです。これは広瀬さん、看護カウンセリングのほうですごく活躍なさっていますよね。これは高松さん、若いですよね。それからこれ尚子さん、村山先生の奥様です。

【スライド13：Forum in Japan 2001（1）[登壇者が舞台上で挨拶]】

これは日本でフォーラムをやりました。

【スライド14：Forum in Japan 2001（2）[大須賀発蔵先生のレクチャー]】

これが大須賀発蔵先生です。日本仏教の中におけるパーソンセンタード的な考え方というのを、すごく熱心に皆さんに話してくださいました。

【スライド15：Forum in Japan 2001（3）[真剣な表情で生け花に取り組む外国人フォーラム参加者]】

これは、日本の文化を日本に來られた方たちに体験してもらおうというので、お花を生けるというのをやりました。

【スライド16：Forum in Japan 2001（4）[コリン・ラーゴとフォーラム参加者]】

彼はコリンさんというイギリス人の方で、彼がその後イギリスでお会いした時話していたのですけれども、「パーソンセンタードで世界を明るくできると信じて、ものすごく頑張っていた」というふうに昔のことを話しておられました。

【スライド17：Forum in Japan 2001（5）[アンさんと登壇者]】

これは、ベトナムの方でアンさんとおっしゃるのです。それで、アンさんにはロジャーズさんのところで会ったことがあるのです。そのとき、ベトナム戦争が激化していましたので、アメリカ人のみんなは「帰るな、帰るな」ですよ。それでそのまま音信不通になっちゃったわけです。それで、ベトナムが落ち着いてアンさんからはがきをいただくときには、私は涙が出ました。ああ生きておられた。それでこのフォーラムに来ていただきました。そのときおっしゃっていましたが、共産主義のベトナム政府から呼びつけられて、それでブルジョアに奉仕するような考え方だと、大分糾弾されたようです。けれども、どこかへ閉じ込められるとかそういうことなく、修道院ですっと生活することができたとおっしゃっていました。

【スライド18～19：Forum in Japan 2001 (6)～(7) [小料理屋で談笑する外国人フォーラム参加者と畠瀬 稔・直子夫妻]】

これは日本の小料理屋です。皆さん満足そうです。

【スライド20：Forum in Japan 2001 (8) [畠瀬家で寛ぐフォーラム参加者と畠瀬稔先生]】

これは、日本人の家に行ったことがないとみんな言うので、我が家に来ていただきました。

3時になりましたので、持ち時間が終わりましたね。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 (坂中)：

ありがとうございました。では、次に村山先生。

村山正治先生

#### 1. 源流 京大教育学部・大学院で生きていた頃 (1954-1963)

私のほうはレジメを配っておりますので、レジメをお開きください。それで順番が、飯長先生からしゃべってもらって、ロジャーズと一番親しい畠瀬直子さん、それから僕が3番目です。坂中先生から「PCAの源流」ってタイトルをいただいたのですが、「This is meを語れ」と思ってレジメを作成しました。それで、大体ここで話すのは、僕は何でロジャーリアンになっちゃったのだろうなど、ちょっとその辺をしゃべってみたいなと思っています。

それからもう一つ、最近オープン・ダイアログとともに有名になった、北海道の「ベテルの家」、あそこ皆さんご存知のように、入院患者さんに病名をつけないのですよ。僕はあそこに入院したらどういう病名を自分につけようと今考えていたのです。そうしたら、だいたい僕もおかしいほうですから、やっぱり僕はどうしても「自分がどう生きるかというのを考えていないといけない人間」、それから「世の中が将来どうなっていくのかということを考えていないとおさまらない人間」、そういう病名を多分つけるのだろうなと実は思っています。

#### 哲学志向からロジャースへ

これは卒業論文の先生が1人、哲学系の先生ですが、「村山君、卒業論文でみんな初めて取り組んだテーマというのは、一生続くんだけ」と言ってくれた先生がいて、いま自分を考えてみると、僕は実は卒業論文は「ビンスワンガーとロジャーズの比較」なんです。下宿の友人達から「そんな大きなテーマやめろ、君が一生かかったってわからないテーマだ」と言われちゃって、でもしょうがないよね、そういう関心を持ちちゃったから。つまりその科学論と人間論

にすごく関心を持って、でも、やっぱりいま考えてみると、僕はビンスワンガーとかロジャーズに何を求めたかという、どう生きたらいいとか、それからこれから社会がどうなっていくのだろうかというのが、やっぱりいまでも関心を持っている。そんなふうにして生きています。

## 2. 私の学生時代の迷いの森の彷徨

それで、源流ということです。さっきの飯長さんの話でわかるように、日本ではまだカウンセリングとかロジャーズとかあまり出てこない時代です。僕は1954年に大学に入学していて、それでもともと何で京都大学に行ったかという、高校時代に僕は哲学者になりたいと思ったのです。その哲学者というのも、何か哲学を知ったら世の中のことがよくわかったり、自分がどう生きるかわかるというふうに思い込んでいたのです。

それで、京都大学へ入ってみたら、授業に出てみても哲学がわからないのですよね。これは困りました。「哲学がわからないということがわかってしまった。」それからもう一つ、哲学をやるにはギリシャ語とかドイツ語とか、そういうのはこれもまた、からきしやってみるとだめなんだよね。かなり一生懸命やってみたけれども、どうもわからない。これはどうしようかな、もう大学をやめてもう一回受験し直すか、しかしまた受験勉強をやるのは大変だし、僕はいまから考えたクライアントさんなんだよね。当時大学にカウンセリングセンターがあったら僕は行ってきますよ。まだなかったんだよね。あったのは、大学の「懇話室」というのと、それから「保健センター」はあったのです。それで、結構いろいろな人のお世話になった。

そういう形で、やっぱり自分がどうしていったらわからないというのがあって、困っちゃって、やっぱりその迷い、悩みが体に出ていました。保健センターで十二指腸潰瘍だと診断され、その先生が何とか治してくれましたけれども、その先生の僕は被験者になって、その先生は何か脳のレントゲンを撮って、「脳の皮に皮下脂肪みたいなものが多いですからノイローゼだ」と言って、いまから見たら唐突なわけのわからないセオリーでしたけれども、なぜその先生のところをやめなかったかという、やっぱり一生懸命治してくれるという感じがすごく伝わってきたので、月に一回行っていました。それで卒業までに手術しなくてすっきり治っちゃいました。

それからもう一つは、学生懇話室といって、カウンセラーじゃないですが、石井完一郎先生がいろいろなところを紹介してくれる。つまり「先生、僕こういうことわからないんだ」と言ったら、「京大のこの先生のところへ行け」とか、それが結構役に立ったのです。「おまえさんの実存論の悩みは、精神科の教授のところへ行っごらん」とか言って、精神科の教授も訪ねました。「あなたそれで来たんだね」と。ベッドで本を読んで先生の著書を紹介いただきました。5分ぐらいで終わり、「ああこれはだめだ。」と感じました。

それからもう一つは、やっぱりビンスワングーというような、まだ僕の中で哲学とカウンセリングみたいなものがなかなかまとまらない、まだ哲学にこだわっていた時代だったのです。また、石井先生から、阪大の有名な実存哲学の先生を紹介してもらったのです。そうしたらやっぱりすごいですね、全然見知らぬ学生だけれども、1時間ほどつき合ってくれたのですよ。これがよかったですね。ビンスワングーや実存哲学の話などをお聞きして、これはとても僕の手には負える代物ではない、それがまずわかった。だから、こっちへ行ったらだめというのは結構いいですね、行かなけりゃいい、そういう思いで事態が動いていきました。

### 3. 正木正教授・高瀬常男教授のゼミ生になる

それから、だんだん僕の求めていることは哲学の理論とか何かじゃなくて、どうも生き方とかそういうものを僕は探していたんだ、それを哲学に求めたんだという感じがだんだんわかってきた。それでちょっと見ると、京大教育学部にカウンセリング、さっき司会からお話のあった正木正先生とか、日本にカウンセリングを紹介している先生がいたのです。でも、カウンセリングはやる気がなかったから、そういうことでキョロキョロと見ると、今日でいうヒューマニスティック心理学を提唱していた正木正先生と高瀬常男先生がおられました。私はこの両先生のゼミ生になりました。

それで、僕の救いは、もう一つありました。やっぱりあまり大学の授業がおもしろくない。河合隼雄先生が非常勤で来ていた、ロールシャッハの宿題があって、嫌でもうしかたがないから、とにかくバツと書いて出す。下宿の友だちに被験者になってもらいました。まあひどいもんですよ。とにかく単位をとれたら何とかなるという感じでした。心理学は大嫌いでした。心理学というのは、僕はなぜ嫌いかと思ったら、当時の心理学には人間が見えないのですよ。僕は心理学をもって人間のことを考えてくれる学問かなと思っていただけども、どうも違う。そういう意味でだんだん心理学とは遠くなって、いまでも僕はあんまり心理学者というアイデンティティーが強い方ではないのです。

### 4. 京大人文研の上山春平先生との出会い

そんなことで、僕は困っていたのですけれども、ただ「探すという行動」だけは一生懸命やっていました。僕は、教育学部の授業は最低限の出席でした。人文科学研究所の研究生募集とかあって、そこに行ってみたらその先生と親しくなって、一緒に共同研究のテーマに関する本を集めに古本屋で探す中で「村山君、あんたドイツ語できないとよく言うね」と言うから、「はい」と言ったら、「哲学やるなら、最近はいいい英語の翻訳があるから」と言ってくれて、これは救われたね。僕が教師になって思うのは、教師は言葉で人を殺しますよね。「おまえ、ドイツ語できないからもっとちゃんとやれ」と言われると、僕はもうだ

めでしたけれども、上山先生のような助け舟を出してくれた先生がいたのですよ。これは助かったね、地獄に仏です。

それから、上山先生には結構いろいろお世話になったのです。つまり僕が学んできたカウンセリングなんていうのは、当時は人間学とか哲学の先生がよく理解してくれたのです。幸い、京大には哲学系の先生がたくさんいたので、心理の先生よりはずっと僕はそっちのほうに親しみを覚えていて、卒業論文が「ピンスワンガーとロジャーズ」とかわけのわからない、いまでもわからないですね、(あまり卒業論文見たくない。) ドイツ語も不十分だし、でもそれなりに一生懸命やった。

## 5. 卒業論文口頭試問で救われる

そのとき救われたのは、卒業論文の口頭試問が僕は4人の先生がいて、心理の先生と哲学の先生が2人でした。有名な哲学者の先生が出てきて、この先生にやられるな、僕はすぐドイツ語のボロが出るかなと思っていたのですが、やっぱりこれもまた救ってくれた。いまでも覚えています、「村山君、ピンスワンガーとかロジャーズって、あなたいい人を見つけたね」、まずほっとした。そしてその後、「村山君、もう少しゆっくりやれ」と言われました。先生にはかなりむちゃくちゃな論文なのをわかっていてに違いないけれども、それを指摘しない。これは自分が教師になって、どれほどそれが難しいかよくわかりました。論文を見たらすぐ学生の穴ばかり見える。それをわかっていてのに違いないのに、それを一言も言わないで、「もう少しゆっくりやれ」と、これはすばらしい先生に僕は救っていただきました。生き返ったのです。

そのおかげで何とか、哲学よりはどうも実践的なことが僕にとってはすごく大事なんだ、生きるということがすごく大事なんだということで、僕はだんだん、本を読んでみるとどうもロジャーズという人の魅力は、科学と哲学、実践の三方向でやれる、すごくそれを統合している人みたいなことがだんだん僕の中でわかってきて、これはやっぱりロジャーズだという話になって、ロジャーリアンのほうにだんだん進んで行くようになった。

## 6. 大学院時代 (1958-1963)

だから、僕は大学院はそんな形で、精神科に入院するんじゃなくて大学院修士課程に入院したというか、入れてもらったのですね。それですごく落ち着いた、それ以来、自分がカウンセリングの方向で歩いてきた道について後悔したことは全くありません。それは4年間かかって見つけた道、結果です。最近思うのですけれども、もうちょっと日本社会も学部時代にみんな迷うということを許したほうがいいんじゃないのでしょうか。本当の自分が出てくるには。日本はすぐ迷うのはいけないと対策をとらせませす。ロジャーズの本を読んでごらんさい、ロジャーズは迷いに迷っている (「This is me」参照)。僕はここか

ら迷うということが、自分の個性が出てくる非常に大事な時間なのじゃないかなというのを学びました。

迷った体験とロジャーズの文献を学習するなかで僕はここに書きましたように、もともとPCAは、僕にとってはセオリーではないです。生きる一つのモデルです。僕の中の核心となる思想の一つです。僕はだから「PCAを生きる」という言葉が好きなんです。自分の中ではPCAはセオリーじゃないですね、あれは自分が生きていく一つの仮説なり、信念みたいなものとなっています。

それからもう一つは、先ほども出ましたけれども、僕は民主主義とか人間尊重というコンセプトを実は日本国憲法から学んでないです。ロジャーズとPCAの実践から学んだのです。一人一人を大事にするとか、人間尊重とかやっぱりカウンセリングの体験を通して、これらの概念を身につけました。

## 7. 畠瀬稔先生との出会い

大学院で5年間過ごしました。ここで畠瀬 稔先生に出会ったのは、僕には大きな出会いであり、いろいろなことを学びました。1958年頃でしたから、教育相談室なんてまだなかった時代です。畠瀬先生を中心にして院生達が集まって、よそから砂を持ってきてプレイルームの砂場をつくるなど、なんでも自前で調達する楽しい時代、そんなような草創期の時代でした。彼からいろいろ教わったのですが、例えばネクタイの締め方、いま僕のやり方は彼から教わったのです。それは一つですけれども、そういう形で僕は彼にいろんな形で影響を受けました。つまり大学院の仲間です。そういう形で勉強していたというか、昔はまだ臨床実践を教える先生がいない時代ですから、仲間で、特にPCAは畠瀬さんと僕たちはみんな一生懸命勉強した。そういう意味で、彼は僕の恩人なんです。

『ロージャズ全集』はさっき司会者が言ってくれましたが、私がああ編集者の一人に名を連ねたのです。畠瀬 稔先生の推薦でした。PCAを東京だけでやっているのではなくて京都でもやろうかという話になって、ねばって彼はやってくれたのです。それで、1964年、畠瀬 稔先生は本を出しています。『来談者中心療法：その発展と現況』という本、僕はこれの分担をしているのです。

それで、畠瀬 稔先生に感謝しているエピソードを一つ語りましょう。『This is me』というロジャーズの自伝、ロジャーズのことを調べたかったらあれ1冊読めば多分ほとんどわかるみたいな、僕の大好きな論文です。畠瀬 稔先生は僕に訳させたのです。彼もやりたかったに違いない。でも僕にそれをやらせた、これはなかなかリーダーとしてはとてもできない技を彼はやった。それから、彼がロジャーズのところに留学して帰ってきて、次に僕が行ったのですけれども、その時もロジャーズへの紹介状をきちっと書いてくれたり、そういう意味では、彼は僕にとってはとても大変な恩人なんですよね。

## 8. 相互共感 個人面接体験から学んだ共感

それで、僕は、大学院へ入ってからは個人面接をたくさんやりました。週に20人ぐらい徹底してやりました。それで、僕は中学生の不登校の成功事例を多数経験していました。多分僕が不登校でしたから、あまり学校へ行かないというのをそう悪いという感じはない、それも影響したと思います。それから、いま思うとやっぱり僕はあそこでクライアントさんに治されていたんだと思います。自分がセラピーをやっていたつもりではあるけれども、何かそこで「おまえはセラピストとしてやっていける、大丈夫だよ」というメッセージをもらった気がしますね、いまから思うと。有名な精神科医中井久夫先生の著書で新しい治療のヒントなどはクライアントの贈り物だよと書いているのを読んだことがあります。なるほどね。僕はそういう形で、自分で治したと思っているのだけれども、実はクライアントさんからもすごく治されていたのだなと考えはじめています。いま共感に関しては、僕は「共感」あるいは「相互共感」という言葉が好きです。カウンセラーが一方的に共感するだけではない、クライアントが僕の言葉に共感してくれているんだと、つまり相互作用というのが実はカウンセリングの本質ではないかと考えています。

ロジャーズさんは研究者としても、セラピストとしても腕がいい人ですけれども、あまり3条件を強調し過ぎるのじゃないか。つまりセラピストの持つ3条件は大事だ、そのとおりですけれども、現実にはだめセラピストでも相手がよければダメ共感も共感になるので、そういう意味では、共感というのは相互作用なんだというのをいまでも思っています。

## 9. ロジャーズとの出会い

1961年に僕は京都でロジャーズに会いました。先ほど、畠瀬直子さんが説明してくれたので、ロジャーズの話はカットしますが、1961年に実はロジャーズが来日したとき、僕が京都・大阪でお世話をする担当になりました。京大アメリカンセミナーでの講義はおもしろくなかったですね。すでに著書で読んでいた内容だったからでした。印象としては何かポパイみたいな感じで、ちょっと小柄だけれども、この腕が太く、力強い。

ただ、印象に残っているのは、ロジャーズの講義のときにマイク係をやっていた。そうすると、コンコンと彼のほうからマイクをたたく、いままで講演者で、マイクの準備をしているのにそんなことやってくれる人ってまずない。あれこの人はなかなか我々の気持ちをわかる人だなと、それが印象に残っている一つ。そんなことがあって、またロジャーズを好きになっていくのです。

## 10. 大甕ワークショップ・様々な人との出会い

それで、大甕（おおみか）のワークショップ（1961年）というお話しがさっき出ましたね。あれで僕は東大の佐治守夫先生とかその仲間たちと親しくなっ



たのは、大きなことです。あのとき出席されていた山本和郎とか越智浩二郎、みんな仲間なのです。ワークショップというのは、他大学の人たちとも一緒に交流ができる、しかも対等に交流ができるというのはとてもよかったです。山本さんとはコミュニティ心理学で、僕は学校臨床のワーキンググループの代表になったとき、どうしても学校の臨床には山本さんが必要である、コミュニティ心理学が要ると思って無理して、委員に出てきてもらって活躍していただきました。そういうおもしろい出会いがたくさんありました。

## 11. 京都市カウンセリングセンター時代（1963-1967）

1963年、僕は京都市教育委員会京都市カウンセリングセンターにカウンセラーとして就職しました。この機関は、日本で初めてカウンセラーを教育委員会職員・地方公務員正職員として採用した事例だそうです。大変恵まれた環境でした。

何としても、その陣容のすばらしさです。顧問に下程勇吉京大教授（教育人間学）河合隼雄（天理大教授：ユング研究所に留学されてユング派のライセンスを取って日本に帰国された）笠原嘉（京大医学部精神科講師）船岡三郎（京女大講師）高橋史郎（天理大講師教育学）の大学教授陣とスタッフに長澤哲史（主任カウンセラー）村山正治（カウンセラー）でした。教師カウンセラー4名、事務主任1名の陣容でした。PCAに関してはまず、毎月一回下程教授を迎えてロジャーズ読書会を持ち、村山正治編訳のロジャーズ全集12巻の掲製論文の多くはこの検討会で輪読しています。今思えば、東京に対していわばロジャーズ研究の最先端を走っている感覚があった。何か新しい創造の雰囲気を感じていました。

顧問の河合隼雄先生の私の印象は「おれがこれから日本のカウンセリングを引っ張っていくんだ」というオーラを感じました。学部時代の印象は、確かに優れた人だなというのは感じていたが、以後接触がありませんでした。だけどこのときは、これはすごいな、ユング派という彼にびったりはまった世界を経験すると、こんなに人間って成長するんだなと思いました。

僕は一回だけ、彼にプレイセラピーのスーパービジョンを受けました。それで、いまでも覚えていますけれども、あの当時、ロジャーリアンの私達の仲間で行っていたグループスーパービジョンは面接と録音逐語記録を提出して、おまえのスキルのここが悪い、指摘するだけでした。河合先生はそれをしませんでした。「村山さん、あんたのプレイセラピーはここが変化しているぜ」と、サポートしてくれました。それが印象に残っています。私が河合隼雄先生に受けた一回だけの個人スーパービジョンでした。またカルフの箱庭療法（サンドトレイ）を教えてもらいました。

そんなことで、ここで一つ区切りをしたいのは、なぜ河合先生の話を出したかということです。その河合先生ユング派の資格を習得されてスイスから帰国さ

れたことは大きな社会的意義がありました。それまでは日本にはカウンセリングの方法としてPCAしかなかったのです。当時は先程、飯長先生も指摘されたようにPCAしか選択肢がなかったとおっしゃっていた。ところが、河合隼雄先生がユング派の資格を取得して帰国されて以後、次々と外国で精神分析系の訓練を受けた心理学の専門家が大学やクリニックでPCAでない心理療法を日本に持ち込んでこられ、この時期からPCA一本だけでない時代が始まったとみてよいでしょう。鏑幹一郎先生はじめ多くの精神科医でない心理療法学が出てきます。あそこで河合先生が帰られた一時代から日本のカウンセリングの世界はPCA独占時代から変わってしまったのです。それを言いたかったのです。

僕たちは畠瀬 稔先生と一生懸命勉強して、PCAを京都大学につくるという流れで一生懸命頑張っていたのです。しかし、当時の教授は河合先生を京大の臨床心理学講座教授に採択されました。河合先生のあのすごいスーパースター、何かブラックホールみたいな大先生ですから、僕のまわりの人はみんな「カワイアン」になっちゃうんですね。僕にはちょっと「カワイアン」は無理という感じがあって、僕は太宰府に逃げたんです。たまたま九大の教養部にいいポストがあったのです。そのことを河合先生はご存じでした。「あんたはときどき太宰府からちょっと攻めてくるね」と、さすが鋭い先生です。ちゃんと僕が距離をとったなということもおわかりでした。でもその後、私は学校臨床心理士WGの代表になって、河合先生と接触が多くなり、その力量から多大のご支援をいただきました。スクールカウンセラー事業の成立と成功は河合先生の多面的な力量のお陰です。心から敬意と感謝を申し上げます。

ここまでで、ちょっと長くなるので。(拍手)

司会 (坂中) :

どうもありがとうございました。

先生方の対話

司会 (坂中) :

ここまでは、それぞれの先生からご自身の経験を語っていただきました。恐らくほかの先生の話聞きながら刺激を受けたりとかそういうことがありますので、どうぞ先生方、相互に話を聞いて、ちょっとこんなことを聞いてみたいとか、そんなことがあったら出していただきたいと思います。

飯長先生いかがでしょうか。

飯長先生 :

聞いてみたいというよりか、ここに至る流れが随分違うなと思っています。やっぱり私も私なりにどう生きていくかということで、きょうは話しませんでしたけれども、もともと考古学者になりたかったり、ロケット工学者になりたかった。で、なぜ考古学をあきらめたか。英語がやっとなんと、フランス語な

んてほとんど成績表が可と不可、語学ができないのに考古学なんて、最後はヒエログリフまで読まなきゃいけない、それで早々とあきらめたんです。まわりにはできる人いっぱいいるから。

**村山先生：**

僕は4年かかっちゃいました。

**飯長先生：**

やっぱり人間のことには興味があったので、教育心理学科の三木先生に相談したら、文学部の心理学はやっぱり動物の心理だからこっちへ来いという話だった。

**村山先生：**

確かにあの時代の心理学の主流は、実験心理学、学習心理学、教育心理学でありとても心理学には自分の求めるものがない。自分にとっては意味がないとか、そんなふうに考えてしまいました。僕自身があの時代の心理学の流れにはとても向かないということがわかったということですから。

**飯長先生：**

私はいまでも言っています。「心理学は非常にあてにならない学問だ」と言っています。でも、その名前で食わせてもらっているんで、あまり悪く言っはいけないんですけども。

島瀬先生は、ロジャーズのことを伺わせていただいて、いつも以上に興味深かったのですけれども、こういう分野に行こうと思われたのはどういうことからですか。

**島瀬先生：**

私は子どもが好きだったんです。で、幼稚園の先生になる予定だったのね。

**飯長先生：**

児童学科。

**島瀬先生：**

だけれども、幼稚園の先生になる学校は、当時は全部短期大学でした。それで、それに似たところだという、当時としたらまず国立一期校を目指すじゃないですか、昔なんですよ。一期校とか二期校とかというのを知らないよね、みんな。

**飯長先生：**

多分知らないね。

**島瀬先生：**

それで、一期校でその児童のことを勉強できるというのは、お茶の水女子大学しかなかったですよ。

**飯長先生：**

国立一期校はね。奈良女はもう二期校ですか。

**島瀬先生：**

いや、一期校だけれども、私は兵庫県にいたから、奈良というのは田舎に見

えたのです。子どもってそうじゃないですか、活気のあるところに行きたいじゃないですか、それでお茶大に行きましたね。

それで、そのときは子どもってというのはキラキラ輝いた目をした、未来に向かって生きている、そういうのが子どもだと思っていたのですけれども、児童臨床心理学のほうに入ったら、もう子どもの段階で輝くどころか、もうペット神経症というのですか、何かもう汚いくまちゃんを離せられないとか、そういう子供がお茶大の臨床相談室なんかに来ていて、わあっと思わしてね、これは大学院に行ってもうちょっと勉強する必要がある。

それで、日本の大学院の臨床心理学を調べたわけ、そうしたら一応整っているのは東大と京大だけでしたよ。お茶大の先生には、「都落ちするもんじゃない」とものすごく反対されたのですが、私はもともと言葉でわかるとおり関西で育った人間ですので、京大まで帰ってきたというか、こういう感じですね。

**飯長先生：**

そうすると正木先生？

**畠瀬先生：**

いや、もうそんな時代じゃない、倉石先生です。アクスラインの本に出てくると、「あれっコピーヤ」というようなプレイルームが京大にあった。

**飯長先生：**

手作りのがありました？

**村山先生：**

畠瀬さんと僕たちが一生懸命、京大教育学部教育相談室の設立や臨床活動を展開している頃に、畠瀬直子さんが京大教育学部大学院に入ってきたのです。それで畠瀬さんと結婚したのです。

**飯長先生：**

後年、私はお茶大の教授になりました。幼児保育学講座の児童中心主義のど真ん中、その話しませんでしたね。

**シンプルだけどむずかしい**

**村山先生：**

それと1つだけ、あなたがさっきの話の中で、ロジャーズを選んだ理由の一つに、わりあいシンプルだと言っていた、シンプルって簡単？

**飯長先生：**

シンプルだと思ったのです。

**村山先生：**

そこ、つまりロジャーズの理論って、非常にシンプルなんだけれども、それを実は生きるのがすごく難しい。理論は確かにある、だけれども、知識としてのPCAはすぐ読めちゃうけれども、これを「生きる」というレベルになると、実は一番PCAをやっていく人の大きなテーマじゃないかなという気がします。

その1964年、畠瀬稔・阿部八郎編『来談者中心療法』の倉石精一先生の「序」。ここへ来るためにちょっと読んでみたら、すごく大事なことを言っているのですよ。「我が国ではいま、言葉だけあって、それが十分な経験がないままのものが非常に多過ぎる」、厳しいね、つまり臨床、僕らのやっているものに対する、さっきの先生はゆっくりやれと言ったけれども、もっと経験を積みとことだと思っただけですね。いいことを言っている。「人間の平等、人間尊重、個人主義、民主主義など、一連の理念がばらばらの言葉として存在し、それがもっと有機的な関連につながっていかないように思われる」と鋭い指摘をされています。さらに「私は博士の学説を単に治療理論としてだけでなく、これらの精神的盲点を補う意味で半歩的テンポで理解していきたい」と書かれています。

いまの日本がぶつかっている社会・文化的課題への取り組みすべてに通用する指摘だと思います。外国からすぐ答えを持ってきて、ちゃちゃとやってみて、うまくいかなきゃ捨てる、また新しいものを取り入れるパターンです。そういうことをやっていたら、僕はだめだと思っただけですよ。私たちPCA60年の体験をベースに私たちのPCAモデルをつくらなきゃいけない、そういうことが出来る準備が出来て、これから発展する時代に入っていると思っただけです。

## ロジャーズをめぐって

司会（坂中）：

畠瀬先生、お二人の話聞いて、感想とか何か聞いてみたいこととかあれば。

畠瀬先生：

村山先生がずっと歴史を話してくださいましたよね。これからの日本はどういうふう展開するのだろうか、これは私は見られないかもしれない、けれども、これが何らかの形で展開していくのだろうかと思っただけです。その前に、地球が滅びないように、戦争が起きないようにと、それですね。

私がエンカウンターにすごく価値を置いているというか、最近つくづく感じるのは、何か人間が人間に絶望するのをちょっと止めてくれるかな、それはそのエンカウンターのプロセスの中で。それをちょっと希望します、人間が人間に絶望する種がいまあまりにあり過ぎますね。

村山先生：

大事なことを言っただけだと思っただけですけれども、先ほどロジャーズは静かな人だ、だけどすごいパワー・・・で、もういままでやったことのないことに挑戦する人と、そういうことをおっしゃったけれども、僕がロジャーズを尊敬しているところは、一つはそこです。

つまりチャレンジしていくという、いままでなかったことを自分の力で開いていくというこの恐ろしさとか、あの迫力には本当に驚きます。スタッフミーティングなどで話しているロジャーズは、何かどこかのじいさんみたいな迫力が無いのですよね。ところが、そういうことになると、スキナーと有名な

討論をしている、すごい討論をしているのです。学問になると絶対譲らないという、あの頑固じいさんというあの迫力ってすごいな、真似はできないですけども、それを強く感じる。彼のいざというときの強さは、面接でいえば、普通に話しているときのロジャーズ。ところが、面接に入るとオーラが出る、つまりわかりやすく言えば横綱みたいな、横に座ると何か輝いてくるんですよ。どんなことでも受け入れるよという雰囲気が出てくる。あれは真似できないでしょうもないなというか、すごさですね、

それだけちょっと思い出したので。

**島瀬先生：**

一つ思い出したことがあります。イギリスに関西大学から半年間派遣されていたことがあるのですが、そのときに大英図書館であらゆるものを読みあさっていたのですけれども、『世界理論辞典』というのがありました。だからソクラテスの時代からの始まっている本ですけども、成長理論というのは20世紀に入るまでなかったそうです。人間がみずから成長するという考え方はなくて、神の前に罪をわびて、何かそういうふうな人間観があって、人間がまづみずからの力で成長していくという考え方がなかったそうです。「ロジャーズは成長理論の発明者である」そんな辞典があったのですよ。日本語には翻訳されていないと思うし、もちろん東大の図書館にはあるでしょうけど。ああそうなんだ、20世紀で初めて「成長」という概念ができたんだ、その世紀に私たちは生きて仕事をしていたんだということは、すごくうれしいことです。

**村山先生：**

いまの話で思い出したのですが、やっぱり僕はつき合って、ロジャーズというのは地球人というか、アメリカ人という感覚がないですね。地球人という彼の人間論というコンセプト、こういうことが書いてありました。「自分の人間論は世界中のどんな人にも当てはまらないとだめだ、つまり未開人から何からすべてを含むという人間観を自分につくらないといけない、そういうつもりで書く」、これはわかりますよね、ユダヤ人とかの人種問題を越えた広さをいつも持っているんだと。

それからもう一つ、ロジャーズに関して人間論をつくる時のもう一つは、「自分も入らないとだめだ、自分にも適用できる理論じゃないとだめだ、世の中の間人間論とかそういうものには自分を入れていないものが多い。だから、実際自分も入れるという理論をちゃんとつくりたい」ということで、実は書いています。実際ロジャーズが困った時期には自分の弟子のカウンセリングを受けています。

**飯長先生：**

それは若いときからそうですよね。さっき坂中先生が日本には2回目だと、最初ではなくて。あれは戦前に北京でキリスト教学生同盟というものの、キリスト教精神による世界平和というものがあったのですよね。だから、その当時

はそういう意味で船に乗って北京まで行って、それからキリスト教とパーソンセンタードとそう密接につながるとい話はあまりないんだけど、そういう視点というのは若いときからあるんだなということですね。

村山先生：

CSPに滞在していた時のあるシーンが浮かんできました。ある会合で、アメリカ人の人が「ジャップ」という言葉を使ったのです。ロジャーズはパッと介入して、「正治、いまの言葉はどんな感じなんだ」と、そういうときすごいですね。後で調べたら「ジャップ」って日本人に対する侮辱的な言葉なんですね。パッと彼だけすぐに僕のことをきちっとフォローした、僕はジャップという言葉の意味が本当によくわからないからボケッとした顔をしていましたけれども、そういうときのロジャーズの介入はやっぱり地球人的な、広い視野の持ち主というのは印象に残っていますね。

それともう一つだけ、またロジャーズのことで、僕が畠瀬 稔・直子夫妻が留学された後、その紹介状で1年半ロジャーズのところで、まあ追っかけですね。いろいろ学んだことはたくさんあるのですが、一つこれはお伝えしたほうがいいなということ、これは僕が学んだことの一つです。すごく印象に残っているのです。「エンカウンター・グループ」(翻訳)に出ていますよね。ある短期大学の教員向けに企画されたエンカウンター・グループの結果については、CSPのスタッフの中で「あれうまくいってないんだ、失敗だ」という声がたくさんあって、気になっていました。日本に帰ってグループをやろうと思っていたので、ロジャーズさんに「先生、どうお考えですか」と聞いたのです。そのときのロジャーズさんの返答がふるっているのです。「君に関心をもらってよかった。それに関心があるなら、ロサンゼルスの子校の関係者を知っているから、住所を教えるからショウジ行って聞いておいで」と言われた。この返答にはまいりました。それでロサンゼルスまで行かなきゃいけなくなった。

それで、何がわかったかということ、要するにエンカウンターの結果、その学校の参加した教員のかかりの人が学校を辞めたという結果なんです。それをどう考えるのかということでした。僕は正直、うまくいったのかいかなかったのかがわからなかった。要するに辞めたということ、ある個人から見たらエンカウンター・グループをやった結果、学校にいることはだめだということで、個人から見たら「大成功」なんです。でも、学校から見ると、エンカウンターをやってみんなが仲よくやっていこうと思って導入したのに、多数の人も辞めちゃうみたいなことが起こったら「失敗」だよな。

で、それから僕は物事を「失敗」か「成功」という視点だけでみないように心がけるようになりました。失敗と考える基準は何か、成功と考える基準は何か、そこを考えるようになりました。ロジャーズさんの1つの教え方というか、自分の目で確かめろ、自分の耳で確かめろ、人のうわさとかそういうもので動かされるなということを多分僕に伝えたかったのかなと思います。

援助者自身も含めてどう生きるかを問う

飯長先生：

一言いいですか、残された時間は短いので、1分だけください。

ここにいらっしゃる皆様には言わないでもいい話かもしれないです。つまり公認心理師の話をちょっとさせてください。

臨床心理士というのはいろいろ不十分な部分もあるのだけれども、公認心理師の試験を受けた方、どれぐらいいらっしゃいますか。

かなりいらっしゃるでしょう、例えば去年と今年の問題が違うのはご存じですか、ああなっちゃうんです。去年と今年、全然問題が違うんです。去年の公認心理師の試験問題はかなり臨床心理士の試験問題に近かったと思います。私は受けませんが、自分で解いてみたのです。今年は猛烈に重箱の隅を突っつくような、神経学とか脳とか、ああいう話とか、しかも面接はない、論文はない。そうすると、一体これからの心理専門職というのはどうなるのだろう、ぜひこれからの人に考えてほしいと思うのです。完全にこれはテクニシャンとしての心理、その医療のあるメジャーな流れの中の本当に一部分として位置づけられるようになる。それこそ、ここで話しているようなことを実践しようとすると、「余計なことをするな、おまえの仕事じゃない」と。

しかも、これは医療だけではなくて、例えば福祉、教育の世界で募集するときに公認心理師を持っていないとだめとなる可能性もあるのですね。だから、公認心理師そのものを止めるわけにはいかないけれども、ぜひこういう分野に進もうという人たちに、パーソンセンタードも含めて、人間的な視点というものを持てるように、誰のために、何のために、どういう人になってほしいと思って仕事をするのか、そのときに当然自分もそこへ入ると村山先生がおっしゃって、私も本当にそう思います。自分の生き方との問題、だから非常にテクニシャンとしてやっていくということは、自分の人間観がやっぱり問われるわけで、それをぜひいろいろなところでお考えいただいて、話してほしいな、そういう岐路にいま立っている、非常に危ないところにいるというふうに思っています。

だから、今回の企画はとつてもありがたかった。

村山先生：

生きるということが大事なんです。セラピストはどう生きるかというのが実際いつも問題にされているわけです。つまり方法とか技法を超えた問題ですよ。何のためにやるのだとかPCAの前提には、それが問われなくなると技法論だけになる。ロジャーズさんは僕がえらいなと思うのは、自分は手法の前提を確実にこういう価値でやるということをきちっと言っていますよね。そこまで言わないといけないのだろうと思う。技法だけで何をやるかとしているのか、その技法の前提になっている価値は何だとか、見えない前提を言語化するのは彼はシビアにとっても鋭いことをおっしゃる、すばらしいラディカルな人です。



飯長先生：

昨日あるところで、ロールプレイで勉強会をやりたいというので、呼ばれて3時間おじゃましたのです。そのときも結局、この聞き方、返し方がいいのか悪いのかという話はしない。それぞれの人がどうここで思い、クライアント役、セラピスト役もそうですけれども、まわりに10人ほどいたのですが、それぞれの人が今日どういうふう思ったかということ語り合う場所にしたいと言って、そうしたらみんな元気でしたね。とってもよかったです。私もそのグループとはそんなに親しくないのですが、PCAGIPまでなかなかいかないのだけれども、いわゆるロールプレイの聞き方がどうのという話にならなくて、みんなそれぞれ「This is me」、オーバーな言い方かもしれないけれども、みんなそれぞれみずからと関係づけて、そのロールプレイに来た人たちの話をどう思ったかという感じがあって、随分シェアできたと思います。

村山先生：

その辺すごく僕も関心を持っていて、私・私が生きている現代社会は、一大転換期であり、科学論、人間論、心理療法論、社会システム論、民主主義の在り方など。そのパラダイムを僕なんかもいろいろ探しているわけです。ロジャーズのPCAも一つのパラダイムです。それから、僕が注目しているのはオープン・ダイアログがPCAと一つの共通点を提出しています。ですけれども、パラダイムを出してきますよね。

最近では「ティール」という新しい組織論というかみたいなものがやっぱり一つ絡む。つまりいまは、そういういろんな生き方の問題というのはどうしたらいいかというのをすごく検討していく時代なんだというふうに思います。結論ではなくて、いまそういう時代に生きていることを。その意味で、「ネガティブ・ケイパビリティ」が一番ぴったりです。耐えていく、そして何かが見えてくるまで私のできること、つまりPCAGIPや、自己実現的大学院教育を実践していくのが私のPCAの未来論です。

司会（坂中）：

ありがとうございました。

司会としては時間が気になってきているので、そろそろ切らないといけなかなと思います。聴衆の皆さんとの対話の時間も持ちたかったのですが、ごめんなさい。時間があるので、それこそ抱えるということが大事ですよ。いまいろいろな刺激がありますけれども、抱えていただいて、またご自身の中で温めていただけたらと思います。

きょう3人の先生にご登壇いただいて、それこそ「This is me」ということで、自分を語るというようなこと、そしてメッセージとしては、3人の先生方からもそれを引き受けて自分がどうか、自分を括弧に入れない、自分のあり方、自分はどうするのかというようなことがメッセージとしていただいたのかなと

思います。そういうことに絡む本が『私とパーソンセンタード・アプローチ』、これは飯長先生が編集されているのですけれども、村山先生も書かれております。この本は、PCAを軸とする15人の実践家が、自分と向き合いながら自分にとってのPCAの意味ということを探めた、そういう文章がいっぱい載っております。

強引にまとめてしまいました、時間の現実もありますからすみません。

最後に、ご登壇いただいた先生方に大きな拍手をもって終わりたいと思います。本日は、先生方どうもありがとうございました。(拍手)

これにて公開講演会を終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

(拍手)

---

対談に続く質疑は、紙面の関係から割愛しました。

南山大学 人間関係研究センター  
2019年度 第2回公開講演会

## PCAの道：源流をたどる

2019年12月15日

国際医療福祉大学

飯長喜一郎



### 私の世代（団塊の世代のちょっと前）

- 1945(昭和20)年 新潟県上越市(高田)生まれ
- 1955年「ロージャズ選集」刊行開始
- 1961年ロジャーズ来日
- 1964年上京(東京オリンピック)
- 1965年大学入学
- 1966年「ロージャズ全集」刊行開始

大学紛争(闘争)、ストライキによる授業中止

- 1969年大学院進学
- 1983年ロジャーズ来日

## 東京大学教育学部の心理臨床系教員

- 1949(昭和24)年文学部から教育学部独立(教育心理学科)
- 1950年 澤田慶輔(生徒指導・カウンセリング)赴任
- 1951年 三木安正(特殊教育)赴任
- 1955年 依田新(教育心理学)赴任(同時に佐治守夫非常勤講師)
- 1967年 佐治守夫(臨床心理学)赴任(~1984年)
- 1984年 近藤邦夫(臨床心理学・教育心理学)赴任
- 1987年 村瀬孝雄(臨床心理学・内観、フォーカシング)赴任
- 1994年 下山晴彦(臨床心理学)赴任

.....  
(敬称略)

## 私とクライアント中心療法(PCA)

### 1 前史

大学入学後「心理学研究会」

(「現代日本の精神構造」、「精神分析入門」)

### 2 教育心理学科へ進学

文学部心理学科受講

(知覚心理学、学習心理学、社会心理学)

卒業論文「疎外感と知識」

伊東博「カウンセリング」

ロジャーズの“ロ”も知らなかった

## 心理臨床への接近

大学院(1969年～)

- 1 「教育相談室」へ  
何もなかった！→ 幼稚園見学  
発達心理学(修士論文)
- 2 臨床心理学の「勉強」  
ロジャーズ全集との出会い(輪読会)  
反精神医学(R.D.レイン、T.サズ etc.)
- 3 大学院の授業  
「授業」 「カンファランス」
- 4 諸先輩  
村瀬孝雄、山本和郎、越智浩二郎、野村東助

## なぜクライアント中心療法に惹かれたか？

- 1 それしか学べなかった！？
- 2 民主主義的発想(ベトナム戦争、ヒッピー)  
人間の価値、平等、自由意志、反権力・反権威
- 3 熱気、熱意(ロジャーズという人の魅力)  
→会えなかった！(1983)
- 4 一見シンプルな原理
- 5 科学主義  
(付:本の編集という仕事)

## 自分の向かうところを知らず(放浪?)

- 長い間、目先のこと(目の前に与えられたこと)に気持ちを持ちを奪われていた。  
(保健所の心理判定員、「日本の小学生」の調査、家庭教育研究所での研究、子育て支援)
- 心理臨床のエッセンスがわからなかった。そもそも臨床心理学を一生の仕事にするかどうか、心が定まらなかった。
- ロジャーズがスピリチュアルに傾いていくのに距離を置きたかった。
- 何事にも傾倒できなかった。したくなかった。EGしかり。「バランス良く」と思っていた。

## PCA的感觉(?)へのはるかな道

- PCA的感觉とは遠かった??
- 障害者およびその支援者との出会い
- 「臨床心理学」と「反臨床心理学」(不登校、学会)
- EGはじめ様々な場での人々との出会い  
(平等のまなざし)
- 自分の病気と娘の障害
- 受け入れられる経験

そして、その先へ(生き方としてのPCAを目指して)

南山大学人間関係研究センター 2019年度 第2回公開講演会

「PCAの道：源流をたどる」参考資料

2019年12月15日

## 日本におけるPCAの源流から未来に向けて

九州大学名誉教授・東亜大学大学院教授

村山正治

### I 源流 京大教育学部・大学院で生きていたころ（1954-1963）

- ① 哲学志向からカウンセリリングへ ロジャースの魅力 「PCAを生きる」
- ② 京大教育相談室・教育心理学講座（1958）・臨床心理学講座（1964）胎動・正木正・倉石）精一が教授。畠瀬稔との出会い・実質の指導者
- ③ 畠瀬稔・阿部八郎編訳「来談者中心療法の発展と現況」（1964）分担訳 「This is Me」の翻訳 ロジャース全集12巻人間論編訳（1967）
- ④ 臨床体験の蓄積・登校拒否の面接体験（ロジャースをめぐる一臨床を生きる発想と方法—2005）
- ⑤ 外部状況「補導研修センターの設置反対」（1959）

### II 私のロジャース体験（1961・1072-1973・1983・1986）

- ① ロジャースの来日 1961 京大での講演 大甕ワークショップ 東大グループとの交流（佐治守夫・山本和郎・越智浩二郎）
- ② 1965 河合隼雄の登場・インパクト

### III PCAを生きる・EG体験・CSP留学体験

- ① 九大教養部SC体験・大学紛争体験（1968）合宿体験
- ② 畠瀬夫妻・村山正治 京都女子大で日本初EG（1970）EG主体の人間関係研究会（1970）福岡人間関係研究会発足（1968）
- ③ 倉石精一の序文
- ④ 私のCSP体験・アメリカ体験
- ⑤ 時代精神 静かな革命家としてのロジャース

### IV 私のジェンドリン体験（1972）フォーカシングを生きる

- ① シカゴのチェンジズ訪問（1973）
- ② ジェンドリン夫妻を日本へ招待（1978）（1987）
- ③ 村山正治・都留春雄・村瀬孝雄で「フォーカシング」翻訳
- ④ 1980以後 池見陽らと九州地区中心の活躍、日本フォーカシング研究会、さらに日本フォーカシング協会設立へ

### V 大転換期に生きる・私のこれからの方向

- ① 新しいパラダイムの探索 静かな革命論の継承

## 村山正治氏 当日配布資料

- ② 新しい事例検討法 PCAGIP（ピカジップ）（2012）の開発と展開
- ③ 新しいE G観による PCAG（2014）の開発と展開

村山追記：時間の都合で当日配布したレジメのⅠ-Ⅱまでを中心としてお話ししました。Ⅲ、Ⅳ、Ⅴには触れることができませんでした。ここにレジメを掲載させていただき、参考資料として提供させていただきました。



■■ 特集「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」

## 私の歩み (This is Me)

田 畑 治

(名古屋大学名誉教授・同朋大学大学院客員教授)

### はじめに

このたび、本特集の編者・坂中正義教授から、私に誌上参加の依頼がありました。厳密に言いますと、私の“源流”はPCAに先行する“Client-Centered-Therapy (CCT:クライアント中心療法)”の感じがありますが、自己の心理臨床実践上も研究上も、C.R.RogersのCCT・PCAの理念に根ざしながら関与してきた第2世代の一人として快諾いたしますと共に、声がけしていただいたことを感謝いたします。

まずは先の12月15日に開催のシンポジウムの登壇者3氏には、以下のようなパーソナルなコメントをさせていただきます。

村山正治先生は私の京大時代の先輩で、私が大学院入学以降、私の研究、PCA関連の全国学会やSC・WG会議等で今日に至るまで私たちを支援してください、つい最近も『スクールカウンセリングの新しいパラダイム』を出版され、絶えず“チャレンジ”され、“チェインジ”されております。

梶瀬直子先生は彼女が京大大学院進学時から会い、その後先輩・稔先生と結婚されて、ご夫妻ともにわが国で初めてRogersのお膝元・カリフォルニア州ラ・ホイアのWBSI⇒CSPで2年間にわたり研修をされ、継続的に“線”で薫陶を受けられた先生方です。また直子先生は、Rogersの1970年以降の著作の翻訳書やご自身の著書が出版される都度にご恵送してくださっています。

飯長喜一郎先生はPCA関連学会、東海地区学会やその他で親しく接している先生です。いつも温顔で、とても率直な自己開示をされ、好感がもてます。また“実験的カウンセリングにおける体験目録の因子分析的研究”の遂行や“上善如水”も忘れていなくて、感謝です。

さて、このたびの特集テーマで私の強い関心は「PCAの源流をたどる」を

見て直観的に浮かんだことは、かつてRogers, C.R.らが、1950年代後半にクライアント中心療法で鋭意取り組んだ“過程尺度”（process scale）の段階づけやストランズ（撚糸の意）の“源流”や“取組み”についてでした。そこでそれらを念頭に置きながら、私のCCTも含むPCAとの出会いや実践研究の歩みの“**This is Me**”を段階づけしてみようと考えました。以下1～7までです。

## 1. 幼少年期と思春期・青年中期時代

<1940・昭和15年～1958・昭和33年までの18年間>

**私の場合、生まれ故郷・山口県瀬戸内海・周防灘の美しい自然、田畑での農作業や継続して家禽などの飼育経験で粘り強く辛抱すること、中学時代のスポーツで体力や精神力の啓培がPCAの源流になる経験・“前段階”**

私は同県光市の山の手の、風光明媚な“御手洗湾”や松原海岸が遠望できる親戚で元旦に誕生しました。父親が光市近辺の国民学校（当時）の教員をしていた関係上、われわれ両親・姉・私・弟の5人は当時叔父・叔母宅の別棟に身を寄せていました。従って私の源流はRogersの北アメリカ大陸・中部の大都市シカゴと異なり、気候温暖な瀬戸内海にあります。

1945・昭和20年夏・太平洋戦争が終結後、佐合島から国民学校入学前に祖母が住む菩提寺のある瀬戸内海・周防大島（＝屋代島）に帰り、3世代7人家族になりました。父親は私が小学校4年まで祝島という離島に単身赴任していました。3世代家族では当時の父親の給料だけでは賄えず、母親は雨の日以外は食糧増産にと野良畑で農作業に勤しみ、われわれも栄養補給にと、鶏・ヤギ・羊・ウサギを飼育し、その種つけや出産の世話もしました。日曜日には一家総出で猫の額ほどの段々田畑や山林で耕作や作業労働をしました。梅雨時には段々畑は土砂崩れに遭い、その修復に土砂除去や石割作業もやり、花崗岩にも石目があるのを発見したりしました。父親はよくそこを“**勤労・実学の場**”・「横山大学」と呼んでおりました。

また夏場には父親と3歳年下の弟と3人で手漕ぎの木造伝馬船に乗り、内海の遠くの小島（浮島）の磯場にヤスでの素潜り漁に出かけました。快晴の日には遠くの空に入道雲がもくもくと浮かび上り、刻々と姿を変え、後に大学で学ぶ投映（影）図のように感じ、また心の流れの読み方「**関係のなかで海流や風向きを読みとる**」、「**潮の干満**」<一丸藤太郎編『私はなぜカウンセラーになったのか』創元社、2002年、Pp.221-241.>も学びました。祖父は、やまじ風や海が荒れた日などは心配して対岸で夕暮れまで待っていてくれて、海行きも一家挙げての共助になりました。

海面下の姿は、まるで“**万華鏡の世界**”を観る感じで、視聴覚・冷覚・味覚・触覚・嗅覚など実によく入り混ざっていました。オコゼ・電気クラゲ・鱻（フカ：サメ）には細心の注意を払い、海底の穴場・“釜”で石鯛などの獲物に出

くわすと“息をつめて”接近しました。これはCCT・PCAで個人や10数名の小グループとの最初の出会いや治療関係の慎重な確立にも共通する感覚です。<<なお1983年来日したRogersと「禅とPCA」で対談した近藤章久先生【精神科医・私学八雲学園々々】は、私が通った安下庄（あげのしょう）高校（現：周防大島高校）の地元生まれ、小5年までの育ちで、因みに平安時代に菅原道真公が九州・大宰府に流される際に停泊した安下庄は“安全に下るように”と命名された土地の生まれです。近藤先生は少年時代に父親に連れられ、“いのちの海”での鯛釣りの経験を述べられ、鯛の行動特性や釣り糸の絡みの解き方がセラピーにも有効だといわれております。（『セラピストがいかに生きるかー直観と共感ー』：春秋社、2002年、Pp.26-27.）>>私も中学時代に行ったクロダイ釣りの経験があり、同感です。

## 2. 京都時代①

<青年期後期⇄学生期（1958年・昭和33年～1962年・昭和37年までの4年間）>

この時期はまだCCT・PCAは知識習得程度の自己評価の第Ⅰ段階

われわれの高校時代までは、日本はまだ終戦後の復興途上で、国内総生産（GDP）水準が低く、所得倍増論が提唱された時期でした。当時授業料が安い国立大に行くことが憧れの時代で、Ⅰ期校の目標は西日本の雄・九州大学か京都大学でした。当時の京都大学（以下京大）には浪人を覚悟で受験し、何とか合格しました。入学したら同学年の連中は受験浪人経験者が多くて男女とも皆“おとな”に見えて私ら地方出身の現役組数人は頭髪も“いがぐり頭”で劣等感に悩まされました。各高校の出身地では北は北海道から南は鹿児島までいました。沖縄は当時まだ米国統治下でした。

①京大は伝統的に“反戦と自由”の学風で、“放任主義・捨て育て”の教育方針といわれておりました。われわれが入学した昭和33年（1958年）には1回生は宇治分校（日本の旧火薬保管庫跡地で“ジャングル大学”のK新聞評があり、金網で隔てて自衛隊宇治駐屯地）、2回生は京都市内吉田分校（旧制第三高等学校跡地）でした。3回生以後の学部専門課程は、昭和31年建設の熊野校舎で過ごし、心理学基礎実験などは本部構内赤煉瓦の建物に分散していて徒歩か市電か自転車で移動しました。その後、昭和40年には京大本部構内に新館が建てられ、熊野地区は学生寮になりました。われわれが入学時から所得倍増計画を見込んで定員が増え、50名・1学科・5コース制：A（教育哲学）、B（教育課程）、C（教育心理学）、D（教育社会学）、E（教育行財政学）に分かれておりました（京都大学大学院教育学研究科70年史編集委員会編『資料に見る京都大学教育学部の70年』、2019年）。

②専門講義：私は概して授業には真面目に出ていた方だと思います。家からの仕送りだけでして食費は切り詰めましたし、アルバイトは無く遊ぶお金は

無しでした。講義にいくつか印象深いのがありました。中でも私が後に臨床心理学の中核に据えましたAコースの下程勇吉教授の教育学講義は人間形成の逆説的二重性、啐啄同機、代理不可能性・全体包容論や“テストクラシー”論に熱弁を揮われ、感激・感動しました。Cコースでは2回生時に正木正（まさきまさし）教授・苧阪良二助教授・梅本亮夫助教授・高瀬常男助教授のオムニバス形式の教育心理学講義がありました。特に正木先生は健康が優れないにもかかわらず自ら教育相談を实践され、独自の“魂の教育心理学”を力説され、感銘を受けました。しかし正木教授は私が2回生の夏休み明けの9月3日に肺エソと急性心臓衰弱のため、54歳で逝去されたのです。正木先生は戦後日本の教育改革にアメリカ教育使節団の教育指導者講習（IFEL）が企画されて来日した際に児童発達心理学のA.T.Jersildを通じてRogersを紹介された先人の一人でした。<<その他はわが国のカウンセリング界の草分け・友田不二男先生が居られ、Rogersの〔Counseling and Psychotherapy,1942.の翻訳書・『ロジャーズ・臨床心理学』1951年、創元社〕があります。>>

③卒業論文は、「悩みとなる病気等の背景に関する心理学的研究」といって小児マヒ、吃音、夜尿症、トラホームなど10個のコンセプトへの都会と田舎の児童とその保護者、および教師の見方や意識の“一対比較法”での文化社会心理学的な調査研究で、調査用紙の集計に夏休み中かけて取り組みました。

### 3. 京都時代②

<大学院修士課程進学から大学院博士課程満期退学（1962（昭和37年）～1967（昭和42年3月）⇨京大助手（1967（昭和42年4月）～1969（昭和44年9月までの7年半）>

**この時期はCCT・PCAの自己評価で第Ⅱ段階の客観的・量的・実証的研究段階**

昭和37年以降は日本の政治・経済政策では所得倍增政策が打ち出され、Cコースの仲間17名は学部卒業後に多くは企業の教育・訓練課に採用されて行きました。私は家では大学院進学を勧められており、Cコース内部からの進学者は私だけでした。

#### (1) 臨床経験の開始

①大学院で心理面接相談の開始：当時の私の日記によれば、5月4日・飛び石連休に心理相談の初体験とあります：5月4日（金）に初めて教育相談に取り組んだことが記され、「面接中に絶えず苦悩したのは立場の問題であった」とあります。5月10日（木）非常勤講師の畠瀬稔先生（京大の大先輩）の「カウンセリング演習」で「はじめてにしては（カウンセリングは）とてもよくできているといわれた」ことが記録されています。<この記述からカウンセリングでの褒めて育てることを学ぶ気がしました。>若干22歳過ぎの若造が親御さ

んの心理面接相談に手玉に取られたことが記憶にあります。考えてみれば、年齢格差があり大相撲で“横綱”（保護者）と“幕下”（初心のカウンセラー）に譬えて認識し、面接に臨んだものでした。時間外（木曜日・夜2時間半程度）の「プラクティス研究会（“プラ研”と略称）」に数名の大学院先輩とS内地研修員の計6、7名が参加する面接実践の逐語記録の検討会を持ちました。土曜日など面接逐語記録作りに明け暮れました。S研修員には録音記録を聴取してから「田畑さんは、どういうつもりで面接をしているのか!？」といつも開口一番に厳しく問われ、苦痛で嫌でしたが、今日ではとても有難かった気がします。率直に申しますと鍛えられたというのが本音です！

②Rogersの実際の録音テープ記録に出会う：大学院では日本育英会の奨学金が貸与されることになり、それも好作用し、7月下旬に京都市カウンセリング・センター主催の学校教員主体の研修会に参加しました。5泊6日の日程で、俗界を離れた涼しい比叡山・延暦寺宿坊が会場で運営形式は“学習者中心”に進められました。少数の大学院生の私たちは初経験であり、会の開始からどのように振舞うか戸惑い、“モヤモヤ・グループ”、“落ちこぼれグループ”になりました。その中の教材で前年1961年に京大アメリカ・セミナーの招きで来日時に実践したRogers（聴き手）が“金欠を訴える学生”（京大学生懇話会のTS先生が英語での話し手）の20分間のデモンストレーション・カウンセリング・ロールプレイの録音記録テープがあり、聴取しました。Rogersは面接終了の間際に3回くらい鼻声で“I respect you”を連続して伝えていたのがとても印象的でした。また講演でCCT・PCAの人間観の一端（＝トカゲは尻尾を切られると自らの力で伸ばしてゆく、生来に成長潜在能力が備わっている）という内容でした。<<氏原寛・村山正治編『ロジャーズ再考』培風館、2000年、第6章、Pp.103-108.>>これは私の方がRogersの肉声の調子や態度に感動し、“主体的に感化を受ける”契機（正木教授）になり、Rogersに初めて出会えたことになります。

③大学院では専任教員が主宰される共同研究にも加わる：私は故・正木先生の精神を引き継いだ高瀬常男助教授主宰の「信楽研究会」に入会し、その世話人に指名されました。正木・高瀬両先生は「魂抜きの心理学（独：Psychologie ohne Seele）」への反骨精神に満たされておりました。フィールドワークには滋賀県信楽町（現：滋賀県甲賀市）にある信楽青年寮という入所・知的障がい青年の「共感関係」・「人格発達」の研究で、月一回は出かけました。施設長・池田太郎先生の間観は“ふれる・しみる・詫びる教育”であり、“受容的な雰囲気”、“信楽らしさ”、“教育的人間関係”や“社会とのつながり”とRogersのPCAの考え方と共通します。成果は東北大学で日本教育心理学会第4回大会が開催されて発表し、当時の発表資料は東北大学の教育心理学・塚田毅先生の研究室でガリ版摺りの資料を作成しました。

④仙台の日本教育心理学会に出かける東大グループとの出会い：東大出身の

山本和郎・越智浩二郎両先生ら「治療関係スケール、特に生命力スケール作成」の共同研究者・野村東助先生ら有志と上野駅始発の夜行列車で偶然出会いました。この先生方の『関係スケール』の取り組みは、私が後に博士課程で組んだ『体験目録』作成に刺激を受けました。

⑤修士課程在学、学外に研修に出かける：当時畠瀬稔先輩方の勧めもあって一日は「何もしない日」を創り、学外の大阪府中央児童相談所（所長：稲浦康稔先生；鈴木Binet法の鈴木治太郎の指導生）・判定課に嘱託判定員として大阪・森之宮まで終日出かけました。判定業務はテストバッテリーを組んでの知的情意的側面の各種テストであり、判定課長にまとめて報告するものでした。私はPFスタディの実施や解釈は得意になりました。

⑥自主的な読書会：隔週土曜日に京大人文学研究所員の心理学・牧康夫先生も加わられて臨床心理学専門書（原書購読が主）の輪読会を持ち、Rogers, C.R. (1951), Axline, V.M. (1947), Freud, S. (精神分析入門・続入門の訳本), Kline, M. (Child analysis) の原典を取り上げました。Klineの性器部位名を基本にした内容には困惑しました。牧先生は修士論文計画案の下相談など丁寧に細かくみて下さいました。

⑦修士論文は、「心理的葛藤としての問題行動の一研究－特に吃音児の自己意識と対人感情の分析を中心として－」がテーマでした。吃音児の特徴から4群に区分し、BC-SCインベントリーとPFスタディを組み合わせでの対象群比較研究でした。

## (2) 修士課程から博士課程では研究題目を心理治療関係と人格変容の研究に変更

その契機はある非行少年との全面接回数が計6回で短期に終結した心理面接で、「逐語記録」もあります。単一事例の面接記録と『関係目録』との双方向からの比較研究でした。

①『過程尺度』か『関係目録』か：心理療法の面接を第三者の視点から研究する前者は、先に〈はじめに〉で言及したC.R.Rogersらの『過程尺度』を用いる方法です。そして後者のアプローチは当事者自らの認知からの方法です。Barrett-Lennard, G.T.が1962年に博士論文で作成し、使用した『関係目録』の方法です。その簡易版を用いて研究したものに鑓幹八郎（当時：京大助手）・村山正治（当時：京都市カウンセリングセンター）両先生、古川和子（京大教育学部卒、4年後輩）があり、私はこの簡略版を使わせてもらい、非行少年の面接の初回面接終了後と5回目面接終了後に実施しました。セラピストの得点はあまり変化しないのに、クライアントの得点でセラピスト認知・知覚が大きいたことが判明し、**初回と5回目ではクライアントの認知評価が天地逆転するほど、何故なのかが基本的な問題意識・課題になりました。**

②新規に『治療関係の体験目録』の作成と適用：この経験と結果から私は面

接要因を拡大して、面接前、- 中、- 後の3時点、それぞれに3⇨3⇨2の計8要因からなるセラピストの『関係の体験目録』を作り、因子分析や信頼性・妥当性の検討をしました。予備調査から集めた項目の各要因評定は森野礼一(神戸女学院大学)、村山正治(京都市カウンセリングセンター⇨九大)、西村洲衛男(京都市カウンセリングセンター)、浪花博(京都市カウンセリングセンター)の4先生にお願いしました。この研究の枠組みには指導教官・倉石精一教授から示唆を得ていたLewin,K.の「人間行動 (B)=f (パーソン (P), 環境 (E))」の関数というトポロジー心理学の考え方が基礎にあります。私の構想した公式・関数は「人格変容 (Personality Change)=f (Therapist, Client)」になります。これらは「セラピストの治療的要因の因子分析」(1967、『臨床心理学研究』)に公刊しました。また来談者用に同様な3時点、8要因からなる『関係の体験目録』を作成し、これは「クライアントの治療的要因の因子分析」(1968、『臨床心理学研究』)になります。

③身固めの結婚と博士課程修了資格論文の完成：博士課程では、それこそ命を懸けて朝夕に臨床実践と客観的研究に邁進しました。そのために先輩方もそうでしたが、1965年(25歳)時には結婚して身固めをしました。<<因みにRogersは僅か22歳で、厳格な家族の掟から解放されて幼馴染のヘレンと結婚し、ニューヨークに出立した記述が『自伝』(Rogers,1961)にあります。>>

#### 4. 京都⇨千葉時代での職業生活①

<助手⇨専任講師・助教授：(京大助手から千葉大学専任講師・助教授に赴任(昭和42年・1967年10月～昭和50年・1975年8月までの約8年間)>

この時期は段階付けとしては物差し作り・客観的量的実証研究の推進(⇨事例研究)、CCT・PCAの自己評価第Ⅲ段階

この時期は日本が1960年代からの所得倍増計画での高度経済成長を遂げ、鉄道も新幹線が東京駅 - 新大阪駅間に開通し、1964年に東京オリンピックを開催した半面で、その負の遺産や歪みが生じ、これらの問題に向けて大学では学生闘争・運動が盛んになり、支配者・国家権力・(大学管理者)対被支配者(学生)との闘争構図はどここの大学でも大なり小なり生じました。象徴的には1969年の東大入試中止に伴い、全国から京大にも入試中止に向けて押し寄せ、まるで“百姓一揆”のような様相でした。他方、国会では「大学の管理運営に関する臨時措置法(大管法)」が成立して大学人は受難の時期になりました。1964年設立の日本臨床心理学会も心理技術者の資格問題を巡って紛糾して暗礁に乗り上げてしまいました。

①京大助手に採用されたこと：1967年大学院博士課程満期退学して4月からは助手に採用され、懐に辞表を携える覚悟での就任でした。“PCA精神である人間誰が相手でも大切に接すること”を自覚・確認しての毎日でした。非常勤

で土曜日に西宮市のS短期大学に出かけ、帰りには住居のある大阪府高槻市の自宅を横目に見ながら、また京大に引き返しておりました。

早速ですが大学紛争では教育・研究だけでなく臨床実践にも影響を受け、助手は心理教育相談室や来談者の安全確保に苦慮しました。経済発展のおかげで、反面で臨床心理学も強い影響を受けました。来談者が学生闘争・運動の被害を受けないよう、専ら安全と安心の確保をすることが助手の務めでもありました。心理教育相談関連の資料の移動保管などには院生も随分協力的になってくれました。もちろん臨床実践と博士論文研究の推進には手が抜けませんでした。

②関東の国立千葉大学に採用にされる：1969年10月から教員養成を主たる目的とする教育学部に縁があり、採用されて教鞭を取るようになりました。小学校教員養成課程免許取得に必須の「児童心理学」のみならず、専門柄選択科目の「臨床心理学」講義や「教育相談法演習（教育心理学選修）」なども担当しました。併せて私が臨床心理学の専門家だとのことで、学内人文学部の心理学のM先生やA先生方とともに「学生相談員」にも委嘱されました。この中で「教育相談法演習」だけは先輩の畠瀬稔先生が京都女子大学で実践中の「学生中心の授業」や、かつて見学させていただいた広島県三原市の小学校・TK先生の「人間中心の授業」に習って試行しましたが、失敗に終わりました。理由は当方にその力量が十分でなかったし、「教育相談法演習」の受講生に反権力・MPI粉碎背番号制阻止連絡会議の親派学生がいて“討論集会”に切り替えられたキライがあり、中断しました。やはり討議にも“自由と制限”の問題がありました。

③博士論文の完成と取得：1971年の元旦に雪が降り子ども達に雪だるまを作り、炭で目球を入れてやりました。その直後から博士論文を一本化する作業にほぼ毎晩のように取り組みました。元旦から執筆を始め、製本する3月までかかりました。論文題目は『心理治療関係による人格適応過程の研究』でした。3月末には京都大学に提出して11月末にはめでたく授与されました（論教博：第14号）。これで量的研究には区切りがつかしました。

## 5. 名古屋時代①・職業生活②

<名古屋大学助教授：(1975年8月～1986年6月まで) ⇨名古屋大学教授：(1986年7月～2003年3月まで) の約28年間>

この時期はいわば質量とも多角的な取り組みが必要になり、CCT・PCAの転回とともに独自の展開が求められ、自己評価の第IV段階

この時代背景は日本が経済的にGDPで世界2位になり好景気で安定しましたが、産業公害などの負の遺産処理問題、その後バブル崩壊や不安な経済状況になり、他方で少子高齢化に向かう時代になります。

名古屋時代①：心の専門職・職業生活：教育・研究、管理の他に学外心理臨床支援の取り組み内容の種類と広がり：縁あって1975年8月から大学院博士課



程を持つ伝統校・名古屋大学に採用され、赴任することになりました。研究面では、これまでのCCT・PCAの心理療法の客観的・量的な実証的研究から、治療者・クライエントの相互主観的・質的な、個別性を重視する実践⇔研究への転回や心理臨床家の資格問題や養成の問題にも関与し、発展・展開するようになりました。特に1982年に新規に日本心理臨床学会や日本人間性心理学会の創設に私も関与し、生身の人間の個別世界を重視する臨床事例研究運動の展開とも重なり、この時期は私の中で、大きな転回が起きる時期になり、基本的にはRogersのCCT・PCAの“最も個別的なものは最も普遍的である”に徹することになります。基本的にはPCAの理念に基づき、学部生・院生のみならず教職員などにも誠実に接触することに努め、私は教職・心理臨床が一貫した専門職ですが、人間関係で意識していることの一つに“親分・子分”という呼び方や上下関係は好まず、PCAの観点から対等・平等関係、気持ちとしては相手の“下側に立つ”(to understand～)スタンスを好みます。

### (1) 心理臨床の諸活動

主として臨床心理相談室⇒心理教育相談室・心理発達相談室並びに学生相談室でのカウンセリング・心理療法事例での治療者・クライエントの相互作用に基づくプロセスの質的な考察を進めました。夢を扱った事例研究や幼少期の親喪失の事例研究や子ども喪失した親事例研究、青年期・成人期事例研究等に集約されます。それらは国内・外の国際応用心理学会議、世界精神保健連盟会議などに参加し、研究発表を行いました。

### (2) PCA関連会議・研修会等への参加

①学生相談担当教官自らが受ける“ベーシック・エンカウンター・グループ”(BEG)のグループ体験：国立大学で主として学生相談に携わる教官(専任⇔兼任)が自ら主体的に“エンカウンター・グループ”を受ける経験を積もうとの意思で企画され、各地区国立共同利用研修施設に合宿形式で3泊4日(後に2泊3日)にわたり行われたものに参加しました。趣旨は学生相談で“小グループに携わる者”は最低100時間以上のグループ・メンバー体験をする必要があるとの認識からでした。第1回は1976年7月に九州大学の学生相談担当者(安藤延男教授、村山正治教授、峰松修講師)のお世話で“リーダーレス形式”で行われ、私がBEGの経験者と仰ぐS先生等約15名前・後が参加しました。この会はその後も愛媛大学(福井康之教授ら)の臨海実験施設、山形大学(末廣晃二教授)の蔵王温泉施設でのお世話で続けられました。私自身は小グループの中で自身の辛い困惑や苦痛の表出を通じて自他ともに揺さぶられて、思いがけず落涙し、他メンバーにふんわりと受け止められたりし、PCAの苦悩、心地よさや美しいあり様や人との繋がりと深まりにも出くわしました。また不消化部分は包んで帰りました。

②1978年に九州大学で日本心理学会第42回大会（委員長：村山正治教授）が開催された際に、シカゴ大学・E.T.Gendlin博士のFocusing講演や学外・福岡北部の津屋崎海岸で夫人M. Hendricks-Gendlinも参加してのFocusing研修会が開催され、私も伊藤義美氏（当時：大学院生）らと参加しました。その後、名古屋に帰ってからもFocusing研究会を立ち上げ、数年間研修を積み重ねました。このグループから後の1998年には伊藤義美氏（情報文化学部助教授）が「フォーカシングの空間づくりに関する研究」で博士学位を取得し、国際フォーカシング研究所認定のコーディネーターになり、今やわが国のPCAグループにも関与し活躍していることは頼もしいことです。

③その会期中に開催された“心理臨床の夕べ”に参加：54名の出席に端を発し、翌年1979年には名古屋大学で村上英治教授や中京大学・空井健三教授らと“心理臨床家の集い”という形でお世話し、1980年は東京地区・八王子セミナーハウスで、1981年は滋賀県大津市で心理臨床研究集会を開催し、ついに翌年1982年に九州大学で日本心理臨床学会第1回大会（委員長・成瀬悟策教授）が開催されました。PCAの創始者Rogersは1983年に人間関係研究会が主催した会に招聘され来日し、80余名の中に私も埼玉県嵐山町の国立婦人会館（現：女性会館）に出席しました（後述）。またその後、Rogersは1987年2月に腰の骨折療養中のところ、心臓発作で逝去されるという悲しい出来事が生じました。この追悼も踏まえ1987年11月の名古屋大学で第6回大会当番校企画シンポジウム：村上英治教授・伊藤義美教授・田畑らは「心理臨床の今日的課題を問う－C.R.ロジャーズが遺したものからの出発－」を企画し、佐治守夫（日精研・心理臨床センター）、島瀬稔（京都女子大）、村山正治（九州大）の話題提供、河合隼雄（京大）、鏑幹一郎（広島大）の指定討論で豪華な顔ぶれのシンポを持ち盛会裏に終了しました。

④1989年3月から文部省の在外研究員として10ヶ月間、アメリカのUCLAに派遣されて、心理学部S.Sue教授（minority；diversityの研究者）のもと「アジア系アメリカ人のメンタルヘルス国立研究センター【略号：NRCAAMH】」に所属しました。UCLAの研究センターでは“Scientist-Practitioner-Model”での主に数量的な研究をするのですが、当方も日本での心の健康・メンタルヘルス課題について発表する機会がありました。先ずUCLA当該大学の使命（mission）に“非差別”（non-discrimination）が謳われていることにPCAの理念と共通すると感じました。6月にはロスで普通乗用車の運転免許も生まれて初めて49歳で取り、マイカーで9月になりロスからラ・ホイアのCSPに故Rogers先生の追悼と生前中の感謝を兼ねての訪問をして歓迎され、N. Kandel所長から“Rogers Memorial Library”目録も拝受しました。しかし10年後夏季中に妻とともにCSPを再訪するとラ・ホイアの別箇所に移転して、郵便受けに数通の郵便物がたまっていました。

## 6. 名古屋時代②・職業生活時代③

＜愛知学院大学教授⇕客員教授：(2003年～2014年まで11年間)：愛知学院大学退職以降の同朋大学大学院客員教授時代(2014年～2020年・現在までの7年間)＞

この時期は日本の経済状況は“低成長・厳冬の時代”

私の研究は個別的な実践研究になりますが、さらに私学の管理運営(学部長や科長)に携わる時期でもありましたからPCAの自己評価は第V期になります。但し、既に指定された紙面が限度を超えています。掻い摘んで述べますと、①臨床実践研究、教育指導、そして管理運営にもPCAの考え方は終始一貫して意識して臨みました。また②文部科学省学術フロンティア推進事業で『『こころの専門家』養成後の研修プログラムの開発的研究』(2004～2006年)に代表者として関与し、人間性心理学への功績で2006年度(平成18年度)日本心理臨床学会賞を受賞したことは望外の喜びになり、わが生涯の歩み記念になります。

## 7. 結 び：PCAと私との出会い：“This is Me”

### (1) PCAの源流・創始者・Rogers, C.R. (1902～1987) との出会いと接触

エピソード (i)：Rogersとは1983年に「人間関係研究会」が主体になり埼玉県嵐山町・国立会館で開催された時にじかに会えました。初日のセッション＝ウォーミングアップで80余名のメンバーが広い会場に二重円で交互に移動し、行き交う際にRogersはごく普通の“好々爺”で軽く肩に手を当てて通過するワークをしたのですが、きちんと温かな眼差しで合わせられました。私のイメージでは、その様は海中に住む“悠長なマンタ”のようでした。研修会期中は充実した企画内容でした。記念出版書『カール・ロジャーズとともにーカール&ナタリー・ロジャーズ 来日ワークショップの記録ー』(畠瀬直子・畠瀬稔・村山正治編、1985、創元社)は現在絶版で、高額プレミアムがついているようです。

エピソード (ii)：会期中の『禪とパースン・センタード・アプローチ』のセッション最中に起きた“地震(深度3?)”時のこと：あとでフロアから両先生へ質問がでた際に、Rogersは肩をすくめて「恐ろしくて机の下に入りたい気がしました!」との返答でした。フロアからそのユーモラスさに笑いが起こり、私もほんとうにその正直さとナイーブさにも痛く感じ入りました。これに対して近藤章久先生は地震の質問に対して泰然自若とされ、問いにも無然として“無応答”でした。近藤先生は心底から東洋の君子観がしました。

エピソード (iii)：非指示的な対応のRogers先生が“質問”をした?!：前年に私が単著で出版した『カウンセリング実習入門』(新曜社、1982年)を学恩にと、毛筆で献本のサインをして風呂敷に包んで会期中に会場で渡すチャンスを狙っておりました。なかなかその機会がなく、最終日前々夜にとうとう講師控

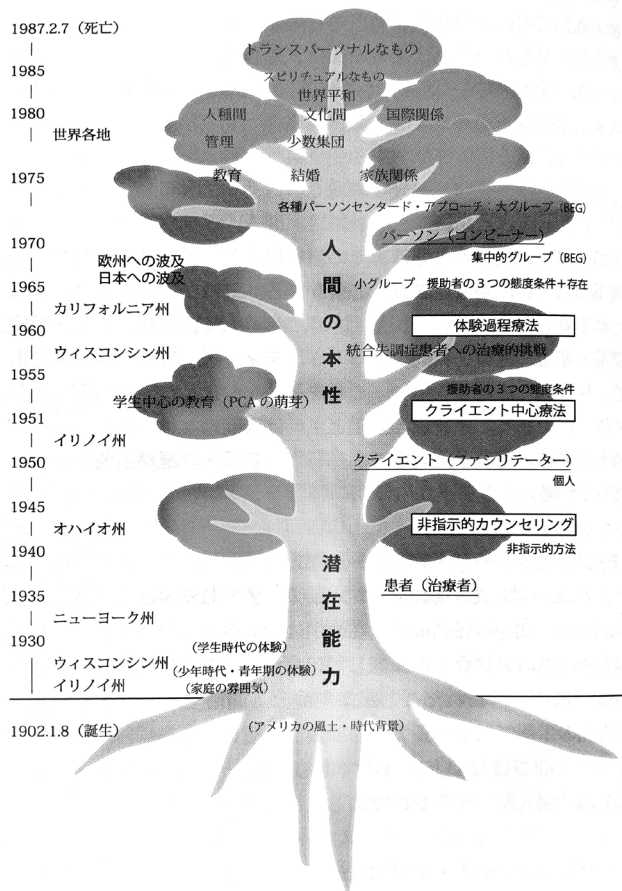
室にまで乗り込み渡しましたら、Rogersが“What’s book name?”と積極的に質問をされたではありませんか!?日本語が読めないから当然な質問ではありませんでした。

## (2) 私が理解したRogersの、PCAの全体像

要点的に、以下の①～④の4点になります。

① 先ずPCAの源流・中流・下流・大河でのフィロソフィー（考え方）：PCAの中核理念は一貫し、かつ継続され大樹・大河を形成していること。図はPCAの発展・展開の系統樹図・イメージです（日本人間性心理学会編『人間性心理学ハンドブック』創元社、2012、P.58）。

つまり種々の人間関係の中で、一貫して個人（体）の実現力・成長力への全幅の信頼を寄せつつ、誠実にあること、無条件の肯定的な関心、内的な枠組みを共感的に理解しかつ伝え返すことの3つの態度条件と臨機応変の対応がなされ、個人やメンバーはその3条件を知覚・認知することです。Rogersの実践領域は非常に広大で遠大です。



PCAの発展・展開の系統樹図・イメージ（田畑、2012）

②コンタクトの相手は、(i) 患者⇒クライアント⇒患者・統合失調症者⇒パーソンへ、(ii) 個人⇒小グループ⇒大グループへ、(iii) カップル・マリッジペア・妊娠・幼少児⇒高齢者や死（スピリチュアル・霊性）まで、(iv) 単一性⇒多様性へ拡張したこと。そのイメージは海・池に投じた小石が次第に大きな波紋を描いて拡大するイメージになること。

③実践主体は“固着”せず、絶えず“チェインジ”しつつあること。

④実現・実践の場：専門相談機関⇒地域社会の各機関⇒国際的な場へと拡張していったこと。

### (3) 私の場合の自己評価

CCT・PCAは前段階を加えて、第I段階から第V段階に展開しております。基本的にはCCT≥PCAであり、直近の“PCAパラダイム”から取り残されて、逸脱しているかもしれません。自己評価では、CCTの実践は“線”でやり、PCAの実践は“点”でやってきた感じです。また私の中での拘泥は、Rogers論文：1957年と1959年の「建設的な人格変容の“6つ”の条件」で、特に第6条件の変化（1957年では“治療者の条件”；本稿の初めに述べた「心理療法の過程方程式（1958年）」のストランズや1959年では“クライアント（パーソン）の条件”）であることです。先の<挿入図>から言いますと、1957年の「建設的な人格変容の第6条件」はRogersが1958年にシカゴ大学からウイスコンシン大学精神医学研究室に移り、メンドタ病院と連携し、“知覚や認知度の低い・動機づけのない”クライアント（患者）との心理療法で最難関とされる統合失調症者への取組みはこの第6条件の変換の指標になると考えます。印象深い事例はMr. James Brown (VAC) (Rogers, et al, 1967) に伺えます。私の博士学位研究（1971年）もその差異点に焦点化しました。

Rogersは、それ以後そこから時計の振り子のように180度転回し、知覚や認知度の高い、まったく健常者に向けて取組みを始め、場所も北アメリカの中部大陸部ウイスコンシン州から1963年から西海岸カリフォルニア州に移り、WBSI⇒CSPに所属し、世界を舞台にして広く実践し、かつ展開した“PCAパラダイム”、その取組みへの考え方や人間観は不変だといえましょう。

### (4) 最後に蛇足

国連決議でのSDG's（＝持続可能な開発目標）に加えて、また21世紀の新課題として今後はCOVID-19への対応，“With Corona”時代の到来に向けて、PCAも含めて人類の存続をかけて、“いのち”・生命維持や多様性への共存に日本国内のみならず全世界中が“一丸になって取り組むこと”が求められるでしょう。

- Fin -

《付記》

1. 本稿の初出は、筆者の名古屋大学定年退官記念最終講義・2003年3月「心理臨床への道」(①～③：3部作)です。これを下敷きに、本特集PCA用書き直して簡略化したもの、と退官後の職場(愛知学院大学と同朋大学)でのCCT・PCA活動を新規に追加したものであることとお断りします。①私の心理臨床の土壌－幼少年時代から青年期中期・高校時代までを語る－. 心理臨床－名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター心理教育相談室紀要、2003、18巻、1-7. ②心理臨床の道－第Ⅰ部：心理臨床への歩み－大学・学部から大学院時代までを語る. 名古屋大学大学院教育発達科学教育研究科紀要－心理発達科学－2002、第49巻、xxxi-xxxxi. ③心理臨床への道－第Ⅱ部：心理臨床への道－職業生活時代－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要－心理発達科学－2002、第49巻、xxxxii-xxxxxix.
2. 本稿に引用した図「PCAの発展・展開の系統樹図・イメージ(田畑、2012)」は『人間性心理学ハンドブック』P.58創元社、2012年刊に掲載したものです。転載に当たっては日本人間性心理学会並びに創元社の許可を得ていることを記して感謝します。

■■ 特集「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」

## 私のPCA

野 島 一 彦  
(跡見学園女子大学)

### \*私にとってのPCAの源流との出会い

私は1966年に九州大学教育学部に入学し1970年に卒業しました。1960年代後半から1970年にかけては、全国的に学生運動（学生闘争）が盛んな時代で、大学の授業は行われず、大学のキャンパスは教員を追い出して学生が占拠して、激しい暴力も行われていました。学生の主張は「権力あるものが権力を使って弱いものを支配する事に我々若者は反対である」と、権力に対して非常に反発があったのです。そういう状況の中でたまたまカウンセリングの本を通してロジャースの考えと出会いました。「人間関係は力で押さえつけるのではなく、信頼関係を基にして成り立つのが良いのではないか」と書いてあり、これを読んで私は鳥肌が立ち、「本当にそうだな」と思いました。それで、それ以降はロジャースが好きになり、ロジャースの本を読んだり、直接お会いしたりして、その考え・生き方を学び、それらが私の考え・生き方の中核となり、現在に至っています。

### \*村山正治先生との出会い

教育学部時代の指導教官は精神分析の前田重治先生でしたが、私がロジャースが好きだと言ったら、当時、教養部におられた村山正治先生を紹介してくださいました。1970年に大学院に進学してからは村山先生の指導を受けることになりました。村山先生は自分が担当しておられたカウンセリングのテープを貸してくださいましたが、それを聞いて、それまでのイメージ（クライアント中心療法はオウム返しをするのが特徴）が崩れました、村山先生はよく笑いながらのびのびと応答をされていたのです。また村山先生からは、エンカウンター・グループのことを教えていただき、エンカウンター・グループを好きになり、その実践と研究のために1970年に福岡人間関係研究会を一緒に設立し、年に数

回のエンカウンター・グループ実践、月例会、「エンカウンター通信」の発行を行うようになりました。また村山先生はフォーカシングにも興味を示され、院生との研究会ではジェンドリンの文献を読んだりしました。

### **\* 院生時代の多様な先生との出会いがPCAの深まり・広まりに貢献**

1970～1975年の院生時代の九州大学にはPCAの立場以外の多様な先生がおられ、そのような先生方との接触が私のPCAの深まり・広まりにつながったように思います。森田療法の池田数好先生、精神分析の前田重治先生、動作法の成瀬悟策先生、グループダイナミックスの三隅二不二先生、感受性訓練の関計夫先生などがおられ、授業を受けることができました。ロジャースは「意識」を重視するヒューマニスティック心理学の流れの人ですが、人間を理解するには「無意識」を重視する精神分析、「行動」を重視する行動主義のことも学ぶことがPCAの深まり・広まりに貢献するように思います。つまり、人間は「意識」、「無意識」、「行動」の3次元一体で生きているように思うからです。

### **\* 人間関係研究会での仲間との出会い**

私は1971年の人間関係研究会（1970年に畠瀬稔先生を中心に設立）の摩耶山でのエンカウンター・グループに参加して以来、この会のグループには何度も参加していましたが、1983年にスタッフになりました。この会はわが国のエンカウンター・グループの実践と研究を熱心にやっている人たちの会で、多くの仲間と刺激を得ることになりました。1月には2泊3日のスタッフミーティングがあり、エンカウンター・グループをめぐるいろいろな意見交換ができました。また、夏には清里プログラムということで、多くのスタッフが泊まり込み、いろいろなスタッフと組んでエンカウンター・グループを行いました。

### **\* ロジャースとの2度の直接的出会い**

私は2度、ロジャースと直接出会う機会がありました。1度目は博士課程2年生の1974年の夏休みに、当時エンカウンター・グループのメッカとでも呼ぶべき「ラ・ホイヤ・プログラム」（17日間）と「クライアント中心療法ワークショップ」（17日間）に参加しました。そこで初めて文献を通してのロジャースではなく生きた72歳のロジャースと出会いました（私は27歳）。印象としては、彼は農夫のようで、ゆったりとして安定感がある人だと思いました。驚いたのはワークショップ中、ロジャースは椅子に座っていて、女子学生らしい一人が床に寝そべって彼と会話をしている場面を見たことです。女子学生がそのようなしていたのは、彼との間で安心感、信頼感を持っていたからだと思います。自然とそのような雰囲気醸し出していたのではと思います。「クライアント中心療法ワークショップ」は翌年の1975年には「パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ」と名称が変わり、それには平木典子先生や小谷英文先生



が参加されました。

2度目は1983年5月に人間関係研究会がお招きしての埼玉県嵐山でのワークショップです。参加者交流のプログラムでは、81歳の彼とハグをすることができました（私は35歳）。とても大きな暖かい彼を感じました。彼はカウンセリングのデモンストレーションをしてくれましたが、それを見て彼の中核理論である態度3条件（自己一致、受容、共感的理解）がそこにあると強く思いました。彼は言っていることと、行うことがきちんと一致している人だなと思いました。

### **\*個人カウンセリング**

私は1970～1972年は実習として心療内科病院、その後精神科病院と精神科クリニックで40年間、学生相談室で26年間、中高一貫校のスクールカウンセラーで19年間、跡見学園女子大学の心理教育相談所で8年間、個人カウンセリングを担当してきました。いずれもPCAをベースとするカウンセリングです。一般にPCAは統合失調症者のカウンセリングには向かないのではと言われていますが、私は精神科病院と精神科クリニックでは統合失調症者のカウンセリングを行ってきました。PCAがベースなのですが、統合失調症者の場合はサポートを多く取り入れるのが特徴です。ちなみにある学会で、集団精神療法で有名なヤーロム先生の統合失調症者を想定した集団精神療法のデモンストレーション（ロールプレイ）を観察する機会がありましたが、私が個人カウンセリングでやっているのと同じような動きをされていたのが印象的でした。

### **\*エンカウンター・グループ**

私は1970年から今日に至るまで50年間、エンカウンター・グループの実践と研究を続けてきました。1971年の日本心理学会での畠瀬稔先生と私のエンカウンター・グループの発表はわが国で最初のエンカウンター・グループの研究発表となっています。修士論文も博士論文もエンカウンター・グループで書きました。エンカウンター・グループ構成論、グループプロセス論、個人プロセス論、ファシリテーション論等の研究をしてきました。

特異な実践としては、精神科病院での統合失調症者を対象としたエンカウンター・グループチックな「心理ミーティング」（毎週75分間）を25年間（1156セッション）やってきました。エンカウンター・グループはPCAの原理が大事にされる場だと私は考えています。私は非構成的グループ（ベーシック・エンカウンター・グループ）がもっともPCAらしいと思っており、一番好きです。しかし、時代状況のなかで、構成的グループ、半構成的グループの工夫もしてきました。直近ではこの3タイプをシリーズとして実践することをしています。

## \*私にとってPCAとは何か

改めて私にとってPCAとは何かを考えると、理論的キーワードとしては「実現傾向」、「態度3条件」、「自己概念と経験」、「十分に機能する人間」等を大切にして、①自分自身がそのように生きること、②他者とそのように関わることであると思います。

実現傾向については、ロジャース自身が非指示的カウンセリング→クライアント中心療法→エンカウンター・グループ→パーソンセンタード・アプローチ→ピース・プロジェクトとどんどん展開していった姿からそういったものが人間にはあるのだと思います。

態度3条件については、彼の論文からだけでなく、直接お会いして、間近にカウンセリングのデモンストレーションを観察させてもらったことからそれは現実にありうるのだと思います。

自己概念と経験、十分に機能する人間については、自分自身のあり方を検討するときに役に立っています。

私が自分をPCAであると考えるときに大事にしている2つのことがあります。

1つは「心の羅針盤」です。人は皆、自分がどのように生きていくのかを示す「心の羅針盤」を持っていると思っています。カウンセリングでは、カウンセラーは「灯台」となりその人を導くのではなく、その人と一緒になってその人の「心の羅針盤」が示している方向を見つけることだと考えています。

もう1つは「自主判断、自主行動、自己責任」です。人は皆、物事を自主判断する力があると思います。そしてそれに基づいて自主行動をするのです。自主行動をした結果、思ったようにいったり、いかなかったりしますが、どのような結果になろうとも自己が責任をとらねばならないのです。クライアントはこのようなプロセスをとるのがなかなか難しいのですが、カウンセラーが寄り添うことを通してこれができるようになっていきます。「自主判断、自主行動、自己責任」ができることが、私は<主体性>だと考えています。

## \*公認心理師制度の「現実化」

私は1970年以来、心理職の国家資格化に向けて、努力をしてきました。私が大事にしているカウンセリングを行う人の国家資格化は人間の心の問題への支援を考えるとその質の担保のために当然であると思いました。これは私のPCA的生き方と深く関わっていると思っています。国家資格化をめざして1982年に日本心理臨床学会が設立され、これが中心となり650万円の資金援助をして1988年に日本臨床心理士資格認定協会が創設され、(一挙に国家資格は無理なので一階梯としての)民間資格である<臨床心理士>が誕生しました。その後、さらに国家資格化の運動は続き、2015年に念願の国家資格である<公認心理師>が法制化されました。そして2018年には日本心理臨床学会(当時私は理事長)からの8000万円の資金援助等をもとに日本心理研修センターが創設

され、2018年度には＜公認心理師＞がようやく誕生しました。

心理職の国家資格化は私のライフワークです。国家資格化は「実現化」したけれども、その「現実化」（きちんとした資質を持つ公認心理師を輩出すること）が現在の・今後の大きな課題です。私はそのためにさらに私のライフワークを続けることにしています。

## 自己の居場所を求めて

安部 恒久  
(鹿児島大学名誉教授)

### 1. はじめに 友人からの不思議なメール

その夜、私は、ジェンドリンさんから受けたフォーカシング体験（1993年8月シカゴ）を振り返り、ケータイをお休みモードに設定して就寝した。ところが、夜半に、ケータイ着信の気配を感じ、手にとってみると、友人の坂中正義先生からのメールだった。おかしいな、お休みモードに設定したはずなのにと思い、確認してみたが、やはり、間違いなく、お休みモードに設定していた。

おかしいことがあるものだ。こんな夜半に何なのだろうと思い、内容を確認してみると原稿執筆の依頼であった。

驚きであった。というのも、就寝前に振り返ったジェンドリンさんとのフォーカシング体験の内容が、友人との出会いというテーマだったからである。さっそく、友人からメールが来た！

朝、起きてみても、坂中先生からのメールはケータイから消えていなかった。夢のなかの出来事ではなかったのだ。早速、坂中先生に、快諾のメールを送った。

以下は、私が私になるために、居場所を求めて出会った人々との、体験や出来事を描いた私の「This is me」である。ただし、紙数に制限があるため、PCA関連にしぼって、私のキャリアの前半である九州大学入学（1969年）からルーヴァンカンファレンス（1988年）までを急ぎ足で駆け抜けることになる。

### 2. 九州大学入学

#### 肢体不自由児の心理療育キャンプに参加 自分の居場所を発見

1969年4月に、九州大学（六本松教養部校舎）に入学はしたものの、大学紛争（大学闘争）のあおりを受けて、授業は1ヶ月ほどで停止（ストライキ）となった。私は、授業停止（ストライキ）やクラス討論会などに振り回され、大学生としての居場所をもてないまま、教養部を通過した。このとき、教養部に

村山正治先生は在職されていたが、出会いの機会はなかった。

大学2年生後期（1970年10月）から、専門課程に進学し、キャンパスが箱崎学舎に変わったものの、こちらのキャンパスはこちらで、やっかいな問題を抱えており、授業に真面目に出る雰囲気はなかった。カウンセリングの授業にも出てはみたが、近代人の疎外論が中心であり、ロジャースの記憶は残っていない。

そんな状況のなかで、私は肢体不自由児の療育キャンプに参加し、自分の居場所を発見した。

私が専門課程に移った頃、教育学部では、成瀬悟策先生が肢体不自由児を対象として、今で言うところの「動作法」を開発されている初期の頃であった。

動作訓練は、学内でも行われていたが、後に、社会福祉法人「やすらぎ荘」の一角を借りて、心理リハビリテーション研究所が開設され、1週間の心理療育キャンプが宿泊形式として行われるようになった。

私は、この心理療育キャンプに、学部の2年生（1970年）後期から、級友らと共に、ボランティアとして参加した。

私は大学生になっても、高校生のときに学んだ「瞑想法（静坐呼吸法）」を継続しており、日常では動かしている「身体」を、いかに「動かさない」で、ただ坐るかということに腐心していた。

ところが、心理療育キャンプで接した肢体不自由の子どもたちは、「動かない」自分の「身体」を、なんとか「動かそう」と苦勞しており、どのようにすれば、自分の「身体」を動かすことができるのかに奮闘していた。

子どもたちにとっても、私にとっても、「身体」は単なる「身体」ではなく、自己にとって特別な存在であり、私は「動作訓練」を通して、子どもたちを支援することで、自分の居場所を発見した。

一方、心理療育キャンプでは、一日三回の動作訓練だけでなく、昼間に子どもたちの遊戯を中心とした集団療法があり、また、夕食の後に、子どもたちだけのTグループを先輩たちが実施していた。

私は、心理療育キャンプでは、この集団療法及びTグループを担当した。

最初はどうなるかという思いであったが、参加した子どもたちや親たちと打ち解け、喜怒哀楽を共にすることによって、のびのびとしたグループ体験を味わうことが出来た。

肢体不自由という同じ境遇の子どもたちや親たちが、同じ苦しみや悩みをもつ仲間を発見し、「そうだそうだ」と頷きあい、お互いを支え合う姿に、私は感動した。

私は、肢体不自由の子どもたちの「動作」をトレーナーとして支援する面白さとともに、一方で、集団療法やTグループ体験をとおしてグループアプローチのもつ魅力にひかれていった。

### 3. 「Tグループ」体験

#### 三隅二不二先生に「Tグループ」をお願いする

1970年に、心理療育キャンプで、Tグループを実施し始めたものの、十分な参考書などもなく、なによりも、私自身は、いわゆるTグループと呼ばれるグループ体験に参加した経験がなかった。

そこで、私は、学部3年生（1971年）の夏休みに、ぜひともTグループを体験してみたいと思い、三隅二不二先生に、Tグループを実施してほしい旨のお願いをした。

三隅先生は、アメリカ留学で、NTL（National Training Laboratory）のTグループを体験しておられたからである。しかしながら、スケジュールが合わなかった。三隅先生は、すぐにトレーナーを探してくれ、Tグループ経験のある社会心理専攻の大学院の先輩が引き受けてくれた。

このTグループは、1971年8月に、2泊3日で大分県の九重町にある九州大学の研修所で実施され、メンバーは、学部生や院生や事務のひとを合わせて、10数人が参加した。私はマネージャー兼メンバーとして参加した。

Tグループ体験の印象として、トレーナーはフィードバックするひとであり、今、ここで起こっている行動をとりあげ、「みなさんはどのように対処しますか？」と問いかけ、メンバーで解決していくことを促した。

私にとって、このTグループ体験は、心理療育キャンプでの子どもたちや親たちとのグループ体験とは、テイストが異なっていた。

Tグループは、グループ体験のなかでの現実に、どのように対処し解決していくか、どちらかといえば、思考実験のようにみえた。だからこそ、ラボラトリートレーニングなのだろう。これはこれでグループ体験のひとつの在り方なのかもしれない。Tグループの参加者は、グループの課題に、意欲を持って挑戦しており、それなりに満足しているように見えたからである。

グループ体験後のふりかえりでは、グループの情緒性よりも、どちらかといえばグループの思考性に焦点をあて、課題を解決するというグループ体験であったかもしれない、というトレーナーの感想であった。

ただ、この先輩は、日常の学生生活のなかでは、ひとの気持ちへの感受性が高く、面倒見の良いひとで、どちらかといえば、情緒性の強い先輩だった。だからこそ、トレーナーを引き受けてくれたのだろう。わざわざ、Tグループを企画して、トレーナーを探して頑張っている後輩に応えてくれたのだと思う。

結局のところ、Tグループは、私の関心である「自己探求」「心理的成長」「支え合い」とは方向が異なっているように、その当時の私には思えた。

後に、Tグループそのものへの私の印象は、山口真人先生（南山大学）と日本グループアプローチ研究会で一緒に活動する機会があり、相当に修正された。山口先生から、大学教育への取り組みの実際を、研究会でお伺いしていると、私の関心との共通点のほうが大きいと感じた。

なお、南山大学でのTグループを用いた教育実践の様子は、楠本（2020）の論稿で知ることが出来る。

#### 4. 村山正治先生との幸運な出会い

本当に幸運なことに、私は1974年4月に九州大学大学院に入学するが、この年に、村山正治先生がCSP（center for studies of the person）でのアメリカ留学から帰国され、教養部から教育学部に異動し、着任された。

アメリカ帰りの村山先生は、若く、輝いており、話を聞けば、エンカウンターグループという心理的成長を目標としたグループ体験を学んで帰国されたとのことであり、大学院での指導をお願いすることになった。

村山先生に、最初に会った日から、50年ほど経った今でも、私は大学院で村山先生に出会ってよかったと、しみじみ思う。その主な理由を二つだけ、記しておこう。

##### (1) 村山先生は権威から自由であった

当時、学生の風潮として、権威に物申すという態度が顕著であったが、村山先生は、権威から自由であった。指導教員として、私を教員と学生という狭い枠のなかに押し込めることをしなかったし、あなたは私の弟子だという態度もとらなかった。私の好きなことを、私の好きなように、やらせていただいた。

私も、後に教員となり、学生の指導をすることになるが、学生が好きなことを好きなようにすることを見守ることほど、教員にとって難しいことはない。教員の気持ち（本音？）としては、教員の好むことを、教員の好むようにやってくれる学生のほうが、ある意味で、楽である。でも、それでは、学生のパフォーマンス（業績）は、あがっているように見えるが、学生自身のオリジナリティ（個性）は育たないということを、村山先生は、よく、わかっておられた。

##### (2) 村山先生は、人とのつながりを大切にしているひとであった

村山先生が教育学部の大学院にいられてから、大学院はそれまでになく活気づき、最終講義の講演録に、以下のように記載されているように、村山先生は精力的に活動された（村山、2005）。

「エンカウンターグループやフォーカシングの拠点としてだけでなく、心理教育相談室の充実と拡大、「心理臨床研究」の創刊、日本心理臨床学会、日本人間性心理学会の創設参加、「人間性心理学研究」編集局長就任」

村山先生とこれらの活動を、いっしょに過ごさせていただいたことで、PCAとはどのようなものなのか、その実際を体験として学ぶことができた。それは私だけではない。村山先生が毎週開催されていたリサーチ研究会や福岡人間関

係研究会には、他のゼミや他の学部や他の大学のひとなど、多様な人々が参加していた。

とにかく、参加する人の価値観を尊重し、いっしょに学ぶということを原点に、人とのつながりを大切にしている先生であった。

## 5. ファシリテーター研究

### リーダーシップの分散 権威からの自由

私は、大学院の博士課程に入ってから、エンカウンターグループの研究を本格化させ、自分がファシリテーターを務めたグループ体験を、グループ事例としてまとめていった。方法論としては、事例研究が、私の肌に合うように思われた。というのも、「私のグループ体験を研究することによって私をつくる」というスタンスを可能にしたからである。

「私は、私のメンバー体験やファシリテーター体験を研究し論文にしてきました。大まかに言うと、グループ体験のなかで、どのようにメンバーとして、ファシリテーターとしてグループのなかに私自身が居ることが、私にとって自由なのかといったことを研究してきたように思います。(中略)自分の体験が、自分には、最もわかりやすいという理由からです。なぜ研究するのかと聞かれれば、自分が自由になりたいからと、はっきりと答えることもできたからです。」

(安部, 2010. エンカウンター通信400号記念号, 福岡人間関係研究会)

「私が自由でなければ、他のひとも自由ではないだろう」

この言葉は、当時の村山先生の口癖で、よく、つぶやかれていた。

私のグループ研究は、メンバーの心理的成長を促進するために、ファシリテーターはグループのなかに、どのような居場所をつくと良いのか、を探索したものだ。

結論としては、「リーダーシップの分散」とそのことを可能にする「安心感の醸成」が、私の研究から示唆された鍵概念だった。ファシリテーターが、グループのなかで、パワー（権力、権威）を独占することなく、メンバーそれぞれがリーダーシップを発揮できるグループの安心感をつくること。それが出来たとき、メンバーも、そしてファシリテーターも、権威から自由となり、グループを自己の居場所とすることが出来るというものであった（安部, 2006；2010）。

なお、当時の九州大学大学院では、教員が直接に学生を指導するというよりも、「助手さん」と呼ばれていた先輩方が核となって、後輩大学院生の面倒をみるシステム？だった。多士済々の先輩助手のなかでも、グループ体験の実践と研究の場合には、私がミスター・エンカウンターグループと呼ぶ野島一彦先



輩が、熱心に取り組んでおられ、大変、お世話になった。

## 6. ラホイヤプログラム体験

### (1) ラホイヤプログラムのインパクト 自分が変わる体験

村山先生に薦められ、1978年8月4日～20日、大学院博士課程3年生のときに、ロジャース博士らのCSP（Center for studies of the person）が主催していたラホイヤプログラム（La Jolla Program）に参加した。

このプログラムへの参加体験は、「私が私になるためのプロセス」として、居場所を求めて来た私に、それまでにない大きなインパクトを与えた。ラホイヤプログラム参加前と後の「私」の変化を、みてみよう（安部, 2010）。

参加前の「私」:

「私は、言葉を使って相手とやりとりするのが得意ではなく、どちらかと言えば、みんなと居るよりはひとりで居るほうが気楽であり、偏屈な面を持ち合わせていた。

したがって、私のグループ体験における課題を、大まかに言えば、みんな（グループ）の中で、言葉を使って、いかに柔軟にやりとりができるか、ということであった。」

参加後の「私」:

「日本に帰国し、日常生活のなかで、それまでの言葉でのやり取りに対する苦手さや人間関係に対する煩わしさは減少した。むしろ、ひとに対する関心が増加し、ひととの関係を楽しもうとする自分を意識することができた。また接するひとを毛嫌いするのではなく、信頼することによって自分自身への信頼感も増すのだということに改めて気づいた。さらに、自分を卑下したり犠牲にしたりすることよりも、自分の好みに対して肯定的な自己像を思い描くことによって、変化しつつある自分を実感できた。」

ラホイヤプログラムは、私が自分に挑戦し変化するための、安心感に満ちた居場所を私に与えた。以後、私は自分がグループ体験でファシリテーターを務めるときは、このような安心感に満ちた居場所を、最優先で作り出そうと試みるようになった。

### (2) 「カール」との出会い?

このラホイヤプログラムで初めてロジャース博士に会った。

私にはロジャース博士がこのプログラムに参加するという意識は全くなかった。したがって、プログラムの途中で、親しくなった参加者のメアリーが「カール」に会わないかと言ったときも、「カール」は、てっきり彼女の彼氏だと勘

違いしてしまった。それで、「疲れているから会わない」と断り、自分の部屋で休むことにした。

「そうか、アベは、変わっているな～。日本人は皆、会いたがるのだけどな～」と言いながら、メアリーは部屋を出ていった。

私は自分の部屋で休んでいた。すると、再び、メアリーがやって来た。

「日本人だけでなく、みんなが会っているから、お前も会ったほうがいい」としつこく言う。

「おまえの彼氏は、そんなにスゴイのか」と、メアリーの押しの強さに辟易しながら、やりとりしていると、どうも様子が違う。

「アベは、カウンセリングのロジャースを知らないのか？エンカウンターグループのロジャースを知っているだろう？」

そのとき、私は自分の勘違いに気づいた。

ロジャース博士がラホイヤプログラムに参加するために、一日だけ特別に、会場であるカリフォルニア大学サンディエゴ校にやって来たのであった。私はロジャース博士が参加するから、ラホイヤプログラムを選んだわけではなかったもので、私の意識から、すっかり抜け落ちていた。

メアリーに連れられて、セッションの会場に出かけて行った。

ロジャース博士は「参加して、いいですか？」と一言、声をかけ、みんなが「ウエルカム」というと、カーペットに座りこんで、セッションに参加した。

おいおい、誰か椅子を譲れよ。私なんか、そう思ってしまいが、誰もそうしないし、そうしてほしい素振りをロジャース博士もみせない。気の良いお爺さん然として、カーペットに座って参加している。

このロジャース博士の姿を見ておいてよかったと思う。このときの、この姿をみることで、私のなかに、極端に理想化されたロジャース像は生まれなかった。私にとって、「カール」と呼ぶことは難しいが、すくなくとも、「ロジャース博士」から、「ロジャースさん」に、変わった一瞬であった。メアリーに感謝である。

ロジャースさんとは、5年後に、1983年4月30日～5月5日に人間関係研究会が開催した国立婦人教育会館でのワークショップ(Person Centered Approach Workshop with Carl & Natalie Rogers)で、お目にかかった。このとき、畠瀬直子先生に通訳として助けてもらい、「ロジャースさんの感受性の鋭さは、生まれつきのものですか？」ということをお尋ねしたが、「いいえ、違います。ひととの関係のなかで学んだものです」という答えであった。

私がロジャースさんの答えに、不満な顔をしていると、すぐに「がっかりしたでしょう」とロジャースさんから声がかかった。やはり、どこまでも、関係のなかに生きるひとであった。

さらに、5年後、1988年9月12日～16日に、ベルギーのルーヴァン大学で開催された国際会議（International conference on client-centered and experiential psychotherapy）に出席したが、ロジャースさんは前年の1987年に亡くなられ、招待講演はジェンドリンさんだった。

以上、私が私になるための居場所を求めての歩みを、大急ぎで述べてきたが、私は、この後のキャリアを、同じ1988年に始まった臨床心理士養成に、人間性心理学、あるいはグループアプローチを専門とする立場から関わるようになる。

## 7. 終わりに コロナ禍のなかでの「自己」の居場所

ところで、今である。2020年の夏に、私はこの原稿を執筆している。

残念ながら、コロナ禍の感染防止のため、自己を探求するための「安心感のある居場所（安部, 2020）」を確保することは、難しくなっている。

大学のキャンパスは、学生の皆さんの元気な声で賑わっているかといえば、そうではない。大声で話すことは禁止され、近づくことも、ままならず、人との接触は制限されている。

ちょうど、本稿の最初に述べた、私が大学に入学した50年ほど前と似た状況が再現している。学生の皆さんは、自分が思い描いていた入学後のキャンパス生活とは異なり、自分の居場所はどこにあるのか？と、困惑している。

戸惑いは、私も同様であり、社会全体もそうである。幸いに、50年前とは異なり、デジタル社会となり、便利な情報機器が生み出されている。三國（2020）は、インターネット会議システムを使った5日間のエンカウンターグループに参加し、そこでの様子を報告している。

はたして、閉塞感を打破し、「自己の成長」を体験するために、私たちは、この予期しない現実と、どのように、つきあっていくことが可能なのか。

私自身も、新たな私の居場所を模索しているところである。

## 文献

- 安部恒久（2006）. エンカウンターグループ 仲間関係のファシリテーション. 九州大学出版会
- 安部恒久（2010）. 私のグループアプローチ入門. 誠信書房
- 安部恒久（2020）. 出会いと自己の成長. 福岡女学院大学大学院紀要, 17, 39-45.
- 楠本和彦（2020）. Tグループを中心としたラボラトリー方式の体験学習. 人間性心理学研究, 38（1）, 71-78.
- 三國牧子（2020）. グループと人間性心理学. 人間性心理学研究, 38（1）, 65-69.
- 村山正治（2005）. ロジャースをめぐって—臨床を生きる発想と方法. 金剛出版

■■ 特集「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」

## フォーカシングと私～狭間での巡り逢い～

池 見 陽

(関西大学大学院心理学研究科)

### はじめに

南山大学人間関係研究センターの坂中先生や青木先生から「パーソンセンタード・アプローチとの出会い」の原稿執筆依頼を受けた。たくさんの原稿を執筆しているなか、はたして執筆は物理的に可能なのかと胸の内に入道雲が立ち込めた。村山正治先生が「原稿より健康！」と仰っていたのを思い出した。しかし、執筆依頼を見ると、最初の項目として「学术论文の体裁をとったエッセーという感じでご執筆ください」とあった。あ、これは面白そうだが、と心が動いた。「エッセーという感じで」という曖昧な表現がとても魅力的に思えた。そして、2番目の項目は「日本のPCAの歩みと This Is Me の交差を意識しつつご執筆ください」とあった。なるほど、This Is Me は カール・ロジャーズ (Carl Rogers) の講演を書き起こしたもので、最初は彼の著作 *On Becoming a Person*, 後には Kirschenbaum & Henderson (Ed.) の *The Carl Rogers Reader* に再録されたものだ。「これが私だ」とロジャーズが個人的な話と彼の心理療法研究を「交差させながら」仕上げた作品だった。うん、なんだか気がついてみると入道雲は消えていて、「よし、やってみるか！」と身の内には青空が晴れわたっていた。

### 狭間に暮らす

天秤座に生まれたことは関係がないことかもしれないが、幼いことから私は狭間を生きてきたように思える。六甲山脈の中では比較的低い標高ではあるが、山の上で育った。学校の友達も山を下った街に住んでいたから、学校から帰宅すると、ポツンと一人で過ごした。雲が流れていくのを見ているのが好きで、蟻の動き方が面白いと観察するのに飽きることはないほどだった。将来はあまり人とかかわることがない、物書きのような仕事をしてみたいとも思っていた

のを覚えている。

父親は広告業で小さな会社を営んでいた。仕事の内実はほとんど営業だった。常に人と関わっていて、頻繁に家に人を招いていた。週末は決まって接待ゴルフだった。そんな仕事の仕方は無理だと幼いころから決めていた。母親は「この子は大学の研究室に残って何かをコツコツと研究していくタイプだ」と思っていたからか、雲や蟻や鳥を観察していていいのだと安心していただけいた。妹は父親の傾向を受け継いだのか、常に友達を呼んできてはテレビの前で歌謡曲の振り付けを練習して盛り上がっていた。それを横目に黙って犬と散歩に行くひとときに充実感を感じていた。

一人好きである反面、人好きでもある。人付き合いの範囲は妹に比べると狭いが、友達とのかかわりはとても楽しいと感じていた。しかし、人疲れをする傾向はあり、ある程度の時間を友人たちと過ごしたら、一人の時間を守り、適度に自閉していた。天秤のように人といる時間と一人でいる時間の巧妙なバランスをとっていたのではないかと今になって思う。

そんなふうには育ったからか、新型コロナウイルスによる外出自粛も気にならない。春学期が遠隔授業になっていたために、この7ヶ月ほどは、ほとんど外出していないが、それが心地よいと感じて過ごす日々が多かった。ある意味、自閉しているようなものだが、毎日数回はZoom（インターネット・ビデオ通話アプリ）で人に「会って」いる。Zoomはもう5～6年前から海外学会の会議に利用してきたが、最近では使用回数が増えてLINEや電話の利用回数を上回っている。Zoomで人に会う時間は豊かなものを感じる。その反面、バーチャルではあっても、人疲れをするところは昔から変わらない。一人好きと人好きの狭間で暮らしているようなものだろうか。

第一言語設定がUS English のマックを通して、一日中英語で話している日もある。そして見ているテレビはMSNBCやCNN（アメリカ合衆国から発信されるケーブルテレビ）、つけっぱなしのインターネット・ラジオはJazzradio（アメリカから発信）ならば、いったい自分がどこで暮らしているのかさえも実感が薄い。日本と海外の狭間で暮らしているようなものだが、このボーダレスでワールドワイドでバーチャルなリアリティ、それに自閉的とも社交的とも判定困難なこの生活実態こそがNew Normal なのだろうか。

## 言語の狭間に聴こえてくるもの

インターナショナル・スクールのバイリンガル環境（英・日）で育ったことも筆者の研究課題と大に関係している。ロジャーズが This Is Me と簡単に英語で言っていたが、日本語だとそう単純ではない。そもそも Me という一人称は日本語の場合は常に関係的だから、相手によって「わたくし」なのか「わたし」なのか、「僕」なのか「俺」なのか、などと感じ方が異なる。独り言で「俺はね」と口に出して言う。次に「私はね」と口に出して言う。前

者を言うときと後者を言うとき、自分（主体）の感じ方（フェルトセンス）が違っていることに気づく。

いつ、どんなときでも、相手が誰であっても、私はいつもMe、あなたはいつもYou という感覚は英語で話すときに味わうことができる cut n' dry な感覚だ。この対人関係の感覚は日本語では表現しにくい。反対に、相手（とくに男性）の名前のあとに「～さん」をつけるか、「～くん」をつけるか「呼び捨て」にするかを迷うのは日本語でしか味わうことができない微妙で繊細な人間関係のテイストだ。

私が「真の私」であり続け、あなたは「真のあなた」であり続け、二人が「出会う」ことのスッキリした素晴らしい奥深さは英語チャンネルで体験可能だ。映画「出会いへの道」（日本語吹き替え版）では、日本語に吹き替えられた音声の下に、ところどころ元の英語が残っている。そして、この2つの言語がもたらすフェルトセンスの違いに驚く。カラダの感じ方がまるで異なるのだ。女性参加者がカール・ロジャーズに「先生！」と甘い声をかける、そのときカメラワークは彼女のチャイナドールのようなお人形さん顔と奥深い瞳にズームイン。こんなカットが数カ所ある。実はここ、英語では、「先生」ではなく“Carl”と（日本語的に言えば）「呼び捨て」にしている。彼女は彼女らしくいて、カールとわかり合う一瞬の出会い場面には「スッキリした素晴らしい奥深さ」があるように私には感じられる。一方、日本語の「先生！」という甘い響きにはキャンディの甘さとべたべたと手にひっついて離れない感覚が立ち現れてくる。筆者は台詞訳を批判しているのではなく、言語が変わるとき、こんなにも感じ方が変わるということの実例をこの映画のいちシーンを通して紹介しているに過ぎない。畠瀬直子先生が本誌掲載の公開講演会でも述べられているように、カール・ロジャーズに“Naoko, call me Carl”, と言われ、違和感があったために最初はそれを断られた、というお話は興味深い。日本語話者の目にはCarl は映らない、「先生」しか映らなかったのだろう。

言葉や象徴は、ある意味のまとまりや「現実」を運んできてくれる。筆者は別の論文（池見2019）で、象徴が意味連関を「運んでくる」機能をギヴス（Gives）と表現した。「アートは心の内側を外側に表現する」と一般的に言われるが、筆者はアート表現は内側→外側の一方通行ではないと主張した。すなわち、ある象徴は意味を「運んできて」（give）、それによって私たちの思考が「前に運ばれる」（carry forward）のである。これはアートの文脈で論じられているが、実はこの発想の背景にはパイリンガル体験がある。

高校生の野球試合の放送を見ながら、「野球選手」という日本語の言葉が運んでくるギヴスには、どんなものがあるだろうかと思ってみた。「日焼け」「根性」「練習」「厳しい」「合宿」「汗臭い」「体育会」など、一つの意味のまとまり～ちょっと雑ではあるが～ひとつの「現実」～がこの言葉を口にしたとたんに発生する。では、「野球選手」を英語にして“baseball player”と言ってみたとき、

何が起こるだろうか。まったく違うギヴスが運ばれてくる。Player は play する人、つまり「遊んでいる人」。「ベースボールをして遊んでいる人」からは「楽しい」「愉快」などのギヴスが運ばれてくる。英語の“play”の感覚は日本語の「遊ぶ」とまったく同じではないにしろ、「野球選手」と“baseball player”～これらは同じ意味の言葉だと言われても、そう簡単には納得できないほどフェルトセンス（フェルト・ミーニング：感じられた意味）が違っている。別の訳語はないものかと考えてしまう。現実感覚を伴わない辞書の上では同義ではあるが、それぞれが与えてくれる現実（ギヴス）は異なっている。2つの言語が描く現実の狭間に落ちていく。今でも筆者はできるだけ「訳」という作業を避けている。野球選手とbaseball player の一語でこれなので、何千ワードもある論文を訳すなんて、気が遠くなる。こういった言語の狭間は中学生のころから顕著に感じるようになった。

横道に逸れるが、昔、筆者よりも一世代年上の諸先生方から「日本人は自我が弱い」とよく聞かされた。ご指摘の現象はよくわかる。だけど、それは自我の構造的な問題ではなく、言語の性質だと思う。「私は～こう思っている、あなたはこう思っているの？」は“I love you, do you love me?”と同じで極めて英語的な発想だ。日本語だと、「私の感じ方」の中に、「あなたはきっこう感じているだろうが…」が最初からブレンドされている。つまり、私の感じ方の中に相手の思いが暗在的（implicit）に含まれている。それは「甘えの構造」ではなく、言語の構造だ。ミック・クーパーとの対話論文（Cooper & Ikemi, 2012）の結びで述べたように、ロジャーズの6条件の第1条件、つまり「二人の人間に心理的接触があること」では「あなた」と「わたし」が個別の実体であるかのように描かれているが、「あなた」と「わたし」が「もともと絡み合っている」（originally entangled）様相をパーソンセンタード理論に構築していくことは今後の重要な課題だと認識している。

「わたし」の中にすでに「あなた」が暗に交差されているというのはジェンドリン先生（Eugene Gendlin）の追体験をめぐる観察（Gendlin, 1997, p.41）だが、日本語話者にはこれとはくに際立って体験される。「わたし」と言うのか「俺」と言うのか、これを無自覚に選択しているときに、すでに相手の存在が第一人称（主体）と絡み合っている。そして、それが如何に絡み合っているのかは、発言をした後になってしかわからない。あとになって省みたときに「ああ、あのとき私がこれこれと発言したのは、暗に彼の気持ちを汲み取っていたからだ、そうだった」と気づく独特の推進の様相を Ikemi (2017) は「推進された“だった”（carried forward *was*）」と表現している。本当に言いたかったことは、何度か言葉を言い換えてみて、やっとじっくりした言葉が見つかって「こうこうだった」となる。では、発言する前には本当に言いたかったことは存在するのだろうか。それはフェルトセンス、つまり意味感覚として存在する。然るに日本語的な感覚では“I love you, do you love me?”は青臭く感じられ、言葉にな

らない以心伝心の中で、互いが“love”という一語からこぼれ落ちる複雑巧妙 (intricacy) なありさまをフェルトセンスとして汲み取る日本語は、英語に比べて相互主観性や共感性に優れているように思える。

さて、中学生のころに戻ろう。「本当の自分は日本語の中にいるのか、英語の中にいるのか」こんな課題を思いついたのは9年生（中学3年）のころだった。今になっても、この課題を卒業したとは言い難いが、今振り返ってみると、「本当の自分」の存在を、このころは疑おうとはしなかった。そして「本当の自分」を存分に引き出してくれるのは日本語か英語か、といった単純な問いの立て方をしていたことに気づく。

### 心理学と哲学の狭間に現れるもの

「本当の自分」などといったものに興味があったから、何の疑いもなく心理学専攻としてボストン大学 (Boston College) に入学した。しかし、胸を躍らせる思いで最初に履修した心理学科目Psych101 (心理学概論) で私の思い描いていた学問は心理学ではないことに気づかされた。このころの心理学概論は2セメスターに分かれており、「自然科学としての心理学」と「社会科学としての心理学」はどちらを先に履修してもいいが、2セメスターに分けて履修しなければならなかった。「母性行動の研究」は生理心理学の教授が担当する「自然科学としての心理学」の中心課題だった。教授自身の数々の動物実験を紹介しながら、ラットにおけるホルモンと行動の関係を説いていった。待てよ、これ、生物学？心理学だとすると、「本当の自分」とはまったくベクトルが違っている。迷子になった不安な気持ちは次の学期の「社会科学としての心理学」が解消してくれるだろうと信じてみることにした。

ところが、次の学期の「社会科学としての心理学」はのっけから統計学だった。参った！数学アレルギーというか、算数がわからないまま数学を勉強したために、数学が「理解できた」実感がもてないままの私は、まるでアナフィラクシー・ショック状態に陥ったも同然だった。

小学生のころからゼロの概念の意味がよくわからない。ここに1本の牛乳パックがある。これを0で掛け算する (つまり、掛け算しない、という意味?)  $1 \times 0 = 0$ だと教わったが、そんなことはあるものか。目の前の牛乳パックは消えて無くなるわけではない。だから  $1 \times 0 = 1$  が正解のはずだ。友達は、そういうことはどうでもいいので、とにかく、この手の問題がでたら0と書けばいいのだと教えてくれたが、納得がいかない。こういったことは他にもあった。長々と字数を割いて書くほどのことではないが、「通分」とはいったい何か？ウチは2人兄妹。妹が1人、男は私1人 (男は1/2)。隣は兄妹3人、うち男は2人 (2/3)。合わせると、子供たちは5人で男は3人 (3/5)。つまり、 $1/2 + 2/3 = 3/5$ となるが、これは「通分していないので間違っている」らしい。しかし、目の前には子供たちが5人、そして男の子が3人いることは疑う余地がな



いではないか。算数の基本がよく理解できていないまま数学に進むと、「わけがわからない」溜息の連続となった。ルートとは何か？そんなことを、あらためてゆっくり考えてみる間もなく $1/\sqrt{n-1}$ などの意味不明の記号を含む統計の宿題が容赦無く降り注いできた。

心理学に失望していた時期に「フロイトと哲学」と題した哲学授業に救われた。この科目を担当していたスティーブンス教授 (Richard Stevens) はソルボンヌでポール・リクール (Paul Ricoeur) がジークムント・フロイト (Sigmund Freud) を扱った著作を執筆していたころ、助手をされておられた。先生は詳細にフロイト思想が「ヒステリー研究」以降どのように展開していったのかを講義していかれた。この授業に「のめり込んだ」私は、心理学科で教えている精神分析や心理療法論について、奥行き不足を感じるようになった。その反対に哲学への関心が増し、哲学授業を積極的に履修したり、もぐったりするようになった。ボストン・カレッジにはジャック・タミニオー先生 (Jacques Taminiaux) やハンス・ゲオルク・ガダマー先生 (Hans-Georg Gadamer) といったヨーロッパの著名な現象学・解釈学の客員教授陣がおられた。ベルギーのリューベン大学から来られていたタミニオー先生の授業「ニーチェ」には深い感動を覚えた。授業内容ばかりでなく、実は先生のヨーロッパ的で紳士的なお人柄や人との繊細な接し方のテイストに惹かれるものがあった。それはフライドポテトを口いっぱい頬張って、バドワイザーで流し込みながら、アメフトの試合に熱中して、チアリーダーを見てワーワー騒いでいるノリのアメリカ合衆国では滅多に接することができない、自分自身の繊細な感覚とも重なっていた。

心理学科から哲学科に転専攻しようかとも考えたが、「パーソナリティ心理学」の授業で読んだジョージ・ケリー (George Kelly) とカール・ロジャーズには魅力を感じた。とくに、ロジャーズの著作 *On Becoming a Person* に収録されている “What it Means to Become a Person” を読んだときには目が覚める思いがした。ロジャーズの著作の多くは講演録で構成されているため、平易な話し言葉で書かれていることも印象的だった。カウンセリングへの興味を捨てきれず、転専攻はしないことにして、心理学専攻・哲学副専攻で大学を卒業した。

## ハイデガーとロジャーズの合流が培うもの

大学卒業後の進路について、マルチン・ハイデガー (Martin Heidegger) の哲学やジャン・ピアジェ (Jean Piaget) のモラル発達を研究されておられたシスター・マーガレット・ゴーマン (Sr. Margaret Gorman) と相談している中で、はじめてユージン・ジェンドリンの名前を知った。「哲学者ハイデガーの英訳に携わって、文通もしている哲学者よ、しかも、彼はカール・ロジャーズとクライアント中心療法を研究している人だよ、アキラには是非おすすめだわ」と先生の言葉が私の脳に到達した瞬間に何か着火したかのごとく全身に

興奮が走った。だって、ハイデガーは今世紀最強の哲学者だろう、とその根拠を検討するまでもなく信じていた。素人を寄せ付けない文の難解さはあるが、その奥に光る何かがあって、それとよく似た何かがかール・ロジャーズにも光っていた。こちらは対照的に素人にわかりやすい英語の話し言葉で、その何かを伝えようとしていた。研究スタイルとしては、図書館に籠もってギリシャ語の古典からコツコツと築き上げていくハイデガー。対照的に、カウンセリングやエンカウンターグループのような対人関係の場に出て行って、そこで人と関わるということ自体を研究の対象にしているロジャーズ。適度に自閉しているのが好きで、かつ、人好きな私にとってみれば、これほど魅力的な組み合わせは考えられなかった。

ところで、本誌掲載の公開公演録で村山正治先生は、大学の卒業論文テーマは「ビンスワンガーとロジャーズ」だったと述べておられて驚いた。ビンスワンガー (Ludwig Binswanger) はハイデガーの哲学に忠実な心理療法を構築し、ハイデガーが人の存在を言うのに使った「現存在」(Dasein) という語を用いて、彼の心理療法を「現存在分析」(Daseinsanalysen) と命名した。ビンスワンガーとロジャーズならば、その内実は「ハイデガーの現存在分析とロジャーズ」と言ってもいいだろう。わあ、ハイデガーとロジャーズを掛け合わせると… このテーマの源流にジェンドリン先生、そして村山先生もおられて、その遙か下流には私もいるのかと思うと、この大河の流れのほとりに培われていく尊い恵に手を合わせたくなる思いである。

大学を卒業する頃はまだ電子メールがない時代だった。そこでジェンドリン先生に連絡を取るには電話をする他になかった。先生の研究室はいつも不在だったので、連絡がとれるまでには相当な時間を要した。やっと電話で連絡がとれると、先生は、「今はフォーカシングをやっている」と言われた。それは、聞いたことがなかった。どんなものですか？ すると先生はシカゴ市内の会場でワークショップをする、無料で入れてあげるから、見にくるか、と誘ってくださった。さっそくシカゴに飛んでワークショップに参加した。

その会場でジェンドリン先生と初めてお会いした。とてもヨーロッパ的で繊細な人間関係のテイストが感じられた。先生がフォーカシングのリスナーをされている場面はまるで魔法を見るようだった。先生はひたすら優しく聴いているように見えた。当時、フォーカシングを知らない私は、どこがフォーカシングなのか、わからなかった。印象に残ったのは、とても敏感で、優しく、非指示的であり、それでいて力強いリスニングだったこと。目の前のクライアントは、たちまち変容していくではないか。すぐにシカゴ大学 (University of Chicago) 大学院に進むことを決めた。幸い同大学院より学費・寮費全額給付の奨学金にも恵まれ、シカゴ市内はハイドパークのキャンパスに居を移した。

ジェンドリン先生は大学ではフォーカシングは教えておられなかった。開講授業科目は フッサール、ハイデガー、カント、それと後にTAEとして花

咲く理論構築 (Theory Construction) だった。授業科目にフォーカシングはなかったが、先生の研究室が当時のフォーカシング研究所 (The Focusing Institute) だった。そして、著作『フォーカシング』の出版に合わせて初めてフォーカシング・トレーナー養成のための夜間コースが行われた。事務局をしていたドラリー・グリンドラー (Doralee Grindler) を手伝うということで、これに参加させていただいた。

授業時間外にジェンドリン先生とは言語の話で盛り上がった。ときどき先生のフォーカシングのリスナーをしていると、先生はドイツ語のハンドル表現を使うことがあった。意味がわからないと伝えると、わからなくてもいいから、その発音を真似して伝え返してくれ、と言っておられたのは印象的だった。どうしても英語にならないと仰っていたが、もちろん、私にもどうしても英語にならない、日本語にしかならない感覚はいくらでもある。先生に「多少は」「気を遣っていた」が、これらも日本語でしか表現できない感覚である。「(多少)とは a lot…多いのか、それとも a little … 少ないのか？」こうやって、互いが言語の狭間にいる感覚を楽しんで語り合った。

2013年の夏、先生を訪ねた。電子メールではときどき連絡はとっていたものの、実際には、何年かお会いしていなかった。別れ際に “Let me give you a big hug. This is the last time I’ll be seeing you (最後になるだろうから、ビッグ・ハグをしよう).” そんなことはないよ、と私は言ったが、先生は私の耳元で “I know” とだけ囁かれた。

2018年、先生亡き後、先生のウィーンの生家や先生が通われたギムナジウム (学校)、それに「ユージン・ジェンドリン展」を行っていたウィーンの Alsergrund 地区にある BezirksMuseum (地域ミュージアム) を訪ねる機会があった。ジェンドリン先生からはまだまだ学ぶことがある。

## 日本のPCAの歩み

執筆要項によると、「日本のPCAの歩みとThis is meの交差を意識しつつご執筆ください」、「日本のPCAの歩みに関わる出来事に関してはその年 (可能な月日まで) を記してください (編集の方でPCA発展の年表をまとめるつもりです)」とあった。しかし、ここまで来て「日本のPCAの歩み」については、何も書いていないことに気づいた。さらに、「日本のPCAの歩み」といったことを意識していない自分がいることにも気づかされた。

冒頭にも書いたように、最近は世界各国の人たちとインターネットでセッションを行い、私がフォーカシングを指導している人たちの6割ほどは海外の方々となっているのが現状だ。これからの時代、ますますボーダレスで、ワールド・ワイドで、バーチャルな現実が進み、「日本として」ではなく、「個人として」いろいろな国の仲間たちと協調していくことが New Normal になって

いく予感がする。そんな中で、相変わらず一人好き・人好きの狭間で執筆の時間を楽しみ、とうとう共著で小説（池見&ダスワニ, 2020）を書き終えたこの頃である。

まあ、そうは言っても、年表の材料が何も提供できないのも困るだろうから、年表素材となる私と関係がある日本のPCAの歩みを付記することでご勘弁いただくことにしたい。年表データーはご自由にお使いください。

## 付記

- 1978年 ユージン・ジェンドリン先生 初来日（九州大学・日本心理学会第42回大会）
- 1980年7月 池見陽 帰国 九州大学・村山正治先生のグループとともに活動開始
- 1987年9月15日～20日 ユージン・ジェンドリン先生 再来日（ワークショップ 東京）
- 1998年9月18日～21日 メアリー・ヘンドリックス先生 再来日（日本心理臨床学会）
- 2009年5月12日～16日 第21回Focusing International Conference（淡路夢舞台国際会議場）
- 2017年8月25日～27日 第1回アジア・フォーカシング国際会議（生田神社会館 神戸市）

## 参考文献

- Cooper, M. & Ikemi, A. (2012). Dialogue: A dialogue between focusing and relational perspectives. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies* 11 (2): 124-136.
- Gendlin, E.T. (1997). How philosophy cannot appeal to experience, and how it can. *Language Beyond Post-Modernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy* (Ed. D.M. Levin). Evanston, Northwestern University Press.
- Ikemi, A. (2017). The radical impact of experiencing on psychotherapy theory: an examination of two kinds of crossings. *Person-Centered and Experiential Psychotherapies* 16 (2): 159-172.
- 池見 陽 (2019).表現のセンスとギヴスの創造的な出会い～体験過程とアートの相互作用をめぐる～ 臨床描画研究 34: 64-85. 北大路書房.
- 池見陽&エディ・ダスワニ (2020). バンヤンの木の下で：不良外人と心理療家家のストーリー 木立の文庫.

## PCAと他学派との狭間を生きる

伊藤 研一

(学習院大学文学部心理学科)

### 理科系での挫折と彷徨

私は高校では自分が理科系人間と信じて疑わなかった。特にはじめはどこからアプローチしてどう解いていいかまったく見当がつかないような数学の難問に取り組むことが好きだった。こうかなと思い、解いていこうとする、しかし、「だめだ」とわかる、ああかなと思い、また解く、これもうまくいかず、しばらく放置する。いつもあたまの片隅のどこかにはその問題がひっかかっている。あるとき、「これだ！」とひらめき、解けたときの喜びは何ものにも替えがたかった。1970年頃の東大の入試にでた数学の問題で、格子状の道路があって犯人がその道を縦や横に進みながら左下の地点から対角の右上の地点まで逃走する。警察官3人(だったか)を途中のどの地点に配備すれば捕まえられる確率が最大になるか、という問題を見たとき、探偵ガリレオではないが「実に面白い！」と思った記憶がよみがえる。

だから東大の理科I類に合格した時にはうれしくて仕方がなかった。「これで好きな勉強が思う存分できる」と思ったことを今でも昨日のこのように思い出せる。

しかし、喜びと希望に満ちあふれた私を待っていたのは強烈な挫折感であった。数学の演習でプリント一枚に書かれないいくつかの問題。少ない公理から出発して定理を導き出すという問題だった。まず問題に魅力を感じられない。しかし難しい。全部は解けず、苦勞して何題か解き、演習の時、黒板にそのうちの一つを書いた。それを見た教師は皆に向かって「ね、簡単でしょ」と当たり前のように言った。心の中で「えー、あんなに苦勞したのに」とつぶやいた。もっと驚いたのは、自分ではどうしても解けなかった問題を黒板上ですらすらと苦も無く(とみえた)解いていく同級生を見た時だった。

この後も高校では「物理」に相当する「解析力学」、「化学」に相当する「熱力学」

等々、すべて「なんじゃ、こりゃあ!？」の世界だった。しかも高校の時のように「チャート式」のような参考書がないのでお手上げ状態が続いた。そして通常は1年生で入る部活に入ることを決め、高校時代好きだった加藤諦三が入っていたワンダーフォーゲル部に2年生時に入ったのだ。しかし、結局は地図も読めず、集団生活にもなじめず1年間で辞めることになる。まさに「wander(さまよう)」の始まりである。さらに2年生でどの専門を選ぶかの志望届を出さなくてはならないのだが、血迷った私は親にまったく相談せず!「進学不志望届」(というものがあることを教務課で知ったのだが)を出してしまった。

教養課程を3年間やって専門課程では地球物理学科に進学した時も「理系の女神(がいるとして)」は微笑んでくれなかった。よく一緒に遊んだ仲間、同じように講義がわからない学生が一人いて「文学部に転科しようと思う。ついては文学部の教授に相談するんだけど、心細いから文学部棟までついてきてくれ」と声をかけてきた。「え、転科?そんなことできるんだ」と驚いた。でも自分はどこに進みたいかまったく見当がつかない。悩んだあげく授業期間が終わる前から夏休みをはさんで2か月間ヨーロッパを一人でまわることにした。はじめと終わりの場所だけ決まっているオープンチケットとスチューデントレイルパス(2等車乗り放題、ユーレイルパスの学生版)で出かけた。さまざまな国のさまざまな人と出会い、時には旅を共にして「ああ、人間て面白いな」と感じた。帰国してから、フロムの本を読んだり、フランクフルトの読書会に参加したりして、教育心理学科に転科しようと思った。その時相談したのが1977年当時教育心理学科にいらっしやった佐治守夫先生と肥田野直先生(専門は教育評価)である。佐治先生は「(転科は)もったいないねえ」と穏やかにおっしゃった一言が印象に残っている。肥田野先生はにこにこ微笑まれ、ウェルカムな雰囲気だったので、何回か相談に通った先は肥田野先生のところであった。教育心理学科に転科してから、理科系のときは180度変わって、「講義内容がその時間中にわかる!」ことがとてもうれしかった。文字通り世界の色が新鮮に見えたのを覚えている。

本誌掲載のご講演で、村山先生が「迷うこと」の大切さを強調されていることから、長々と私の迷いと彷徨について書かせていただいた。苦しかったこの過程を経て、迷って悩んでいいのだということを身をもって学んだ。

## エンカウンターグループとの出会い

転科を決断した年、大学の学生相談所主催のウィークリー・エンカウンターグループ(週に一度2時間くらい(だったと思う)自由に本音を話し合うグループ)に参加した。一度二人のファシリテータ(学生相談所の助手)の一人とぶつかり合った(内容は忘れた)。その日の夜、夢を見た。父親を背負い投げで投げ飛ばし、ぐったりした父親を心配になって「大丈夫?」と声をかけるという夢。グループ体験が反映していると思った。「面白いなあ」と感じ、心は急

速に臨床心理学へと向かった。その後、ロジャーズの「出会いへの道」を見たり、実際に宿泊を伴うエンカウンターグループに繰り返し参加したりした。しかし、最初の体験ほど意味深く感じるような体験はなく、しだいに足が遠のいた。

## 京都大学との第1回合同カンファレンス～河合隼雄先生との出会い

修士2年生の時に中学入学を目前にひかえた男子の不登校のクライアントA君を担当した。母親との並行面接で母親面接は私の先輩が担当。今から考えると軽度の知的障害と愛着障害をもったむずかしいクライアントだった。ただ、私が知っているのは来談者中心療法的遊戯療法だけである。しかも本を読んだだけ。ひたすらアクスラインの8原則を金科玉条のようにして臨んでいた。最初から驚くことばかりだった。まず、初回、プレイセラピーを終えて一緒に母親面接が終わるのを待っていると、突然待合室を出てしまう。あわててドアを開けるとすぐそこにいて「びっくりした?」。その後もプレイルームの中ほどにあるアコーデオンカーテンを見つけ、部屋をそれで仕切り、クライアントはドアのある側、私は奥の側に振り分けてカーテンを閉めて一人で遊ぶ。なんとか工夫して二人で遊べるようになってからは、2階にあったプレイルームの窓からミニチュアの玩具を捨ててしまい、「先生拾ってきたら」と真顔で言う。私は「窓からものを捨ててはいけないことになっている」「この時間はA君といっしょにいることになっている」などと「最小限の制限」繰り返すしか能がない。

1980年だったか京都大学との第1回合同カンファレンスが開かれることになり、そこでこのケースを出した。河合隼雄先生がその場にいらしゃった。京大の院生が百家争鳴のごとく次々に意見を発するのに驚いた。最後に河合先生が「君がこの子の大変さをわかっていたら、君は下に行って拾ってくるはずだ」とコメントされた。「この子は乳幼児期に母親との関係が十分に育っていない。その時期の子どもがよくものをつかんで捨てて、母親がそれを拾うことを繰り返すよね。それをここでやろうとしているんじゃないかな」目からうろこが落ちるとはこのことかと思った。

次回、クライアントが窓からミニチュア玩具を捨てた時に、私が「拾ってくるよ」というと「もうしないからいいよ」と答えたことに河合先生のコメントの妥当性を痛感した。

## 心理臨床と責任～村瀬孝雄先生との出会い

彼を担当して一年くらいたってから、実践を事例報告にまとめて紀要に載せるつもりで、村瀬孝雄先生にコメントを依頼した。当時、村瀬先生は立教大学教授であった。事例報告を送ってから、しばらくして村瀬先生から自宅に電話があり、話したいことがあるから会いましょうといわれた。立教大学最寄りの

池袋の喫茶店で、開口一番、低いが張りのある声で「このケースの責任はいったい誰がとるんだい？」と尋ねられた。いきなり中心を突かれた感じで、その問いへの返答が全く浮かんでこないことに気づいた。もちろん、「私」に違いないが、その「私」の中に内実を伴った答えが存在しないのである。その後、とにかく村瀬先生の話を一言漏らさず聞かなければという思いで聞いた。詳細は忘れてしまったが、すべて最初の問いに集約される内容だったと思う。

その場でスーパービジョンをお願いしたところ、「まずは、自分で考えなさい」と一言。まさに茫然自失である。

何とか態勢を立て直し、それまでの母親面接の記録、自分の記録を何度も読み返した。すると、乳幼児期から不登校にいたる現在までの彼の生き方が一つのストーリー（土居、1977）として浮かび上がり、援助の方向性も見えてきた。この瞬間、高校の時に数学の難問を解く過程と重なった。

### 多面的アプローチ～村瀬嘉代子先生との出会い

博士後期課程に進学と同時に文京区の教育センターで非常勤の教育相談員として勤務した。その頃、スーパーバイザー（といってもケースをたくさん担当していた）でいらっしやったのが村瀬孝雄先生の奥様である村瀬嘉代子先生である。数年後大正大学カウンセリング研究所に勤務されることになるが、私もそちらに引っ張っていただいた。

カウンセリング研究所には子どもから大人、神経症圏から統合失調症圏、さまざまな発達障害までいろいろなクライアントが来室していた。

村瀬先生からは、今の私の臨床の土台となるものを築かせていただいた。特に当時は多面的アプローチ、現在では統合的心理療法と呼ばれている臨床が実践されていた。狭義の心理療法面接だけでなく、実際に料理をクライアントと作ってスタッフや他のクライアントにふるまったり、クライアントやその保護者と一緒に年末に餅つき大会を行なったりと、一見型破りな実践の裏に、クライアントに対する的確な理解と細やかで多様なねらいが込められていた。

今現在、私は中学校で週1日スクールカウンセラーをしている。孤立感の強い不登校の生徒とプレイセラピーをしながら、徐々に元気が出てきたあたりで、体育の教員と一緒にバスケットボールをしたり、理科の教員と実験をともにすることをしたりして学校とのつながりを回復する実践を試みたことがある。ここには多面的アプローチが生きていると考えている。

### フォーカシングはむずかしい？～壺イメージ療法との出会い

前述のクライアントとの臨床が軌道に乗ったころ、村瀬孝雄先生とお会いしてから一年ほどたった。そこであらためてスーパービジョンを電話でお願いしたところ、「できる限りやってみましょう」と引き受けていただいた。「できる限り」のところ少しばかり心細さを感じたことを覚えている。



スーパービジョンは初めのころは毎週していただいた記憶がある。何年後か村瀬先生がジェンドリンのフォーカシング（1982）を村山先生、都留先生と訳されたことを知り、スーパービジョンの時間をお願いした。しかし、セッションの途中でプロセスが進まなくなったところで、村瀬先生が「進まないね。やめよう」とあっさり中止された。自分には「フォーカシングはむずかしい」と思わされた。

別のあるセッションで「壺イメージ療法」に関する当時広島修道大学の田畠誠一先生のコピーを見せていただいた。心の中にあるものが入っている「壺」を思い浮かべて、そこに入って中の感じを味わい、出てから蓋をするという方法である。とても興味を惹かれた。実際、当時学生相談で担当していた自己臭恐怖の女子学生に適用したところ、徐々に症状が緩和し、親密な女性の友人ができて、終結にいたる経験をした。

その後、1984年、壺イメージ療法の臨床例に関するクローズドの研究会が開かれるということを村瀬先生から知らされ、一緒に広島まで出張した。発表者は私や田畠先生、栗山一八先生、富永良喜先生、松木繁先生、であったが、討論者の中に村瀬先生をはじめ、中井久夫先生、増井武士先生、成瀬悟策先生（司会兼）がいらしたのである。私は先の自己臭恐怖の事例を出したが、特に中井先生の縦横無尽、博覧強記のコメントに強烈に驚かされた。帰りの新幹線の車中で、村瀬先生が「あそこ（中井先生のこと）までいくと張り合う気にもならないね」とおっしゃった。村瀬先生にしてそうかと思わされた。このときの事例と討論は「壺イメージ療法」に収められている（田畠、2019）。

ともあれ、言葉よりイメージのほうが有効そうなクライアントに対しては壺イメージ療法を行なう場合が多かった。

## フォーカシングはむずかしくない～アン・ワイザー・コーネルとの出会い

フォーカシングから離れて10年くらいたった頃、アン・ワイザー・コーネルのフォーカシング入門マニュアル（1996）に出会った。一読して「ああ、これは自分でやっていることに重なるなあ」と感じた。私の考えでは（間違っていたらごめんなさい）ジェンドリンの方法は「シフトする」ことに重点があり、コーネルの方法は「フェルト・センスと一緒にいる」ことに重点がある。

そこでフォーカシングをコーネル法で大学院のゼミで行なった。その中の一例がフォーカシングで極めて劇的な変化を生じ、その後、その大学院生が悩まされていた手足の冷えや片頭痛、腹痛などの症状がきれいに消失したのである。さらにはその院生がカウンセリング演習の課題として行って、行き詰っていた試行カウンセリング（鑑、1977）が大きく展開することになった（伊藤、1999）。目をみはる思いであった。

これをきっかけにフォーカシングに本格的に取り組み始めた。

## セラピスト・フォーカシング、内観法、臨床動作法、スーパービジョン

心理療法面接をしていると、強さの程度はいろいろあるが、違和感を感じることもある。ここでセラピストがそのクライアントを思い描いてフォーカシングを行なうと、その違和感と適度な距離をとることができ、時には言語化できることがある。これは精神分析でいう「逆転移の利用」である。神田橋條治先生がジェンドリンが来日した時に、ジェンドリンに「フォーカシングは逆転移の感知に有効だと思う」といったらジェンドリンがとてもうれしそうな顔をしたという（私信）。するとジェンドリンもそのことに気づいていたと思われるが、直接そのことを明示してある文を寡聞にして知らない。土居（前掲書）は、クライアントを理解しようとしているときに、面接者にあらわれる「不快感情」を重視して、「面接者が感じている不快な感情は、実は被面接者が内心深く感じているものの反映である」。したがって「面接者は自分の心境によって相手の心中を推測できるということになる」。しかし面接者が被面接者に共振れを起こすだけでは「何も新しい発展はそこから期待はできない」「面接者が相手との接触によって引き起こされた内心の変化の意味を洞察し、それを認識にまで高めなければならない」（下線筆者）。お気づきのように、この「認識にまで」高めるスキルはフォーカシングの得意技と言っていいだろう。クライアントが「内心深く感じている」ことをセラピストが伝え、それが「相手の急所をついたとき」「かつて自分が自分を理解した時よりも、もっと深く理解されたと感じず」「それはいわゆる疎通を超え、いわば火花が散ったように、面接者と被面接者の間に真のコミュニケーションが成立し、二人の間の劇が進展するのである」。このような事例については以前に論じた（伊藤、2009）

その後、しばらくして、私がスーパービジョンを行っているときに感じた違和感についてフォーカシングしたときに、クライアント、セラピスト関係がスーパーバイザー、スーパーバイザー関係に持ち越されていることに気づいた。それは精神分析では「パラレル・プロセス」と呼ばれる現象である（伊藤、2019）。

また機会があつて、臨床動作法を経験することがあり、この技法の奏功メカニズムがフォーカシングで説明できるのではないかと考えた。そこでフォーカシング的態度日常化傾向を測定する尺度を用いて、学部でのゼミで行なった5回の臨床動作法の前後で、測定したところ、統計的に有意な増加が見られた（伊藤、2005）。

またかなり以前から自分でも経験し、面接者の経験もあつた内観法にもフォーカシング的な効果がるのではないかと予想し、奈良内観研修所の三木義彦、潤子夫妻の協力を得て、（一週間、宿泊形式の）集中内観前後で同じ尺度で評価した。同じように有意な増加が見られ、特に「問題と距離を取る」因子の増加が目立った（伊藤他、2009）。「罪意識」を重視する内観法は一見すると、それに悩まされそうに見られるが、むしろそこから心理的距離をとる効果があ

ることが意義深い。さらに内観法とフォーカシングを融合した「内観フォーカシング」なる技法を考え、週1回の面接で効果的な内観ができないかと試し、参加者によっては大きな効果が見られた（伊藤、2003）。

## まとめにかえて

振り返ってみると、理系での挫折からはじまり、さまざまな学派、技法に首を突っ込んできた。したがって自分は（あるとして）純粹PCAとはとてもいえない。しかし、クライアントの自発性、能動性を尊重するという土台は自分の中にあるし、フォーカシングは自分の大きな柱である。理系から転進した時には、自分がやっていけるかどうか、心細い限りであった。本当にこれでよかったかどうか、今でも自信を持って断言はできないが、やめないで続けていることはたしかである。

## 文献

- Cornell,A.W.(1994) The Focusing and Student Manual. Focusing Resources.  
（村瀬孝雄監訳 大澤美枝子訳 『フォーカシング入門マニュアル』 金剛出版.1996）
- 土居健郎（1977）方法としての面接 医学書院.
- Gendlin,E.T.(1981):Focusing. 2nd ed. Bantam Books,New York. (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳 『フォーカシング』 福村出版. 1982)
- 伊藤研一（1999）カウンセリング訓練に求められる要素の考察—フォーカシングで劇的な変化が生じた大学院生の事例から 人間性心理学研究 17（2）187-197.
- 伊藤研一（2003）フォーカシングと内観療法の統合的使用（内観フォーカシング）の試み その2 学習院大学文学部研究年報 50 241-256.
- 伊藤研一（2005）集団施行による臨床動作法とフォーカシング実習の効果（その3） 学習院大学文学部研究年報 52 195-207.
- 伊藤研一(2009) 心理臨床にフォーカシングを活かす 諸富祥彦(編著)フォーカシングの原点と臨床的展開 岩崎学術出版社 229-276.
- 伊藤研一（2013）フォーカシングによるパラレルプロセスの気づき 学習院大学人文科学研究所 人文 227-237.
- 伊藤研一・三木善彦・三木潤子・小林孝雄・南風原朝和（2009）フォーカシングから見た内観療法 内観研究49-58.
- 田嶋誠一（編著）（2019）壺イメージ療法 創元社
- 鑑幹八郎（1977）試行カウンセリング 誠信書房

## 特集付録

table 1 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関わる出来事\*

	1922 (北京での国際キリスト教学生会議への参加の途上で来日)
1950	
	1951 ロジャーズの「カウンセリングと心理療法」を友田不二男氏が翻訳(タイトルは「臨床心理学」)刊行
	1955 友田不二男、遠藤 勉氏らが中心となりローガン・フォックスの協力のもとカウンセリング・ワークショップを実施(茨城県大甕) 「ロジャーズ選書」翻訳刊行開始(「カウンセリングと心理療法」「クライアント中心療法」を分収)
1960	
	1961 ロジャーズ来日(京都大学での講演、大甕ワークショップ)
	1966 「ロジャーズ全集」翻訳刊行開始
1970	1970 京都女子大学でわが国初のエンカウンター・グループ 人間関係研究会発足 福岡人間関係研究会発足
	1971 日本心理学会にて畠瀬 稔氏、野島一彦氏がわが国初のエンカウンター・グループに関する研究発表
	1973 ロジャーズの「エンカウンター・グループ」を畠瀬 稔氏・直子氏が翻訳刊行
	1978 ジェンドリン 初来日(九州大学・日本心理学会第42回大会講演 10月15日)
1980	1980 池見 陽氏 帰国(7月)九州大学・村山正治氏のグループとともに活動開始
	1982 日本心理臨床学会発足 日本人間性心理学会発足 ジェンドリンの「フォーカシング」を村山正治氏、都留春夫氏、村瀬孝雄氏が翻訳刊行
	1983 ロジャーズ&ナタリー・ロジャーズ来日 日本フォーカシング研究会発足
	1987 ロジャーズ逝去 ジェンドリン&メアリー・ヘンドリックス来日(ワークショップ 東京 9月15日~20日)
	1988 日本臨床心理士資格認定協会発足、「臨床心理士」誕生
1990	
	1994 アン・ワイザー・コーネル来日
	1997 日本フォーカシング協会発足
	1998 メアリー・ヘンドリックス来日(日本心理臨床学会第17回大会 9月18~21日)
2000	
	2001 PCA Forumを日本で開催(赤穂)
	2009 第21回Focusing International Conference(淡路夢舞台国際会議場 5月12日~16日)
2010	
	2015 国家資格「公認心理師」法制化
	2017 ジェンドリン逝去 第1回アジア・フォーカシング 国際会議(神戸市 生田神社社会館 8月25日~27日)
	2018 日本心理研修センター創設
	2019 「公認心理師」誕生
2020	

\*坂中編著(2017)と今回の特集に関わる原稿を中心に坂中がピックアップした。

# ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討

—2018年春の修養会の実践報告と検討を中心に—

丹羽 牧代

(南山大学外国語教育センター)

楠本 和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

## I. 問題および目的

### 1. ワorkshop形式の修養会

本稿は、プロテスタント教会であるシティ リジョイス チャーチ<sup>1</sup> (以後、CRCと略する) が実施したワークショップ形式の修養会について考察する。そのため、まず、キリスト教会による修養会 (retreat) やワークショップによる学びについて簡潔に記す。

#### (1) 修養会とは

キリスト教会における修養会は、「都会を離れた所に設けられたセンターで、いろいろなグループの人々が、指導者のもとに、祈り、瞑想、研究などを通して霊生活を深めるために、短期間ともに生活する会」(世界キリスト教百科事典、1986) と定義される場合がある。また、オックスフォードキリスト教辞典(2017) には、黙想会 (修養会) retreat という項目があり、「一定の日数を沈黙のうちに過ごし、宗教的修練に専念すること。正式の信心として、黙想会は対抗宗教改革期に導入され、「黙想の家」(retreat houses) は17世紀に建てられた。カトリック教会では、毎年黙想会に参加する慣行が19世紀に広まった」と記

<sup>1</sup> 榊原康成牧師が、2004年に新しく教会を建て上げる開拓伝道の働きを始めて設立された教会である。2004年当時は、名古屋市の栄地域にはプロテスタント福音派に所属する教会がなかったことから、この地域での都市部伝道と次世代への伝道を目指して始まった。当初は、牧師の自宅であるマンションの1室を礼拝場所として始まった。その後、貸会議室を使用するなどして、現在は名古屋駅近くのCBI (キリスト聖書学園) のビルの1室を礼拝場所として使用している。自前の会堂を持たないため、CBIでの日曜日の礼拝の他に牧師自宅での金曜日の夜の礼拝や集会などをおこなっている。

されている。CRCはプロテスタント教会であることもあり、CRCが実施する修養会は世界キリスト教百科事典による説明に近い目的や形態や活動となっている。

## (2) 聖書的な学びの観点から

次に、キリスト教教育、教会教育をワークショップ形式の修養会の特性と関連付けて確認しておく必要がある。ワークショップ形式の修養会は、キリスト教教育、教会教育の一部、一形態であるためである。そのために、まず、松原(2010)を参照する。

松原(2010)は、「教会教育を聖書の原点に立ち返って根本的に見なおそう」とする(p.2)。そして、「聖書的な学び」を検討の中心におく。聖書的な学びは「時代や文化を超越した聖書が教えている学びの本質」であるとして、①聖書的な学びが目指すもの、②神と人との共同作業、③生涯にわたる過程、④聖書のことばの人格性、⑤全人的関わり、⑥共同体的な学び、⑦霊的戦いの7点から検討している(p.12)。

「聖書的な学びの究極の目的は、人がイエス・キリストによって救われ、「神のかたち」が回復され、神・自分自身・他の人・被造物との本来意図された関係を回復し、神の栄光を現わしていくこと」であり、「別の言葉で言うと、聖書的な学びが目指すものは、イエス・キリストに似た者へと変えられていく霊的成長」だとする(松原、2010、p.14)。上記②～⑥は、ワークショップ形式の修養会に関連が深いと考えられる。②～⑥に関して、以下のように述べている(p.21)。

聖書的な学びは、神と人との共同作業によってなされるものであり、生涯にわたるものです。聖書の言葉には人格性があり、聞く人を神と出会わせ、悔い改めを迫り、神の愛を経験させ、神とのより深い親しい関係へと導きます。

霊的成長は全人的なものであり、5つの側面を通して現れます。聖書の真理を知り(知的)、神と人を愛し(情緒的)、よい人間関係を築き(社会的)、正誤を正しく判断できる(道徳的)という形で現されます。このような活動はすべて身体を通してなされるものですから、身体もなくてはならないものです。

さらに、聖書的な学びは共同体的なものです。私たちが霊的に成長するためには、共同体の中で暮らすことが不可欠です。教会や家庭、地域教会において、互いに愛し合い、赦し合い、訓練し合うような関係の中で、私たちは霊的に成長します。

松原(2010)の聖書的な学びに関する用語を使用すると、ワークショップ形式の修養会は、「イエス・キリストに似た者へと変えられていく霊的成長」を

目指し、「神と人との共同作業」、「聖書のことばの人格性」に導かれ、「共同体」によってなされる「全人的な関わり」による学びということができよう。

### (3) スモールグループの実践とその意義

次に、ワークショップ形式の修養会に関係の深いトピックスとして、スモールグループについて概観する。松原（2017）は、「教会史の中で、教会をあるべき姿に戻そうとする試みとして、スモールグループはよく用いられてきました」とし、教会におけるスモールグループの利用の歴史についてまとめている（p.4）。ここでは、本稿で検討する、スモールグループを用いた2018年春の修養会のプログラムはKurt Lewinのグループダイナミクスやラボラトリー方式の体験学習と関連深いことを指摘するに止め、次にグループダイナミクスやラボラトリー方式の体験学習が、日本における教会生活に関する研修として導入された経緯を確認する。

本稿で検討しているワークショップと関連が深いラボラトリー方式の体験学習は、1958年の世界キリスト教協議会、日曜学校協会主催の第14回基督教教育世界大会の一行事である第1回教会集団生活指導者研修会（Laboratory on the Church and Group Life）によって、日本にもたらされた（中堀、1984、p.12）。「世界キリスト教協議会は、日本キリスト教協議会に対して、大会の一環として、グループ・ダイナミクスからのキリスト教教育へのアプローチを紹介してはとの申し出を行った。これはアメリカ聖公会教育局がパリッシュ・ライフの革新を目指してすでに研究と実践を積み重ねて成果をあげていた「教会生活におけるグループ・ダイナミクスの原理の応用」である」（坂口、1984、p.46）。第1回教会集団生活指導者研修会は、アメリカ聖公会およびカナダ合同教会より10名の指導者をスタッフとして迎えた。参加者は日本のプロテスタント教会各教派の教職者、教師、宣教師35名であった（中堀、1984、p.12）。

この研修会の目的は以下の通りであった。

教会の共同体的生活は、キリスト教信仰の伝道のための基本的媒体である。聖霊の力が各個人を我らの主にあって一つとしているようなキリスト者のグループは、日常の生活に直面し、互いに分かち合うような統一を具体的に示すことによって、此の世に対し、福音の力を宣揚するものである。キリスト者の共同体のこの意味は教会内において、知られるべきであるほどに充分には知られていない。従って、このラボラトリーの目的は、グループ・ライフへの我々の関わり具合に影響をおよぼす諸要因、諸力を探究することである。実験的特殊状況下で、これらの諸力に対してよりセンシティブになり、教会内のリーダーとしてより創造的、応答的になることをめざすのである（中堀、1984、p.12）。

このようにラボラトリー方式の体験学習が日本に導入された源の一つは、教会の共同体の意味を実現しようとする研修の試みであった。

以上のような流れと並行して、キリスト教会の福音派を中心とする群れの中では、また別系統の流れからの定期的・継続的なスモールグループが実施されてきている経緯もある。例えば、家の教会や家庭集会の運動は盛んにおこなわれている（Stott,1968, pp.112-113;松原、2017、p.4）。日本におけるプロテスタント系のスモールグループ活動の流れのひとつは、大橋（2002）によれば1990年代初頭にRalph W. Neighbour によってもたらされた。Neighbour（2010）での総括によれば、そしてその協働者であるBoren（2007）などでの位置づけによれば、スモールグループは、教会のプログラムとしてではなく、「キリストのからだ」として信徒同士が関係を結び成長していく教会の本質のひとつとしてとらえられている。牧師などの教役者が大勢の会衆に対して語り教えるという形に加えて、リーダーはいるものの、基本的にフラットな関係の中で学び協同して成長をめざすという教会形成の形が、新しいものとして導入されたわけである。その後現在に至るまで、本稿の考察対象となったスモールグループによるワークショップのような特別プログラムではないにしても、定期的に小集団での交流を持ち、それを通して信徒教育を行っている教会は多々ある。また地域教会を横断するキリスト教団体、主として若い世代を対象とする宣教団体では、このようなスモールグループでの活動を主軸にしていることも多い。CRCにおいても、特別プログラムを立てるわけではないが、3人から8人ほどの区切りで信徒をスモールグループに分けて分かち合いや学びをする定期的なセルグループ活動も行われている。このような流れは、いわゆるプロテスタント教会の福音派と呼ばれるひとまとまりの系統の教団にもっともよく継承されてはいる。

また、ロンドンのオール・ソウルズ教会における交わりのグループは、クリスチャンの交わりの三つの要素（神ご自身との関係、相互への配慮、この世への奉仕）を現し、発展させることを願い、定期的、継続的に実施されたとされている（Stott,1968, pp.126-127）。さらに、Francis Schaefferは、その著作の中で繰り返し「神は沈黙してはおられない」と語るとともに、（Schaeffer 1972）その神の語ることを聴き、問い、応答するための実践としてスイスにL'abri（＝隠れ家）というretreatの場を創設した。そこで自由な共同生活と参加者同士の分かち合いや議論を通して、全人格的な神と人との交流・人同士の交流によって信仰の成長を目指す。この活動も現在では世界各地で継承されている。アメリカ合衆国におけるキリスト教教育の中では、Gorman（2001）が指摘しているように、ある種のブームとして教会教育におけるスモールグループの役割が喧伝され、活用されたが、教会の衰退を食い止めるための手段・手段としてのみ利用され、プログラム化と定式化が進んで変質する中でこれまた衰退へ向かう。ただ、Gorman（同上）は、スモールグループは人間同士が寄り合い、



協同することで得られるものがあることをも論じ、そのためにスモールグループのデザインやプログラム、リーダーシップがどうあるべきかを記し、教会や信徒の成長のためのひとつの手段として評価を与えている。

現代日本での状況に戻れば、松原（2010）は、定期的なスモールグループのグループ活動の意義を次のように述べている。「互いに励まし合い、互いに徳を高め合う（1テサロニケ5：11）ためには、小人数の同じメンバーが定期的集まるスモール・グループが最適の形態です。そこにおいて、すべての生活経験、弱さ、失敗を自由に分かち合い、みんなで話し合い、互いに受け入れ合い、違いを認め合い、生活経験をみことばの真理によって正しく解釈していくことを訓練します」（松原、2010、p.19）。

CRCのワークショップ形式の修養会は、上に述べた定期的・継続的なスモールグループではないが、スモールグループの機能や有効性を限定的ながらも持っていると考えることができる。グループダイナミクスに造詣の深い柳原（1969）は、キリスト教教育とスモールグループとの関係について以下のように述べている。「小集団研究の成果が、キリスト教教育とかかわってくるのは、小集団が教育方法として採用されるとき、殊に小集団による成人教育、特に教職、信徒の指導性訓練においてである。キリスト教教育を、キリストについての知識伝授としてではなく、キリスト者としての生活訓練と考えると、小集団が基本的教育方法となる。出会い、対話、交わりの教育—キリストが、私たちお互いのかかわり合いの中に「うきぼり」にされるようになるような人格関係的教育過程—は、小集団の活用をまたなければならない」（p.357）。CRCのワークショップ形式の修養会は、スモールグループを活用した出会い、対話、交わりの成人教育であると考えることができる。

松原（2017）は、スモールグループをコンタクトグループ、伝道グループ、成長グループなど7つのタイプに分類するとともに、さまざまなスモールグループには①グループのメンバーのニーズに応える、②目的を達成する、③グループの関係を維持する、の3つの共通目標があるとする。CRCのワークショップ形式の修養会もまた、これらの3つの共通目標を目指している。上のタイプとしては、成長グループに分類できると考えることができる。成長グループは、聖書理解、信仰を深める、交わりを深める、互いに助け合うなど信徒が成長するためのグループである。これらのグループの目的は、洞察や理解、真理の適用、研究方法、配慮、コミュニケーション、信頼を増すことなどであるとされている（pp.7-8）。CRCのワークショップ形式の修養会は、聖書理解、信仰を深める、交わりを深める、互いに助け合うなどの成長を目指している。

松原（2017）は、スモールグループの利点として、①個人的利点と②集団的利点を挙げている。①個人的利点として、a.受容と配慮により、希望をもたらす、b.信頼と愛を学べる、c.人が変わる、d.賜物を認める、e.積極的に奉仕する、f.み言葉を実践する、g.模範を示したり、見たりできる、の7つの利点を指摘して

いる。また、②集団的利点として、a.個人では不可能なことが可能になる、b.メンバーをととのえる、c.伝道と弟子化の3つの利点を指摘している (pp.5-7)。CRCの修養会は、1年に1回程度、長くても1泊2日のワークショップ形式であるため限定的であるが、これらの利点が生じる端緒となったり、再確認できる機会となったりすると考えられる。

## 2. CRCにおけるワークショップ形式の修養会の概要

CRCは2004年より毎年、ワークショップ形式の修養会を実施してきた。その企画・準備や実施は、榊原牧師が主となって行っており、時には、CRCの信徒が準備や実施に協力する場合もあった。その概要を資料1に一覧表として記載した。資料1に、CRCの修養会の時期、長さ、テーマと主な内容、学び方や実習のタイプを記した。

頻度及び時間的継続性について言えば、CRCは1年に1回修養会を実施している。ただ、2007年、2010年、2013年及び2014年は1年に2度、春と秋に修養会を実施している。2013年までは、必ず1泊2日の修養会を実施していたが、2014年以降修養会の長さは短縮され1日または半日となっている。

内容について述べれば、各回の修養会において、キリスト教の信仰に関する事柄から、榊原牧師がその時々に適したテーマを設定している。そして、そのテーマに沿った具体的なプログラム内容と、それに適した学び方について検討し、実施している。テーマを概覧する。祈り (2006年秋、2007年春、2007年秋、2015年秋)、喜び (2009年春、2010年秋、2016年春)、自己理解 (2013年秋、2014年春、2018年春)、人生の最後の時 (2007年秋、2008年秋) は複数回取り上げられている。それ以外にも、赦し (2004年秋)、礼拝 (2005年秋)、出会い (2010年春)、賛美 (2011年春) などがテーマとして取り上げられている。

学び方や実習のタイプは、テーマについての学びが促進されるように、より具体的なプログラムが検討される際に同時に検討される。テーマは抽象的であるため、それをより具体的なプログラムとして企画していく必要が生じる。その際、どのような内容について学ぶのかという学びの内容を検討するとともに、どのように学ぶのかという学び方も検討している。内容と学び方がマッチすることができれば、そのテーマに関する参加者の学びが促進され、深まる可能性が高くなる。CRCの修養会では、プログラム内容と学び方を榊原牧師が中心となり、自分たちでオリジナルに創作する場合と、既存のプログラムや作品を利用する場合がある。榊原牧師による講解説教は、各回のテーマに合わせ学びを聖書に立脚するものとして認識させ、深化させることを目指して、毎回行われている。

学び方・実習のタイプについて、まずは、オリジナルに作成した場合について取り上げる。学び方・実習のタイプとしては、個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあいと分類できる学習方法が多い (2006年秋、2007年秋、2008年

秋など)。このタイプの学びでは、より具体的な実習プログラムの中で、テーマに関して個人への問いかけが行われ、参加者はそれについて考える過程を通して、そのテーマに関する気づきが生まれる。そして、その気づきを小グループの中で、お互いにわかちあい、そのわかちあいを通して、気づきを広げ、深めるタイプの実習となっている（例：2007年秋の実習「閉ざされた村」<sup>2)</sup>）。小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバックと分類したのもの、類似の学び方である（例：2010年春）。これらの学び方は、様々なテーマに関して、適用可能な学び方だと考えられる。それ以外にも、ロールプレイ（例：2009年春、2013年春）やディベート（例：2006年秋）も複数回実施されている。図式化も複数回実施されている（例：2005年秋、2007年春）。例えば2005年秋には、イエス・キリストと自分との距離や関係性について、自分が持っているイメージを図示して示す実習を行った。図示することによって、言葉では表現が難しい内容について、表現・伝達することが可能となる。それ以外にも、KJ法<sup>3)</sup>を利用した実習や聖書の内容についてのオリジナルのすごろくを作成したこともあった。

既存のプログラムを使用した場合もあった。例えば、気質分析<sup>4)</sup>（2013年秋）や賜物発見<sup>5)</sup>（2014年春）、祈り<sup>6)</sup>（2015年秋）、スーパーブック<sup>7)</sup>鑑賞（2017年春）は、既存のプログラムを利用した。

### 3. 本稿の目的

前節で述べたように、CRCでは、現在まで19回に亘って、ワークショップ形式の修養会を実施してきた。これらのプログラムは、ワークショップ形式という点では共通しているが、内容は多岐に亘っているため、一まとめにして考察することは難しい。そのため、本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告するとともに、それを事例研究的に検討することを通して、ワークショップ形式の修養会の意義と課題を信徒とグループ・ファシリテーターという複数の視点から考察することを目的とする。その考察を、ワークショップ形式の修養会の意義に関する、より包括的な検討の端緒としたい。

---

<sup>2)</sup> 楠本和彦・丹羽牧代（2008）. 実習「閉ざされた村」人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）、7、pp. 141-154.

<sup>3)</sup> 川喜田二郎（1967）. 発想法—創造性開発のために— 中公新書. や 川喜田二郎（1970）. 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中公新書. を参照されたい。

<sup>4)</sup> 平野耕一（2011）. 血液型より気質分析 プリズム社.

<sup>5)</sup> 廣橋嘉信（2014）. 教会の形成と賜物の活用. 賜物発見の参考資料は、廣橋嘉信（日本長老教会 海浜幕張めぐみ教会牧師）の許可を得て、廣橋嘉信牧師が書かれた文章とチェックリストを用いた。2014年に改めて資料を得たが、初稿の出版年は不明である。

<sup>6)</sup> 原作：三浦綾子 作画：のだますみ / 監修：三浦光世（2015）. 漫画 塩狩峠 いのちのことは社フォレストブックス.

<sup>7)</sup> DVD「SuperBook Season1」日本語版（2013）. いのちのことは社・ライフ・クリエイション.（The Christian Broadcasting Network, Inc）.

## Ⅱ. 2018年春の修養会の実践報告

ここでは、当修養会の実践について、報告する。まずは、準備・企画段階において話し合われたことを記し、続いて、修養会当日のプログラム実施について記す。

2017年12月から、プログラムの企画・立案を開始した。修養会は、2018年5月20日に実施された。修養会終了後、榊原牧師と筆者らが集まり、修養会のふりかえりを行った。

### 1. 準備・企画

2018年春の修養会は、ペンテコステの5月20日（日）の午後に実施されることが決定されていた。2017年12月に榊原牧師と筆者ら3名が集まった際、榊原牧師から、次回の修養会では、以前修養会で実施した実習「閉ざされた村」のように、現実とは異なる世界に入りこんで、何らかの選択を行うタイプのプログラムにしてはどうだろうかとの提案があり、筆者の一人（楠本）がたたき台を作成し、検討を始めることになった。

個人的な実体験を直接話し合い、わかちあうことにはリスクが伴う。とりわけCRCの修養会のように、原則として誰であれ参加可能であり、オープンな場で話し合いが行われる場合には、参加者個人の内部に立ち入る状況を設定することに留意が必要となる。ロールプレイにより、現実とは異なる世界を設定することによって、このリスクはかなりの程度回避が可能である。なぜならば参加者はロールプレイの中で実際には「自分としての判断」で動くのではあるが、ロールを取っているという共通前提があるために、あくまでもそのロールの担い手を託されたという枠組によって守られる部分があるからである。直接的個人的体験を語らないため、基本的には自己開示の度合いをコントロールすることもできるし、どこまでそのロールに自分自身を反映させるかについても決定することもできる。

12月下旬にたたき台が、共有され、電子メールによって、意見交換がなされた。2018年1月下旬に筆者ら3名が集まり、プログラムについて検討した。この話し合いにより、たたき台を大幅に絞り込んだ修正案その1の方向性が決定された。その後も、電子メールでの意見交換を続け、プログラムの修正を行った。3月に最終打ち合わせを行った。

以下に、電子メールや打ち合わせにおいて、話し合われたことや修正箇所の概要について記す。修正案その4を完成版とした(図1および資料2～8参照)。

#### (1) ねらい

ねらいを考えるにあたって、修養会には、クリスチャンとノンクリスチャンがともに参加することを前提にすることとした。そこから出発して次にねらい

の焦点について、クリスチャンの成長と学びが優先なのか、ノンクリスチャンに「クリスチャンの考え方」をわかちあってもらうことが優先なのかについての議論に進んだ。参加者の多くはクリスチャンであり、修養会は教会としての学びの場であるため、クリスチャンの成長や学びに寄与する内容であることは重要である。しかし、礼拝に出席し、かつ修養会にも参加するがノンクリスチャンである場合は「信徒としての学びやそれに基づいた成長の方向性への気づき」はその時点での適切なプログラムではない。とはいうもののクリスチャン・ノンクリスチャン両方の立場からの参加を前提とする以上、後者にとっても意義のある内容にすることが必要だと考えた。

両者の学びが同時に成立するには、プログラムを通して同時に学びは進行するが、それがクリスチャンにとってもノンクリスチャンにとっても、意味合いは異なっているにしても何らかの気づきや成長をもたらすものであることが必要になる。これを踏まえた上で、ひとまずねらいを絞り込んで「自己理解を深めること」とした。

自己理解の深化はクリスチャンであっても、ノンクリスチャンであっても、その人らしく、人生を豊かに生きていく上で、重要な要因である。自分の性格や与えられた資質や育ててきた能力等の特性を的確に・深く理解できることによって、人生の中で自分の特性を開花できる可能性が高まる。自己理解は、自己成長や自己実現の基盤となる。

このように誰にでも共通する人生における選択に焦点をあて、その選択から自己理解を深めることをねらいとし、さらに、それぞれの選択を伝え合うことを通して、その異同から翻って自己への理解をさらに深めることができるプログラム設定とした。このように工夫することによってノンクリスチャンにとっても、共に礼拝している身近なクリスチャンがどのように考え、行動し、どのような選択

実習「決意の時」

ねらい：

それぞれに様々な選択を行い、異なる人生を歩んできたものの、今、この場に共に集っている私達が、個人で考えたり、お互いの考えや思いを伝え合うことを通して、

- ・自己理解を深める。
- ・神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。

手順：

(125分～150分)

1.導入 修養会のテーマ、ねらいについてのメッセージ (10分)

2.実習

課題の説明	(10分)
課題の個人記入	(15分)
課題のわかちあい(3～4名で)	(15分～20分)
「気づきのメモ」<項目1>記入	(5分)
「気づきのメモ」のわかちあい	(5～10分)
榑原康成牧師の講解説教	(5分)
「気づきのメモ」<項目2～3>記入	(10分～15分)
お茶	(15分～20分)
「気づきのメモ」のわかちあい	(20～25分)
「私らしさ、私のイメージ」記入	(10分)
おわりに	(5分)

図1 2018年春修養会 日程表

を行うかを知るという意義が生まれると考えた。

以上のような協議ののち、「それぞれに様々な選択を行い、異なる人生を歩んできたものの、今、この場に共に集っている私達が、個人で考えたり、お互いの考えや思いを伝え合ったりすることを通して」という言葉をねらいとして、表現した。

更にその後、ねらいに「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加した。その理由は、クリスチャンにとって、自己理解とはどのような意味があるかの議論の中で、クリスチャンの自己理解において重要なのは単に自分が自分の特徴を理解することに止まらないことが確認されたからである。そして、より重要なのは神が個々に最もふさわしいものとして作り出した「神による自己像」であり、その姿を理解することではないかとの考えが榊原牧師と筆者ら3名の中で共有された。さらに、「神による自己像」と実際の自分の自己理解とのズレに気づくことから信仰の深まりが生まれる場合があることを、筆者らの体験について吟味した。その吟味を通して、この問いかけを修養会で取り上げることがクリスチャンとしての自己理解の深化に寄与すると考えた。

修養会は本来的には信徒の成長を目指すものではあるが、共に学ぶ以上は、ノンクリスチャンにとっても意義のあるものでなければならない。同時に、教会活動の一環であるからには、教会のより大きな目的である「量・質両面における神の国の布教・伝道・拡大」を目指すものでなければ意味がない。修養会への参加によって、ノンクリスチャンに、信仰に基づいた人格形成の同根性とその多様さを実感してもらうことは、キリスト教会の姿をリアルに伝えるという広い意味での伝道に寄与するという、教会の本性に沿うものとして位置づけられる。

また、原案の「自己理解や他者理解を深める」から他者理解を削除し、「自己理解を深める。」に修正した。実施に際しては他者理解を深めるパートを充実させることも可能なプログラムであるが、「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加したため、自己理解に特化して焦点を合わせた方がプログラムとして、よりよいのではないかとの合意に至った。

## (2) 導入

課題がプロ棋士を目指す過程における大きな選択という参加者にはなじみの薄い設定であるため（資料3参照）、プロ棋士について少しでもイメージできる導入が必要であると考えた。そのため、将棋会館や対局風景の写真を提示し、

その簡単な説明を加えることにした。さらに、三段リーグ<sup>8</sup>がプロ棋士を目指す人にとって、どのような時期かをイメージしやすいように、三段リーグの対局風景と、体験者の三段リーグに関するコメントを紹介し、三段リーグが多くの体験者にとって、いかに過酷な時期であることを説明することにした（資料2参照）。その説明により、課題における選択がいかに切迫したものであるかをよりイメージしやすくなることが期待された。

### (3) 課題

ねらいの検討と並行して、課題内容についても検討した。たたき台は、内容が多すぎるため、学びが拡散し、気づきが深まらない危険があった。そのため、課題を絞り込んだ（資料3と4参照）。

#### 1) 設定の概要

以下の状況にある人物（じゅん）になるように設定した。

①名古屋にある有名私立大学の3年生であり、かつ、将棋のプロを目指す、奨励会に入っており、現在、勝ち抜くとプロ棋士になれる三段リーグで戦っている。

②21歳になった今期も四段に昇段することはできなかった。三段リーグを何年も勝ち抜くことができず、だんだん自信がなくなってきて、自分は本当にプロ棋士になれるのか、大きな不安を抱えている。

③じゅんがクリスチャンであるかないかは、参加者がクリスチャンである場合もそうでない場合もあるため、参加者自身が選択できるようにした。

④じゅんの性別は、自分の実際の性別と同じとする方が、自分に引きつけて考えやすいと思われる。だが、あえて別の性別として設定することを選ぶことを禁じないことを口頭で説明することにした。

#### 2) じゅんが迫られている選択の概要

選択について、以下のような説明文を示すことにした。

今、あなたが迫られている大きな選択は、次のようなものです。

数ヶ月後の4月に、将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させるのか、あるいは今年は大学を休学して、将棋に専念するのか、それとも将棋のプロになることは諦めて、就職活動をするのかの選択を迫られています。そして、どの道を選ぶのか、将棋の師匠と自分の両親と、三日後に伝えなければなりません。

---

<sup>8</sup> 奨励会について：「三段から6級までで構成されており、二段までは東西にわかれて行い、規定の成績を上げると昇級・昇段となります。三段になると東西をあわせてのリーグ戦を半年単位で行い、上位二名が四段に昇段し、正式にプロ棋士となります」（日本将棋連盟のwebpageより <https://www.shogi.or.jp/match/shoreikai/>）

この選択に関連する事項として、三段リーグの仕組みや、じゅんの奨励会での履歴等を示すことにした（資料3参照）。

### 3) 課題

上記の選択を巡って、以下のような課題を設定した。

課題：

幸いにも、3日後まで、対局も大学の授業もないため、この3日間はこの選択をするために、自由に時間を使うことができます。

- 1) あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。例えば、人に相談するとしたら、どのようなことを、誰に相談したいですか？
- 2) そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？
- 3) プロ棋士を目指しますか？それともプロ棋士は諦めて、就職活動を行いますか？
- 4) その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？

考えるヒントとして、3日間の過ごし方について、「人に相談する」「神様にひたすら祈る」「一生懸命、一人で考える」などを例示することにした（資料4参照）。

上の課題を記すシートを配布することにした（資料5）。シートでは、上記3)の項目に関して、①将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させる、②将棋のプロを目指し、今年を大学を休学して、将棋に専念する、③プロ棋士は諦めて、就職活動を行う、を例示し、選択の手がかりとなるようにした。これら以外の選択の可能性もあるため、④その他に自由記入できるようにした（資料5参照）。

本課題は、参加者の実人生における実際の体験を通しての学びではなく、プロ棋士を目指すじゅんという人物になって、選択を行うというものである。選択内容は、人生における大きな岐路になりうるものであり、選択やその選択を行うまでの過程には、実際の体験ではないものの、各参加者の考え方や価値観や行動の仕方等が反映されると考えられた。

また、このような課題を参加者全員が行うことによって、共通の場面設定の中での各自の選択を比較することができる。その比較を通して、選択内容の異同から、それぞれの自分らしさや自分の特徴がより明確に浮かび上がると考えられた。ここにはクリスチャン、ノンクリスチャン双方にとっていくつかの気づきがあることが大枠で想定されよう。すなわち、クリスチャンにとっては

・キリスト教的価値観に基づいた指向性と共通項



- ・キリスト教的価値観に基づいていることが前提であっても浮かび上がる多  
様性

ノンクリスチャンにとっては、キリスト教的価値観に基づく発想が前提とされ  
ていないことから

- ・クリスチャンの他メンバーの多様性と共通性が同時に存在していることの  
発見

・ノンクリスチャンである自分とクリスチャンとの異同への気づき  
ということになろうと予測された。

#### (4) 個人で行った選択のわかちあい、わかちあいによる気づきの個人記入と そのわかちあい

個人の選択に関しては、じゅんの立場で考えたことではあるが、最終的には  
自分自身の選択の仕方が反映される。この個人の選択記入の段階でも、言語化  
によって自分の特徴への気づきが生まれる。さらに、課題シートの1)～4)  
の項目について、3～4名の小グループでわかちあいを行うことにした。この  
わかちあいによって、それぞれの項目に関して、グループ内の他の参加者が記  
入したことと、自分の記入内容とを比較することによって、自分の特徴への気  
づきを促すことができると考えた。

わかちあいを15～20分行うことで、参加者全員が各自項目1)～4)につい  
て、伝え合うことができると考えた。

わかちあい後、わかちあいによる自分らしさや自分の特徴についての気づき  
に焦点を合わせるために、「気づきのメモ」の項目1(資料6)に個人記入した。  
項目1を記入することによって、他者との比較を通して気づいた自分らしさや  
自分の特徴をより明確にできる。

個人記入後、「気づきのメモ」の項目1のわかちあいを行うこととした。こ  
のわかちあいによって、上記課題における気づきや学びのまとめになることが  
期待できるからである。そのまとめが区切りとなり、次の課題である「自分自  
身の経験に基づいて考える」という課題に移行しやすくなる。

#### (5) 榊原牧師の講解説教

次の実習に入る前にその課題を考える準備として(資料6参照)、榊原牧師  
からの聖書講解を行うことにした(図1参照)。

次の実習は、自分に戻り、①自分自身の今までの大きな選択をしようとした  
時や歩みの中で迷った時に、神や周りの人々と、あなたはどのように関わり、  
語ってきたか、②神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したこ  
とがあるか?神が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致してい  
たか、ズレがあった等について考えるというものである。

プログラムが聖書の言葉をどう実践するかを考え学ぶということを目指して

いるものであるために、聖書に基づいた牧師からのメッセージは、前半でのロールプレイの意味を確認し、後半の実習が意義深いものになるために重要であると考えられたが、必要なポイントを伝えるには、修養会の時間内に納めるのは困難だと予想できた。そのため、修養会当日午前中の礼拝の牧師による講解説教の際にも、この実習内容に関連するメッセージを行うことにした。礼拝内でのメッセージでは新約聖書「使徒の働き」から、使徒のパウロを取り上げて、自分の理想とする姿を求める生き方から、神が自分に期待している生き方へと変換した喜びを語ることにした。修養会内でのメッセージは、短い時間で、パウロが目指した自分が正しいと信じる姿から神に期待されている姿への転換について語ることにした。実習前半の内容から切り替えを行うとともに、後半の内容の導入となることを目指した。

#### (6) プログラム後半：「気づきのメモ」項目2と3の個人記入

プログラムの後半では、前半のロール（じゅん）から離れて、自分に戻って考える設定にした。そして、以下の項目に関して、考え、個人記入することを参加者に求めることにした（資料6参照）。

2. 以下のような時に、あなたは、神様や周りの人々と、あなたはどのように関わり、語ってきましたか？また、もらった言葉などで、心に残っていることはありますか？

<自分自身の今までの大きな選択をしようとした時>

<歩みの中で迷った時>

3. あなたは、神様が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがありますか？それは、どのような時、どのようなものでしたか？また、神様が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致していたでしょうか？それともズレがあったのでしょうか？ズレがあったとすれば、それはどのようなズレだったのでしょうか？

<どのような時>

<どのような内容>

<神様が求める姿と自分が思っていた自分の姿との一致・不一致>

後半の実習内容は、「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする」とのねらいの達成を目指したものである。より具体的には、項目2にある

ように、①大きな選択をしようとした時や歩みの中で迷った時などの、自分の人生の岐路において、自分が神や周りの人々と、どのように関わり、語ってきたかについて、焦点を合わせるものである。さらに、項目3にあるように、②神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがある場合、そのことに着目し、自分が思っていた自分の姿と神の計画している自己の姿との一致・不一致に焦点を合わせる問いを置いた。

上記①は、クリスチャンにとっては、自己の信仰において、神との縦の関係性と周りの大切な人々との横の関係性を考える上で重要な点だと考えられた。ノンクリスチャンにとっても、大きな選択をしようとした時や歩みの中で迷った時などの、自分の人生の岐路において、周りの重要な人々とのどのような関係性を培ってきたか、それらの人々から受けるソーシャル・サポートの有無やその内容をふりかえることは自己理解を深める上で重要なことだと考えた。あるいは、キリスト教の神以外の神や仏に祈るという経験があるノンクリスチャンの場合、そのような縦の関係が自分にとって、どのような意味があったのかについてふりかえる契機となると考えることができた。

上記②については、神が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識する時、自分が思っていた自分の姿と神が自分に求める姿にズレがあることに気づく場合があることが想定されていた。

これらの項目は、ノンクリスチャンの参加者にとっては、記入できない可能性が高いこと、また、非常に個人的な体験に関するものであることを考慮して、「すべての項目を記入する必要はありません。書ける項目だけで結構です。また、このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。メモは提出せず、自分で持ち帰ります」との言葉を記載することにした。

#### (7) 「気づきのメモ」項目2と3のわかちあい

「気づきのメモ」項目2と3のわかちあいを実施することにした。各自が話す内容を吟味し、可能な範囲内で話し合うことによって、信仰上における重要な体験やその体験を巡って考えたことや気づいたことや変容について理解を深めることに寄与する。このプロセスを経て「自己理解を深める」というねらいを達成することができるとともに、今回はねらいとはしなかったが、グループの他の参加者への理解の深化も促進できると考えた。

#### (8) 「私らしさ、私のイメージ」記入

修養会の実習のまとめとして、「私らしさ、私のイメージ」の記入を設定した(資料7参照)。修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、自分らしさや自分のイメージを、最後に表現することが、個人のまとめとしての成果物となると考えた。表現方法が各個人にフィットするように、言葉で記すことも絵(色や形や線)で表現することも各自が自由に選択できるようにした。

## (9) アンケート

修養会の最後に、匿名で、アンケートの記載を求めることにした。項目は、満足度、意味度、修養会で感じたこと、考えたこと、気づいたこと、学んだことなどについての自由記述であった（資料8参照）。

## 2. 実施

本節では、修養会で実際に行われたプログラムの概要について記す。修養会当日の午前中に行われた礼拝中の説教内容は、意図的に修養会のプログラムと関連する内容としたため、説教の概要も報告する。

修養会のプログラムは、一部で時間の延長・変更はあったものの、プログラム内容は変更なく計画通りに実施された。

### (1) 礼拝における講解説教内容の概要

聖書箇所、説教題、メッセージ内容は以下の通りである。

聖書箇所：使徒の働き 9章18～22節

説教題：「パウロから主のしもべへ」

メッセージ：パウロは、ユダヤ人として正式に律法を学んだ人物であり、その実践に熱心であったため、初めはイエスを救い主と信じるキリスト教の信者を、律法を否定して間違った教えを信じる者たちと考えて激しく迫害した。しかし迫害者として活動をする途上で、イエスとの真の出会いを通してイエスこそが救い主である神と信じた。

そして、迫害者から主のしもべである使徒となって、福音を伝える働きに仕える人へと変わった。

聖書の言葉を誰よりも熱心に求める中で、神に自分が求められているふさわしい姿、あるべき姿を見出して使徒となり、殉教する日まで神に従い通した。

人は誰もが神に期待されている働き、生き方があることをパウロの変化から学び、自分の進むべき道を探ることができる。

### (2) 修養会の導入

榎原牧師によって、導入が行われた。プリントが配布され、ねらいの説明がなされた。自己理解の深化を目指すのが、特に、神が作ってくださっている自分の姿を知ることが重要であることが参加者に伝えられた。事前に準備していたグループ構成を発表し、3～4名の参加者からなる小グループを作った。

ファシリテーター（進行役）を楠本に交代した。日程表を示しつつ、ファシリテーターから、①今回のプログラムは大きく前半と後半に分かれること、②前半部は、現実とは異なる場面設定の中で考えること、③そのような場面設定をする理由（全員が共通の場面設定、枠組みの中で考え、選び、それをお互いに比較することによって、その異同から翻って、自分らしさや自分の特徴が明

確になりやすいこと)が伝えられた。

### (3) 実習の実施

#### 1) 実習の導入と設定に関する説明

ファシリテーターが、設定を記した用紙(資料3)を示し、設定の前半部分を読んだ。そして、設定にある状況を理解し、じゅんという人物になって考えることを行いやすくするために、スライドを提示しつつ、その説明を行った(資料2参照)。

じゅんが迫られている選択について説明した(資料3参照)。

その後、質疑応答を行った。設定に関するいくつかの質問がなされ、それについて答えた。

#### 2) プログラム前半部の実施

課題を記した用紙(資料4・5)の項目について、ファシリテーターが説明した。選択を行うヒントとして用いることもできる例についても説明した。個人記入後、これらの項目について、小グループでわかちあいを行うことを伝えた。

個人記入後、わかちあいを行うことの意味について、ファシリテーターが再度説明し、小グループでわかちあいを行った。

課題のわかちあい後、「気づきのメモ」(資料6)の項目1の個人記入を行った。その後、小グループで、項目1について、わかちあった。わかちあい終了後、①ここまでがプログラムの前半部であること、②後半は、榊原牧師が進行を行い、ロールから離れ、自分に戻り考えていくプログラムになること、③その橋渡しとして、次に、榊原牧師からのメッセージがあることを伝えた。

#### 3) 榊原牧師による講解説教

聖書箇所、説教題、メッセージ内容は以下の通りである。

聖書箇所：使徒の働き 9章18～22節/使徒の働き 13章～15章/テモテの手紙第二 4章11節

説教題：「なりたい自分と神の望まれる姿」

メッセージ：パウロは選民イスラエル人としての誇りを持ち、モーセの律法を厳守する人であった。そのためイエスを救い主と信じる人たちを律法に背く人と見ていた。彼らを迫害することが神に従う道だと信じて行動していた。

そのパウロが救い主のイエスとの真の出会いを通じて変えられていった。

神は、パウロの弱点を使徒として仕える中で変えていった。自分が自分の才能や経験に自信を持つ強いパウロではなく、人としての弱さを認め、謙遜で愛のある人へと変えて豊かに用いた。隣人のために犠牲を払うパウロの最終的な姿は神に期待された姿に近いものであった。

#### 4) プログラム後半部の実施

用紙を用いて、「気づきのメモ」の項目2と3の説明を行った。この項目は個人的な経験に関するものであるため、①すべての項目に記載する必要はないこと、②このメモを基に、同じ小グループで話せる範囲に限って、再度わかちあいをを行うこと、③メモは提出しないことを伝えた。個人記入の所要時間にばらつきがあったため、記入が終わった人から、お茶休憩に入ることを伝えた。

休憩終了後、小グループでわかちあいをを行った。

プログラムの個人のまとめとして、「私らしさ、私のイメージ」記入用紙（資料7）に、参加者は、修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、私らしさや私のイメージを表現した。色や形や線でも表現できるように、小グループにクーピーを配布した。多くの参加者が絵で表現した。

最後に、各グループから一人が代表して、今回の修養会の感想や気づきなどについて、発表した。

プログラム終了後、アンケート（資料8）の記載・提出を求めた。

### Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討

ここでは、2018年春の修養会の企画・準備、実施、プログラム等に関して、参加者アンケートや筆者らの所感を質的なデータとして取り上げ、意義や今後の課題について検討する。企画・準備に関わった筆者らがそれぞれ異なる視点から多面的に検討することを通して、今回のワークショップ形式の修養会がもつ多様な側面について、できる限り明示化することを目指す。

#### 1. 信徒の視点より

ここでは信徒にとっての学び全般の意義と、このような形での学びの意味するもの、その効用及び限界について述べる。

まず学び全般についての一般論であるが、通常の場合信徒が学びえる方法としては（1）信徒用の神学校プログラム（2）独自の聖書研究（ひとりで聖書を読む・黙想するといった広義のものも含む）（3）礼拝や集会における牧師の説教・奨励等があげられる。しかし現実的には日曜の礼拝でメッセージ（説教）を週に一度聴くというあたりが、日本の教会の一般的信徒の平均的な姿であろう。この状況の中で、一番欠け易い側面は「適用と応答」及び「聖書全体に立った視点」であると考えられる。この二点について、本プログラムのようなタイプの学びがカバーし得る点や届かない点について検証しよう。

##### （1）トップダウンとしての説教

プロテスタント教会にとっては聖書が信仰の中心であるといっても過言ではないわけであるし神学による重点の置き方等に差異があるとはいっても、礼拝プロ

グラムにおける説教が占める割合は時間的にも位置づけ的にも非常に大きい。そして権威を託された説教者が「みことばを語る」「みことばについて語る」ことを傾聴するという姿勢はおそらくどの信徒でも持っていると考えられる。ただし、このいわば「トップダウン」による学びは、信徒が現実の信仰生活の中で「どのように振舞う『べき』かを問い、迫って来る」内容になるのはなかなか難しい面がある。ひとつには物理的・時間的制約があり、もうひとつにはまさしくトップダウンであることの本質的な側面、選ばれた話者から不特定多数に向けてのメッセージである、ということに不可避の制約であろう。このことは著名な神学者の書いた講解書や注釈書、あるいは信仰への指針をまとめた著作などから学ぼうとするときにも当てはまる。

注釈書を読むにしても説教者から聖書に基づいた生き方の奨励を受けるにしても、基本的な神の存在・原罪や罪の指摘・救いとその受容といったメッセージのほかに、多くの場合伝えられるメッセージは「キリスト者はこうあるべき」であるという指針であり、人間がどのように生きることを神は望んでおられるかという教示であることが多い。そのこと自体は無論重要な点である。しかし多くの場合「このように生きるべきである」といういわば理想と、そこに向かう成長途上の姿の間には乖離があるのが当たり前である。完成された信仰をもって始める信徒はひとりもないのであるから。この乖離はあって当然のもので是非もないが、この乖離を埋める努力や手段については、残念ながらそれほど意識化されないというのが信徒としての実感でもある。「大事なエッセンスはこれとこれである」と先に示されてしまうことによって、そこで思考停止してしまうことはよくある。そのエッセンスに示されたことに即して自らの現実を検討するという自律的な学びには訓練が必要だからである。そしてそのような「適用を学ぶ練習の機会」があまり多くはないことが遠因であろう。

説教等はエッセンスを説くものとして欠かせないものではある。しかし、その弱点として、ひとりひとりの状況にあてはめた個人的なものには成り得ないということがある。例えば信徒として「常に祈りなさい」という聖書からのメッセージを説教として聴くとき、その「常に」とは現実の自分の日常の中のどの場面のことを指しているのかまで具体的に思い描くことができる聞き手もいれば、できない聞き手もいるであろう。「常に」と言われるが24時間ずっと祈り続けていくことは現実には不可能である。だとしたら、この「常に」は個々にとっては何を指すのか。多くの場合は個人の理解できる範囲の中で処理するのが人の常であるので、ひとつの例として、「常にの意味は比喩的にたくさん祈ることを示しているのであろう」と解釈してそのまま「落ち着かせる」。そしてこれらの解釈は大概の場合他者に明かされることはめったにない。人生の重大な局面が訪れたときに、長期にわたって深いかわりを持った信仰上の友人やクリスチャンの家族などに、聖書の生き方をどう実人生に適用するべきかについて深く意見を交わしたり、アドバイスを受けたりということはもちろんあ

るだろう。しかし、人間が赤ん坊の時代から子どもを経て大人へと日々の活動の中で成長していくように、段階を経て時間をかけて、その人自身を建て上げていくような信仰のあり方を考えるとき、むしろ大事なのは大事件の起こらない日常への信仰の適用だと思われる。が、いわば原理原則しか書いていない聖書の教えを卑近な日常生活の中にどのように当てはめるかについては信徒それぞれに任されている。個人と神の関係を重視する信仰のあり方の良い点でもあり弱点にも繋がるということである。

## (2) 受け取っているはずのものはどこにあるか

以上を踏まえて、学びのひとつの様態である体験型学習である本プログラムについて述べる。このプログラムにおいてはロールプレイであるという一種の安全枠に守られてはいるものの、実際には自分自身の内面的な信仰上の態度がかなりの程度反映されるように作られている。本プログラム実習のようなロールプレイ型体験学習において、学びの中核をなすのは「自分であればどうするのか」という個人的な思索であり（擬似）決断・選択である。加えて、そもそもこのプログラムは教会で行う「修養会」として位置づけられており、プログラム途中にクリスチャンであるかどうかの設定がある。このことから、参加者は程度の差異こそあれ、キリスト者としての価値観とそれに基づく思考と行動を問いかけてられていることを無意識のうちに前提とするであろう。であれば、参加者は（ノンクリスチャンを除いて）個人的であり現実的な問題に直面したときに、クリスチャンとして自分はどのように振舞うかを自問していくことになる。

このように、自分はクリスチャンとしてどのように振舞っているのか、について意識化できることがまず第一の利点である。前述のように、よほど重大な人生の局面を除いて、聖書からの説教を自分がどのように受け取っているのか、受け取ったあとそれをどのように内面化させているのかを他者に語る機会は少ない。それどころか意識化することも少ないかもしれない。本人の気づきを超えて実は受け取ったものが育っている場合もあるし、受け取っただけで休眠状態になっている場合もあろう。養われたものが自分の中でどうなったのかを意識化することの効用は、自分の信徒としての姿を的確に知ることと、その現状認識を出発点にして更に成長に向かえるということであろう。

第二の利点は意識化ができた段階で、これまでの自分の在りようを振り返って、どのように聖書の示す価値観に沿ってきたか、あるいはこなかったのか、を検討できるところである。さらにそれは同様の信徒の立場である他者とのわかちあいを通じて、気づかなかった側面を発見することもできるということにつながる。いわばトップダウン的に聖書からの教えとして受け取ってきたものが、現実の中で生きているのかいないのか、どのように活かすことが可能なのか、活かすことのできる領域に実は限界を設けていなかったのかなど、さまざま



まなことを問いかけてして迫られることになろう。このようなプロセスを経て、「では自分はいかに生きるべきか」を再検討・再構築することになり、それが行われる仕組みを提供するという点でワークショップ型の学びは信徒の助けになるであろう。

これらの過程は、実はこのようなプログラムではなくても週ごとの説教⇒受け取り⇒吟味⇒適用ということが個人的に実践できれば可能であるし、実際、多寡は別としても多くの信徒はこれを実行していると考えられる。しかし、本プログラムのような形式をとることで、それを一気に顕在化させ促進することが可能なのではないだろうか。すなわち、聖書の語る価値観を受け取ったあとそれを自分自身の中にどのように活かすのかという適用面において、成長を促す機会になるということである。

また、このわかちあいそれ自体がコミュニティとして行われるという側面によっても、適用と成長の効果がもたらされる。クリスチャングループに限らず、対人交流から生まれる心的成長の効果については一般的にも検証されているが、キリスト教会におけるコミュニティでも、それが大きく働く。なぜなら、メンバーは通常の社会的集団よりはる意味多様性の幅が大きい。共通項が「教会に集っている・その価値観を（少なくとも）受け入れている」の一点のみに集約されるからである。多様で多彩であるメンバーが、世代・職業・社会的立場・その他の差異にもかかわらず、「神の前の個」というフラットな関係を結び、最終的に根ざすところと「神の似姿」を目指すところに大きな共通の枠を持つ。個々の差異の振れ幅の大きさと、それにもかかわらずどの個性ももれなく「神の似姿」として受容されていくという、その独特の心理的一体感が自己理解とその肯定や自己成長への前向きな動機づけを生むことになる。シンプルに言って、神との関係やそれに基づく自分の内面を語り分かち合うことは、信徒にとっては楽しく聖書と現実の自分とを結ぶことになるのである。<sup>9</sup>

### (3) ボトムアップであるが故の欠落

次にこのようなボトムアップ的な学びの危うさを述べておく。

説教・講解などがどこまでいっても一般論にしかならないという弱点は、一対多の教授の際に必ず起こることではある。そして最終的には自ら気づかない限り人は変わらないというのもまた真であろう。その意味で、信徒として自分がどう生きているのかを自律的・意識的に振り返る機会となるのはワークショップ形式の良い点であることには間違いはない。分かち合いの効用は多様性を実感できること、一体感も持ち得ること、現実感を持って聖書に向き合う

---

<sup>9</sup> ここにはどの程度本当のことを出せるかという問題が関係してくる。そしてそれは個人の資質の問題だけでなく、それができるだけの下地がどの程度プログラム参加者のコミュニティにできあがっているかに深くかかわる。また本当のことを安心して出せるような一種のセーフティネットをプログラムに内在させることも非常に重要となる。

他者の存在を認知できることなど様々にあるのも事実である。しかし、一般的な精神的成長を目指す自律的な学びと、教会教育における同様の学びには大きな特性の差がある。このことが、自律的・ワークショップ的な学び方を教会教育で行うとき、そこに欠落しかねないもの・実施者が留意しなければならないもの、へと繋がる。

その特性の差とは、誤解を恐れずに言えば、信徒としての向かうべき成長には明確な定められた方向性があり、「キリストの似姿を目指していく」という「正解」が存在しているということである。<sup>10</sup>このある種の明快な絶対的正解については、どこまでいっても限界がある個人の尺度で測ったりその実態を定義づけたりすることは本質的に不可能である。違う表現をすれば、有限の人間が無限の神に成り代わって「これがあるべき姿」と言ってしまうのはそもそも不可能であるということである。信徒同士の分かち合いから学んだ信仰の見方、考え方、態度などは、信仰実践上有益であることは否定されるものではないが、あくまでも人間同士の、しかも大層限られた経験から限られた人数内で生みだされたものであることをわきまえておく必要があるであろう。ボトムアップで組み上げられたものは、極めて小さな部分に過ぎないことと、聖書全体に照らし合わせたときにそれがどう位置付けられるものなのか、すなわち「正解」との関係性を俯瞰的に吟味し説き明かすフォローが必然となる。

もう少し具体的にその欠落・弱点とそのフォローアップを検討しよう。ボトムアップの場合、分かち合える内容は、最終的には参加者の経験値の総和でしかない。スモールグループでの学びの場合は、どれほど人数を多めに設定してもせいぜい6人程度であり、分かち合いによって知り得る他者の信仰のありようもその人数分でしかない。2000年にわたる聖書研究をベースに、聖書全体を俯瞰したうえで部分を説き明かすトップダウン的聖職者の視点による説き明かしとはその点が大きく異なる。語られたことがすべてではないという状況は同じであっても、全体の中での位置づけが明確なトップダウン的聖書講解ピースと、場合によっては、得たものが聖書全体から見て何を示し、自分にとってどういう意味があるのか不明のまま迷子のまま終わってしまう可能性も否定できないボトムアップ型のピースの差異と言ってもよい。

#### (4) 「正解」と導き手

ワークショップで得たものが、その場ではすぐに役立つものにならないとか、すぐに身ににならない、実を結ばないということ自体は、教会外のワークでは珍

<sup>10</sup> もちろんこのことは没個性になることや画一的な価値観に凝り固まることを目指すこととは異なる。究極の成長した信徒の姿は、おそらく最大限に個性的であると同時に、キリストが説いた人としての在り様を共通の核心として持つ姿であろうと思われる。しかし、この「正解」を、数少ないケースでの個人の価値観・共同幻想・体験に基づいた解釈のみ、などで目指すときに「キリスト教信仰」の衣をまとった危うい言説や危うい行動・カルトの様相が現れるのは歴史的にみても明らかであろう。

しいことではない。変革や自己成長には時間と実体験の積み重ねも必要だからである。しかし、信徒の目線と言えば、目指す先にはある種の正解がある、ということが心理的葛藤とプレッシャーを生む。よって、最大の利点でもある「自分の中の信仰のありようを主観的に主体的に探る」というワークショップ的試みはそのまま最大の欠点にもつながるように感じられる。つまり、他者との分かち合いによって得られた視点や価値観への揺さぶりは確かに生き生きとしたものをもたらし、自分が保ってきた信仰の枠を再構築するよい機会となるのだが、と同時に、先に述べた「正解」との関連付けの難しさがかえって浮き彫りになってくるのである。例えば、ある程度成長をみた信徒ならば、好き勝手にどこへ向かっていてもよい、どんな枠を定めてもよいというとらえ方はしない。信仰的成熟が進むほど、聖書によって示される世界、すなわち「神の国とその義」とされているものは「今ここ」に「自分の中に」「自分たちの間に」完成されてはいないという認識を持たざるを得ないからである。ワークショップによって浮かび上がって自分自身と自分の信仰として設定した枠が「これでよいのか」「間違っているのか」を自問することになる。一信徒に過ぎず、圧倒的に学びの足りない、体系的にキリスト教の全貌を知っているわけでもない自分は果たしてあるべき方向へ向かっているのか、と。ボトムアップ的ワークショップの場合、信仰の適用という意味でよい学びの機会になるのは確かであるが、このように学びの着地点を自分で探さざるを得ない。そしてその着地点が、キリスト教の教理全体から導き出される信徒の成長や信仰のあるべき姿から乖離してしまうと、本来の修養会の方向性から大きくはずれていってしまう。ところがその吟味・検証となると、困惑にぶつかるのである。もしくは「その時点での自分の見識のみで自分自身を肯定または否定する」という陥穽に陥ることになりかねない。

そういうわけで、ここに指針をもたらし、導き手となり得るものが必要となる。つまり先に述べた「聖書全体を踏まえたうえでの視点」であり、キリスト教の示す「絶対的他者」＝「神」の視点だろう。その視点をもたらしてくれる講解メッセージの説教者は、体系的な学びと神学を前提に説教を組んでおり、月間・年間・10年20年のスパンという視点を模索し構築しながら説教を展開していく。しかし、通常の場合、信徒はそうではない。もちろん毎日のように聖書通読をする信徒もいるし、講解書を系統的に勉強する信徒もいる。だが、多くの信徒は日常の中で試行錯誤しながら、その日常が実は聖書における「神の国」とどのように繋がるのかに確信を持ってない、あるいはそもそも気がつかないままに過ごすのが実情であろう。その在りように深く切り込むことのできるワークショップ形式の学びの効用は多いが、同時に、その特性ゆえに主観的になりがちな主体的学びを的確に位置づけるフォローは欠かせないものと思われる。

以上のことから、この重要な絶対的視点を喚起するフォローアップが非常に

大事で不可欠なものと感じられる。具体的にいえば、「学んだことは何か」「自分の現実の中でその学びはどういう意味を持つのか」「今の自分はどのような姿でどこに立っているのか」などを、聖書全体の示す「神の国とその義」に照らしてくれる、あるいは鏡のように客観的に示してくれるものの存在である。その意味でワークショップの限界を踏まえて、その位置づけを行う仕組みとしてのフォローアップ講解メッセージや、学び自体の振り返りが重要であろう。

## 2. アンケート結果について

参加者14名からアンケートが提出された。以下にその概要を記す。アンケートは無記名であるが、アンケートの匿名性をさらに高めるため、分析には榊原牧師が満足度や意味度の数値、コメントを項目ごとに一覧としてタイプした資料を用いた。

満足度（項目1）についての回答は、3が1名、5が3名、6が2名、7が8名であった。意味度（項目2）についての回答は、4が1名、5が3名、6が1名、7が9名であった。

項目1～3の自由記述には、計32個のコメントがあった。それらの意味することをKJ法（川喜田、1967; 川喜田、1970）によって、分析した（図2）。

分析の結果、「自己理解の深化」、「話し合いによる他者理解の深化」、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」の大きな島が見いだされた。「自己理解の深化」と「話し合いによる他者理解の深化」とはお互いに関連していると考えることができた。それらが、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」に影響していると考えることができた。

「自己理解の深化」は、「自己と神様との関係への気づき」と「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」から構成されていた。「自己と神様との関係への気づき」内には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」からは、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」からは、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。

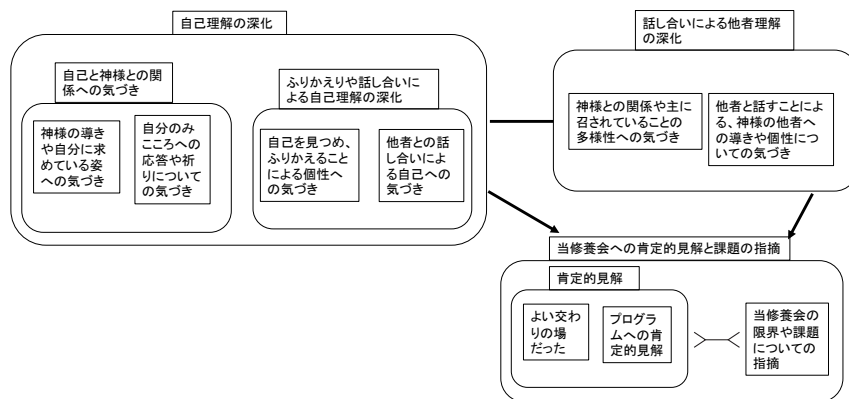


図2 当修養会についての参加者からのコメント

し合いによる自己理解の深化」内には、「自己を見つめ、ふりかえることによる個性への気づき」と「他者との話し合いによる自己への気づき」があった。

「話し合いによる他者理解の深化」は、「神様との関係や主に召されていることの多様性への気づき」と「他者と話すことによる、神様の他者への導きや個性についての気づき」から構成されていた。

「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」は、異なる見解とみることができ「肯定的見解」と「当修養会の限界や課題についての指摘」から構成されていた。「肯定的見解」内には、「よい交わりの場だった」と「プログラムへの肯定的見解」があった。

### 3. グループ・ファシリテーターの視点より

筆者（楠本）は、南山大学人文学部心理人間学科や人間関係研究センターや北海道ヒューマンインターアクション・ラボラトリー<sup>11</sup>などで、ラボラトリー方式の体験学習を中心としたグループ・アプローチをファシリテーターとして実施している。そのため、本節では、グループ・ファシリテーターの視点から考察する。

「2. アンケート結果」と「3. グループ・ファシリテーターの視点より」を中心に、草稿を本修養会参加者に渡し、加筆修正が必要であれば、筆者たちまで連絡するよう依頼した。匿名性を守るために、加筆修正意見は榊原牧師を経由して筆者たちに連絡するよう（筆者たちには誰からの意見かわからない形）伝えた。修正意見は、1か月以内に連絡するよう伝えた。このような手順を踏んだが、修正意見はなかった。

当修養会で実施したワークショップは、厳密にはラボラトリー方式の体験学習とは言えないかもしれない。ラボラトリー方式の体験学習では、グループや対人関係において今・ここでまさに起こっていること（プロセス）に焦点を合わせることを重視するためである。しかし、当修養会のワークショップは、グループメンバー同士の相互作用を通して、メンバーが学び・気づきを得ることができるという形式において、ラボラトリー方式の体験学習と共通点がある。そこで、本節では、ラボラトリー方式の体験学習において使用される概念も使用して考察する。

ワークショップの企画・準備段階および実施段階では、場所、時間、参加者、スタッフ・チーム、ねらい、実習内容、ファシリテーターの役割や関わりなど様々な要因についての考慮が必要になる（柳原、2003、pp.5-18; メリット、2005、pp.177-180; 他）。当修養会の準備・企画段階で、筆者らはそれらの要因の内、ファシリテーターの視点からすると、（1）参加者のニーズと修養会の

---

<sup>11</sup> 北海道にて、ラボラトリー方式の体験学習を実施する研究会である。ヒューマンインターアクション・ラボラトリーのwebpage (<http://hi-laboratory.com/index.html>) を参照されたい。

ねらい、ねらいとプログラム内容がマッチしているか、(2) プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるか、(3) プログラム内容は侵襲的ではないか、について主に考慮し、議論した、と考えることができる。

本項では、上記3点について、アンケート結果を使用しつつ、グループ・ファシリテーターの視点から検討する。

### (1) 参加者のニーズと修養会のねらい、ねらいとプログラム内容がマッチしているかに関して

まず、参加者のニーズと修養会のねらいがマッチしているかに関して検討する。「II-1-(1)ねらい」に記したように、クリスチャンの成長や学びに寄与する学習内容であることを中心にしつつ、ノンクリスチャンにとっても意義のある内容にすることが必要だと考えた。それを前提とした議論の結果、人生における選択に焦点を合わせ、その選択から自己理解を深めることをねらいとした。人生において選択が求められる場面が訪れることは、クリスチャンにもノンクリスチャンにも誰にでも生じる重要な出来事だと考えた。

KJ法のラベルに「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」があった。アンケートに、自分を見つめ、ふりかえることができ、有意義であったことや、今考えるべきことに気づいたという意のコメントが複数あった。これらの結果は、自己理解の深化が、参加者のニーズに一定程度マッチしていたことを示している、と捉えることができる。

一つ目のねらい「自己理解を深めること」だけでは、参加者の中心であるクリスチャンにとって、信徒としての学びやそれに基づいた成長の方向性への気づきという面で深みに欠け、ニーズにマッチしないと推測できた。そのため、二つ目のねらいである「神様が作ってくださっている自分の姿を知る一助とする。」を追加した。KJ法のラベルに「自己と神様との関係への気づき」があった。アンケートに、神様が自分に求められていることや導きや、自分の神様への応答についてのコメントがあった。そして、それらについて考えることができたことの自分にとっての意義が記されていた。これらの結果から、二つ目のねらいを追加することによって、修養会に対するクリスチャンのニーズにマッチしたねらいの設定ができた、と考えることができる。

次に、ねらいとプログラム内容がマッチしているかに関して、検討する。一つ目のねらいは、プログラム全体を通して達成を目指した。課題に対する個人記入によって、自己の選択や選択の過程における行動の特徴に目を向けることができる、と考えた。さらに、他者と話し合い、比較することによって、共通点と相違点から自分らしさや自分の特徴をより明確に理解できる、と考えた。参加者のニーズと修養会のねらいがマッチしているかで検討したKJ法やアンケートのコメントは一つ目のねらいとプログラム内容がマッチしていたことを

示している、と捉えることができる。さらに、わかちあうことや自分と他者と比較することからの自己への気づきに触れたコメントが複数あった。これらのコメントも二つ目のねらいとプログラム内容が一定程度マッチしていたことを示している、と捉えることができる。しかし、次項で検討するように、一部の参加者にとって、前半部のプログラムはねらいの達成には役立たなかったため、それは今後の課題となった。

企画・準備段階で、二つ目のねらいが達成できるプログラム内容にすることが当修養会における一番の重要事項であると筆者らは考えた。そのため、二つ目のねらいを達成するために、前半のロールから離れて、自分に戻って考える設定について協議し、決定した。二つ目のねらいが達成できるためには、「気づきのメモ」に適切な項目を設定できることが肝要であった。

「気づきのメモ」項目2と3（資料6参照）の内、3はより重要である。3の項目に参加者が深く関与できるためには、自分が思っていた自分の姿と一致・不一致を考えることから「神による自己像」への気づきが深まる可能性があることを理解してもらうための心理的準備が必要だと考えた。その準備のためには、聖書の言葉を用いたメッセージが適切であるが、それを修養会内だけで行うことは不可能であり、礼拝の説教でも関連するメッセージを行うことを協議・決定できたことが重要な選択であった、と考える。

KJ法の「自己と神様との関係への気づき」の中には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があった。これらの気づきは、二つ目のねらいに関連した気づきであり、このような気づきが生まれたということは、プログラムの内容が二つ目のねらいが達成することに寄与した、と考えることができる。

## (2) プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるかに関して

プログラム内容は参加者がその体験から学び・気づくことに寄与することができるかに関して、検討する。

まず、プログラムの前半部について、検討する。課題がプロ棋士を目指す過程における大きな選択という参加者にはなじみの薄い設定であるため、プロ棋士について少しでもイメージできる導入、三段リーグが多くの体験者にとって、いかに過酷な時期であるかの説明が必要だとの議論に基づき、短時間の中でそれらの点をどのように実現するかが企画・準備段階におけるファシリテーターの課題となった。導入と課題の説明後、参加者からいくつかの質問があり、それに答えた。それ以上質問がないことを確認して、プログラム前半の課題の個人記入とそのわかちあいを実施した。

KJ法のラベルに、「当修養会への肯定的見解と課題の指摘」があるように、上記の点に関して、効果的であった点と今後の課題の双方がある、と理解でき

る。参加者のコメントの中には、自分とは異なる立場になって考えることを通して、自分が大切にしていることを再発見できたことや、同じ設定における人生の選択やその過程が各自で異なるものの、それぞれが納得できる内容であったことについての記述が複数あった。これらのコメントから、プログラム前半部の課題は一定の意義があったことがわかる。

一方で、参加者のコメントの中に、仮定の設定に対する否定的見解もあった。参加者にこのような思いをさせてしまったことに筆者は大変申し訳なく感じている。そして、十分に検討すべき今後の課題だと捉えている。前半部の課題は、実人生とは異なる場面設定の中で、他者として考えるというロールプレイとなっている。ロールプレイの一般的な留意点として、ロールプレイの設定と現実との乖離が大きすぎる場合、効果的ではないというものがある。前半部の設定が実人生との乖離が大きく、導入の工夫や課題の説明が不十分だったと捉えることができる。

参加者のこの見解に関して、仮定という観点からやや意味をずらして、自分自身の実人生ではないという観点から考えてみたい。自分自身の人生が描かれていないという点においては、聖書の記述も同様である。しかし、そうであってもクリスチャンはそこに自分の姿をみて、自分へのメッセージを感じとる。今回のプログラムと聖書との違いは、そこに神の姿や言葉が明示的にあるのか、明示的ではないのか点にある、とみることもできるかもしれない。

2016年度のCRCの修養会では、聖書の三つの場面における主役と脇役の喜びを考えるとというテーマで、プログラムを実施した（資料1参照）。それらの場面における主役は、聖書に登場する人物であるが、脇役はその場面にいたであろうと想定できるが、聖書には登場しない人物であった。2016年度のプログラムでも、今回のプログラムと同様に、自分の実人生ではない設定であり、脇役は聖書に登場しない人物であったが、筆者の記憶では、このプログラムについての明確な否定的見解はなかった。2016年度のプログラムと今回のプログラムを比較すると、前述のように、そこに神の姿や言葉が明示的にあるのか、明示的ではないのか点にある、みることもできるかもしれない。

そうであるならば、今後、CRCの修養会においてプログラムを企画する際、聖書に直接関係の深いプログラムであれば、プログラムに違和感をもつ参加者をなくすことができると考えることができる。それに対して、修養会のプログラム企画者がある意図をもって、聖書に直接的には関係ないように感じる設定のプログラムを企画する場合は、その意図の説明や進行における配慮などにおいて、今回以上に丁寧に実施していく必要があると考えることもできる。これらの点については、今後の課題であると考えている。

次に、プログラム全体について検討する。KJ法の「自己と神様との関係への気づき」の中には、「神様の導きや自分に求めている姿への気づき」と「自分のみこころへの応答や祈りについての気づき」があり、これらは主に、後半



部のプログラムによって、参加者がえた気づきと考えることができる。神様の導きや自分に求めている姿、そして、それへの自分の応答や気づきというクリスチャンに重要な点について、学びを深めることができた、と捉えることができる。

KJ法の「ふりかえりや話し合いによる自己理解の深化」の中には、「自己を見つめ、ふりかえることによる個性への気づき」と「他者との話し合いによる自己への気づき」があり、これらはプログラム全体の中で、課題を通して、自己を見つめ、ふりかえり、それらをわかちあうことを通して、得られた気づきと考えられる。自己を見つめることを通して、自己への気づきが生じた。それをわかちあうという自己と他者の相互作用を通して、自己と他者の語りの異同からさらなる気づきを深めることができた、と推測できる。

さらに、「他者理解の深化について」について検討する。「(1)ねらい」に記したように、自己理解に特化して焦点を合わせた方がプログラムとして、よりよいのではないかと筆者らは判断し、原案の「自己理解や他者理解を深める」から他者理解を削除し、「自己理解を深める。」に修正した。

アンケートにおける参加者のコメントに関するKJ法の分析をみると、「話し合いによる他者理解の深化」の鳥があり、「神様との関係や主に召されていることの多様性への気づき」と「他者と話すことによる、神様の他者への導きや個性についての気づき」のラベルがある。この結果から、本修養会のプログラムは、参加者同士の他者理解の深化に寄与したことがわかる。その理解は、単に他者の心理的特性への気づきに止まらず、他者の神との関係性や神の導きの多様性への気づきである。わかちあいを通して、このような信仰にとって重要な気づきが参加者にもたらされたと考えられる。このような気づきは、参加者同士の、神の家族としての関係性の深化に大きく寄与すると推測できる。

### (3) プログラム内容は侵襲的ではないかに関して

プログラム内容は侵襲的ではないかに関して、検討する。企画・準備段階で、筆者らは、プログラム後半部では、各自にとって信仰上重要で、繊細な体験を取り上げることになり、そのようなことを取り扱う前に、個人およびグループとしての準備性が整っている必要があると考えた。

前半部のロールプレイは、直接的に自分の体験ではないため、選択や選択を行うまでの過程を語ることは、自己体験を語ることに比べると、心理的なハードルは低い。そのような話題を通して、お互いが語り、聴きあうことによって、①自分の心がオープンになり、メンバー同士の関係が近づくウォームアップの意味や、②お互いの自己開示による関係性の深まりが期待できる、と考えた。さらには、③各自がそれぞれに異なる実人生を語るという設定と比較すると、共通の設定の中で考えるという行為は同じ枠組みの中での選択であるため、共通点や相違点から自分らしさ・自分の特徴がより明確化できる、と考えた。こ

これらの要素が、個人およびグループとしての準備性を高めることが期待された。

参加者のコメントには、自己の信仰上の重要な体験について語ることに關して、語ることを無理じいされた感じや他者から語りたくない部分にまで踏み込まれた感じについての記述はなかった。そこから、プログラム内容は侵襲的ではなかったと判断できる。

プログラム内容が侵襲的でなかった要因について考えたい。その要因として、①参加者の信仰の成熟度の高さ、②参加者の親密さ・関係性の深さ、③プログラムの流れが挙げられる。本項では、アンケート結果を用いて検討しているため、③について取り上げる。①と②も当然のことながら、本項のテーマに関連しているが、アンケート結果を用いて検討することは難しい。ここでは、①や②の要因もCRCの修養会のプログラムが侵襲的にならないことや意味深い学びが生まれる要因であるとの印象がこれまでの修養会の経過を通して筆者たちにあることを記すに止める。

前述のように筆者らは、前半のプログラムが、後半のプログラムに臨むにあたっての心理的準備性を高めていることを期待した。参加者のコメントには、ロールプレイがおもしろかったという意の内容があった。これは、前半部が上に挙げたウォームアップとして、有効に働いた可能性を示している、と考えることができよう。また、わかちあうことで、いろいろと考えることができる、よい交わりの場であったという意のコメントが複数あった。これらのコメントは、お互いの自己開示によって、関係性の深まりがもたらされたことを示している。異なる他者の立場から考えることによって、結果的に自分が大切にしていることや神の望まれる姿を再発見することができたという意のコメントが複数あった。これらのコメントには、前後半両方の内容が含まれており、前半部が導入となり、さらに後半に自己の体験や思いを語るという流れについて記されていると捉えることができる。そのような流れが、自己や他者、その多様な神の導きへの気づきを生む一因となったと考えることができる。

①～③が相まって、プログラム内容が侵襲的にはならず、参加者の学びや気づきの深化を促進できたと考える。

#### IV. 今後の課題

本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告するとともに、それを事例研究的に検討することを通して、ワークショップ形式の修養会の意義と課題を信徒とグループ・ファシリテーターという複数の視点から考察することを目的とした。今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

第一に、本稿の筆者には、キリスト教学、特にキリスト教教育を専門とする者がいなかった。そのため、キリスト教教育の観点から考察を深めることが十分にできなかった。榊原牧師を通して、本稿に關係するテーマについて複数の先生方に文献を教えていただいたにもかかわらず、それらの先行研究の知見を

十分に反映することができなかった。キリスト教教育に関する知見からより深い考察を実施することが今後の課題となる。

本稿は、2018年春に実施された修養会の実践を報告し、事例研究的に検討することはできた。しかし、それ以前に実施した修養会に関しては、概観するに止まった。未検討の修養会のプログラムには実践報告するに値する内容のものがあると考えられる。他の修養会のプログラムにも検討を広げることは今後の課題である。

#### 備考：

執筆担当箇所は以下の通りである。「Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討」の「1. 信徒の視点より」は丹羽牧代が執筆した。「Ⅲ. 2018年春の修養会に関する検討」の「2. アンケート結果について」と「3. グループ・ファシリテーターの視点より」は楠本和彦が執筆した。他の箇所は、丹羽牧代と楠本和彦の共著である。

#### 謝辞：

CRCの榊原康成牧師には、本稿に関連して情報提供や貴重なコメントをいただいた。また、本稿の分析・考察に問題がないか修養会参加者に確認する過程にも協力いただいた。深く感謝いたします。

修養会やキリスト教教育に関する文献について、榊原康成牧師を通して、松原洋満師と本澤敬子師に、キリスト教における信徒の成長・教会における教育のあり方・リーダー育成のヴィジョン、などなど多岐に亘って示唆をいただいたことに深謝したい。また、「キリストの似姿に向かって育つ」ということが内包するものの豊かさにあらためて感銘を受けるとともに、一編の論文では到底考察が及ばないことも痛感し、本稿では活かしきれなかったことをお詫びしたい。今後、教えていただいた文献についての理解を深め、続編に活かせるよう努力したい。

#### 引用文献：

Boren, M. S.(2007). *How Do We Get There from Here?: Navigating the Transformation to Holistic Small Groups*. (Kindle Edition) Amazon Services International, Inc.

Gorman, J. (2001). *Small Groups in the Local Church*. in Michael J. Anthony (ed.) *Introducing Christian Education.*, pp.176-184. Baker Academic, Grand Rapids, Michigan.

川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書.

川喜田二郎 (1970). 続・発想法—KJ法の展開と応用— 中公新書.

松原洋満 (2010). 新しい教会教育をめざして ～聖書と学習科学からのアプ

ローチ～「教会教育ノート」へようこそ！

<https://churcheducation.jimdofree.com/app/download/10384453791/%E6%96%B0%E3%81%97%E3%81%84%E6%95%99%E4%BC%9A%E6%95%99%E8%82%B2%E3%82%92%E3%82%81%E3%81%96%E3%81%97%E3%81%A6.pdf?t=1496295288> 最終閲覧日2021年1月3日.

松原洋満 (2017). スモールグループ「教会教育ノート」へようこそ！

<https://churcheducation.jimdofree.com/app/download/11060870391/%E3%82%B9%E3%83%A2%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%82%B0%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%97.pdf?t=1496295307> 最終閲覧日2021年1月3日.

メリット リチャード (Richard Merritt) (2005). 学習者を援助する人について —教育, 宗教, そして人間性の回復— 南山短期大学人間関係科 (監修) 津村俊充・山口真人 (編) 人間関係トレーニング第2版 —私を育てる教育への人間学的アプローチ ナカニシヤ出版 pp.177-180.

中堀仁四郎 (1984). JICEラボラトリー・トレーニングの変遷 —その1— 人間関係 (南山短期大学人間関係研究センター), 創刊号,11-35.

Neighbour, R. W. (2010). *Christ's Basic Bodies: Embracing God's Presence, Power, and Purposes in Holistic Small Group Life, Cell Groups, Home Groups, Life Groups, and Biblical Communities* (Kindle Edition) Amazon Services International, Inc.

大橋秀夫 (2002). 21世紀の伝道を考える 5教会を生きかえらせるセルグループ (1) 月刊いのちのことば 2002年5月号.

オックスフォード キリスト教辞典 (2017). 木寺廉太 (訳) 教文館.

世界キリスト教百科事典 (1986). 教文館.

坂口順治 (1984). JICE 小史 (1) —1958-1964— キリスト教教育研究 (立教大学キリスト教教育研究所), 1,pp.46-63.

Shaeffer, F. A. (1972). *He is there and He is not silent*. Tyndale House Publishers. Wheaton, Illinois.

Stott, J. R. (1968). *One People*, Pennsylvania: Christian Publication. (石黒則年 (訳) (1990). 今求められる牧師と信徒のあり方 いのちのことば社)

柳原光 (1969). 小集団 高崎毅・山内一郎・今橋朗 (編) キリスト教教育辞典 日本基督教団出版局, pp.354-359.

柳原光 (監修・著作) (2003). III. 実習 (Structured experiences) の位置づけ, IV. ファシリテーターの姿勢・態度と役割, V. 研修の立案・評価についての指針, VI. デザインするという事について 復刻版 Creative O.D. —人間のための組織開発シリーズ— Vol. I 行動科学実践研究会 プレスタイム, pp.5-18.

## 資料1 CRC 修養会一覧

時期	長さ	テーマ・主な内容	学び方・実習のタイプ
2004 年秋	1泊2日	信徒自身の中にある聖書の言葉を探求する/赦し	聖書クイズ/ケーススタディ（事例を用いたディスカッション）/価値観の明確化/牧師の講解説教
2005 年秋	1泊2日	礼拝をすることの大切さ・礼拝の意味（日曜日の誘惑/無人島へ一つだけもっていくもの/礼拝の中での安息/礼拝のプログラムを一つだけ残すとしたら）/イエスと自分との距離	ロールプレイとディベート/図式化/価値観の明確化/牧師の講解説教
2006 年秋	1泊2日	祈り（聖書の中での祈り、実生活の中での自分の祈り）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/祈りの必要性についてのディベート/牧師の講解説教
2007 年春	半日	日々のデヴォーション（祈り）の学び	平日と日曜日の祈りの時間の図式化とわかちあい/牧師の講解説教
2007 年秋	1泊2日	葬儀について考える、祈り、人や社会との約束について考える（実習「閉ざされた村」）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2008 年秋	1泊2日	人生の最期の時どうする？（最後の食事、処刑される時？）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2009 年春	1泊2日	聖書の出来事を知る/信徒としての喜びに気づく/聖書にある喜びの追体験	聖書すごろく/ロールプレイ/牧師の講解説教
2010 年春	1泊2日	聖書の中の出会いによって起こったこと、信徒としての出会いによって起こること（イエス（または教会）との出会いの現在・過去・未来/聖書の登場人々のイエスとの出会い）	小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2010 年秋	半日	自分や他者の喜びやお互いの喜びの違いに気づく	カードへの記入・カードのわかちあい、個人の気づきとペアでのわかちあい/牧師の講解説教
2011 年春	1泊2日	賛美について理解を深める（賛美を聴いて、その気持ちを現す/新しい賛美（歌詞）を作る）	小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/賛美（歌詞）の創作/牧師の講解説教

2012 年春	1泊2日	神を知り自分を知る（自分たちの体験を基に、神や神と人の関わりについて考える）	KJ 法的ワーク、気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2013 年春	1泊2日	神に従った聖書の人物の心を知る/なぞかけ（人物・物・オチ）/聖書の人物のなりきり演劇/自分（聖書の人物）ならどうする？	なぞがけ遊び/ロールプレイ/牧師の講解説教
2013 年秋	半日	自分の性質を知る、その自分がどのように神に仕えるのか（気質分析）	質問項目に答える、各自の気質の特徴を知る、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年春	1日	自分の隠れた才能（賜物）を知る、その自分がどのように教会に仕えるのか（賜物発見）	質問項目に答える、わかちあい/牧師の講解説教
2014 年秋	半日	4コマまんが/友人のために何をするか	4コマまんがの吹き出しに言葉を創作する、そのまんがを演じる/牧師の講解説教
2015 年秋	半日	祈り/危機の時に何を期待し、何を祈るべきか	塩狩峠の各登場人物となって祈る内容を探る/牧師の講解説教
2016 年春	半日	喜びに思いをはせる	聖書の主人公や脇役の喜びについて想像し、ストーリーを創作する/牧師の講解説教
2017 年春	半日	飛び出す絵本/映像、仕掛け絵本によって自分に飛び込んでくる内容を受け止める	DVD：スーパーブックを鑑賞/牧師の講解説教
2018 年春	半日	神が作ってくださっている自分の理解を深める、実習「決断の時」	個人の選択、小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教

資料2 課題説明用スライド一覧



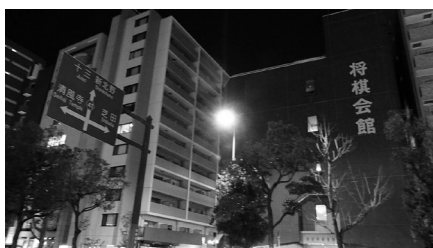
スライド1 東京将棋会館



スライド2 東京将棋会館入口付近



スライド3 対局風景（東京将棋会館）



スライド4 関西将棋会館



スライド5 三段リーグ対局風景  
（藤井聡太三段）



スライド6 三段リーグ対局風景  
（里見香奈三段）

第59回奨励会三段リーグ戦  
2018年4月～2018年9月

順位	氏名	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数	勝	敗	引	勝率	対局数
1	藤井 聡太	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15	15	0	0	1.000	15
2	里見 香奈	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15	10	5	0	0.667	15
3	青野 照市	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15	8	7	0	0.533	15
4	佐藤 大樹	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15	7	8	0	0.467	15
5	佐藤 大樹	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15	6	9	0	0.400	15
6	佐藤 大樹	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15	5	10	0	0.333	15
7	佐藤 大樹	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15	4	11	0	0.267	15
8	佐藤 大樹	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15	3	12	0	0.200	15
9	佐藤 大樹	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15	2	13	0	0.133	15
10	佐藤 大樹	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15	1	14	0	0.067	15
11	佐藤 大樹	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15	0	15	0	0.000	15

スライド7 第59回奨励会三段リーグ戦  
（一部抜粋）

三段リーグの厳しさは、絶望感との戦いである。（中略）4期で抜けた私でさえ「上がれなかったらこのビルの屋上から飛び降りるのか」という夢を、何回見たかわからないからである。



青野照市九段

出典：<https://www.zakzak.co.jp/soc/news/180415/soc1804150001-n2.html>

スライド8 三段リーグについてのコラム  
（青野照市九段）

退会が決まった後は、将棋会館からすぐ帰途についていたのですが、まっすぐ家に帰れなかったんですよ。(中略)頭の中はいろんな思いでパニック状態でした。(中略)プロ棋士を目指したこと自体も悔やみました。なぜそんなにリスクの高い生き方よりも、みんなと同じように大学へ行って、会社に入ってしまう普通の人生を選ばなかったのか。本当に、12年間、将棋なんかやらなきゃよかったって思いましたし、自分がやってきたこと全てが無駄だったっていう気になりましたね。しまいには将棋そのものを恨みました。将棋にさえ出会わなければこんな目にあうこともなかったって。悪いのはすべて将棋だった。

スライド9 三段リーグについての  
インタビュー記事  
(瀬川晶司五段)

それは単なる挫折感というような生易しいものじゃなかったです。なんていうかもう、自分の人生が終わったような感じでしたね。小学生のころから将棋にすべてを賭けてきた身にとっては、将棋がなくなったわけですから、自分には何もない、もう本当にゼロなんです。自分の体をぐちゃぐちゃにして、消し去りたい衝動に駆られるほどでした。



瀬川晶司五段  
出典：<http://www.jinzai-bank.net/edit/info.cfm/tm/100/>

スライド10 三段リーグについての  
インタビュー記事 (続き)  
(瀬川晶司五段)

スライドの出典：

スライド3：第30期竜王戦6組ランキング戦 加藤一二三九段 vs 藤井聡太四段 パート6  
<https://www.youtube.com/watch?v=XowDf28KIkW> より

スライド5：日本将棋連盟 将棋コラム藤井聡太四段も5敗！？ プロへの最終難関である「三段リーグ」とは？ [https://www.shogi.or.jp/column/2017/12/post\\_285.html](https://www.shogi.or.jp/column/2017/12/post_285.html) より

スライド6：日本将棋連盟 将棋ニュース 里見香奈奨励会員、女性として史上初の奨励会三段に！  
[https://www.shogi.or.jp/news/2013/12/post\\_892.html](https://www.shogi.or.jp/news/2013/12/post_892.html) より

スライド7：日本将棋連盟 第59回奨励会三段リーグ戦 の一部を掲載  
<https://www.shogi.or.jp/match/shoreikai/sandan/59/index.html> より

スライド8：青野照市九段(2018年6月現在) 三段リーグは人生かけた絶望との戦い 「上がれなかったらこのビルの屋上から飛び降りるのか」という夢を何回見たかわからない の一部を引用  
<https://www.zakzak.co.jp/soc/news/180415/soc1804150001-n2.html> zakzak 2018.4.15.

スライド9・10：瀬川晶司五段(2018年6月現在)のインタビュー記事 プロ棋士 瀬川晶司 その2 奨励会退会 後悔と絶望と怨嗟の日々 の一部を引用 <http://www.jinzai-bank.net/edit/info.cfm/tm/100/> 人材バンクネット 転職研究室 魂の仕事人 第26回 2007.10.8.



### 資料 3

#### 実習「決意の時」

設定：

この課題で、あなたは、じゅんという人物になったつもりで考えてください。

あなた(じゅん)は、今、人生の大きな岐路に立っています。

あなたは二つの立場をもって、生きています。一つは、名古屋にある有名私立大学の3年生です。もう一つは、あなたは将棋のプロを目指す、奨励会に入っています。現在、三段で、勝ち抜くとプロ棋士になれる三段リーグで戦っていますが、21歳になった今期も四段に昇段することはできませんでした。三段リーグを何年も勝ち抜くことができず、だんだん自信がなくなってきて、自分は本当にプロ棋士になれるのか、大きな不安を抱えつつ、三段リーグでの対局を行っています。

今、あなたが迫られている大きな選択は、次のようなものです。

数ヶ月後の4月に、将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させるのか、あるいは今年に大学を休学して、将棋に専念するのか、それとも将棋のプロになることは諦めて、就職活動をするのかの選択を迫られています。そして、どの道を選ぶのか、将棋の師匠と自分の両親に、三日後に伝えなければなりません。

この選択をする上で次のようなことが関連しています。

- ① 就職活動と三段リーグでの対局を掛け持つことはスケジュール上も困難ですし、将棋の師匠から「そんな中途半端なことは絶対に許さん！」と言われていました。
- ② 三段リーグは、半年間に各自18戦します(1ヶ月に約3戦)。全国の三段約30名の内、上位成績2名が四段に昇段でき、プロ棋士になることができます。
- ③ じゅんは約9年間前の小学6年生の時、奨励会の入会試験に合格し、プロ棋士を目指し、昇級・昇段を果たし、約4年前の高校2年生で三段になることができました。
- ④ 奨励会には年齢制限があり、満26歳までに四段に昇段できない場合、退会となり、原則的にはプロ棋士になることを諦めなければなりません。じゅんには、あと、約5年の猶予があることになります。

両親はクリスチャンで、じゅんは、子どもの頃から、CRCの礼拝に出ています。じゅんがクリスチャンなのか、ノンクリスチャンなのかは、あなた(自分自身)が選択して、○をつけてください。

じゅんは ( クリスチャン      ・      ノンクリスチャン )

## 資料 4

### 実習「決意の時」

課題：

幸いにも、3日後まで、対局も大学の授業もないため、この3日間はこの選択をするために、自由に時間を使うことができます。

1)あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。

例えば、人に相談するとしたら、どのようなことを、誰に相談したいですか？

2)そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？

3)プロ棋士を目指しますか？それともプロ棋士は諦めて、就職活動を行いますか？

4)その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？

参考のために、3日間の過ごし方について、以下に、例を挙げておきます。その中から選んでもいいですし、他の選択を行ってもかまいません。いくつかを組み合わせてもかまいません。

例)

・人に相談する。

相談相手としては、次のような人々が考えられます。将棋の師匠、先輩棋士、両親、兄弟、榊原牧師夫妻、CRC に来ている大人や同世代の人々、幼馴染や大学の友人や先輩、大学の先生や学生相談室カウンセラー、など。

・神様にひたすら祈る。

山中にある一人で祈ることができる祈りの場にこもって祈る。教会の会堂で祈る。自分の家で祈る、など。

・一生懸命、一人で考える。

一人旅をしつつ考える。山に登りつつ考える。将棋盤の前で考える。ヒントが書いていそうな本を読みつつ考える、など。

・その他

頭を真っ白にするため、走る。気分転換のために、マンガを読む。考えるのを止めて、逃亡する、など。

## 資料 5

### 実習「決意の時」

あなたの選択とその理由：

- 1) あなたは、この3日間をどのように使いますか？できるだけ具体的に考えてください。
- 2) そのような過ごし方を選んだ理由はどのようなものですか？
- 3) あなたはどの選択を行いますか？○をつけてください。  
  
①将棋のプロを目指し、将棋と学業を両立させる  
  
②将棋のプロを目指し、今年は大学を休学して、将棋に専念する  
  
③プロ棋士は諦めて、就職活動を行う  
  
④その他 \_\_\_\_\_
- 4) その選択をする時に、大事にしたことは何ですか？(考慮した要素や望む生き方など)

## 資料 6

### 実習「決意の時」 気づきのメモ

<課題のわかちあい後に記入>このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。

1.この課題で、じゅんとして選択したことやそれに関する思いを再度、見つめてみた時、それらことから、自分らしさや自分の特徴が見えてくるかもしれません。思いついたことを記してください。例えば、3日間の過ごし方や将棋を続けるか止めるかを選んだ時に重視した点はどのようなものでしたか？そこに自分の大事にしていることが反映されているかもしれません。また、他の人の選択やその理由と比較した時、その異同から自分らしさが見えてくるかもしれません。

<榊原牧師のメッセージの後に記入>

すべての項目を記入する必要はありません。書ける項目だけで結構です。また、このメモを基に、話せる範囲内で再度語り合います。メモは提出せず、自分で持ち帰ります。

ルール(じゅん)から離れて、自分に戻って考えてみてください。

2.以下のような時に、あなたは、神様や周りの人々と、あなたはどのように関わり、語ってきましたか？また、もらった言葉などで、心に残っていることはありますか？

<自分自身の今までの大きな選択をしようとした時>

<歩みの中で迷った時>

### 資料6の続き

3. あなたは、神様が自分に求めておられる自分の姿や生き方を意識したことがありますか？

それは、どのような時、どのようなものでしたか？また、神様が自分に求める姿は、自分が思っていた自分の姿と一致していたでしょうか？

それともズレがあったのでしょうか？ズレがあったとすれば、それはどのようなズレだったのでしょうか？

どのような時
どのような内容
神様が求める姿と 自分が思っていた自分の姿との一致・不一致

## 資料 7

### 「私らしさ、私のイメージ」記入用紙

修養会を通して、気づいたあるいは再認識した、私らしさや私のイメージを表現してみてください。  
言葉で記してもいいですし、色や形や線で表現してもかまいません。

2018 年度 CRC 修養会 アンケート

1. この修養会で、あなたは  
どの程度満足しましたか。  
(どのような点で)

1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 --- 6 --- 7

不満足 満足

2. この修養会は、あなたにとって  
どの程度意味がありましたか。  
(どのような点で)

1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5 --- 6 --- 7

全くなかった 大変あった

3. 修養会で感じたこと、考えたこと、気づいたこと、学んだことなどを自由に記してください。

# 被災地の復旧・復興に寄与する ビジネスリーダー達のポジティブ・ストーリー

—AIM2Flourishによる事例研究—

中尾陽子  
(南山大学経営学部)

## 要旨

AIM2Flourishは、アプリシアティブ・インクワイアリーの思想と手法を通して、持続可能な開発目標（SDGs）の枠組みからビジネスの事例を探究する、高等教育のプログラムである。本稿の第1節では、このAIM2Flourishの概要を紹介し、当プログラムの意義について考察を行なった。

また、第2節では、当プログラムの手法を用いて実施した、東日本大震災の被災地において地域の復旧・復興に寄与する観光ホテルの事例研究の結果を報告した。このような新たな枠組みから得られた知見は、大規模地震がいつ起きてもおかしくない現在の日本において、被災地の復旧・復興活動、あるいは支援へと活かしていくことができるものと考えられる。

## キーワード

AIM2Flourish, アプリシアティブ・インタビュー, 東日本大震災被災地, ビジネス, ポジティブ・ストーリー

## はじめに

本稿では、ケースウェスタンリザーブ大学のデイビッド・クーパーライダー教授を中心に開発された教育プログラム、AIM2Flourishの概要について紹介すると共に、その意義について考察する。また、このプログラムの手法を用いて筆者が行った事例研究の内容についても報告する。

本プログラムには、ビジネスが従来のように富を追い求めるものとしてではなく、この世の様々な側面に貢献する可能性を明らかにし、世界中の人々に利益をもたらすものとして発展することへの願いが込められていると推察される。人々の持つ強みや希望に光を当てた問いかけによって、ビジネスリーダー



たちの思いを探究し、それらを持続可能な開発目標（SDGs）の枠組みから新たに捉え直すことに取り組む当プログラムは、学生のみならず、ビジネスとの接点をもつ全ての人にとって、これからのビジネスを考え、実行するための指針になるものと考えられる。

## 第1節 AIM2Flourishについて

### AIM2Flourishとは

AIM2Flourishは、アメリカ合衆国オハイオ州にあるケースウェスタンリザーブ大学のビジネス大学院Weatherhead School of Managementを中心に、世界中のビジネススクールとのつながり中で展開されている教育プログラムである。2009年、当大学院にはFowler Center for Business as an Agent of World Benefitという名のセンターが設立され、自然と人間とビジネスが共に繁栄する社会の創造を目指した研究や実践活動が行われている（Fowler Center for Business as an Agent of World Benefit webサイトより）。

AIM2Flourishは、国際社会共通の目標である持続可能な開発目標（SDGs）と、ポジティブで有益なビジネスの探究を取り入れた、世界初の高等教育カリキュラムであり、このセンターの活動の一つとして推進されている。このプログラムに参加する学生は、まず、持続可能な開発目標を営利企業のビジネスを覗く際のレンズとして用いながら、ポジティブなビジネス・イノベーションの事例を探していく。そして、自分の見出したビジネスを率いるリーダー達を取材し、インタビューを通して、そのビジネスにまつわるストーリーやリーダー達の思いに触れていく。更に学生たちは、インタビューの結果を主に6つの観点から見つめ直し、そのビジネスを一つのポジティブ・ストーリーとしてまとめあげていく。

記述されたストーリーは、AIM2Flourishのwebサイト上に集められ、世界中の誰もがアクセスできるよう公開されている。こうして、これらのポジティブなストーリー達は、次のビジネスを担う学生達の、また、現在ビジネスの最前線で活躍する人たちのインスピレーションの源として活用されていくのである。

“Business as an Agent of World Benefit(世の利の仲介者としてのビジネス)”という、この教育プログラムのキーワードは、ポジティブかつ有益なビジネスの事例を指す意味でも重要であると考えられるが、同時に、ここから新たにビジネスリーダーとなってゆく学生たちのマインドセットとして、今後欠かすことのできない側面に光を当てたものであるところに意義があると考えられる。

### AIM2Flourishの流れと具体的な実施方法

当プログラム開発の中心的な人物であるデイビッド・クーパーライダー氏

(ケースウェスタンリザーブ大学 ウェザーヘッド経営大学院 教授) は、対話型組織開発の手法の一つであるアプリシアティブ・インクワイアリー (以下、AIと略記)<sup>1</sup>の創始者である。当プログラムは、そのAIの思想と手法に基づく大変ユニークな営みであり、ビジネススクールの学生を対象としながらも、この地球上に暮らす私たち一人ひとりにできる社会貢献のヒントを提供してくれるものだとも考えられる。

具体的な手順は第2節の方法欄に示すこととするが、AIM2Flourishのwebサイトに示されているプログラムの流れを要約すると、以下の2つの段階から成るものと言えるだろう。

#### プログラム第1段階：教室での学び

学生達はまずそれぞれのクラスで、強みベースのAIアプローチについて、また、持続可能な開発目標 (SDGs) について学ぶ。AIM2Flourishの webサイト上には、開発チームにより動画・プレゼンテーション資料・ニュースレター・インタビューのガイドラインなど、様々な素材が提供されている。そのため教員たちにとっては、それらを教材として活用しながら学生の学びを支援する環境が整えられているとも言える。また、学生たちも、それらの素材をいつでも自由に活用し、自ら学びを広げ、深めることができるのである (詳細については、AIM2Flourish webサイトのResourcesを参照のこと)。

#### プログラム第2段階：教室を離れた学び

学生達は、授業と上記の学習素材などを活用しながら、基礎的な知識とインタビューのためのスキルについて学んだ後、教室を離れ、体験的かつ変革的な学びにチャレンジする。彼らは、ポジティブなビジネス・イノベーションを実践したリーダー達を対象に、AIの手法に基づいたインタビューを実施する。このインタビューは、インタビュー対象者の持つ強み、その強みが発揮されることによって生じたポジティブな体験や周りへの影響、行動の原動力となっているポジティブなエネルギー源に焦点を当てながら実施される点が大きな特徴である。

インタビューの実施後、学生達はインタビューで得られたポジティブ・ストーリーを、1) Overview (ビジネスの概要) 2) Innovation (そのビジネスの革新的な側面) 3) Inspiration (ビジネスやビジネスリーダーに影響を与えている (た) インスピレーション) 4) Overall impact (そのビジネスによる全体的な影響) 5) Business benefit (ビジネス上の利) 6) Social and

---

<sup>1</sup> アプリシアティブ・インクワイアリーの概念・思想・実践方法などの理解には、Whitney & Trosten-Bloom (2003), Cooperrider & Whitney (2005), Cooperrider, Whitney & Stavros (2008) が大変参考になると考えられる。また、中村 (2014) は、組織開発の枠組みにおけるAIを理解する上でも大変参考になると考えられる。

environmental benefit（社会的・環境的側面への利）の観点から見つめ直し、一つのポジティブ・ストーリーとしてまとめ上げる。完成したストーリーは、投稿後、AIM2Flourishチームによるチェックとサポートを経て、webサイト上で公表されることとなる（すでに公開されているこれらのストーリーは、AIM2Flourish webサイトの項目Innovations内のBrowse Storiesにて閲覧できる）。

また2017年からは、これらのポジティブ・ストーリーの中から際立って素晴らしい取り組みが選出され、年に一度開催されるGlobal Forum for Business as an Agent of World Benefit においてFlourish Prizesが授与されている<sup>2</sup>（詳細については、AIM2Flourish webサイトの項目Flourish Prizesを参照のこと）。

### AIM2Flourishの特徴

Fowler Center for Business as an Agent of World Benefitディレクターのメガン・バクター氏は、AIM2Flourishのミッションを「AIを用いて、ビジネスのゴールに関する学生たちのマインドセットを、“世界一になること”から、“世の中にとって一番であること”へ変化させること（*The mission of AIM2Flourish is to change students' mindsets about the goal of business from being the best in the world to being the best for the world, and we do this using Appreciative Inquiry. (Buchter, 2019 p.55 114-18)*）」であると、このプログラムの意義について、次のように述べている。

ビジネスはもともと、新しいニーズを革新的に、機敏に、迅速に満たす力を持っている。一方世の中では、持続可能な開発を達成するためのイノベーションが必要とされ、それに対する市場の需要も高まっている。この二つをつなげることによって、今、世界で必要とされている持続可能な開発を推進することが必ず可能になると考えられる。

このプログラムは、AIのもつ力と持続可能な開発へのチャレンジとを結びつけることによって、より平和で繁栄した世界の創生にビジネスが貢献していることを理解し、今後自分たちが貢献できることの発見へと、学生たちを導いていく（Buchter, 2019 p.58 130-38 訳は筆者による）。

Buchter（2019）によれば、当プログラムには以下のような特徴があるとさ

---

<sup>2</sup> このFlourish Prizesについてクーパーライダー教授は、氏とその他スタッフ達が「ビジネス界のノーベル賞を作って、世界中で行なわれている素晴らしいビジネスをたたえよう！」という思いを持ってプロジェクトを始めたことを、筆者が2015年に参加したセミナー（Appreciative Inquiry : Leveraging Strengths for Transformative , Lasting Change）の中で紹介された。終始穏やかな笑顔で語られたそのストーリーは、スタッフ達の熱い情熱に周りの人々が魅了され、巻き込まれ、このビジネス界のノーベル賞が実現に至ったことをイメージさせる、まさにポジティブ・ストーリーであった。

れる。

- インタビューツールとしてAIを用いることによって、学生とビジネスリーダーとの間に交わされる会話が変わり、それぞれの視点も変わる。一般的に行われがちな批判的な会話は、課題やビジネス戦略への視点をもたらす。一方でアプリシアティブ・インタビューは、強みに目をむけ、インスピレーションを捉えることにつながる。そのため、アプリシアティブ・インタビューによる対話は、お互いの関係やつながりを全く違うものにする。
- 質問が、会話を開き、深めるということに気づく。
- 自分自身の体験と、インタビュー対象者のストーリーとを関連づけ、活かすことにつながる。
- あるビジネスの内側にある、ポジティブなプロセスとリーダーたちの情熱のストーリーを知るによって、どのようにすれば持続可能な開発とビジネスを関連づけることができるのかを発見する。
- ビジネスのストーリーを一般的な枠組みから変化させ、ビジネスによる世界への貢献を讃えることが、更なる貢献へとつながることに気づく。

## AIM2Flourishの意義

Buchter (2019) が述べているように、このプログラムの体験は、確かに学生にとっての学びにつながるものであることは間違いないであろう。またそれと同時に、自分たちの取り組みについて語るビジネスリーダーたちにとっても、新たな気づきにつながる可能性があると考えられる。このAIインタビューへ参加したビジネスリーダー達は、これまで自分自身が取り組んできた様々な営みと、その中で感じ考えてきたことを、平時とは異なる視点から眺め、語り直す体験をすることになると想像される。日本人の場合は特に、自分の営みを振り返る際には、足りない部分やダメな部分に目をむけ、反省し、その溝を埋めるための対策を考え実行することを、幼い頃から徹底的にトレーニングされてきた人が大半ではないだろうか。AIにおいて“ギャップ・アプローチ”と呼ばれるこの思考と行動変容のパターンは、確かに改善への有効なサイクルの一つではあるものの、それを延々続ける道のりは、人間にとって相当に苦しいものであることも間違いない。

一方で、“強みベースのアプローチ”と呼ばれるAIに基づいた当プログラムのインタビューでは、自分が何を大切にし、どのような強みを発揮し、何にどのように鼓舞されながらビジネスに取り組んできたのかを見つめ、言葉にする体験をしてゆく。この過程は、多くの人にとって、自分の体験をこれまでとはまるで異なる枠組みから捉え、語り直す作業だと言えるだろう。AIインタビューの始まりでは、自分の自慢話をするような感覚になり、語ることを躊躇する人もいような印象を持つ。それでも、インタビュアーの働きかけとサポートで語りを進めていくと、これまでのドキドキワクワクするような体験を強い感情

と共に思い出し、言葉にならないような思いも含めて、語りたいたことが次々と湧きあがってくるという印象も受ける。ビジネスリーダー達にとって、このAIインタビューの体験は、対話を通して、自分自身の、あるいは自分が所属する組織の中にある素晴らしさや価値を強く認識する機会になると同時に、そのプロセスを共にしてきたメンバーへ改めて感謝の思いを感じることにつながるものと推察される。おそらくこのインタビュー体験は、リーダー達にとって、自分自身を支えてくれる人たちとのその後の関わりにも影響を与えるものになっていくことだろう。

このようにAIM2Flourishは、対話によって新たな、そしてポジティブな気づきが生みだされるという大きな特徴があり、学習者側だけでなく、そこに参加する人全てに学びが生まれる可能性を持っていることから、非常に意義あるプログラムだと考えられる。

以上、第1節では、AIM2Flourishの概要について紹介すると共に、その意義について考察してきた。

この後の第2節では、筆者がAIM2Flourishの手法により見出した、一つのポジティブ・ストーリーを報告する。AIM2Flourishのウェブサイトにおいて紹介されているポジティブ・ストーリー達は、基本的な実施方法が同じであるため、手続きに関する記述はなされていない。そのため本稿では、本研究の手続きが読者にも明確になるよう、まずは通常の研究論文と同様に研究方法を記述し、その後、本研究によって見出されたポジティブ・ストーリーを記述することとする。

## **第2節 被災地の復旧・復興に寄与するビジネスリーダー達のポジティブ・ストーリー**

### **1. 目的**

本研究は、東日本大震災の被災地において観光ビジネスに取り組み続ける企業のリーダー達を対象とし、大規模災害からの復旧・復興に向き合う人々の心理的過程と、そこから生まれるビジネスの様相やその影響について明らかにすることを目的とする。

2011年3月に起きた東日本大震災により、被災地では、物的・人的被害だけでなく、人々の心理面にも甚大な影響が生じた。そのような影響は、時が過ぎても形を変えながら続くことが知られており、これまでも様々な支援活動や研究がなされてきた（これらの概要理解には、松井，2017；大類ら，2020などが参考になると考えられる）。

大規模災害からの復旧・復興には長い時間が必要であり、その過程には様々な困難が生じるため、そこに関わる人々の長期的な心身の健康維持という観点も、非常に重要になると考えられる。このような観点から考えてみると、復旧・

復興活動に対して精力的に関わりながらも健康的な状態を保ち続けている人々の様相を明らかにすることにより、有用な知見が得られる可能性があると考えられる。

そこで本研究では、東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた地域において、健康的な状態を保ちながら、継続的かつ精力的に企業活動を続けている人物を対象にインタビューを行い、被災地の復旧・復興に対する心理的過程とその様相、そして、そこから生まれているビジネスの様相について明らかにしていく。

現在の日本は、東日本大震災以上の大規模地震がいつ起きてもおかしくない状況にあると言われており、西暦2004年頃からは、毎年のように豪雨災害にも見舞われ続けている（気象庁webサイト参照）。このように自然災害と常に隣り合わせにある日本において、本研究を通して得られた知見は、復旧・復興事例のポジティブな様相を明らかにすると共に、残念ながら今後も増え続けることが予想される被災地および被災者の支援へ活かしていくことができるものと考えられる。

## 2. 方法

**研究データの収集方法：**本研究では、東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受けた、宮城県本吉郡南三陸町にある、南三陸ホテル観洋の管理職スタッフ3名を対象にインタビューを行った。インタビューは、ケースウェスタンリザーブ大学のディビッド・クーパーライダー教授を中心に開発された教育プログラム、“AIM2Flourish”において用いられる手法により実施した。このインタビューはAIインタビューと呼ばれるものであり、インタビュー対象者の持つ強み、その強みが発揮されることによって生じたポジティブな体験や周りへの影響、行動の原動力となっているポジティブなエネルギー源に焦点を当てながら実施するところに特徴がある。

本研究でのインタビューは、以下の5つの質問を基本としながら、半構造化面接の形式で実施した。

インタビューの質問内容：

- ①あなたが今取り組んでいることや、現在のお仕事であなたが最も惹きつけられていること・意味がある・価値がある・挑戦的である・エキサイティングであると感じていることはなんですか。
- ②ご自身の人生で重要な時間を振り返ってみた時、あなたにとっての人生の目的が明確になってきた瞬間や重大なポイントはどのようなものでしたか。
- ③これまであなたがお仕事に携わってこられた年月をたどっていくと、様々なアップダウンを経験されたこと推測しますが、あなたがこれまでに体験したハイポイントの経験はどのようなものでしたか？ どこで、どのようなこと

- が起きましたか？ あなたのその時の気持ちはどのようなものでしたか？
- ④あなたをよく知っている周りの方々に、あなたの持っている資質や能力の中で、『変化に関するリーダーシップをもたらす資質のベスト3』を尋ねたとしたら、どのような資質や能力を挙げられると思われますか？
- ⑤少し突飛な質問になりますが、こんなことを想像して見てください。あなたが今夜眠りにつき、目覚めたとき、なぜかそこは10年後の未来になっています。あなたが眠っている間に10年が過ぎ、多くの変化や、奇跡も起きています。そこであなたが見ている世界は、あなたにとっても、その他の人々にとっても、最も見たいと思う方向へ動いています。あなたはそれを見て幸せな気持ちでいます。そこには、あなたがそうなって欲しいと願っている世界が見えています。あなたが見ている世界の中で、最も重要な部分をお聞かせください。新しくなっていること、よりよくなっていること、変化していること、今と変わらないことは何ですか？ 可能な範囲で、できるだけ詳しくお聞かせください。

なお、一般的に考えて、これらの質問内容は奇異に感じられる可能性があり、返答に困ることも予想された。そのため、インタビュー対象者から無理な回答を引き出すことにならないよう、事前に質問内容を伝えておくと共に、当日は対象者の様子と反応を十分に観察しながらインタビューを実施するよう心がけた。また、できる限り対象者の自由な語りを妨げないよう、柔軟に問いかけを変更しながら実施した。

インタビューは、対象者毎に個別で実施し、許可を得た上で録音を行なった。

**データ分析の方法：**始めに、インタビューで得られた録音の内容を逐語録に起こし、インタビュー対象者によって語られたストーリー全体を文字データ化した。次に、全体を通読した上でオープンコーディングを行い、それぞれの対象者の語りに含まれる内容や意味の把握を試みた。それらのコードを、内容を損なわない程度に更に要約し、ラベルに転記した。そのラベルをKJ法により分類し、意味の近いもの同士でのグルーピングを行った。最後に、グルーピングされた内容を元にしながら、AIM2Flourishの手法に従って以下の6つの観点から見つめ直し、南三陸ホテル観洋のビジネスリーダーたちが体験したポジティブ・ストーリーとしてまとめていった。6つの観点は、1) Overview (ビジネスの概要) 2) Innovation (そのビジネスの革新的な側面) 3) Inspiration (ビジネスやビジネスリーダーに影響を与えている) (た) インスピレーション) 4) Overall impact (そのビジネスによる全体的な影響) 5) Business benefit (ビジネス上の利) 6) Social and environmental benefit (社会的・環境的側面への利) であった。なお、記述に際しては、インタビューでの語りを斜体で引用しながら、ビジネスリーダー達の思いがより正確に伝わ

るよう心がけた。なお、この引用文は、初稿の記述後にインタビュー対象者の確認を経て、インタビュー時の語りから若干の修正が施されている。

最後に、このポジティブ・ストーリーを持続可能な開発目標（SDGs）達成への観点から検討し、この取り組みが17の目標の何れに該当するかを示した。

**インタビュー対象者：**本研究の実施以前からつながりのあった南三陸ホテル観洋管理職スタッフへ本研究の目的を説明し、ご本人へのインタビューを依頼すると共に、本研究のインタビュー対象者としてふさわしいと考えられる方を2名紹介していただいた。

**インタビュー実施時期：**2019年3月におこなった。

### **3. 結果と考察：南三陸ホテル観洋ビジネスリーダー達のポジティブ・ストーリー**

#### **3-1. Overview**

南三陸ホテル観洋（以下、観洋と略記する）は、宮城県本吉郡南三陸町に建つ大型リゾートホテルである。このホテルのある南三陸は、美しい海、おいしい海の幸、そして穏やかで温かな人々と自然が大きな魅力の町であった。しかし、2011年3月11日、南三陸を含む東北地方の太平洋沿岸部一帯は、東日本大震災による壊滅的な被害を受けてしまった。比較的被害の少なかった観洋は、発災直後から約半年に渡り、地域住民の避難所として多くの人々の生活を支えた。その後は、通常のホテルとしての営業を再開しながらも、現在に至るまで、地域の復旧・復興に大きな役割を担ってきた。

人々の予想をはるかに超えた規模の東日本大震災は、観洋にも甚大な変化をもたらした。しかし、観洋は厳しい環境の中にあっても挫けることなく、地域全体の利益と人々の幸せを見据えた取り組みを、粘り強く続けている。

#### **3-2. Innovation**

観洋のイノベーションは、2011年3月11日の震災をきっかけに、そうせざるを得ない状況に置かれ、実行されていったとも言える。1000年に一度の災害と言われる東日本大震災は、このホテルのある南三陸町に甚大な被害をもたらした。町は、震度6弱の揺れにみまわれると共に、マグニチュード9.0の巨大地震によって生じた大津波に襲われた。場所によって20mを超える高さとなったこの津波は、町全体で600名以上の方の尊い命を奪い、60パーセント以上の家屋を破壊した（南三陸町webサイト参照）。繰り返し襲い来る津波により、指定避難所となっていた公共施設も大きな被害を受け、道路も寸断されてしまう中、津波から逃れた人々が、高台に建つ観洋に向かってまさに着の身着のまま、続々と集まってくる事態になったという。



幸いにも比較的被害の少なかった観洋は、急遽、女将の強いリーダーシップのもと、避難所としての役割を担うこととなった。

やはりあの時には、一人のリーダーだけでは不十分で。結局、食事を担当する中でもリーダーが必要で、暖をとることを考える中でもリーダーが必要で、と。やはり有事の時には、リーダー、すごく重要だというのが、あの時、すぐからわかりました。また、このリーダーというのが急に作れるものでもない、というのわかりました。この難しさの中で、正直言って一刻も早く家に帰りたいと思ったスタッフは事実いたと思います。ただ、それを何とか目の前のことにまず向き合わせたり、なんとか世のため人のための考え方を理解してもらうためにも、やはり初期対応で誤ったら大変なことになる。(中略)我々のスタッフも、自分の家族がどうなっているかわからない、自分の家もどうなってしまったかわからない中でしたから、泣いて心の折れた者もありましたけど。ただ、ほとんどのスタッフは使命感を持って協力してくれましたので、心より感謝しております。

“世のため人のため”の思いで始まった避難所運営は、観洋スタッフ達がそれぞれのリーダーシップを発揮しながら、最大時で1000名以上の人を受け入れ、地域住民と災害支援にあたる人々の生活を約半年間に渡って支え続けたという(南三陸ホテル観洋 3.11からの記憶 参照)。観洋のイノベーションは、このような自社の利益を横に置き、スタッフ達が最大限に主体性を発揮しながらの必死の取り組みから始まっていったのである。

### 3-2-1. 地域の中にいる大変な人を支え、町の健全な復旧・復興を目指す

ホテルとしての営業を再開した後も、観洋は「地域全体がよくなるないと、それぞれの会社もよくなることは難しい」という思いを強くし、地元の人々と連携しながら、地域産業の復旧・復興のために力を尽くしてきた。震災直後の南三陸町には、震災によってこれまで大切に築き上げてきた会社や工場を丸ごと失ってしまった経営者が数多く存在していた。そんな極限状態の彼らに対して、公的な保障は与えられず、自分達で立ちあがっていくしかない状態だったという。長年働いてくれた従業員達を解雇せざるを得なかった経営者の中には、立ち上がる気力も持てなくなった方が一人や二人ではなく、人々の心に与えたダメージは計り知れないものがあったそうである。

そのような過酷な状況の中、観洋は、自社の本来の仕事である観光業が、町全体の産業にプラスの影響を与えていく可能性を認識する。このことは、仕事を求めて他地域へ移住する人が後を絶たなかった南三陸の人々にとって、この町で生き続けてゆく可能性を開き、町の人口流出抑止にも影響を与えることとなった。

復旧を早めることができた会社は、町の中でそう何社もあったわけではないので、そういうところが牽引役になるという考えが必要だと思いました。そして、私たちのような観光業は、マンパワーが必要なのです。私どもはひとつのホテルに過ぎませんが、それでも私たちが動くことによって、魚屋さんが肉屋さんが電気屋さんが八百屋さんが、という展開になりますから、やはり観光業は町づくりにおいて重要ではないかという自覚を持ちました。我々のような分野が動くことによって、関わりのある商人の人たちから、この町にとどまるきっかけや、細くてもそういう道が見えてきました、ということを言われた時には、私たちが嬉しかったです。会社としては、そんな存在も意識していきたいと、これからも、思います。

その後も、町の復旧・復興は決して一筋縄ではいかず、時が経つにつれて、町の中に大きな格差が生まれているを感じざるをえない状況になっているという。以下の語りは、そんな現状への強い思いが地域や地域住民への思いを一層高め、イノベーションを粘り強く続ける原動力となっていることをうかがわせる。

諦めたら何も、復旧さえにもならない。復興なんて言葉を軽々しく使えるような感じではないのです。(中略)(町民たちの)まちづくりの参加の気持ちですっかり奪ってしまった感じで、本当に、格差が生じてしまった。もう少しやはり大変な人が支えられたりとか、よくなる必要があるんじゃないかと、思えてならないんです。(中略) 私たちも、建物が土台だけになった訳ではなくて、大浴場のところまでの被災でしたので、あの日から止まることなく動いています。やはりそういう人たちが先頭に立ち、あとは大変な人たちにも手をお貸しできるようにするのは、それは当然のことと思います。

### 3-2-2. 命の大切さを伝え続ける

観洋が震災後に始めた事業の一つに、ホテルのスタッフがバスで町内を案内しながら、震災の当日から今までの様子を乗客に伝える『語り部バス』の運行がある。2011年夏頃から始まったこの営みの中に、リーダー達は、自分たちが体験したとてつもなく悲しい出来事を風化させることなく、世界中の人々に命の大切さを伝えたい、そして自分と自分の周りの大切な人の命を守ることにつなげて欲しい、という強い願いを込めている。

その時の事実も大事なんですけど、そこに大事な命があったんです。そこで、生きる死ぬがわかれましたが、何を大切にすべきかと、その本質はどんなに時間が経っても変わっていないというのがあります。(中略)

命が大切なんて、私のような者に言われなくても、そうだねって誰もが思うことでもあると思うんですけど、結局、自分が生きてないと守れないんです。一番守りたい人を。だから、絶対何があっても生き延びて、一番大事な人を守り続けるんだと。それが、生きがいか、生きる意味とか、そういうことになるんじゃないかと思います。災害のことをこうやってお伝えしてますけど、災害以外でも、命を落とすことって、結構人為的原因で起こることもありますので、犠牲者をゼロにできなくても、実は人が変われば、いろいろな不幸なことを減らせるのかな、と思います。

筆者もこれまでに何度もこの語り部バスに乗車し、毎回、様々なことを感じ、考える体験をしてきた。自分自身の目で実際に現地を見て、語り部スタッフの思いのこもった話に耳を傾ける時間は、本や映像ではありえないほど、心を強く動かされる体験となる。自宅へ帰ってこの語り部バス体験を家族や友人に伝え、実際に災害が起こった時の行動計画を話し合う人達、職場や地域の防災対策につなげようとする動きなど…、運行以来休むことなく続けられてきたこの取り組みは、草の根の活動となり、いづどこで同じような災害が起こってもおかしくはない日本の人々に、また、海外から訪れる人々に、防災・減災のための種をまき続けているのである。

### 3-3. Inspiration :

インタビューを通して、以下の3つの要素がリーダーたちに強い影響を与えていると感じた。

#### 3-3-1. 人々との関わり

観洋のリーダー達は、人々との関わりの中で生まれる喜びや希望を、自分達のエネルギーにつなげていると感じられた。震災がなければ出会わなかったかもしれない数多くの人との関わりとつながりが、想像を絶するような困難の中でも立ち止まることなく、前に向かって歩き続けるエネルギーになっていると考えられる。

印象深いエピソードとして、彼らは、避難所運営の当初から、「避難所は不便で辛いのが当たり前」などとは決して考えなかったことがある。必要最低限のライフラインである水が出ないという厳しい状況が何ヶ月も続く中、彼らは、被災者の方々が少しでも居心地よく楽しく過ごせるようにと願いながら、働き続けたそうである。これは、ホテル業に従事してきた彼らの持つホスピタリティ魂のなせるわざなのかもしれない。しかし、未曾有の事態の中で、しかも自分たちの本来の仕事ではない営みに対して、そのような思いを持って取り組むことは、決して誰にでもできることではないと思われる。そんな彼らの思いは、周りの人々へも届いていったことを実感したという。

専門家の方から、仮設住宅に行くとは深刻なことがありますよと。だから気を付けてくださいと。このホテルに来たら、皆さんが引きこもりにならないようにしてくださいという指導を受けたのです。それで、この避難所の運営は、自分の仕事の取り組みの中でも、際立って難しいケースに挑戦したと思うのです。この避難所にいる間に、少しでも楽しいこと、居心地がいいと感じてもらうためにはどうしたらいいだろうかと。(中略)かなり広範囲で避難所を回って活動された方が私どもに来て、「日本一の避難所だ」って言ってくれたのはすごく嬉しかったです。たとえライフラインが整ってなくても、日本一に見ただけなのはすごく嬉しいと思って。そして、この時にあるご高齢の方が、「ここは一つの家族なんだ」って言ってくれたのです。その言葉はとても嬉しかったです。被災された方達を、私たちなりにどうお世話できるだろうと思った時に、一つの家族なんだと捉えてもらえたことはすごく嬉しかったですし、やはり不十分な環境の中でも、気持ちがあれば伝わるのかなと思いました。

また、震災後にホテル内で始めた学習支援活動には、当初、これほどまでの被害を受けた地域に住む子ども達が、南三陸に生まれ育ったことを誇りに思うことができるよう育ってほしい、という願いが込められていた。しかし、この活動を継続していくと、子どもたちの成長を支えることのみならず、大人達にとっての希望の源へと波及していることにも気づいたという。

自分がちょっと関わったり、応援していた子どもたちがすごく伸びてくれたのが嬉しいのです。そろばん教室に60人の子が通っているのですが、暗算九段の子が二人育って、全国大会でもベスト4に入ったんです。そういう子が育つと、下の学年の子達も。やはり子どもって純粋で素直ですから、「あのお姉さんのようになりたい」というふう思うのです。それで今、小学1年生で暗算五段と4年生で七段という子が育っております。それは、先生の力にもなっていく訳ですね。やはりハード面を進めるのには時間がかかります。人々の日常ってやはり身近なことの影響が大きいので、思うようにならない現実を、3年くらい経った時に思い知らされた感じでした。(中略)子どもが大人の力になるのは、地域全体で考えてもそう思えます。やはり、よその子どもでも活躍して話話を聞いたら、みんな悪い気持ちはしなくて、嬉しい明るい話もそのまま受けとめられます。全国規模という話になった時には、それを見倣わなくちゃとか、誇りを取り戻すことにもつながります。誇りがズタズタになったというのも、この震災の特徴だと思うのです。

子どもを支えるということが、実は大人の励ましにもなる。特に年齢の高い方達にとって、震災は、言葉では表せないほどの辛い事でしたので、自分の孫がちょっとでも英語ができるようになったとか、そろばんができ

るようになったとか、そういう具体的な、日々の生活の中で生きる力を意識して考えることが、希望につながると思いました。そういう事は、大きなことでなくても創り出せるのではないかと思います。(中略)子どもの教育の問題に、思いがけず関わって、その思いがけなかった中でこのような結果が出た事は、やはり嬉しいです。そして、その子どもの成長は、本人も喜びますが、その背景でおじいちゃんおばあちゃんもすごく喜んでくれて、この様な事はやりがいを感じます。

震災をきっかけに、国を代表するようなVIPを含む多くの有名人が観洋を訪れるようになったことも、彼らのエネルギーになると同時に、様々な成長の機会につながったという。中でも、行幸啓で平成天皇・皇后両陛下が宿泊された際のエピソードは、「失敗したらどうしよう…」という恐怖心との戦いの日々を超え、言葉では言い表せない程の感動や学びを得る機会となり、そこからまた前に向かって歩み始めたスタッフたちの様子が伝わってきた。

どうしても行幸啓でしたので、ギリギリまで公表できませんでした。通常は半年か一年前から準備することを、2ヶ月でやり遂げなければならなかったのです。一番はセキュリティ関係ですが、毎日「これはダメです」と指示が来るわけです。そして、その時々で状況は変わってまいります。また試されて、またチャレンジするというのでしょうか。ホテルでも選ばれたメンバーしか対応させていただけませんので、一個人のレベルをあげる上でも色々勉強になりましたし、いい経験をさせてもらいました。色々試されることがあるのですが、それを皆で、様々な形で連携をとりながら、チームワークで一つ一つクリアしていったことは、大きな自信になったと思います。(中略)やはり心配する気持ちの方が大きいです。支障が生じたらどうしようとか、町の名前を傷つけてしまうとか、成功させようということはもちろん第一前提ですけれども。無事終える事ができ、関係者の方々に感謝しております。

### 3-3-2. 自分たちと同じような思いをする人を少しでも減らしたい

観洋のリーダー達にとって、東日本大震災は、「故郷の最大の危機」と痛切に感じるような出来事だったという。しかし、それほどの苦しく悲惨な状況の中で、世界中の人々から寄せられた様々な支援を前に、「故郷の復旧復興を自分がやらずして誰がやるのだ！」という思いで奮い立ったという。

正直言って、この大震災に遭遇してどんな気持ちだったかという、どこまでも沈むと思いました。どこまでも沈む。周りもどんどん沈んでますから、沈む状況を目の当たりにして、引っ張り上げられる人が引っ張り上

げないと、という感じです。へこんでいる余裕がない、というか、あまりにも深刻なので、逆の気持ちになる人っていますよね。私もそうでした。なんとかしなければ、と奮い立ちました。(中略)単なるビジネスじゃないって思って色んなことをやれば、「あなたがやることですか？」という考えをされる人もいました。でも、ひるまないです。(中略)先に進める人が進まないと、止まったままになりかねないですから。いいと思うことはとりあえず今まで取り組んだことのないことでもやり続けようとか、やっつけていかないと、というスタンスで進みます。

また、その時の思いは、現在も続く語り部バスの活動に反映されているように思われた。語り部バスでの営みは、スタッフ自身にとっても辛すぎる震災の記憶を、毎日のように思い起こし、言葉にして伝え続けることが必須となる。しかし、このように辛い営みが続けることができるのは、「自分達の体験した出来事をできるだけ正しく人々に伝え、次にまた必ず起きる災害へ活かしてほしい」という彼らの強い思いと願いにあると考えられた。

辛くても悲しくてもなかったことにしちゃダメですと。そのために伝えるんですと。その気持ちは始めから持っていたのではなくて、やがて気づき始めました。最初はみんな忘れたいですし、辛いから喋りたくないです。でも、これだけ景色が変わってくると、本当に、知らない人にとっては、初めから何も存在してなかったようにも見えるのです。家があったことも、思い出があったことも。(中略)津波の教えだって、全くゼロからではなくて、その前の津波とか災害の経験でみんなが辛い思いをしたから教訓があった訳です。そのようなことをなかったことにしてはダメですから。(中略)広く様々な人に伝えたいという気持ちもありますけど、最近では地元の人にも聞いてほしいと。もちろん、辛いことも思い出させるかもしれないですけど、そこと向き合わないと、これから成長していく世代とか子どもたちに、自分たちは何を伝えるのだろうか。そう考えたら、やれると思うんです。誰だって、自分の息子とか孫とか可愛いはずですから。

筆者が初めて南三陸町を訪れ、ホテルの方々とお話しさせていただいたのは、2013年春頃のことだった。その時、あるスタッフが語られた、「こんな悲しい思いは私たちだけで沢山です。」という言葉、そしてその表情や声を忘れることはできない。尋常ではない、体験していないものには想像の及ばないような辛く苦しい震災体験が、今なお粘り強く続く取り組みの原動力であることを感じた。

### 3-3-3. 復旧を願う

彼らが描く10年後の理想的な南三陸の姿を尋ねると、その語りからは、今までと同じような温かさと穏やかさを保ちながら、多くの人で賑わう町のイメージが浮かんできた。その上で、あるスタッフは、「千年に一度の大災害は、千年に一度の学びの機会と捉えながら日々学び続けたい。10年後は、それらの学びを自分も、町の人々もしっかり身につけた状態で成長していきたい。」と語ってくださった。また、別のスタッフは、こんな夢のような世界を語ってくださった。

SF映画とかドラえもんの話みたいに、普通に車が空を飛んでるとかです。ね、信じられないものになってるんだらうなというのがありますね。(中略) スピート感、とかですかね。特に…お年寄り達が、例えばどこでもドアみたいなもので希望のところへ行けたり、必要なものを買えたりするとか。やはりこう、介護にも便利だし、あと通勤通学にも便利だし。

この語りにあらわれているように、彼らは決して町の近代化を望んでいるのではない。津波により線路を流されてしまったこの町の人々が、以前のように日帰りで街まで出かけ、買い物を楽しむことができる。高校生が、学校の始業時間に間に合わない<sup>3</sup>とか、通学に時間がかかりすぎるため部活動に参加できない、などの状況が起きないような毎日を取り戻している。そんな、被災前には当たり前のようにあった日々が実現されている世界なのだ。地域の人々が以前と同じ穏やかな暮らしを取り戻すこと、つまり、『復旧』への願いが、彼らの原動力の一つになっていることを感じた。

### 3-4. Overall Impact

ここまで紹介してきたように、震災後の観洋の取り組みは、一般的なビジネスのイメージとは大きく異なる部分があると感じられる。そんな観洋の取り組みが人々に、また地域に与えた影響は、大きく2つあると考えられた。

#### 3-4-1. 世界から注目される町としての役割を意識する

南三陸町は、震災を機に世界から注目される町となった。そのきっかけが津波による甚大な被害であることは間違いなく、これ自体は決して嬉しい事ではないだろう。しかし、観洋のリーダーたちの語りからは、そんな町にあるホテ

<sup>3</sup> 震災前、南三陸町には鉄道が通っていたが、津波で線路が流されてしまったため、代替の移動手段として、BRT (Bus Rapid Transitの略) というバスが導入されることとなった。BRTの運用により、震災前に近い移動経路は確保されたものの、電車と同じ人数を一度に乗せることはできないこと、運行本数・乗り換え・移動そのものにかかる時間などの影響により、特に朝の通勤通学時間帯は、乗車したい人全員がバスに乗り切れない、という状況が起きているとのことであった。

ルとしての役割を強く意識し、世界中の人々の幸せにつなげようと、日々取り組んでいることが伝わってきた。

究極の目標かもしれませんが、どんな国の人でも来てくれる町、みたいなのを思い描きたいですし、来てくれる、ではなくて、来なきゃいけない町、そのような町でいられればいいかなと。(中略)段々風化するばかりの中で、まずは沢山の方に現地に来ていただけるようなことをやはりチャレンジしていかなきゃいけないと思いますし。今の景色は今じゃなくちゃ見えない景色ですし、一年二年三年経っていくとまた変わっていきますよね。でも、逆に、一回見ていただくと、次の景色も気にしていただけるのかな、とか。それがまたリピーターとなる理由なのかな、とかですね。やはり自分の目で見たことは印象に残ると思うので、帰った時に、自分の家のある場所とか故郷のある場所を、守るとか誇りに思うとか、現代で失われていく気持ちを、この場所に来ると改めて気づかされるのではないかな、とかですね。現地を見た方が語り継ぐ人になってくれれば、悲しい思いをする人が減るのではないかなと思うのです。結局、語り継ぐって一人じゃできないですから。語るの一人でも、継ぐの一人では無理なので。語り継ぐ方々がそここに増えていくような、そんな状況を夢見ています。

### 3-4-2. 子ども達の著しい成長

3-3-1. で紹介したように、観洋は、震災後ホテル内で学習支援活動を始め、その枠組みを緩やかに広げながら、子どもたちの成長をサポートし続けてきた。そのことが町へ、そして人々へ与えた影響は非常に重要であり、子ども自身や周りの大人たちの希望、そして今後の地域発展への希望にもつながっているものと考えられる。

やはりこれだけの出来事でしたから、不登校とかいじめとか、宮城県内ではそれが問題になっているのも事実です。一方で、バネにして伸びた子もいるっていうことは、貴重な事例が作れたと感じているのです。やはり、どんな環境でも、大人がどう接するかとか、限られた環境の中でも、工夫や努力をすれば勉強はできないわけではないと、証明されたと思います。(中略)興味深いです。その子ども達はあれだけの強さを身につけたり、負けない気持ちを持ったということは、ある程度いい大人になるだろうと本当に楽しみです。

際立って伸びている子たちがいるので、10年後、その子たちが成長しているっていうのはやはり期待が持てると思います。この震災で、実は海外とのつながりも少なくはないのです。風評被害も酷いんですけど、その中



でも被災地と関わってくれたい方とご縁を頂戴できたっていうのがあって、子ども達にはチャンスが与えられたんですね。アメリカに3人招待しますとか、オーストラリアへ何人来ませんか、ということで。今までは、ここの郡部の方は飛行場が近いわけでもないし、親が海外に行った経験がないので、海外に行く機会は少なかったのですが、中高生でそのチャンスを与えられたわけです。そうすると、帰ってきて、大体の子どもが前向きになったとか、リーダーを進んでやるようになったとか、すごく変わっていくそうなのです。私もその分野も応援しておりますので、確かに、その学生達の成長の様子もわかります。そのような子ども達が大人になりますから、グローバルな視点での活躍が期待されます。

実はこのことは、3-4-1. 世界から注目される町の役割の内容とも関連しており、このような子ども達の中から、多様な活動機会において被災地の今を語り伝える人達が生まれているそうである。震災からまだ日が浅いうちは特に、周りの大人たちの方が、子ども達と震災について話することに迷いや躊躇を感じていたようだ。しかし子ども達は、語る場・語るチャンスを与えられることによって一歩を踏み出し、被災地以外の人たちに向けて、自分の体験を伝えることに取り組んでいったという。決して周りから強制された訳ではなく、自ら選んで、震災の体験を語り伝える過程を通して、子ども達は、想像もしなかったような著しい成長を遂げているようだ。

### 3-5. Business benefit

震災前、観洋を訪れる人は団体客が中心であったが、震災後は個人客の数が大幅に増加したという。このような変化のきっかけの一つは、『語り部バス』の運行にあると考えられている。またこれには、インターネットの情報も大きく影響したと考えられている。震災直後は、テレビや新聞なども含めたメディアによって、南三陸の甚大な被災状況や観洋の被災者支援の取り組みが伝えられた。その後は、観洋自身がwebサイトやSNSを通じて発信する情報や、南三陸を訪れた人の口コミなどを通して、人々は観洋の取り組みを知る機会を得た。観洋スタッフたちの「命の大切さを伝えたい」という強い思いが、人々に伝わり広がっていくことによって、観洋のビジネスには新しい形での利がもたらされたと考えられる。

震災が起こって、被災地のことを知っていただくという語り部バスを始めたのは、個人のお客様が増えてきたということがきっかけになります。我々が営業に行って、団体様にお越しいただくというのが普通だったんですけども、それはそれで、244（の客室）を団体だけでまかなえるかというところではないので。やはり個人の方に来ていただいて、知っていただく

というのがよかったかなと思います。

そして、この個人客の中には、語り部バスのリピーターとなり、町の復旧・復興を見守り、応援するような存在となる人も現れているという。

（語り部バスの運行が）いつかは途切れると思っていたのですよ。話し手ずっとやってきましたけど、毎日続けられるなんて思ってなかったんです。それは本当、聞いてくださる皆様には感謝です。何回も乗ってくださる皆様もいらっしゃいますし。あれ、この人また乗っていらっしゃるって。すごいなこの方って逆に思うくらいですね。「もう、全然聞くたびに違うよ」って、もちろん見る景色も変わりましたし、だから乗るんだよ、来るんだよって言われて。たぶんそんなこと、普通に旅行していたらあり得ないですね。一回行ったら、もっと違う場所へ行きたいって気持ちになるのが当然だと思いますし。私だってそうですから。でも、バスに乗っていると、「あれ、また来ていただいている」っていう。これは一体何なんだろう。その部分も、自分の中では想像のつかない世界。だから、語り部ってすごく大事な言葉だなあって思うのですが、でももう一歩進んで、聞き手のことを見て感じて話すって大事かなって思います。

### 3-6. Social and environmental benefit

これまで紹介してきたように、観洋がこれまで行ってきた様々な取り組みは、決して自社の利だけを目指したものではなく、地域社会全体の利と人々の幸せを目指した営みであることは間違いない。

この他にも観洋は、南三陸を訪れた人々と地域の商店等をつなぐスタンプラリー（南三陸てん店まっぷ）や、町内の複数店舗に呼びかけ、地元でとれた海の幸を使って季節毎に独自の味を展開する海鮮丼（南三陸キラキラ丼）の提供など、地域全体の活性化を目指した企画を発案し、取り組み続けている。このことは、南三陸の持つ特徴や強みを活かしながら、地域の魅力を発信し、地域産業全体を活性化させることにつながっていると考えられる。

#### このポジティブ・ストーリーに該当する持続可能な開発目標

- 目標8. 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する
- 目標11. 包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する

## おわりに

本稿では、AIM2Flourishの概要紹介とその意義の考察を行うと共に、当プログラムの手法を通してまとめた、一つのポジティブ・ストーリーを報告した。このポジティブ・ストーリーは、東日本大震災から8年を過ぎた2019年3月のインタビュー内容をもとに纏めたものであったが、その後も観洋は、地域が再び明るい日々を取り戻すこと、そして、自分達と同じような悲しい思いをする人が一人でも少なくなることを願いながら歩み続けている。その粘り強い取り組みは、ここまで紹介してきたリーダー達の様々な思いに支えられていると共に、根底の部分で、東北人の特徴の一つとして挙げられる、我慢強さと粘り強さという強みにも支えられているように感じた。

被災地は、間もなく震災から10年を迎えようとしているが、2020年前半から世界中に蔓延した新型コロナウイルスの影響によって観光業は大変な打撃を受け、今なお先の見えない状況に陥っている。現在の観洋が、これまでとはまた違った苦しみの中にあることも想像に難くない。とは言え、南三陸から遠く離れた地に住む筆者にとって、現地に出向いて応援することも難しい日々が続いており、歯痒い思いで一杯である。とにかく今は、東日本大震災という未曾有の危機にも屈しなかったこのリーダー達が、そしてこのホテルが、コロナ禍も必ず乗り切られることを信じて、離れた地にいる自分にできる応援活動を続けていきたい。

日々の中にあることの内から希望の光を見出し、未来へとつなげていくこと。自分の命は自分で守ることを強く意識し、行動すること。そのような思いや行動を、当たり前のことだから…と思わず、周りの人との対話を通して広げ、伝え続けること。このポジティブ・ストーリーからのメッセージは、まさにこのコロナ禍にある私たちにとって、大切な指針になるものだと感じている。

## 謝辞

本研究のインタビューにご協力くださいました、南三陸ホテル観洋の管理職スタッフの皆様へ心より感謝申し上げます。

付記：本研究は南山大学研究倫理審査委員会における倫理審査を受け、2018年12月に承認されている。

## 参考文献・引用文献

- AIM2Flourish. <https://aim2flourish.com> (2021年2月7日 最終閲覧)
- Cooperrider, D. L., & Whitney, D. (2005). *Appreciative inquiry: A positive revolution in change*. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers. (クーパーライダー, D. L.・ウィットニー, D. 市瀬博基 (訳) (2006). 「最高の瞬間」を引き出す組織開発 - 未来志向の“問いかけ”が会社を救う - PHP研

- 究所)
- Cooperrider, D. L., Whitney, D., & Stavros, J. M. (2008). *Appreciative inquiry handbook: For leaders of change*. 2nd edition. Co-published by Brunswick, OH: Crown Custom Publishing & San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers.
- Fowler Center for Business as an Agent of World Benefit. <https://weatherhead.case.edu/centers/fowler/> (2021年2月7日 最終閲覧)
- 国土交通省 気象庁. 気象庁が名称を定めた気象・地震・火山現象一覧 [https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/meishou/meishou\\_ichiran.html](https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/meishou/meishou_ichiran.html) (2021年2月7日 最終閲覧)
- 国際連合広報センター. 持続可能な開発目標 [https://www.unic.or.jp/activities/economic\\_social\\_development/sustainable\\_development/sustainable\\_development\\_goals/](https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/sustainable_development_goals/) (2021年2月7日 最終閲覧)
- 松井 豊 (2017). 東日本大震災における心理学者の支援活動と研究の概観 心理学評論, 60, No.4, 277-284.
- Megan Buchter (2019). AIM2Flourish : An Agent of World Benefit AI Practitioner, 21-3, 54-58.
- 南三陸町. 東日本大震災における被害の状況について <https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/17,181,21.html> (2021年2月7日 最終閲覧)
- 南三陸ホテル観洋. 3.11からの記憶 [http://www.mkanyo.jp/brochure/3.11\\_2019.pdf](http://www.mkanyo.jp/brochure/3.11_2019.pdf) (2021年2月7日 最終閲覧)
- 中村和彦 (2014). 対話型組織開発の特徴及びフューチャーサーチとAIの異同 人間関係研究, 13号, 20-40.
- 大類真嗣・田中英三郎・前田正治・八木淳子・近藤克則・野村恭子・伊藤弘人・大平哲也・井上彰臣・堤 明純 (2020). 災害時のメンタルヘルスと自殺予防 日本公衛誌, 67, 第2号, 101-110.
- Whitney, D. & Trosten-Bloom, A. (2003). *The Power of Appreciative Inquiry: A Practical Guide to Positive Change*. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers. (ウィットニー, D.・トロステンブルーム, A. 株式会社ヒューマンバリュー (訳) (2006). ポジティブ・チェンジ – 主体性と組織力を高めるAI – ヒューマンバリュー)

# ラボラトリー方式の体験学習における 対面形式とオンライン形式の学習成果の比較

池田 満

(南山大学人文学部心理人間学科)

土屋 耕治

(南山大学人文学部心理人間学科)

## 1. 問題

ラボラトリー方式の体験学習とは、“今ここ”での人との関わりの体験から、人間や人間関係について学ぶ学習方法（津村，2010，p.173）である。ここでいう“今ここ”での関わりが，他者と直接対面し対話する時間と場を意味することは，特に議論されることもなく，自明のものとして考えられてきた。すなわち，ラボラトリー方式の体験学習は対面で行うことが前提であり，その他の可能性を考慮することもなかったと考えられる。そもそもラボラトリー方式の体験学習が誕生し発展してきた1960年代から1990時代までは，一般の人が対面以外の方法で即時的に他者と対話する方法は電話や無線通信などごく限られたもののしか存在せず，そうした限定的手段における人間関係について，実践的に議論をする必然性自体がなかったともいえる。

21世紀に入り，インターネットが普及する中，電子メールやSNS，さらにはオンライン会議システムなど，複数の人が同時的，即時的にコミュニケーションをする手段は様々に発展してきたものの，ラボラトリー方式の体験学習の文脈では（そして一般社会においても），対面でのコミュニケーションを前提としたうえでの副次的ツール，メディアという位置づけに留まり，対面と同等の手段として使用が試みられることはなかった。

しかし，2020年初頭から始まった新型コロナウイルス感染症の拡大（以降，コロナ禍とする）は，ラボラトリー方式の体験学習にも大きな影響を与えている。感染を予防するためには，多人数で集まる（密集する）ことや間近で会話を（密接する）場面を避けること，他者との十分な距離（2m）を取ること，マスクを着用することなどが求められている。これらの制限は，時間と場

所を共有し共に関わる体験を通して学ぶことを目指すラボラトリー方式の体験学習の実施の大きな障壁となり、実際上、2021年2月現在も従来と同じ方法で体験学習を実施することは困難となっている。

南山大学では、新型コロナウイルスの感染拡大、並びに4月7日に発出された緊急事態宣言を受け、2020年度の授業開始が約3週間遅れの4月24日からとなった。同時に、対面での授業は禁止となり（その後、徐々に緩和）、すべての授業を、Zoomを用いたオンライン形式で実施することとなった。心理人間学科では、ラボラトリー方式の体験学習がカリキュラムの中軸の一つとなっており、一般的な講義形式の授業とは異なる授業方法を、オンラインで実施するという、前例のない試みに取り組むこととなった。

本稿では、2020年度にオンライン形式で実施されたラボラトリー方式の体験学習の授業の一つを取り上げ、授業を通して得られた成果について、従来の対面形式での同授業と数量的に比較する。そのことを通して、ラボラトリー方式の体験学習における、対面実施とオンライン実施の相違など検討する端緒となる示唆を得ることを目指す。

### 検討対象となる授業の概要

本稿では、南山大学人文学部心理人間学科で開講されている「人間関係概論」を、検討対象とする。この授業は同学科1年生の必修授業として、例年第1クォーター（4月～5月）の8週間に毎週1回、各回2時限（180分）で開講されている（最終週のみ1時限となり、合計で15時限）。しかし2020年度については、オンライン授業化に加えて、上述の通り授業開始日が遅れたため、授業回数として2回減少し、全6回合計12時限で授業が行われた。

この授業のシラバスに記載されている「授業概要」と「到達目標」をTable 1に示す。この授業概要と到達目標は2018年度から変更なく継続されているものである。2020年度については授業期間の短縮、オンライン授業化によって内容の変更を余儀なくされたが、大学の方針としてシラバスは変更せずに授業を行った。

Table 1 人間関係概論の授業概要と到達目標（南山大学Webシラバスより抜粋）

---

#### 【授業概要】

この授業は演習および講義形式で行われます。人間関係を学ぶ際には、先人が見出した理論から学ぶ方法（心理学や社会学などの学問から学ぶ）と、自らの体験から自分自身の人間関係を学ぶ方法（体験学習）があります。前者は、普遍的な人間関係の原理を整理するために役立つ、後者は自分自身の人間関係の持ち方について、直接的にふりかえり、気づき、自己の成長につなげることが可能となります。この授業では、人間関係に関わる実習演習を授業で実施し、その体験を通して自分自身の他者との関わり方の理解に取り組みます。

---

---

**【到達目標】**

- ・体験から学ぶという学び方が理解できている。
  - ・自分自身のコミュニケーションやグループの中での他者との関わり方の特徴に気づいている。
  - ・行動目標を設定し、それに取り組むことを通して、自己成長に取り組むことができている。
- 

授業回ごとの内容詳細（Appendix 1， および 2 を参照）については，2018 年度と2019年度は，時間配分等の小修整に留まりほぼ同じ授業内容で実施された。これに対して2020年度は、「オンライン化」と「授業回数の減少」によって，授業内容に様々な変更が加えられた。主な変更点は以下の通りである。

実習の点で見ると，従来，授業期間中に2回行われていた情報カード型実習（「朝刊にまにあわせろ」「ふくぶく村の宝探し」）は行われなかった。これは，事前にファイルをダウンロードしてもらい，それをもとに情報紙実習を疑似的にオンラインで実施することは可能ではあったものの，主な受講生である1年生は大学の授業がはじめてであり，また，各自の通信環境も明確には分からない状況であったことから，事前の手順が必要ない実習が選択されたためであった。また，従来行われていた「聴く実習」に代わり，「カウンセリング的な聴き方（傾聴）」の実習が行われた。これは，「聴く実習」は，実施のルールが煩雑な面があり，オンラインでは実施に難しさが考えられたこと，また，限られた授業内容のなかでは，カウンセリング的な聴き方や，コーチングといった，しっかりと聴き合うことを体験してもらった方がよいただろうという判断がなされたためであった。実習以外の面では，従来，第2回授業で「コーチング・トリオ」を設定し，最終回までに2～3回，コーチング・セッションを行いお互いの行動目標の達成をサポートする取り組みを行っていたが，2020年度はコーチングを体験する実習を1回のみとした。これは，実習時間が少ないなかでは，より多くの受講生と関わり合う機会を持つことを優先したためであった。その他の特筆事項として，第1クォーター中は学内ネットワーク環境の準備が十分でなかったため，原則として学生の画面がオフとされていた。しかし少人数では画面をオンにしてもよいとされていたため，グループでの実習などの際には画面をオンにすることとした。

ここまで，オンライン化によるネガティブな変更点を挙げてきたが，オンライン化によって新たに実現可能な取り組みもあった。その最大のものは，毎授業のジャーナル・ピックアップの実施であった。ジャーナル・ピックアップとは，毎授業の最後に学生が書いたジャーナル（授業での体験や，気づき，学びなどを書きとめる用紙）の記載内容を教員が読み，特に共有するとよいただろうと思う記述を拾い上げ，資料として提示する取り組みである。従来はジャーナルを手書きで記入し提出を求めていたため，それを読み，拾い上げ，PCに入力して資料を作成するという作業の負担から，授業期間中に2回程度しか実施

することができなかった。しかし、授業の全面オンライン化によってジャーナルもオンライン提出となったため、最大の負担であったPCに入力するという作業がなくなったことから、ジャーナル・ピックアップを毎回行うことができた。

## 本研究の目的

本稿では、下記の2つの指標について、2018～2020年度の実施年度間の比較を通して、対面実施とオンライン実施の間で生じる際について探索的に検討することを目的とする。<sup>1</sup> 筆者らは、ラボラトリー方式の体験学習のプログラム評価研究として、本授業を対象に、2018年度から継続的に種々のデータを収集している。本稿ではそのうち、数量的データとして収集している、「体験から学ぶ力」と「ソーシャルスキル」を取り上げる。

ラボラトリー方式の体験学習は、道具的な人間関係スキル（ソーシャルスキル）の獲得を目指す学習法ではなく、日常での人間関係場面の中で自らの人間関係を継続的に振り返り発展させる力、いわば人間関係の「学び方を学ぶ」手法（中村，2013）とも呼ばれている。特に本研究で対象としている人間関係概論は、心理人間学科で学ぶラボラトリー方式の体験学習の最初の科目として位置付けられていることから、Table 1の到達目標にも示されているように、「体験から学ぶ学び方」を理解することが主要な目標の一つとなっている。このことから、体験から学ぶ力の獲得が、人間関係概論という教育プログラムのアウトカム指標の一つとして妥当と考えられる。

ラボラトリー方式の体験学習では、EIAHE<sup>1</sup>と呼ばれる循環的な学習過程を想定している。これは体験する（Experience）、指摘する（Identify）、分析する（Analyze）、仮説化する（Hypothesize）の頭文字をとったものであり、自らの体験を体験のまま終わらせることなく、関わり行動を内省し、新たな体験場面へ向けた行動計画を立てるサイクルを指している。中村（2004）は、この4つの側面を測定する尺度を作成しており、プログラム評価研究に際しては、この尺度を用いて体験から学ぶ力の獲得について、プログラム効果を測定している。

体験から学ぶ力に加え、プログラム評価研究ではソーシャルスキルを測定している。上述したように、ラボラトリー方式の体験学習は、道具的な対人関係スキルの獲得を目指しているものではない。しかし、これまでの研究ではラボラトリー方式の体験学習を受講した人のソーシャルスキル得点の上昇が確認されている（津村，2002; 2013など）。加えて、ラボラトリー方式の体験学習の

---

<sup>1</sup> 「対面授業」と「オンライン授業」の比較を目的とするならば、2018年度と2019年度のデータを統合し、2020年度と比較するのが妥当とも考えられる。しかし、2018年度と2019年度についても完全に同一内容ではないことから、本稿では統合はせず、年度ごとに比較することとした。



プログラム評価におけるロジックモデルとしても、アウトカムとしての体験から学ぶ力の獲得することで、自らの日々の体験から人間関係をふりかえる力の向上が見込まれることから、ソーシャルスキルはインパクトとして位置付けることが可能である。そのため、プログラム評価研究においてもソーシャルスキルを指標の一つとして測定している。

2018、2019年度と2020年度の違いは、それまで教室で対面コミュニケーションによって進めていたものがオンライン化されたというコミュニケーション・メディアの変化だけにとどまらず、期間の短縮や技術的限界から授業内容にも変化が生じている。加えて、授業外での学生同士の交流ができないことなど、学生を取り巻く環境が全く異なる中で行われた授業であり、本稿で2018～2020年度の比較を通してなんらかの差異が見出されたとしても、その原因をオンライン化のみに帰結させることはできない。しかし、これまで経験のなかったオンラインでのラボラトリー方式の体験学習の実施によって生じた変化を見ることで、オンライン実施の欠点や利点をより精査するうえでの、端緒となることが期待できると考える。

## 2. 方法

### 調査対象者と調査方法

2018～2020年度に人間関係概論を受講した学生を対象に、匿名自己回答式の質問紙調査を実施した。回答の際、事前事後調査の照合のため、任意で携帯電話番号の下4桁の記入を求めた。2018年度と2019年度については紙媒体で調査を行い、2020年度についてはSurvey Monkeyを用いたオンライン調査を行った。各年度、初回授業終了時に事前調査、最終授業終了時に事後調査を実施する、一群事前事後テストデザインを採用した。研究では、事前事後、両方に回答があったものを分析の対象とした。分析対象者の性別と学年、学科構成をTable 2に示す。心理人間学科以外の学生、2年次以上の学生の割合が低かったため、本研究では区別せず分析の対象とした。

Table 2 各調査年度の分析対象者の構成

年度	性別		学年		学科	
	男	女	1年生	2年生以上	心理人間学科	他学科
2018	72	15	76	11	83	4
2019	71	17	83	5	84	4
2020	27	3	30	0	30	0

### 調査項目

回答者の性別や所属学科等のデモグラフィック情報とともに、次の2つの尺度を用いて、質問紙を構成した。

体験から学ぶ力：中村（2004）が作成した体験学習機能尺度を用いた。この

尺度は、ラボラトリー方式の体験学習が想定している、4つの側面（体験、指摘、分析、仮説化）からなる体験学習の循環過程の各側面について、回答者がどの程度、得意としているかを測定する尺度である。本研究では、各項目について「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

ソーシャルスキル：菊池（1988）が作成したKiSS-18を使用した。KiSS-18は、人間関係を円滑に営む際に有用なスキルを相対的に測定する尺度として広く用いられているものである。本研究では各項目について、「いつもそうだ」から「いつもそうでない」の5件法で回答を求めた。

### 3. 結果

各開講年の事前事後得点を、測定因子ごとにFigure 1-1から1-5に示す。体験因子とKiSSについては、2018年度と2020年度が上昇し2019年度が下降するという傾向が見られた。仮説化因子についても2018年度と2020年度に類似した変化が見られるが、2020年度については、上昇はごくわずかであった。一方、指摘因子と分析因子については、2019年度と2020年度が類似した変化を示し、いずれも下降していたのに対して、2018年度が上昇傾向を見せていた。

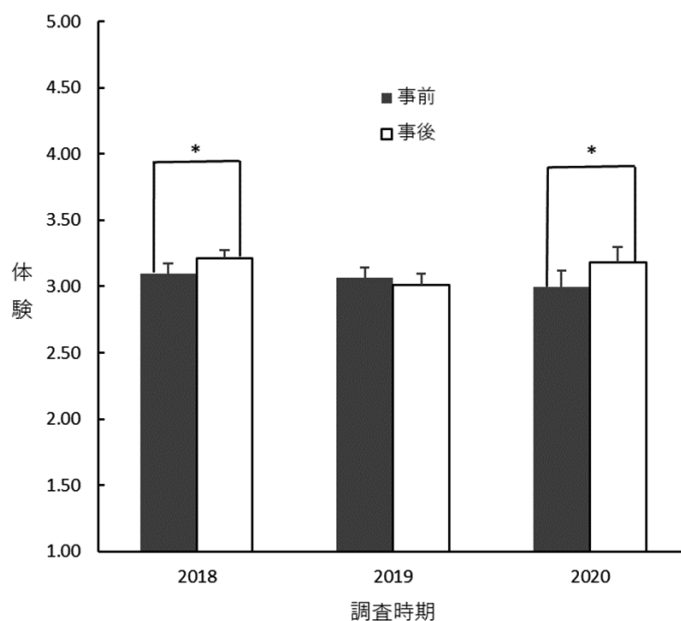


Figure 1-1 体験因子の得点

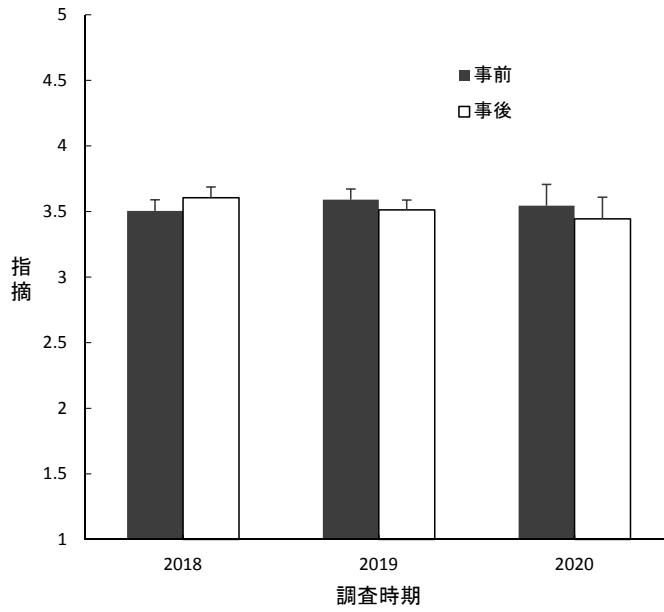


Figure 1-2 指摘因子の得点

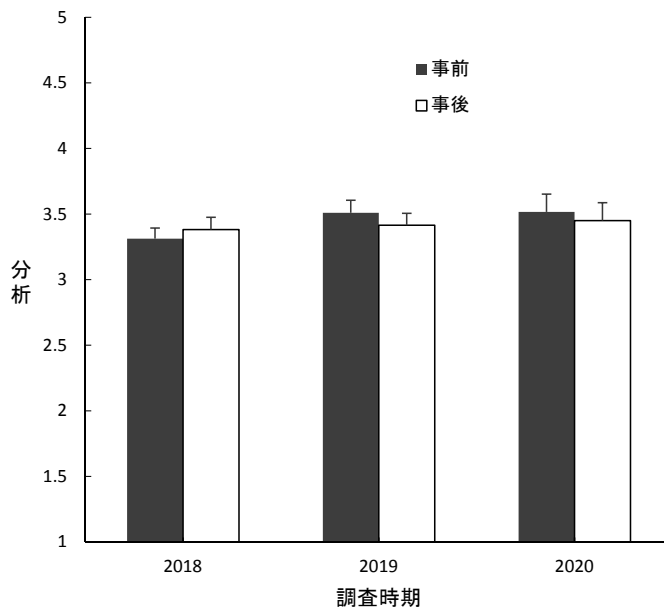


Figure 1-3 分析因子の得点

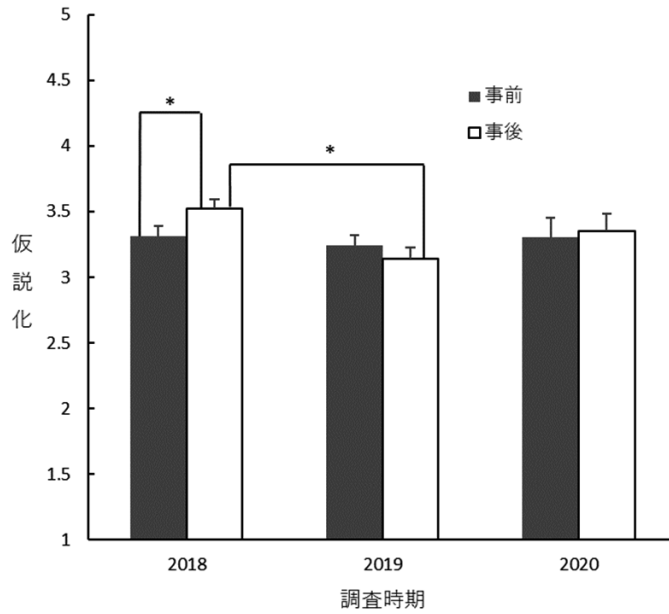


Figure 1-4 仮説化因子の得点

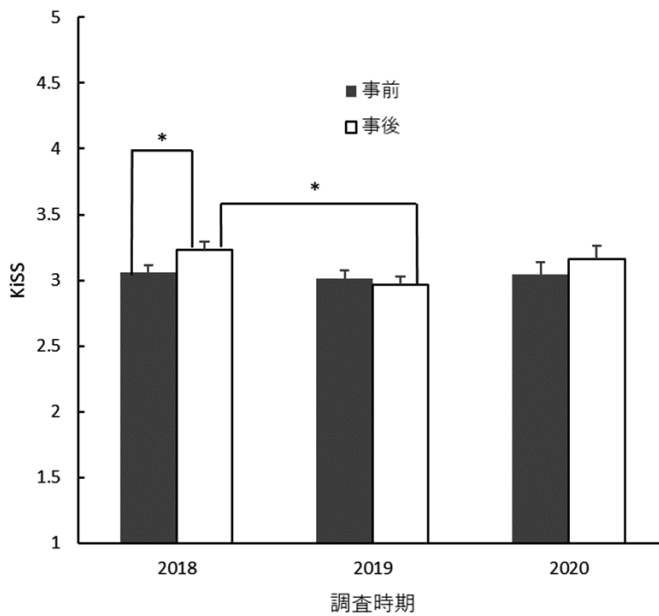


Figure 1-5 KISSの得点

これらの変化を詳細に検討するため、開講年度を被験者間要因、調査時期を被験者内要因する  $3 \times 2$  の二元配置分散分析を行った。その結果、体験から学

ぶ力のうち体験因子と仮説化因子、およびKiSSの得点について、調査時期と開講年の交互作用が有意であった（体験： $F(2, 202) = 3.415, p = .035$ ；仮説化： $F(2, 202) = 5.157, p = .007$ ；KiSS： $F(2, 202) = 6.821, p < .001$ ）。そこで多重比較を行った結果について、因子ごとに詳しく記す。なお有意水準はいずれも $p < .05$ である。

体験因子については、2018年度（事前： $M = 3.10, SD = 0.69$ ；事後： $M = 3.21, SD = 0.62$ ）および2020年度（事前： $M = 2.99, SD = 0.68$ ；事後： $M = 3.18, SD = 0.65$ ）で、事前得点よりも事後得点のほうが有意に高かった。次に、仮説化因子については、2018年度のみ事前得点（ $M = 3.31, SD = 0.73$ ）より事後得点（ $M = 3.52, SD = 0.68$ ）のほうが有意に高く、また事後得点において2019年度（ $M = 3.14, SD = 0.77$ ）よりも2018年度（ $M = 3.52, SD = 0.68$ ）のほうが有意に高かった。最後にKiSSについても、2018年度のみ事前得点（ $M = 3.06, SD = 0.54$ ）より事後得点（ $M = 3.23, SD = 0.54$ ）のほうが有意に高く、事後得点において2019年度（ $M = 2.96, SD = 0.56$ ）よりも2018年度（ $M = 3.23, SD = 0.54$ ）のほうが有意に高かった。

加えて、体験因子（事前： $M = 3.07, SD = 0.72$ ；事後： $M = 3.12, SD = 0.69$ ）およびKiSS得点（事前： $M = 3.04, SD = 0.54$ ；事後： $M = 3.11, SD = 0.56$ ）について、調査時期の主効果が有意であり、いずれも事前調査と比較して事後調査得点が上昇していた（体験： $F(1, 202) = 4.342, p = .038$ ；KiSS： $F(1, 202) = 6.251, p = .013$ ）。

#### 4. 考察

本稿では、オンライン授業となった2020年度と、対面で行われた2018年度、2019年度の体験学習授業を対象に、体験から学ぶ力とソーシャルスキルの二つの量的指標を用いた比較を行い、オンライン授業によって生じた可能性のある差異を探索することを目的とした。数量データの分析結果に限れば、体験学習の効果という点では年度ごとの差異が顕著であり、オンラインで行われた2020年度に統計的に有意な差として検出可能な特徴的な傾向は見られなかった。

統計的に有意ではなかったものの、指摘因子と分析因子については、事前から事後に向けて減少傾向が見られ、授業の効果が見られなかった可能性がある。しかしこの傾向は2019年度も類似しており、2020年度に特徴的なものではない。体験学習の短期的な効果について池田（2018）は、それまで明確な根拠がないまま「自分はできている」と思っていた学習者が、体験学習を通してEIAHE'のサイクルに基づく詳細な検討を体験することで、自身の持つ力の未熟さに気づいたことが低下の要因ではないかと推測している。すなわち、体験から学ぶ力の向上は体験学習のインパクトとして捉えられるものであり、直接的アウトカムとしては、自らの力に対するクリティカルな気づきが得られることを設定するべきかもしれない。事後での低下傾向が2020年度に限られていなかったこ

とからも、体験から学ぶ力の低下を、体験学習の成果がなかったと解釈すべきなのか、あるいは本来期待されている効果が見られたのか、詳しく検討する必要がある。

同様に、体験因子とソーシャルスキルについては事後に上昇する傾向が見られ、授業のオンライン化が、必ずしも体験学習の授業効果に悪影響を及ぼしてはいないことが示唆される。他方、仮説化因子については、上昇傾向は見られたもののごくわずかであり、他の年度との類似性も乏しかった。本論で取り扱っているデータからは、これがオンライン授業による影響なのか、あるいは年度（受講学年）の特徴なのかは明らかにすることはできない。しかし、オンライン授業による影響であると仮定すると、以下のような可能性が考えられる。

第一に、対面であれば得られたはずの効果が減ってしまった可能性である。仮説化とは、次の人との関わり体験へ向けて、自分がどのような行動をとるかを考えるステップである。対面授業であれば、授業が終了した直後から、それまで授業時間内で関わっていた友人らとの授業外での関わりが始まり、仮説化した行動をすぐに体験を通して実践することができる。しかしオンライン授業では、授業終了後にこうした新たな関わりのお機会を得ることが難しい。さらに本授業が行われていた時期は、政府による緊急事態宣言が発令されていた時期とも重複しており、なお一層、人との関わりのお機会が乏しい時期であった。すなわち、仮説化そのものができたとしても、その仮説の正しさや効果を検証する機会がなかったため、仮説の妥当性に自信を持たず、仮説化因子得点の上昇を阻害した可能性が考えられる。これは、毎回の授業終了時に書かれるジャーナルからも、授業の実習を通して学んだ学びが、オンラインでのコミュニケーション時に注意することというような今年度特有の形態との関係で語られていることとも関連するであろう。つまり、仮説化の項目で答えられている内容が、オンライン上でのコミュニケーションに即したもののなのか、それを越えたコミュニケーションに関する事柄に一般化したのかという点は、体験の学びほどの程度抽象化され、学習となるのかという点からも検討が求められるであろう。

これに対して、対面であれば2019年度と同様に事後に低下したはずのものが、オンライン授業によって低下しなかったという可能性も考えられる。これは一見すると、オンラインのほうがポジティブに働いたことを意味するようにも見える。しかし上述したように池田（2018）は、体験学習授業後の体験から学ぶ力の低下はクリティカルな気づきの現れであり、短期的には効果がなかったように見えても、中・長期的視点では体験学習の効果として意味を持つ可能性を述べている。この可能性が正しいならば、仮説化因子が低下しなかったことで、短期的にはオンライン授業のポジティブな成果のように見えても、長い目で見れば体験から学ぶ力の醸成を阻害する可能性があるであろう。

上記の可能性はいずれも本稿で分析したデータのみでは検討不可能であり、仮説の域を出るものではない。しかし、オンライン授業の良悪や効果、意義を

検討するためには、その前提として、体験学習から得られるものは何なのかという問いに対して、中・長期的展望から検討する必要性を提示するものといえよう。

限られたデータのみに基づく検討ではあるが、本研究から、オンラインでのラボラトリー方式の体験学習は、対面と比較して、明確な差異は見出されなかった。しかし、分析したデータが個人の自省に基づく質問紙調査による数値データであるため、実際に学習の成果としての行動変容が生じていたのかを明らかにすることはできていない。同様に数値データの限界から、学習内容が質的に同等であるのかも不明である。加えて本研究では、前提となるプログラムの成果について、本研究で取り上げた指標選択の妥当性や望まれる変化の想定が確定しているといいがたいため、プログラム評価の点でも、2020年度に行われたオンライン授業に効果があったかどうかを判断することもできない。しかし、得られる成果が同質であるとは言えなくとも、少なくともオンラインでのラボラトリー方式の体験学習が明確に劣っているという根拠は見られなかった。

本稿を執筆している2021年2月時点でも新型コロナウイルスの感染拡大は収まっておらず、対面での人と人との関わりが制限され、オンラインという手段での関わりを継続せざるを得ない状況は、続くように思われる。こうした、新たな人間関係の様式も、緊急的手段から日常的手段へと次第に浸透していこう。オンラインでのラボラトリー方式の体験学習実施も、緊急的手段から、新たな可能性の一つとして考慮すべき時になりつつある。オンラインでの人間関係を、副次的なものとして捉えるのではなく、より効果的なオンラインでの関わりのあるようを探る一つの方向性として、オンラインでのラボラトリー方式の体験学習の効果について、さらなる検討を進める意義が高まっていくと思われる。

## 5. 引用文献

- 池田 満 (2018). 体験を通じた人間関係力を育成するプログラムの評価事例 日本評価学会第19回全国大会Proceedings pp. 41-46.
- 菊池章夫 (2004). KiSS-18 研究ノート 岩手県立大学社会 福祉学部紀要, **6**, 41-51.
- 中村和彦 (2004). EIAHE'モデルの体験学習機能尺度作成の試み アカデミア (南山大学紀要) 人文・社会科学編, **79**, 87-121.
- 中村和彦 (2013). 大学一年春学期におけるラボラトリー方式の体験学習の効果: 体験から学ぶ力の影響 実験社会心理学研究, **52**, 137-151.
- 津村俊充 (2002). ラボラトリー・メソッドによる体験学習の社会的スキル向上に及ぼす効果: 社会的スキル測定尺度Kiss-18を手がかりとして アカデミア 人文・社会科学編, **74**, 291-230.
- 津村俊充 (2010). グループワークトレーニング: ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試み 教育心理学年報, **49**, 171-179.

## Appendix

### Appendix 1 2018年度「人間関係概論」授業内容

回数	授業内容
第1回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●この授業の概要を理解する</li> <li>●体験学習の一連の流れを体験する</li> <li>●グループの中での自分のコミュニケーションの特徴に目を向ける</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「ビザパイ」, 「朝刊に間に合わせろ」(カード型の問題解決実習)</p>
第2回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ラボラトリー方式の体験学習について理解する(コンテンツとプロセス, 体験学習のEIAHE'のサイクル)</li> <li>●この授業での「私のねらい(行動目標)」を明確にする</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>コーチング・トリオづくり, 実習「出会いの試み」, EIAHE'のサイクルの分析</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「ラボラトリー方式の体験学習とは」, 「体験学習のEIAHE'のサイクル」</p>
第3回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分のコミュニケーションの特徴(話し方, きき方)に目を向ける</li> <li>●コミュニケーションのプロセスを観察する視点を持つ</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「はなす・きく・みる」</p>
第4回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●相手の話をしっかり聴いてみる</li> <li>●普段の自分の聴き方についてふりかえる</li> <li>●“コーチング”について理解し, コーチングを通しての他者との関わりを試みる</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「聴く実習」, トリオでコーチング実習</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「コミュニケーションモデル」, 「コーチングとは」</p>
第5回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●“グループの中のわたし”の特徴に気づく</li> <li>●グループで課題(仕事や作業)を行う際に生じるプロセスに気づく</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「ふくぶく村の宝さがし」(カード型の問題解決実習)</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「グループプロセスの諸要素」, 「フィードバックの留意点」</p>
第6回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ふりかえることやフィードバックの意味を理解する</li> <li>●次の実習に向けて行動目標を明確にする</li> <li>●この授業での気づきや学びと日常とのつながりを考える</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>ジャーナル・ピックアップ, 行動目標のふりかえり, 日常とつなげる</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「ジョハリの窓」</p>



第7回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●コンセンサス（全員の合意）によるグループでの意思決定を体験する</li> <li>●コンセンサスによる話し合いを行う際に生じるグループプロセスに気づき、それに働きかける</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「相談する相手」（コンセンサス実習）</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「グループでの意思決定」</p>
第8回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●この授業全体をふりかえる＋締めくくる</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>この授業全体をふりかえる, 「私」の変化曲線, 「プレゼント交換」</p>

Appendix 2 2020年度「人間関係概論」授業内容

回数	授業内容
第1回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●互いに知り合う</li> <li>●この授業を理解する</li> <li>●体験学習の一連の流れを体験する</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「ビザバイ」</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「コンテンツとプロセス」</p>
第2回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●ラボラトリー方式の体験学習について理解する</li> <li>●プロセスをふりかえる</li> <li>●この授業での「私のねらい（行動目標）」を明確にする</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>実習「出会いの試み」</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「ラボラトリー方式の体験学習とは」</p>
第3回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分のコミュニケーションの特徴（話し方、きき方）に目を向ける</li> <li>●コミュニケーションのプロセスを観察する視点を持つ</li> <li>●この授業での「私が授業で取り組んでみたいこと」を明確にする</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「はなす・きく・みる」</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「体験学習のEIAHE'のサイクル」</p>
第4回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●相手の気持ちによりそう話の聴き方にふれる</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「カウンセリング的な聴き方（傾聴）」</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「きもちがかよう『聴き方』とは」</p>

第5回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●“コーチング”について理解し，コーチングを通しての他者との関わりを試みる</li> <li>●自らの取り組みをふりかえる</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「相手の自己理解を目指した聴き方（コーチング）」</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「ジョハリの窓」</p>
第6回	<p>&lt;ねらい&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●コンセンサス（全員の合意）によるグループでの意思決定を体験する</li> <li>●コンセンサスによる話し合いを行う際に生じるグループプロセスに気づき，それに働きかける</li> <li>●この授業を閉じる</li> </ul> <p>&lt;実習&gt;</p> <p>「相談する相手」（コンセンサス実習）</p> <p>&lt;小講義&gt;</p> <p>「グループでの意思決定」，「グループプロセスの諸要素」</p>

■■ 実践報告

## オンライン授業に対応したワークの開発： 私をあらわすオブジェ作り

青 木 剛  
市 川 紗 里 奈  
山 崎 綾 介  
坂 中 正 義

(南山大学人文学部心理人間学科)

### 要 旨

本論は、オンライン授業で実施可能なワークとして、筆者が考案した「私をあらわすオブジェ作り」を提示することとする。本論ではその手順や各手順の中での留意点、意図したことを提示し、従来の対面授業でのワークでねらいとされていた、ワークの中で作り手・話し手の自己理解がなされること、話し手の自己理解を促す聴き方ができることができるワークとなっていることを示した。自宅での完全自主課題となるオブジェ制作をPart 1 とし、制作したオブジェを元にオンライン上での傾聴の実施をPart 2 とし、両方で一つのワークが構成されることとした。実施した経験から、家にあるものを素材とすることでよりその人らしさが表れること、オブジェという実体のあるものを使って傾聴を行うことでその人らしさの理解が進むこと、オブジェ制作と傾聴を一つのセットとすることでより新たな理解が生起しやすいことなどの特徴が見出された。従来に実施されていたワークの替わりとして、オンライン授業で活用できるワークであることが確認された。

### キーワード

オンライン、私をあらわすオブジェ作り、自己表現、自己理解、傾聴

### はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一部の学期で全面オンライン授業となるなど、対面授業ではない形の授業形態を実施せざるを得なかった。その中で、体験学習も行わざるを得ず、かつ従来の対面授業での学習

効果を維持できるような工夫をする必要があった。本論文で紹介するワークは、その中で生まれたワークである。このワークを実施する授業は、第一著者が「野菜フォーカシング」(青木, 2020)を実施していた授業である。この授業は、2年生以上が春学期に受講するカウンセリングに関する授業で、すべてが体験学習から構成されている。2年生にとっては、それ以前に体験学習の授業を1つだけ受ける機会があったが、カウンセリングに特化した授業としては初めての体験であり、その他にも開講されているカウンセリングに関する体験学習の入門編ともなっている。この授業ではまず、言語的・非言語的にも自分自身を改めてふりかえてみる、ふりかえてみてから表現することや、改めてじっくり感じられたことに注意を向けてみる、相手を理解するために必要な話の聴き方・聴く態度などの体験学習を行っている。従来の授業では、アート素材を豊富に使ったワークや、先述の野菜フォーカシングのように野菜の話を使って安全にカウンセリングで行われるようなやり取りを体験することが含まれていた。

しかし、オンライン授業では、豊かなアート素材を各受講生に提供することが物理的に難しい。また、いくら安全に配慮した模擬カウンセリングでも、「野菜」で自分を表すような一見奇妙なやり取りや、あいまいさを含んだやり取りを実施者が受講生の様子を見られない状況で一斉に行うことは、受講生それぞれの体験学習が成り立たっていない中で体験させることにもつながりかねず、危うさをはらんでいる。本論文で紹介するワークは、そのような懸念があるために実施方法を再検討する必要があった「セルフ・バッグ」と「野菜フォーカシング」を代替するものとして考案された。「野菜フォーカシング」については先に簡単に記しており、青木(2020)に詳述されているため、そちらを参照されたい。

「セルフ・バッグ」は、受講者全員に一律に配布される紙袋を自分に見立てて加工するワークである。配布される紙袋は茶色の無地の薄い紙で作られた、取っ手も飾り気もないものである。その紙袋そのものを切ったりして加工することも可能であるが、用意されたアート素材を使って装飾したりすることも可能である。その際、用意されるアート素材としては、コラージュ作品のように写真やイラストなどを切り貼りするための多数の雑誌、色とりどりのモール、色付き発泡スチロールのスティック、綿、多色の画用紙、単色無地や模様の入った色紙、色付きセロファン、クレパス、クーピー、マーカーなど多数に及ぶ。アート素材を装飾するためのノリやボンド、セロテープなども加えると、手押し荷台3台以上の量となる。それらを使って、最初に配布された無味乾燥な紙袋を、自分を表すものになるよう制作するのである。表面はもちろん、底や内側も使い制作していくように指示がなされる。また、作成後は全受講生の作品が中央に並べられ、全員で鑑賞する。そうすると、全く同じ作品はなく、たしかに自分の作品には自分らしさが表れていることにも気づくことが多い。ま

た、その後は2、3人で一組となり、作品についての説明をシェアする体験を行う。見ているだけでは伝わらなかった点などにも気づけることもある。このワークは非言語的に自分を表すことや、何気なく装飾していくうちに無自覚的にも自分らしさが表現されていくことに繋がること、そうした中で自分の持っているさまざまな側面に気づくことが意図されたものである。

このようなアート素材を用いて非言語的に自分を表してみたり、意外と表れていた自分らしさに気づくことなどが意図された「セルフ・バッグ」と、模擬カウンセリングが行え、かつその人らしさを表していることに関心を持ってリスニングができるように意図された「野菜フォーカシング」を代替するワークの考案が必要とされていた。そこで本論文で紹介する「私をあらわすオブジェ作り」が考案された。考案する中で、一緒に授業を担当している第四著者からもアドバイスやコメントを受け、それらも取り入れつつ授業内で実施した。授業で実施した際のふりかえり用紙からは、概ね意図したような体験が生起していることが伺えた。また、直接授業内のワーク後に何人かの学生から感想を求めたところ、基本的な傾聴が体験され、その中での意外な発見などがあったことが報告された。加えて、授業以外で筆者のゼミで本ワークを実施し、その様子を見たり感想を得たりしたところ、先述の授業と同様に意図した体験が生起し傾聴も体験できていたことが確認された。以下に本ワークの詳細を記すこととする。

### 私をあらわすオブジェ作りの手順

詳細な手順を説明する前に、大まかな概要を記すこととする。本ワークは先に記した授業で行っているが、その授業は2コマ連続授業（180分）であり、2週にわたってオブジェ作りとそのオブジェを素材にした傾聴体験を実施した。最初の180分は完全自主課題とし、オンラインではなくそれぞれが自宅で時間を確保して取り組むものであった。完全自主課題のため、その前の授業の終了時に課題の説明を行った。完全自主課題ではオブジェ制作に取り掛かることや、ワークシートに記入すること、次回の授業でそのオブジェを画面共有で見せられるように写真を数枚とっておくこと、最後にふりかえりを行い提出することを求めた。なお、オブジェを制作するための素材が必要なため、このワーク実施に先立つ2ヶ月前前に、工作で使えるような箱や紐や毛糸などの素材、切り抜いてもいいようないい感じの写真が載っている雑誌があれば確保しておくように伝えた。オブジェ作りの次の回では、オブジェを制作した感想を数名の受講者に聞き、その後この回でどのようなことをするのかを説明した後に、3名一組に分かれてオブジェを使った傾聴とふりかえりを行い、その後全体で数名の学生から感想を聞き、ふりかえり用紙を提出して終えた。つまり、前半が「セルフ・バッグ」の代替、後半が「野菜フォーカシング」の代替となっている。この2回を通して「私をあらわすオブジェ作り」のワークと考えるが、場合に

よっては前半のみを活用することもあるだろう。2回を通して一つのワークと考えるのには、「体験過程流コラージュ・ワーク」(Ikemi, et al., 2007)を参考にした。

それでは、授業で行った際の手順を提示する。実際のオブジェ作りの段階をPart 1とし、オブジェを使った傾聴体験の段階をPart 2と記すこととする。Part 1の具体的手順の説明の前に、Part 1のオブジェづくりのねらいとして「自分自身を表現してみることによって、自分の持っているさまざまな面に気づく」こと、「自分の意識層・無意識層にふれてみる」ことがあることを伝えた。加えて、このねらいの実現のためにPart 1で重要とされる以下の点を伝えた。Part 1は手順書(資料1)に沿って行うものだが、そこには目安となる時間が記載されている箇所がある。Part 1では、急いでササッと作成を行ったり、テレビや動画を見ながらなど片手間に行ったり、適当に物を並べて終わるなどのことがないようにし、時間の記載のある箇所はその手順のことだけに割く時間として最低その時間を確保しておくこと、その確保された時間内では十分に味わうことを重点的に行い、オブジェ作りが進むごとに「本当にこれで自分が表せているかな」と確かめて吟味しながら進めることを伝えた。また、記載の時間は最低限の時間であって、さらに多くの時間をかけることも構わないことを伝えた。

上記のような点を伝えただけで、具体的手順の説明を行った。資料1の手順1の通り、「自分の表面、裏面、内面、可能性などを考えてみる。その際、言葉ではなく何となくの感じとしてしかわからないものでも構わない。とにかく、じっくりふりかえりとらえてみる。」ということ伝えた。その際、その時は言葉ではよくわかっていないことでも、オブジェとして表していく中でわかることもあったり、その次の回のワークの中でわかること、もしくは、しばらくわからないままだけ時間がたつとわかることもあったりすることも伝え、言葉にならない何となくの感じも重要な自分の一部として言葉以外で表してみるようにとした。この手順1には最低でも10分はかけることとした。

続いて、手順2として、「1.」でとらえられたものをあらわすことができそうな素材を集める。質感や形、雰囲気など、さまざまな側面について確かめながら自分自身をあらわすオブジェを作成する。この作業は、一人になって、無言で行う。早々に作り終えても、それでじっくりくるか確かめてみることを。」を伝えた。また、工作で使えるような素材以外でも、ハンガーや食器、洗濯ばさみ、服など家にあるものでも構わないと伝えた。この点は、第四著者のアドバイスを受けて取り入れたものであった。素材集めの際もいったん集められた素材を見て、これで足りるかなと確かめてみることや、もっと他にあったらいいなと思える質感のものはないかなと吟味するような時間をとることが重要であると伝えた。また、作成途中で当初には思っていなかったことだが付け加えたいこと、当初思っていたことを変更して作成に当たることは全く構わず、とに

かく自分らしさが表れるようなオブジェを作ることが大切だと付け加えた。この手順2には最低でも60分はかけることとした。

手順3は、資料2の自主課題用紙への記入である。これについても、ササッと書いて終わりではなく、オブジェ作りの体験を味わいながら記入するように求めた。自主課題用紙は以下の3つの項目からなっている。まずは「できあがった「自分をあらわすオブジェ」を見て……」ということで、「全体的な印象は……」「私がぴったり表れているところは……」「私にとって意外なところは……」の3点について記入するようになっている。続いて、「「自分をあらわすオブジェ」を作っている時の自分について気づいたことは……」という点について記入を求めた。最後に、これまでのふりかえり用紙の項目を踏まえて「オブジェの名前もしくはタイトル」をつけるように求めた。

そして、Part1の最後に、Part2のワークのためにオブジェの写真を3枚以上撮影することを求めた。以上でPart1が終了する。

続いて、Part2だが、先述の通り冒頭でPart1の感想を数名に答えてもらい、その後、手順の説明を行った。受講者にはオブジェの写真が画面共有できる状態にしておくこと、前回のふりかえりを行った自主課題用紙を手元に準備しておくことを伝えた。また、今回のワークはこれまでの授業で学んだり身に着けてきたりしたことを総動員して行うことと伝え、資料3を活用し、3人一組で15分の傾聴体験とその後5分のふりかえりを計3回繰り返すことを伝えた。具体的手順としては資料3にある通りに説明を行った。まず、3人一組に分かれたら、役割①オブザーバー（観察者）、②話し手、③聴き手を決める。それぞれの役割の留意事項を記載の通り説明した。傾聴体験の最初の10分は話し手と聴き手のやり取りのみで、オブザーバーはそのやり取りを観察しているが、後の5分でオブザーバーからの聴きたいことを聴けるように、メモを取りつつ聴くこととなっている。この時間設定は「野菜フォーカシング」と同じ設定となっている。また、話し手は、自主課題用紙の3をまず話し、その後2、最後に1の順で話すように求めた。その際、自主課題用紙に書いたことを読み上げるというよりは、改めてそのオブジェ作成を振り返って自主課題用紙にあるような問いに今答えるようにして話すこと、自主課題用紙に既に行ったものは話す際に参照する程度で構わないことを伝えた。聴き手には、話し手のその人らしさを理解しようとして聴くこと、聴く中でその人らしさの理解を深めるための質問をしても構わないが、質問することがメインにならないようにすることを伝えた。むしろ、その人らしさが表れていることを味わって聴くことが重要であるとも伝えた。また、傾聴の後のふりかえりの順番を説明し、その際にそれぞれが話して終わりというだけでなく、そのふりかえりを聴いて思ったことなどを伝えあうなどの相互のやり取りが起こっても構わないことを伝えた。その後、記載され口頭で伝えられた説明だけではわかりにくい可能性もあるため、補助スタッフとして入っていた学生の協力のもと、ワークと同じだけの時間で筆者

が聴き手、1名の学生が話し手、また別の学生がオブザーバーとしてデモンストレーション（傾聴部分に加えふりかえり部分も）を行った。最後に、第2巡、第3巡の役割の回し方を説明し、それぞれの組に分かれてワークを実施した。

### 私をあらわすオブジェ作りPart2の架空事例

本論文を執筆するにあたって、ゼミ生の協力のもと本ワークを実施した。実際にPart2でどのようなやり取りが起こっているのか示すため、その際に行われた本ワークの体験を複数参考にして架空事例を作成した。なお、都合上話し手と聴き手のみを想定した架空事例となっている。架空事例中では、話し手をS、聴き手をLと表記することとする。LやSの後の数字は、単純に前から順につけたものである。

作成されたオブジェについて、架空の画像を作成し図1として示す。円形のオレンジ色の画用紙があり、それが両端の同じくオレンジの画用紙で作られたもので支えられている。かつオレンジ色の円形の画用紙の中央は円形の穴が開き、その穴には緑色のラインマーカーが4本立てられ、少しペンの先が画用紙よりも上に出ている。ペンの下部は白い紙がクシャクシャと丸められて土台のようにになっている。

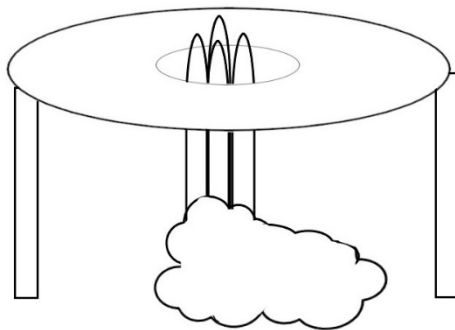


図1. 作成されたオブジェ（架空）

#### 架空事例

- L1 タイトルは？  
S1 タイトルは傘です。  
L2 傘、ですか？もう少し教えてください。  
S2 ほんとは、最初はオレンジのやつが浮かせられないかと思って、浮かせられなかったので、しょうがなくオレンジの棒というか、支えをつけて、浮かせられたらもっと傘っぽいのかなって。  
L3 浮いてる設定だったんですね。なるほど。少し聞きたいんですけど、傘っててっぺんに穴があいてたら雨が漏れてきてしまうような気がしたんですけど…。  
S3 傘のビニールの部分あるじゃないですか。それがオレンジ色のところで、それが外から見える自分のそとづらなのかなあと思って。ただ、全部が全部いい外面じゃなくて、カバーされているというよりは、真ん中が多少欠けてるじゃないですけど、十分じゃないって感じで、それがしっくりくるように思ったんです。



- L4 なるほど。ビニールの部分がそとづらでよくしている部分だけど、それですべて覆われているわけじゃないってことなんですね。この緑色のペンは何を表現しているんですか。
- S4 自分の核というか中心。そういうものがあると思って、それが直線で…立っている方がいいなって思ったんです。ただの棒でもよかったんですけど、せっかくなので家で作ったので、これまでの資格の勉強とかも含めた勉強で使いきった緑のマーカーを残していたので、大切なもの、それを使いました。
- L5 ああ、資格の勉強とかの時に使っていたペンを使って、それを核、中心にまっすぐ立っている形にされたんですね。
- S5 そうですね。大きい存在というのかな、そんな感じですね。それで、下は紙で。これも勉強とかそういうので計算用紙にしていたような紙で。オレンジのところを外から見るところとしたら、これは中身というか、内面というか。それで、紙は、なるべく底の方、下の方になって。
- L6 この計算用紙を丸めた紙とさっき言っていた資格の勉強の時のペンは内面なんですね。
- S6 そう。紙は課題とか就活とかのメモ用紙で、うまくは行ってないんだけど。うん。最初は紙の部分を球体にしようと思ったんですけど、悩みに思ってることとかに近いものに思えて、球体じゃないなと思って、いびつな感じでくしゃくしゃとしました。
- L7 くしゃっと。それは悩みに思っていることに近いんですね。それで一つ一つを開かせてもらったんですが、このオブジェ全体的な印象は？
- S7 改めて見て思ったのが、だいたい丸みを帯びているなと思って。それから、外側と内側がはっきりと分かれているのかなと思いました。
- L8 そうした印象はご自身にとってはどうですか？
- S8 しっくりは来ます。尖ってるのだと違うなって思うし、尖っている発想自体なかったかなあ。尖ってたり角ばったりしてたら自分とは違うなって思うかなあ。
- L9 結構腑に落ちているんですね。
- S9 そうですね。自分が表れてるかなって。今回のワークが家でやるものだったので、いつもだったら用意されているものにするんだろうけど、自分の家だったから、思い出深いものを使ったりして。でも、外から見えるものは適当にオレンジの画用紙を使ったり、中心のほうは思い入れのあるペンであったりとか、素材にこだわったなあ。特に意外なことは外見をオレンジの画用紙にしたことかな。
- L10 オレンジの画用紙を使ったことは意外だけど、それもしっくり来ているということですか？
- S10 はい…。はっきりとは言いにくいんですけど、そとづらをよくしているっていうのは自分では思っているの、自分の中でそんなに大事じゃないというか、できるだけ内と外で対比じゃないですけど、外は適当なもの、中のほうが思い入れのあるもの。そうですね、自分のそとづらは…あ、でも今思うとなぜオレンジなんだろうって思いますね。
- L11 あ、外は適当なものとしてオレンジ色の画用紙にしたけど、どうしてオレンジ色の画用紙でしっくり来るところがあるのかということ？
- S11 オレンジを選んだのははっきりとしたことはわからないけど、そとづらがいいイコール、外見がいいっていうのがオレンジだったのかなあ。なんでだろうなあ、明るいついていうのはあったのだけど、なぜかオレンジで、今はちょっとわからないけど、意外だけどしっくりは来てるかなあ。しっくりきてるのにわからないっていうことも意外。
- L12 作っていたときは特に迷いなく作っていたんですか？
- S12 そうですね。パッと思い浮かんだイメージがあって、だいたいには特に迷いはなく。ただ、作っていくうちにこの方がいいなとか思って、最初の思っていたものと違うようなところもあるんですけど。
- L13 変化していったところもあるんですね。穴をあけるのは最初から？
- S13 最初からですね。あ、そうだ、本当は、この空いてる丸からペンはでない予定だったんだけど、支えるオレンジの使ったら出るようになってちゃって、直そうと思ったんだけど、逆にそれでもいいかあとと思って。
- L14 出ていない予定だったけど、出ていることに逆にいいかあと？

- S14 そうですね。自分の願望もあるんだろうけど、ちょっとは自分が出てたらいいかなって。そうなければいいなあって。ちょっと恥ずかしいんですけど、このペンも、どこか1本じゃ少ないなって思って。自分を表すのは1本は嫌だなあって。
- L15 物足りないような感じですか？
- S15 あ、そう。物足りない。使ったペンを残してるんですけど、この緑のペンが一番多くて。なんだか直観的に手に取ったんですね。
- L16 一番使ったのが緑だったんですね。
- S16 そう、使い込んだ。その時はそこまで思わず手に取ったけど、使い込んだものですね。
- L17 なるほど、これは傘で、オレンジ色のところはそとづらで、中心は自分の中身とか大切なもの。いくつかの使い込まれたものでできて、それも少し外を出ているといいなって感じで、その底の方にはうまくはいていないかもしれないけど、クシャッと変わったものでできている。オレンジ色とかどうして緑のペンなのかはわからないけど、全体としてはしっかりきてるんですね。
- S17 そうですね。なんとなく、こんな感じだなあって思います。ふふふ。
- L18 どこかわからなさがあるのも面白いですね。そろそろ時間なんで終わりなんですが…。
- S18 あ、そうなんです。わかりました。ありがとうございます。

## ワークのねらいと実際に起こっていること

先述の通り、本ワークは2つのワークを代替するものとして考案された。1つは、アート素材を用いて非言語的に自分を表してみたり、意外と表れていた自分らしさに気づくことなどが意図された「セルフ・バッグ」である。もう1つが、模擬カウンセリングが行え、かつその人らしさが表われていることに関心を持って聴けるように意図された「野菜フォーカシング」である。これらのねらいをまとめると、ワークの中で作り手・話し手の自己理解がなされること、話し手の自己理解を促す聴き方ができることであるといえる。このようなねらいを達成するために先述の手順の中での教示等で意図したことを示し、架空ではあるが事例を元にねらいとしたことがワーク中でどのように実現されているのかを検討したい。また、ねらいとの照合だけでなく、実際に実施した中で思いがけず起こっていたことについても検討することとする。

まず、本ワークはPart 1とPart 2の両方を通して、じっくり味わいながら実施することを伝えている。これは、「野菜フォーカシング」(青木, 2020)でも論じたように、reflexiveな様式が賦活されることを意図しているためである。思いがけずあらわれている自分の側面を理解したり、話し手らしさに聴き手自身が気づき、そうした側面を話し手が理解することを促すためには、オブジェ作成前にイメージしたものを単に再現する形で素材を配置したり、話し手が単に記憶を再生したり、聴き手が単に話し手の言葉を再生したりするだけでは起こりにくい。単なる再現・再生ではなく、改めて味わうというreflexiveな様式が生起することによって意図していなかった暗在的な側面への理解へとつながると考えられる。Part 1の手順書に時間を記し、最低その時間を使ってじっくりと実施するようにしたのも、こうした意図があるためである。しかし、アート表現を使ったワークは苦手意識のある学生も少なからずいるため、長すぎないように普段の対面授業で行っている「セルフ・バッグ」で早めに終わる学生

の時間を参考に設定を行った。Part 1 の作成過程は完全自主課題であるために実際の様子を見ることはできなかったが、授業後に提出されたふりかえり用紙には、この設定時間が長かったという感想は見受けられなかった。また、Part 2 については、むしろ時間が短かったという感想もあり、じっくり味わって話をする・聴くということを大切にするためには、話し手と聴き手のみのやり取りも10分ではなく、15～20分程確保することも必要かもしれない。

聴く時間が足りないという感想になった点については、このワーク自体の要因もあると考えられる。この話し手と聴き手のみのやりとりをする10分と、オブザーバーも交えてのやりとりをする5分という設定は、「野菜フォーカシング」の設定と同一の時間配分であった。「野菜フォーカシング」の際には「時間が足りない」という感想が見られたことはなく、むしろ、この時間設定を学生に告げた際には「長い」というようになりアクションもあったり、実際にリスニングをしても「まだ時間がある」というような様子を見せるグループもあるほどであった。それでは、「野菜フォーカシング」と「自分をあらわすオブジェ作り」ではどのような違いがあるのだろうか。筆者はその違いがアート表現であることにより生じているのではないかと考える。「野菜フォーカシング」は最近の私について、野菜で想像してみてもその野菜のイメージを元に個人作業や話し手聴き手オブザーバーを交えたやり取りを行う。この場合、野菜はイメージであり実態がなく、共有されるのはその野菜のイメージを表す言語的表現のみとなる。この点がオンライン上で傾聴ワークとして実施する際に、イメージという曖昧なものを活用した傾聴となり、意図した体験とはならず体験学習が成立しない可能性があるとして危惧された点であった。しかし、「自分をあらわすオブジェ作り」におけるオブジェはイメージを具体的な物で表現している。フォーカシング指向アートセラピーの実践・研究者である Rappaport (2008) は、アートは作り手自身が自分の創作しているところを見ることができると、その具体的な作品をセラピストとともに共有できることの意義を論じている。フォーカシングでは言葉やイメージ、作品などは、実感を表すシンボルとしてとらえられる。そこでは、単にシンボルは話し手が実感を表したものとして完結するのではなく、いったん表されたシンボル表現から新たに生起する実感が得られ、さらなるシンボル化が進むようなことを想定している。話し手のイメージを表す言葉だけでなく、実体もそこにあることで、話し手や聴き手が新たに実感を獲得するための刺激が多いことになる。そのために、作り手にとっては創作過程の中でも、創作途中の目に見える作品もシンボルとして機能しやすくなり、その結果新たな実感を獲得して新しいシンボル（作品）の創作過程へとつながることが想定される。架空事例の中でもS6で話されたように、最初は底の紙は球体を想定していたが、作っているうちにクシャっとしていた方がしっくりくるように思われ、作品自体も変化している様子が見える。また、聴き手としても同様に、言葉だけでなく視覚的にも共有できる作

品があることで新たに生起する実感もあると考えられ、そうした実感が話し手と一緒にのかどうかを確認したり、話し手と違っていることを知っても、どう違っているのかを確認しやすくなると考えられる。架空事例のL3はそのようなことが起こっていたのではないかと考えられる。これらのことから、今回話す時間が足りないという感想が生じた背景には、言葉以外にも作品というシンボル表現があり、話し手として新たに話したい実感が得られやすいこと、聴き手にも実感を得る刺激が多くなったことがあったのではないかと考えられる。

また、作品作りに関しても、「セルフ・バッグ」と異なる点があった。今回のワークは完全自主課題として実施できるよう、家にある物を使ってオブジェを作成するものであった。対面授業で行う「セルフ・バッグ」では、素材はほとんど全て大学側が用意するものであったのに対し、今回のワークは家にあるものを使うということで、架空事例のS9にもあるように、思い入れがあったり、生活を想起できるものを素材として使うことができた。工作で使用できるようなものだけでなく、日常生活の中にある物でもいいのではないかという第四著者のアイデアを取り入れてこのような設定としたが、単なる材料ではなくその素材に含まれる思いや背景と相まって、よりその人らしさにつながる材料を使用して作品作りができたと考えられる。より自分らしさがある作品が作れることによって、自己理解が促されたり、その人らしさを理解するリスニングが行えたのではないだろうか。

最後に、このワークをPart 1 とPart 2 合わせてのものとなるよう想定した点について論じる。先に「体験過程流コラージュ・ワーク」(Ikemi, et al., 2007)を参照したと記したが、「体験過程流コラージュ・ワーク」では、創作後の聴き手とのやり取りを取り入れたコラージュ作成のワークを行っている。先にもシンボルと実感の相互作用から新たな意味が生起する点について記したが、この相互作用過程がより起こりやすくするために、創作後のやり取りも含めてのワークとなっている。話し手だけで作品を理解するよりも、聴き手の理解を交えることで、当初の話し手だけの理解がより明確・詳細になったり、新しい理解が生まれやすくなる。「セルフ・バッグ」では、相互に話し合うことは授業終了時に毎回行う振り返りの一環であり、主眼とされていなかったが、本ワークではPart 2 のやりとりも「私のオブジェづくり」の一部であるとした理由は、そのような理由からである。話を聴くということは、ややもすると話し手が想起した記憶を聴き手が正確に理解することのように捉えられることもある。しかし、傾聴はそれだけでは不十分である。本ワークはカウンセリングに関する入門編の授業の総集編として実施するものであった。そのため、話を聴く中で聴き手に生じた理解が話し手に伝え返され、その交差が起ることによって話し手にも新たな理解が展開するような、そのような傾聴のクリエイティブな側面が体験できるようにと期待して（願って）、Part 1 とPart 2 の両方で一つのワークとした。架空事例中でもS9でオレンジの画用紙を使ったことは単に「意外」

として表されていたけど、L10で聴き手が「じっくり」しているのかを確認したところ、S10では当初思っていた「意外」な理由を再生するように話す中で、オレンジの画用紙の「オレンジ」はなぜなのか…という吟味に至っている。最初のS9の「意外」ではオレンジの画用紙だということであったが、次のS10ではオレンジの画用紙の「オレンジ」が意外になり、より詳細な吟味がなされている。この架空事例中ではその点はわからないままであったが、この「オレンジ」の吟味がなされ、オレンジに含まれる意味が明らかになると、話し手なりのそとづらの良さについての意味合いがより明確になり、話し手の自己理解や聴き手の話し手らしさの理解がより進んだり深まったりする可能性があるだろう。このような体験が必ず生起するわけではないと思われるが、生起する可能性や生起した結果起こる傾聴のクリエイティブな側面への理解がなされる可能性を含めるためには、Part 1 とPart 2 で一つのワークとして実施することが望ましいだろう。

対面授業時に行われていた「セルフ・バッグ」と「野菜フォーカシング」をそのままオンライン授業として実施することの難しさを解消しつつ、同様の学習効果が期待できるワークとして本ワークは考案された。実施した後のふりかえりやゼミ生と実際に実施した様子を踏まえると、対面授業時に行われていた2つのワークのねらいとされていたことが体験されているように見受けられた。今後実践が繰り返され、実施上の留意点や改善点が見出さされることで、より良いワークとなればと考える。

## 引用文献

- 青木 剛 (2020). 「最近の私ってキュウリやねん」への傾聴から学ぶフォーカシング指向リスニングワーク. 人間関係研究, **19**, 110-122.
- Ikemi, A., Yano, K., Miyake, M., Matsuoka, S. (2007). Experiential Collage Work: Exploring Meaning in Collage from a Focusing-Oriented Perspective. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **25**(4), 464-475.
- Rappaport, L. (2008). *Focusing-Oriented Psychotherapy*. Jessica Kingsley.

## 私をあらわすオブジェづくり

ねらい：

自分自身を表現してみることによって、自分の持っているさまざまな面に気づく。  
自分の意識層・無意識層にふれてみる。

手 順：

1. 自分の表面、裏面、内面、可能性などを考えてみる。その際、言葉ではなく何となくの感じとしてしかわからないものでも構わない。とにかく、じっくりふりかえりとらえてみる。

10分

2. 「1.」でとらえられたものをあらわすことができそうな素材を集める。

質感や形、雰囲気など、さまざまな側面について確かめながら自分自身をあらわすオブジェを作成する。

この作業は、一人になって、無言で行う。

早々に作り終えても、それでじっくりくるか確かめてみること。

60分

3. ふりかえりの項目1、2、3の記入。

4. 完成した作品を様々な角度から撮影する（最低でも3種類は撮る）。

## 資料2

### 自主課題用紙 私をあらわすオブジェを作ってみて

1. できあがった「私をあらわすオブジェ」を見て……

・全体的な印象は……

・私がびったり表れているところは……

・私にとって意外なところは……

2. 「私をあらわすオブジェ」を作っている時の自分について気づいたことは……

3. オブジェの名前もしくはタイトル

4. オブジェの写真をさまざまな角度から撮り(最低でも3種類)、授業を受ける際に使用している機器(パソコンやタブレットなど)に保存し、授業中にZoomの画面共有の機能を使って画像を共有できるようにしておくこと。

## 傾聴手順書

### 1. 役割決め

役割①：オブザーバー（観察者）

観察者として話し手の話を聴き、話し手を理解しようと努める。

その際、自分が気になった点や、聴き手だったらこんなこと聴きたいなということをメモ。

15分の最後の5分で気になった点や聴きたいと思った点について聞いてみるができる。

役割②：話し手

まずはオブジェの全体像が見える画像を表示させオブジェの名前やタイトルを伝える。

その後オブジェについて撮った画像や自主課題用紙の「2」を使いながら聴き手に伝える。

最後に画像や自主課題用紙の「1」を使いながら聴き手に伝える。

役割③：聴き手

話し手について聴き手が理解しようと努める。

理解するための質問は可。

ただし、質問がメインにならないように質問の後は傾聴を丁寧にしていくことを心掛ける。

1 巡目

2 巡目

3 巡目

Aさん	オブザーバー	→	聴き手	→	話し手
Bさん	話し手	→	オブザーバー	→	聴き手
Cさん	聴き手	→	話し手	→	オブザーバー

### 2. 15分間の傾聴

基本的に… 最初の10分は話し手と聴き手の2者で傾聴を行う。

10分経ち、きりのいいところで聴き手からオブザーバーに「オブザーバーから何かありますか?」と尋ね、オブザーバーから話し手に確認や質問などをしてもらい、話し手と聴き手でグループでの傾聴を行う。

### 3. 5分間のふりかえり

進行役：オブザーバー

①まずは、オブザーバーから感想やフィードバック

②次に、聴き手

③最後に話し手

※ ただし、その役割の人しか話してはいけないということではない。

それぞれの役割の人が話している最中に、「それってどういうこと?」「私にとっては～と感じられた」などと、適宜会話をしながら進めてください。



■■ 資料

## 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2020)

坂 中 正 義

(南山大学人文学部心理人間学科)

### 要約

本論文は、2020年に発表された、わが国におけるパーソンセンタード・アプローチ関連の文献リストである。文献は、非指示的カウンセリング、来談者中心療法、パーソンセンタード・カウンセリング、パーソンセンタード・セラピー、パーソンセンタード・アプローチ、ベーシック・エンカウンター・グループ、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、積極的傾聴法等に関するものである。収録は「来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング」「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」「ベーシック・エンカウンター・グループ」「その他」ごとに、A.書籍、B.研究論文、C.学会発表、D.翻訳、E.海外文献紹介、F.書評のジャンルに分けて行っている。

キーワード：来談者中心療法、パーソンセンタード・カウンセリング、パーソンセンタード・セラピー、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、ベーシック・エンカウンター・グループ、パーソンセンタード・アプローチ、文献リスト

### はじめに

筆者は、わが国におけるパーソンセンタード・アプローチの研究および実践を振り返り、今後の発展のための課題探索の1つの手がかりを提供するため、次のような文献リストを作成した。

1. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト ―ロジャース選書及び全集― 九州大学心理臨床研究, 17,

113-121.

2. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（～1969） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 2, 9-31.
3. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1970～1974） 福岡教育大学「教育実践研究」, 6, 81-88.
4. 坂中正義 1998 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1975～1979） 福岡教育大学「教育実践研究」, 6, 89-98.
5. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1980～1984） 福岡教育大学紀要（教職科編）, 48, 195-214.
6. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1985～1989） 福岡教育大学「教育実践研究」, 7, 115-132.
7. 坂中正義 1999 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1990～1994） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 3, 13-51.
8. 坂中正義 2000 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（1995～1999） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 4, 13-55.
9. 坂中正義 2001 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2000） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 5, 23-56.
10. 坂中正義 2002 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2001）—第Ⅰ部：来談者中心療法— 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 6, 51-68.
11. 坂中正義 2002 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2001）—第Ⅱ部：ベーシック・エンカウンター・グループ、第Ⅲ部：体験過程療法・フォーカシング、第Ⅳ部：その他— 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 6, 69-85.
12. 坂中正義 2003 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2002） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 7, 1-22.
13. 坂中正義 2004 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2003） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 8, 31-50.
14. 坂中正義 2005 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2004） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 9, 17-36.
15. 坂中正義 2006 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2005） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 10, 1-24.
16. 坂中正義 2007 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2006） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 11, 1-20.
17. 坂中正義 2008 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2007） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 12, 1-24.
18. 坂中正義 2009 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（2008） 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 13, 9-29.

19. 坂中正義 2010 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2009) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 14, 27-50.
20. 坂中正義 2011 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2010) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 15, 29-50.
21. 坂中正義 2012 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2011) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 16, 1-20.
22. 坂中正義 2013 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2012) 福岡教育大学「心理教育相談研究」, 17, 1-23.
23. 坂中正義 2014 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト (2013) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 13, 231-255.
24. 坂中正義 2015 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2014) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 14, 231-255.
25. 坂中正義 2016 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2015) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 15, 105-134.
26. 坂中正義 2017 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2016) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 16, 111-139.
27. 坂中正義 2018 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2017) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 17, 97-130.
28. 坂中正義 2019 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2018) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 18, 115-137.
29. 坂中正義 2020 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2019) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 19, 123-149.

本論文では、これらの論文の続編として、2020年の日本におけるパーソンセンタード・アプローチ関連の文献リストを作成する。また、これまでのリストに漏れていたものを追録する。

## 方法

2020年に発行されたパーソンセンタード・アプローチ関連の以下のようなキーワードが論じられている文献が収集された。

非指示的カウンセリング、来談者中心療法、パーソンセンタード・カウンセリング、パーソンセンタード・セラピー、パーソン・センタード・アプローチ、ベーシック・エンカウンター・グループ、フォーカシング、体験過程療法、フォーカシング指向心理療法、積極的傾聴法、人間中心の教育等。

分類方法は、文献を「来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング」「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」「ベーシック・エンカウンター・グループ」「その他」の4部に分類し、それぞれ、A.書籍、B.研究論文<sup>1</sup>、C.学会発表、D.翻訳、E.海外文献紹介、F.書評に分けて収録した。さらに、各部ごとに2020年の動向や代表的な文献を紹介した。

文献は、できるだけ手広く収集を努めたが、不備も予想される。それらについては、指摘をまって、今後の文献リストシリーズの中で、訂正、追加、補足したい。

## 第I部：来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング

「第I部：来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング」には関連文献のうち、来談者中心療法、来談者中心遊戯療法、パーソンセンタード・セラピーといった個人カウンセリングや「自己一致」「共感的理解」「無条件の積極的関心」「アクティブリスニング」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した。

2020年の概要は次のとおりである。「A.書籍」は2本であった。「B.研究論文」は6本であった。「C.学会発表」は7本で、そのうち1つがシンポジウムであった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」は1本であった。「F.書評」は1本であった。

2020年における「来談者中心療法」の特徴は、ワークショップ等の体験に関わる文献とカウンセリング初学者をターゲットにした文献が刊行されたことであろう。

ワークショップの体験に関わる文献はB-1、B-3、B-4、C-5などである。カウンセリング初学者をターゲットにした文献は、C-1、C-7である。また、B-1、B-3等のワークショップは初学者をターゲットにしており、その意味ではこれらの文献もあげられる。パーソンセンタードをオリエンテーションとするカウンセリングをどのように伝え、セラピストをどのように育成するかはこの領域の1つのテーマといえよう。これらの文献はこのテーマをさらに深める素材となりえよう。また、パーソンセンタード・セラピストは自身のありようを問うことが求められる。その視点に立てば、C-3やC-6もセラピスト育成といったテ

---

<sup>1</sup> 研究論文には便宜上、ニュースレター等も含めている。

マの連続線上にあるといえよう。

#### A.書籍

1. 東 斉彰 2020 精神分析、パーソンセンタード・アプローチ、ブリーフセラピーと認知療法—他学派にこそ役立つ認知療法— 「心理療法・カウンセリングに生かす認知療法—統合的認知療法の実際—」誠信書房, 序章, 3-7.
2. 東 斉彰 2020 心理療法の各学派における治療理論—精神分析、行動療法、パーソンセンタード・アプローチ、ブリーフセラピーを中心に— 「心理療法・カウンセリングに生かす認知療法—統合的認知療法の実際—」誠信書房, 第1章, 8-16.

#### B.研究論文

1. 板橋真由美 2020 「《パーソンセンタード・アプローチPCA》を体験的に学ぶ」を受講して 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 1-2.
2. 久羽 康 2020 パーソンセンタード・アプローチと「問う力」「聴く力」 臨床心理学, 20(4), 389-392.
3. 前濱祥子 2020 《パーソンセンタード・アプローチPCA》を体験的に学ぶに参加して 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 3.
4. 中田行重・上西裕之・斧原 藍・小野真由子・本山智敬・David Murphy 2020 David Murphy Osaka Workshopからの学び：日本の PCTの今後について 関西大学心理臨床センター紀要, 11, 57-66.
5. 日本カウンセリング研究会本部 2020 ワークショップを終えて感想・気づき等アンケート 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 4-5.
6. 坂中正義 2020 日本におけるパーソンセンタード・アプローチに関する文献リスト (2019) 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 19, 123-149.

#### C.学会発表

1. 三國牧子 2020 カウンセリング理論教授法—Rogersの6条件の教え方から— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 50.
2. 永野浩二 2020 自分自身を生きることの意味～パーソンセンタード・カウンセリングの事例を通して～ 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 43.
3. 日本人間性心理学会第39回大会 2020 自主シンポジウム：臨床家としての Personal Developmentを考える 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 37.

司会（永野浩二）

企画者（永野浩二・河 俊博・本山智敬・森川友子）

4. 奥井智一郎 2020 教員採用試験におけるクライアント中心療法—2014年～2019年の教員採用試験の教職教養問題を対象として— 日本心理臨床学会第39回大会発表論文集, 242.
5. 小野真由子・斧原 藍・並木崇浩・山根倫也・白崎愛里・中田行重 2020 PCA-Kansaiにおける活動と学びの体験報告 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 70.
6. 田中将司 2020 プレイセラピーにおけるセラピストの態度—パーソンセンタードアプローチに基づく再考— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 41.
7. 山根倫也 2020 パーソンセンタード・セラピストに専門的知識は不要なのか—クライアントと出会う“準備”という観点から— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 45.

#### D.翻訳

〔該当文献なし〕

#### E.海外文献紹介

1. 山根倫也・小野真由子・中田行重 2020 Person-Centered Therapyのエビデンス：Elliott, Watson, Greenberg, Timulak, & Freire (2013) の メタ分析の紹介から 関西大学心理臨床センター紀要, 11, 77-86.

#### F.書評

1. 平木典子 2020 「飯長喜一郎・園田雅代編 2019『私とパーソンセンタード・アプローチ』新曜社」 精神療法, 46(1), 125.

付：同リスト（～2019）

〔第I部：来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング〕の追録

#### A.書籍

〔該当文献なし〕

#### B.研究論文

1. 堀尾直美 2018 公認心理師・臨床心理士の実践知を看護に活かす！ ナースが使える臨床心理の知識・技法（第6回）来談者中心療法とその展開（ロジャーズとジェンドリン） 月刊ナーシング, 38(10), 112-115.
2. 細田憲一 2013 摂食障害と向き合う—空洞化したモラトリアムを生きる—

CAMPUS HEALTH, 50(2), 97-102.

3. 宮前 理 2019 「来談者中心療法」の理論と実践 東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要, 50, 161-170.
4. 岡村達也 2015 ロジャーズとクライアント中心療法（特集：精神療法における治療者の心性）精神療法, 41(5), 686-691.
5. 徳田完二 2017 「教育相談」における課題：カウンセリングとは何かについてどう教えるか 同志社大学教職課程年報, 7, 44-54.
6. 渡邊孝憲 2019 来談者中心療法における「受容」（特集 学校健康相談における「受容」）学校健康相談研究, 16(1), 10-24.

### C.学会発表

1. 堀井 翼・櫻井義尚・櫻井恵里子・鶴田節夫 2019 来談者中心療法を用いたカウンセリングシステムの性能比較 情報処理学会第81回全国大会講演論文集, 771-772.

### D.翻訳

〔該当文献なし〕

### E.海外文献紹介

1. 中田行重・秋山有希・大田由佳・大谷絵里・中森涼太 2016 体験的療法はクライアント中心療法からの新たな発展か：Lietaer（1998）の紹介と考察 関西大学臨床心理専門職大学院 心理臨床センター「関西大学心理臨床センター紀要」, 7, 111-120.

### F.書評

〔該当文献なし〕

## 第Ⅱ部：体験過程療法・フォーカシング指向心理療法

「第Ⅱ部：フォーカシング指向心理療法・体験過程療法」には関連文献のうち、体験過程療法やフォーカシング、フォーカシング指向心理療法、「体験過程」「フェルトセンス」「シフト」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した。

2020年の概要は次のとおりである。「A.書籍」はなかった。「B.研究論文」は32本であった。「C.学会発表」は12本であった。「D.翻訳」は1本であった。「E.海外文献紹介」はなかった。「F.書評」はなかった。

2020年における「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」の特徴は、学会奨励賞受賞記念講演であるC-3、C-7、BionとGendlinの理論の異同を検討

したB-10が刊行されたことであろう。

C-3は日本人間性心理学会、C-7は日本心理臨床学会で学会奨励賞の受賞記念講演である。異なる学会でフォーカシングに関わる研究者が奨励賞を受賞するという事は、例年この領域の文献は多数発行されていることもあわせて、この領域の研究が活性化している傍証といえよう。

このうち、C-3の久羽 康氏がBionとGendlinの理論についてその共通点と相違点を検討したのが、B-10である。氏も述べているとおり、異なる立場や理論とパーソンセンタード・アプローチを比較検討することはパーソンセンタード・アプローチの展開において重要な示唆を与えてくれる。第1部のA-1、A-2は認知療法からの同様の試みといえよう。

なお、2020年は「人間性心理学研究」に1本（B-10）、関連文献が掲載された。また、「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」の文献は、日本フォーカシング協会ニューズレター「The Focuser's Focus」にコンスタントに発表されている。

## A.書籍

〔該当文献なし〕

## B.研究論文

1. 阿部利恵 2020 研究者の数珠つなぎ：身体 フォーカシング 妄想=ひとりでゆったり・みんなとゆったり The Focuser's Focus, 22(4), 14-16.
2. 青木 剛 2020 「最近の私ってキュウリやねん」への傾聴から学ぶ フォーカシング指向リスニングワークー 南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」, 19, 110-122.
3. 土井晶子 2020 国際交流コーナー：新たなレジェンドの誕生！—第2回アジア・フォーカシング国際会議@上海の思い出 The Focuser's Focus, 22(4), 17-18.
4. 芳賀朋子 2020 プレゼンスと共感で動く The Focuser's Focus, 23(2), 5.
5. 堀尾直美 2020 国際交流コーナー：＜感想＞フォーカソン (Focus-a-thon) 日本語向け時間 The Focuser's Focus, 23(2), 13-14.
6. 泉屋昌平 2020 「早期の自己」と出くわす The Focuser's Focus, 23(2), 6.
7. 菊池幸子 2020 生き方や関係性に示唆 The Focuser's Focus, 23(2), 5-6.
8. 吉良安之 2020 研究者の数珠つなぎ：日常生活のなかのフォーカシング体験 The Focuser's Focus, 23(3), 8-10.
9. 小坂淑子 2020 国際交流コーナー：新しい“時空間” The Focuser's Focus, 23(3), 12-13.
10. 久羽 康 2020 Bion理論のパーソン・センタード・アプローチにおける可能性—Gendlin理論との関連から— 人間性心理学研究, 38(1), 41-51.



11. 李明 2020 国際交流コーナー：フェルトセンスから直照合体へ The Focuser's Focus, 23(1), 4-9.
12. 望月秋一編大月かおり・永野順子・T.Y. 2020 紅葉フォーカシング& PCA ワーク2019—感想と振り返り— The Focuser's Focus, 22(4), 6-8.
13. 望月秋一 2020 実存と観照フォーカシング The Focuser's Focus, 22(4), 9-12.
14. 宮川睦子 2020 日常の暮らしの中にあるフォーカシング～Sちゃんの発見～ The Focuser's Focus, 23(2), 4-5.
15. 大田民雄 2020 私はチリのセルジオ・ララ氏の文書を読んで驚嘆しました。 The Focuser's Focus, 23(3), 7.
16. 大月かおり 2020 Web学習会で共に学ぶ The Focuser's Focus, 23(2), 7.
17. 酒井久実代 2020 インタラクティブ・フォーカシングとフォーカシング・ショートフォーム The Focuser's Focus, 22(4), 12-13.
18. 桜井多恵子 2020 国際交流コーナー：第二回アジア国際フォーカシング会議 (AFIC) 備忘録 The Focuser's Focus, 22(4), 19.
19. 桜井多恵子 2020 国際交流コーナー：「池見陽フォーカシング」満載のワークショップ The Focuser's Focus, 23(2), 12.
20. 笹田晃子 2020 子どもとフォーカシング：マルタ・スタベルツに感謝をこめて The Focuser's Focus, 23(1), 3-4.
21. 笹田晃子 2020 国際交流コーナー：<Weeklong感想>勢いで参加してしまいました！—偶然の出会いも楽しかったです— The Focuser's Focus, 23(3), 11-12.
22. 笹田晃子 2020 子どもとフォーカシング：マルタ・スタベルツを偲んで The Focuser's Focus, 23(2), 3-4.
23. 笹田晃子・大澤三枝子編 2020 アン・ワイザー・コーネルのビデオセミナー『停止したプロセス、トラウマの癒し、内側との関係 (Stopped Process, Healing Trauma, and Inner Relationship)』に参加して The Focuser's Focus, 23(2), 5-8.
24. 島袋みどり・桑野浩明 2020 小学校教職員の心理的緩和法としてのフォーカシングの適用 東亜大学大学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 71-82.
25. 白岩紘子 2020 子どもとフォーカシング：「ミラーリングについて」・・秋の夜なが、徒然なるままに・・ The Focuser's Focus, 23(3), 5-6.
26. 高橋寛子 2020 研究者の数珠つなぎ：私はフォーカシングをどのように生き、心理臨床や研究に活かしてきたのだろうか？ The Focuser's Focus, 23(2), 8-11.
27. 土江正司 2020 国際交流コーナー：進むフォーカシングと仏教の融和—第2回アジア国際フォーカシング会議より— The Focuser's Focus, 22(4), 18-

- 19.
28. 筒井優介 2020 国際交流コーナー：フォーカシング×マラソン＝フォーカソン The Focuser's Focus, 23(2), 13.
29. 上村英生 2020 途中で何度も聴く The Focuser's Focus, 23(2), 6-7.
30. 山岡俊英 2020 状況を生きるからだ～自身のプロセスに深く The Focuser's Focus, 23(2), 7-8.
31. 矢野キエ 2020 子どもとフォーカシング：大切なことを心にとめて—マルタ・スタベルツの計報に接して— The Focuser's Focus, 22(4), 5-6.
32. 吉澤良子 2020 フォーカシングサンガ@東京 体験レポート The Focuser's Focus, 22(4), 13-14.

### C.学会発表

1. 青木 剛・小中萌愛・松下ひかり・伊藤佐和子 2020 2019年度南山大学青木ゼミ卒業論文の概観 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 48.
2. 伊藤研一 2020 大会主催ワークショップ：やさしいフォーカシング—対人援助職に役立ちます— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 27.
3. 久羽 康 2020 学会奨励賞受賞記念講演：臨床と有機体、主体、応答性 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 20.
4. 真澄 徹 2020 児童養護施設心理士におけるセラピストフォーカシングの意味 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 52.
5. 岡村心平 2020 テキストマイニングを用いたFocusing第1版・第2版の改訂内容の検討：cruxの使用法に着目して 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 42.
6. Parker, R. (小坂淑子・日笠摩子訳) 2020 大会主催講演：Focusing Oriented Psychotherapy and Complex Trauma (フォーカシング指向心理療法と複雑性トラウマ) 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 16-17.
7. 櫻本洋樹 2020 奨励賞受賞者講演2：セラピストが自身のフェルトセンスに開かれたあり方の治療的意義—こころそしてフェルトセンスという無形の富— 日本心理臨床学会第39回大会発表論文集, 4.
8. 舎川優悟 2020 フォーカシング版プロセススケール作成の試み 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 55.
9. 高沢佳司・中山 真 2020 フォーカシング中の解釈レベルを測定する試み 日本パーソナリティ心理学会第29回大会プログラム, 19.
10. 田中秀男 2020 フェルトセンスへの創造的廻行を介した言明間の移行：ジェンドリンのプラトンの対話篇注釈を手引きとして 日本人間性心理学会第39

回大会プログラム・発表論文集, 47.

11. 山本志帆 2020 ヨガフォーカシングの開発と適用についての検討 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 66.
12. 矢野キエ 2020 フォーカシングを用いた保育者の応答に関する探索的研究—子どもの話を聴くこと、表現を促すこと— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 44.

#### D.翻訳

1. Conell, A.W. (久羽 康訳) 2020 国際交流コーナー：Report from Shanghai Asia international Conference The Focuser's Focus, 22(4), 17.

#### E.海外文献紹介

[該当文献なし]

#### F.書評

[該当文献なし]

付：同リスト（～2019）

「第Ⅱ部：体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」の追録

#### A.書籍

[該当文献なし]

#### B.研究論文

1. 安藤智英美 2014 連絡帳を用いた担任と保護者のコミュニケーションに関する質的研究 授業実践開発研究, 7, 61-70.
2. 青木 剛 2016 フォーカシング的態度に関する研究—その尺度研究と臨床応用について— 関西大学学位論文
3. 近田輝行 2014 半構造化した描画課題による新たなclearing a spaceの試み：「公園のベンチ」 東京女子大学紀要論集, 61(1), 133-146.
4. 崔チャン・根本真理子・池見 陽 2017 韓国語版EXPチェックリストの試作過程及び体験過程の推定に参照される非言語的表現をめぐって 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 49-56.
5. 羽田野暎子 2015 自分の特徴を振り返るツールとしてのカンバセーション・ドロ잉：前反省的な体験を反省的に覚知する 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 5, 19-27.
6. 平野智子・池見 陽 2013 産業保健師のメンタルヘルス：フォーカシングを用いた対人援助職支援の試み 第49回日本心身医学会近畿地方会演題抄録,

- 53(1), 76.
7. 池見 陽 2015 心のメッセージを聴くために 日本糖尿病教育・看護学会誌, 19(1), 38-41.
  8. 池見 陽 2018 複雑に布置された全体は動きを指し示している 大阪経大論集, 6, 81-96.
  9. 稲垣応顕・松井理納・犬塚文雄 2016 感情表出トレーニングの理論的検討：そのねらいと効果の過程に着目して 上越教育大学研究紀要, 35, 11-21.
  10. 井野めぐみ 2015 夢フォーカシングではどのように夢とかかわるのか：応答分類による研究 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 5, 63-71.
  11. 伊藤研一 2015 「逆転移」感得と吟味の練習法としてのインタラクティブ・フォーカシング：初心心理臨床家のために 学習院大学紀要「人文」, 3, 117-126.
  12. 伊藤義美 2015 ぎふ・長良川フォーカシング・ワークショップの実践：長良川方式の事例研究 人間環境大学「人間と環境」, 9, 45-60.
  13. 伊藤研一 2016 ロジャーズは中核条件で何をめざしたのか：来談者中心療法とフォーカシング、そして心理療法 学習院大学紀要「人文」, 14, 149-167.
  14. 伊藤義美 2016 セルフヘルプ技法としての心のつぼフォーカシング (KFT) 人間環境大学「人間と環境」, 12, 12-24.
  15. 伊藤義美 2016 セルフヘルプ技法としての風景天気図フォーカシング (VOMF) について 人間環境大学「人間と環境」, 7, 10-21.
  16. 伊藤義美・寺田節子 2017 興味深い進展を示した初心者のフォーカシング・セッション 人間環境大学「人間と環境」, 8, 37-51.
  17. 伊藤義美 2019 フォーカシング指向グループアプローチ (FOGA) を用いた保護者への心理教育プログラム 人間環境大学「人間と環境」, 10, 1-8.
  18. 伊藤研一・西澤善子 2017 主体から切り離された身体感覚とフェルト・センス 学習院大学人文科学研究所「人文」, 15, 57-69.
  19. 城一道子 2016 フォニックス・ライム・チャンツ・歌を活用した発音指導の教育効果：TAE (Thinking at the Edge) を応用した分析 江戸川大学教職課程センター紀要「教育総合研究」
  20. 筧 愛 2015 手のワークとアート・プレゼントによる気持ちの変化の一考察 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 5, 83-90.
  21. 上條晴夫 2018 教材開発：連詩の持つ学びの意味・学びのしかけ 教職研究 2017, 123-134.
  22. 鹿島田景子 2016 箱庭療法とフォーカシングの統合的方法 (Sandplay Technique & Focusing : STF) の試み：からだによる箱庭解釈 学習院大学人文科学論集, 25, 237-258.
  23. 糟谷千香江・村田ひろみ・河瀬未来世・河津 巖 2018 発達障害児を持つ

- 母親の時間的展望の変化：「人生紙芝居」を用いた自伝的語りの再構成 九州ルーテル学院大学人文学部心理・教育・福祉研究, 17, 11-19.
24. 小林孝雄 2016 ロジャーズ理論から見たセラピスト・フォーカシングの意義 生活科学研究, 38, 89-98.
  25. 小泉隆平 2017 フォーカシング指向心理療法におけるクリアリング・ア・スペースの活用について：Thinking Aboutという技法を巡って 近畿大学総合社会学部紀要, 6(1), 21-39.
  26. 小松原智子 2014 キャリア教育における自己理解・表現を豊かにする試み：「字フォーカシング」の活用事例から 中京大学教師教育論叢, 4, 175-188.
  27. 久保田恵実・池見 陽 2017 体験過程様式の推定に関する研究：EXPチェックリストⅡ ver.1.1作成の試み 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 57-65.
  28. 栗野理恵子 2016 フォーカシング指向音楽聴取がもたらす体験過程：聴取音楽の感情価と好みの影響 音楽心理学音楽療法研究年報, 45, 34-41.
  29. 栗野理恵子・清水 遵 2016 からだの感じフォーカシングがもたらす心理的生理的効果 愛知淑徳大学論集 心理学部, 6, 1-11.
  30. 栗野理恵子・清水 遵 2017 悲しみ想起後のフォーカシング技法を用いた音楽聴取がもたらす心理・生理的反応②：教示の有無と歌詞の内容の違いによる検討 感情心理学研究, 25 Supplement, 44.
  31. 前田幸恵 2015 体験様式の違いによる語りの様態に関する一研究 立教大学臨床心理学研究, 9, 1-12.
  32. 松本 剛・小橋洋子 2017 小学校教育におけるフォーカシング活動の効果検証のための予備的研究 兵庫教育大学研究紀要, 50, 105-113.
  33. 三村尚彦 2018 詩人のFelt Meaning：荒川修作、マンドリン・ギンスの遺稿研究に向けて 関西大学東西学術研究所紀要, 51, A79-A100.
  34. 三宅麻希 2013 クライアントにとって意外な気づきを促したフォーカシングセッションでの応答の一例—フォーカシングにおけるセラピストの応答の機能についての一考察— 四天王寺大学紀要, 56, 23-32.
  35. 三宅麻希 2015 パターン化された思考へのフォーカシング適用についての一考察 四天王寺大学紀要, 60, 179-190.
  36. 宮本一平 2014 JournalingとInterpersonal Process Recallを応用して自らを振り返り理解を深める試み 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 4, 63-70.
  37. 村上博志 2013 グループ・フォーカシングの特徴に関する研究—参加者の感想シートの分析から— 九州大学心理学研究, 14, 139-147.
  38. 村川治彦 2018 G.R.A.C.E.：コンパッションに基づくケアのトレーニング Cancer Board Square, 4(1), 70-75.
  39. 中島妃佳里 2013 ジャーナリングの意義とその方法 関西大学臨床心理専

- 門職大学院紀要「サイコロジスト」, 3, 21-30.
40. 大橋梨乃・池見 陽 2017 クライエントの体験過程様式の推定値とセラピストが認知した面接経過の関係について 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 39-47.
  41. 岡村心平 2015 Gendlinにおけるメタファー観の進展 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 5, 9-18.
  42. 岡村心平 2017 共に感じること：対人的な相互作用における交差に関する理論的研究 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 29-38.
  43. 押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 2016 テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループ：参加者の体験分析グループ・プロセスに関する仮説生成の試み【第一報】 聖泉大学紀要「聖泉論叢」, 23, 1-12.
  44. 押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 2017 テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループ参加者の体験分析：グループ・プロセスに関する仮説生成の試み【第2報】 聖泉大学紀要「聖泉論叢」, 24, 33-44.
  45. 酒井久実代 2013 感情プロセス認識力と抑うつ・不安との関連性の検討 感情心理学研究, 20, 9.
  46. 酒井久実代・河崎俊博・池見 陽 2017 フェルトセンスの象徴化を含めたフォーカシング的態度の測定：因子構造、性差、および精神的健康の因果モデルによる検討 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 9-18.
  47. 酒井久実代・河崎俊博 2018 振り返り日記が精神的健康に及ぼす効果の検討 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 8, 49-59.
  48. 島田佳栄・緒賀郷志 2014 「こころの風景天気図」がもたらす心理的影響から：フォーカシング的経験の側面から 岐阜大学教育学部研究報告「人文科学」, 62(2), 243-252.
  49. 高橋和子・山本 光 2018 レジリエンスを高める「からだ気づき」の有効性に関する研究：看護専門職の「主体的対話的で深い学び」を通して 日本女子体育連盟学術研究, 34, 17-30.
  50. 竹端佑介・後和美潮 2016 大学生の過剰適応とフォーカシング的態度、身体感覚及び精神的健康との関連性について 学校保健研究, 58(1), 25-32.
  51. 竹端佑介・後和美潮 2018 過剰適応と性格特性が抑うつに与える影響について：大学生を対象にして 大阪国際大学紀要「国際研究論叢」, 31, 7-19.
  52. 竹下健太 2013 フォーカシングと筆記開示法の統合の試み（前編） 平成音楽大学紀要, 13(2), 47-53.
  53. 竹谷美佐子 2013 舞踏の稽古における身体の組織化とフォーカシング 舞

- 踏學2013(36), 94.
54. 竹谷美佐子 2016 舞踏の稽古における身体的思考：身体イメージの再構成を手がかりとして 人体科学, 2(1), 23-33.
  55. 玉澤秀寿・森川友子 2015 大学の講義におけるフォーカシング体験実習にインタラクティブ・フォーカシングを導入する意義についての検討 九州産業大学国際文化学部紀要, 60, 163-174.
  56. 田村眞由美・得丸智子 2016 質的研究におけるTAE (Thinking At the Edge) の分析のプロセスについて：分析者の内省と体験の考察 聖マリア学院大学紀要, 8, 33-40.
  57. 寺脇 梓 2013 フォーカシング的態度の諸側面の検討—フォーカシング的態度尺度作成の試みを通して— 学習院大学人文科学論集, 22, 123-145.
  58. 舍川優吾 2018 フォーカシング領域におけるマインドフルネス：双方の関連性と異同に着目して 九州産業大学大学院臨床心理センター「臨床心理学論集」, 13, 27-33.
  59. 上淵真理江 2017 電話フォーカシングによる社交不安症の大学生との面接過程 共立女子短期大学文科紀要, 60, 1-12.
  60. 上村英生 2018 フォーカシングとTAEを使って書き記すことによる社会の改良 北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要「学校臨床心理学研究」, 15, 41-55.
  61. 山形碧子 2017 ピアノ演奏における体験過程：曲理解の推進とフェルトセンス 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 7, 101-109.
  62. 山内志保 2015 感情体験の象徴化による感情調整に関する一考察 神奈川大学心理相談センター紀要, 7, 9-47.
  63. 矢野キエ 2014 子どもたちへのよりよい関わりを考える：こどもフォーカシングに基づいて 大阪キリスト教短期大学紀要, 54, 139-151.
  64. 矢野キエ 2017 体験過程を推進させる応答：機能する応答としない応答、体験過程流コラージュワークの実践より 大阪キリスト教短期大学紀要, 57, 1-21.
  65. 吉水ちひろ 2017 共感的傾聴トレーニングとしてのインタラクティブ・フォーカシング：大学院授業におけるプログラムの試み 仁愛大学研究紀要(人間学部篇), 16, 33-42.

### C.学会発表

1. 阿世賀浩一郎 1995 Gendlinの体験過程理論によるalexithymia概念の拡張およびその治療的面接場面への適用の実際 心身医学, 35(5)(第70回日本心身医学会関東地方会演題抄録), 431.

#### D.翻訳

〔該当文献なし〕

#### E.海外文献紹介

〔該当文献なし〕

#### F.書評

〔該当文献なし〕

### 第Ⅲ部：ベーシック・エンカウンター・グループ

「第Ⅲ部：ベーシック・エンカウンター・グループ」には関連文献のうち、ベーシック・エンカウンター・グループ、パーソン・センタード・アプローチなどのパーソンセンタードなオリエンテーションにもとづくグループ・アプローチ、「ファシリテーター」「グループ・プロセス」などの基礎概念、歴史、人物等が論じられているものを収録した<sup>2</sup>。

2020年の概要は次のとおりである。「A.書籍」は1本で単行本であった。「B.研究論文」は14本で、そのうち1本が特集であった。「C.学会発表」は8本であった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」はなかった。「F.書評」はなかった。

2020年における「ベーシック・エンカウンター・グループ」の特徴は、この領域の実践と研究を推進してきた人間関係研究会創立50周年記念書籍であるA-1、および同会の学会賞受賞記念シンポジウムの記録であるB-9が刊行されたことであろう。

A-1は、前述のように人間関係研究会創立50周年を記念して刊行された書籍である。本書は2分冊構成で、初学者を読者に想定し、基本概念等を概説した上で、その展開を紹介した「学びの書」と、後述の昨年の日本人間性心理学会での学会賞受賞記念シンポジウムの収録と人間関係研究会ホームページのコラムに会員が寄せたコラムを中心とした「出会いの書」による。これまで同研究会が開拓してきたエンカウンター・グループの実践と研究があればこそその書籍であり読み応えがある。その歩みも年表として収録されており、資料的価値も高い1冊である。

B-13は、昨年の日本人間性心理学会での学会賞受賞記念シンポジウムを元とした特集である。わが国の人間性心理学におけるエンカウンター・グループの重要性、その実践と研究への人間関係研究会の貢献が認められたことによる学会賞受賞であり、今後の同会の活動の発展が期待される。

なお、2020年は「人間性心理学研究」に7本（B-1、B-5、B-6、B-7、B-8、

---

<sup>2</sup> なお、体験過程療法に特化したグループ・アプローチは、第Ⅱ部へ収録されている。



B-9、B-13)、関連文献が掲載された。

## A.書籍

1. 人間関係研究会監修伊藤義美・松本 剛・山田俊介・坂中正義・本山智敬編著 2020 エンカウンター・グループの新展開—自己理解を深め他者とつながるパーソンセンタード・アプローチ— 木立の文庫  
学びの書—考え方と実践—
  - 第Ⅰ部 エンカウンター・グループとは何か?
    - 第1章 エンカウンター・グループの概要とこれまで
    - 第2章 エンカウンター・グループの構造とプロセス
    - 第3章 エンカウンター・グループの今日的意義と適用
    - 第4章 エンカウンター・グループと他のアプローチ
    - 第5章 エンカウンター・グループの研究法と研究動向
  - 第Ⅱ部 エンカウンター・グループの多様な展開
    - 第1章 エンカウンター・グループの諸側面
    - 第2章 さまざまなエンカウンター・グループ
    - 第3章 トレーニングとしてのエンカウンター・グループ
    - 第4章 現代社会とエンカウンター・グループ出会いの書—対話とメッセージ (タテ組み)
  - 第Ⅲ部 エンカウンター・グループの未来を拓く—学会賞受賞記念シンポジウムから—

はじめに

シンポジスト1 人間関係研究会は、生きるエネルギーでした

シンポジスト2 時代とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの

シンポジスト3 エンカウンター・グループのこれからについて考える

指定討論 人間関係研究会の歩み五十年に寄せて

まとめ 次代への継承を期して

総括討論 エンカウンター・グループのフロンティアを探る
  - 第Ⅳ部 一人ひとりの物語—パーソンセンタード・アプローチの声をつむぐ

## B.研究論文

1. 畠瀬直子 2020 シンポジウム 2019 人間性心理学研究, 38(1), 5-6.
2. 廣瀬真由美 2020 看護基礎教育における継続的PCAグループの適用と効果の検討—社会人基礎力の育成と評価— 東亜大学大学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 148-149.

3. 廣瀬真由美 2020 看護基礎教育における継続的PCAグループの適用と効果の検討—社会人基礎力の育成と評価— 東亜大学大学院総合学術研究科修士論文
4. 作田信子 2020 九十九里のエンカウンターでの体験 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 6-7.
5. 松本 剛 2020 序文 人間性心理学研究, 38(1), 1-3.
6. 三國牧子 2020 グループと人間性心理学 人間性心理学研究, 38(1), 65-69.
7. 森岡正芳 2020 他者と出会うこと—エンカウンター・グループの持続する時間— 人間性心理学研究, 38(1), 23-28.
8. 本山智敬 2020 エンカウンター・グループの今後の展開に向けて 人間性心理学研究, 38(1), 15-22.
9. 日本人間性心理学会編 2020 特集1：第13回学会賞シンポジウム「未来を紡ぐ人間関係研究会の歩み」 人間性心理学研究, 38(1), 1-28.  
 序文 (松本 剛)  
 シンポジウム 2019 (畠瀬直子)  
 時代の変化とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの—人間関係研究会第二世代として— (高松 里)  
 エンカウンター・グループの今後の展開に向けて (本山智敬)  
 他者と出会うこと—エンカウンター・グループの持続する時間— (森岡正芳)
10. 日本カウンセリング研究会本部 2020 エンカウンター・グループに参加しての感想 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 8.
11. 野島一彦・坂中正義 2020 わが国の「集中的グループ経験」と「集団精神療法」に関する文献リスト (2019) 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 16, 3-29.
12. 作田信子 2020 「エンカウンター・グループ (九十九里)」に参加して 日本カウンセリング研究会本部2019年度会報「ゆすらうめ」, 5.
13. 高松 里 2020 時代の変化とエンカウンター・グループ、そして変わらぬもの—人間関係研究会第二世代として— 人間性心理学研究, 38(1), 7-13.
14. 吉田由美・重松初代香・原口淑子・古谷 浩・中山幸輝・村山正治 2020 看護学生の入学初期に実施した1泊2日のPCAGの効果測定と今後の課題—過去3年分のデータをもとに— 東亜大学大学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 43-48.

### C.学会発表

1. 金子周平・古賀なな子 2020 ファシリテーター訓練におけるメンバー体験と体系的訓練の効果の比較 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 64.
2. 松井幸太 2020 自然体験活動を通じたエンカウンターグループにおける成

長と課題—参加者の体験過程と中途離脱者の体験過程に着目して— 日本心理臨床学会第39回大会発表論文集, 85.

3. 松本 剛・三國牧子 2020 大会主催ワークショップ：ベーシックエンカウンターグループ 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 31.
4. 新村信貴 2020 家族エンカウンター・グループの機能と経年参加者のニーズに関する一考察—自然な対話と成長への気付き— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 49.
5. 大谷桃子 2020 青年期女性における生きづらさを話し合う会の実践と検討 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 54.
6. 山郷志乃美 2020 エンカウンター・グループにおける自己変容に寄与した体験の検討—体験記録を分析して— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 53.
7. 清水幹夫 2020 大会主催ワークショップ：自己生成プロセスワークパーソンセンタードセラピストを志向する方々のために— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 29.
8. 首藤和佳子・小池有紀・内田尚宏 2020 エンカウンター・グループの事前準備における幹事の役割に関する一考察 日本心理臨床学会第39回大会発表論文集, 287.

#### D. 翻訳

[該当文献なし]

#### E. 海外文献紹介

[該当文献なし]

#### F. 書評

[該当文献なし]

付：同リスト（～2019）

「第三部：ベーシック・エンカウンター・グループ」の追録

#### A. 書籍

1. 國分久子監修國分康孝著 2018 構成的グループエンカウンターの実践と方法：半世紀にわたる研究成果と継承 金子書房  
まえがき  
序 章 私の人生にSGEはどう生かされたか  
第1章 エンカウンターの意味  
第2章 自己開示とシェアリング

第3章	S G Eの思想と理論的背景
第4章	S G Eの方法と技法
第5章	教育カウンセラーにとってのS G E
第6章	子どもにとってのS G E
第7章	S G Eリーダーの心得
第8章	教育カウンセリング理論とS G E
第9章	S G E後継者へ捧ぐ——S G E理論総説
	あとがき

## B.研究論文

1. 松井幸太 2019 自然体験活動を通じたエンカウンターグループの試み：参加者のふりかえりと自己成長性および自己効力感からの検討 関西国際大学研究紀要, 20, 109-126.
2. 松本千尋 2019 非構成的エンカウンターグループ参加体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 79-84.
3. 三浦文子 2019 既知集団の大学生を対象とした授業での構成的エンカウンター・グループに関する一考察：プログラムとプロセスの視点から 文教大学「人間科学研究」, 40, 13-24.
4. 水野邦夫・中地展生他 2018 構成的グループ・エンカウンターへの満足度と感情変化について—自発参加・単発型の場合— カウンセリング研究 (増刊号), 51, 35.
5. 村山正治 2009 いじめの予防：ポジティブフィードバックの意義—PCAグループからのアプローチ— 子どもの心と学校臨床, 11, 遠見書房.
6. 西野秀一郎 2018 臨床心理士を目指す大学院生の継続型ベーシック・エンカウンター・グループ体験による心理的効果の研究—アイデンティティの模索の促進に焦点を当てて— 跡見学園女子大学附属心理教育相談室紀要, 14, 67-79.
7. 西野秀一郎・高橋由梨他 2019 自己生成プロセスワーク体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 57-70.
8. 野島一彦 2018 三タイプのエンカウンター・グループについての検討 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 14, 3-8.
9. 野島一彦 2019 エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの事例研究 (1980) 野島一彦教授日本心理臨床学会学会賞受賞記念誌, 30-50.
10. 野島一彦 2019 エンカウンター・グループ・プロセス論 (1982) 野島一彦教授日本心理臨床学会学会賞受賞記念誌, 51-64.
11. 野島一彦 2019 エンカウンター・グループにおける個人過程—概念化の試み— (1983) 野島一彦教授日本心理臨床学会学会賞受賞記念誌, 65-73.
12. 野島一彦 2019 エンカウンター・グループ研究の三本柱を語る 野島一彦

教授日本心理臨床学会学会賞受賞記念誌, 75-81.

13. 野島一彦 2019 「3タイプのエンカウンター・グループ・シリーズ体験プログラム」の実践と検討 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 3-7.
14. 大橋佳奈 2018 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談室紀要, 14, 123-135.
15. 大脇百合子 2007 看護職者の職場内エンカウンター・グループにおける体験—グループ参加者の気持ちの変化に着目して— 日本看護管理学会誌, 11(1), 20-29.
16. 櫻井信也 2018 エンカウンター・グループの発達の、治療的意義—あるグループの事例を通して— 神奈川県立外語短期大学紀要 総合編, 28, 63-77.
17. 山口豊一・山本絵梨他 2019 中学生に対する構成的グループ・エンカウンターを用いた効果研究—固定化された人間関係において— 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 43-56.
18. 鐘水翔太 2019 ベーシック・エンカウンター・グループ体験の報告と考察 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 85-90.
19. 鐘水翔太 2019 学習塾講師を対象とした構成的グループエンカウンターによる自尊感情育成の研究 跡見学園女子大学心理学部紀要, 1, 143-152.

#### C.学会発表

1. 日本人間性心理学会第37回大会 2018 ワークショップ：3タイプのエンカウンター・グループ・ファシリテーターの理論と実際 日本人間性心理学会第37回大会プログラム・発表論文集, 32.  
講師（野島一彦）
2. 野島一彦 2018 3タイプのエンカウンター・グループについての検討 日本集団精神療法学会第35回大会抄録集, 34-35.
3. 野島一彦 2019 3タイプのエンカウンター・グループをシリーズとして体験するプログラムの実践と検討 日本集団精神療法学会第36回大会抄録集, 36.

#### D.翻訳

〔該当文献なし〕

#### E.海外文献紹介

〔該当文献なし〕

#### F.書評

1. 神田橋條治 2015「村山正治編著 2014『「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門—新しいエンカウンターグループ法—』創元社」こころの科学, 181, 日本評論社, 103.

## 第Ⅳ部：その他

「第Ⅳ部：その他」には関連文献のうち、親子関係・家庭生活、教育・学習（学生中心の教授法や人間中心の教育など）等の来談者中心のオリエンテーションの広がりやその基礎概念、歴史、人物等、また、表現療法などのこれまでの3部には分類されないものを収録した。

2020年の概要は次のとおりである。「A.書籍」は1本で単行本であった。「B.研究論文」は3本で、そのうち1つが特集であった。「C.学会発表」は4本で、そのうち3つがシンポジウムであった。「D.翻訳」はなかった。「E.海外文献紹介」はなかった。「F.書評」はなかった。

2020年における「その他」の特徴は、長年、学校臨床心理士ワーキンググループ代表であった村山正治氏の代表退任記念講演を軸としたスクールカウンセリングに関わる論文集であるA-1が刊行されたことであろう。50年にわたる学校臨床から生み出されていた氏独自のPCAグループやPCAGIPといった実践や個人々人を大切にするという哲学に裏打ちされたグループ観、組織観（これがまさにパーソンセンタード・アプローチの視座といえよう）からの学校臨床がいきいきと立ち現れてくる良書である。

### A.書籍

1. 村山正治 2020 スクールカウンセリングの新しいパラダイム—パーソンセンタード・アプローチ、PCAGIP、オープンダイアローグ— 遠見書房
  - 第1章 スクールカウンセリングのパラダイム論
  - 第2章 パーソンセンタード・アプローチとオープンダイアローグの出会いから生まれてきたもの—21世紀のあたらしい心理臨床のパラダイムを求めて
  - 第3章 学校におけるPCAグループの実践と展開
  - 第4章 グループワークとしての新しい事例検討：PCAGIP法入門
  - 第5章 心理臨床家養成における実践家—科学者モデルはうまく機能しているか
  - 第6章 連携をキーワードにみるSC事業の新しい展開への序曲的メモ
  - 第7章 いじめの予防：ポジティブフィードバックの意義—PCAグループからのアプローチ
  - 第8章 新しいスクールカウンセラー：チーム学校をめぐる
  - 第9章 スクールカウンセラーの創成期から未来に向けて

### B.研究論文

1. 南陽子・村山正治・並木崇浩 2020 第3回PCAGIPネットワーク大会シンポジウム—PCAGIP法・ファシリテーター論・実践上の工夫— 東亜大学大

学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 107-121.

企画者 (村山正治・並木崇浩・南陽子)

話題提供者 (渡辺隆・押江隆・岩淵匡彦・南陽子)

指定討論者 (兒山志保美・小野真由子)

2. 成田有子・村山正治 2020 PCAGIPとテール 東亜大学大学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 97-106.
3. 杉浦崇仁・村上恵子・吉田由美・古野薫・北田朋子・中山幸輝・吉持慕香・村山正治 2020 「PCAグループ」及び「PCAGIP法」に関する文献リスト (2019) 東亜大学大学院総合学術研究科「東亜臨床心理学研究」, 19, 123-132.

### C.学会発表

1. 日本人間性心理学会 (第39回大会) 2020 大会準備委員会企画シンポジウム：新型コロナウイルス状況下での人間性心理学の実践 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 22.  
話題提供者 (三國牧子・堀尾直美・下田節夫)
2. 日本心理臨床学会第39回大会 2020 教育・研修委員会企画シンポジウム：事例検討会を再検討する—ケースカンファレンス再考— 日本心理臨床学会第39回大会発表論文集, 8.  
シンポジスト (嘉嶋領子・村山正治・山本力)  
指定討論者 (岩倉拓・元永拓郎)  
座長 (横山知行・吉川真理)
3. 日本人間性心理学会第39回大会 2020 自主シンポジウム：人間性 (心理学) と宗教性の交差をめぐって—科学技術の時代に宗教性は何であり得るか?— 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 35.  
話題提供者 (飯嶋秀治・村里忠之・高橋寛子・吉良安之・森岡正芳)
4. 小野京子 2020 大会主催ワークショップ：表現アートセラピーの様々な場面での適用 (臨床、教育、産業領域) 日本人間性心理学会第39回大会プログラム・発表論文集, 28.

### D.翻訳

[該当文献なし]

### E.海外文献紹介

[該当文献なし]

### F.書評

[該当文献なし]

## 付：同リスト（～2019）「第Ⅳ部：その他」の追録

### A.書籍

〔該当文献なし〕

### B.研究論文

1. 池見 陽 2019 表現のセンスとギヴスの創造的な出会い～体験過程とアートの相互作用をめぐって～ 臨床描画研究, 34, 64-85. 北大路書房.
2. 村山正治 2009 グループワークとしての新しい事例検討：PCAGIP法入門 子どもの心と学校臨床, 3, 遠見書房.
3. 筒井優介 2015 夢PCAGIPの試み：グループにおける相互作用の活用 関西大学臨床心理専門職大学院紀要「サイコロジスト」, 5, 73-81.

### C.学会発表

〔該当文献なし〕

### D.翻訳

〔該当文献なし〕

### E.海外文献紹介

〔該当文献なし〕

### F.書評

〔該当文献なし〕

## 統計

2020年に発行された文献、及び追録された文献を先述の坂中（2004）に従い分類した。その結果を以前のデータと共にTableに示した。2020年に公刊された関連文献は74篇（「来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング」10篇、「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」45篇、「ベーシック・エンカウンター・グループ」15篇、「その他」4篇）であった<sup>3</sup>。

よって、これまでに日本で公刊された関連文献は8319篇（「来談者中心療法・パーソンセンタード・カウンセリング」3599篇、「体験過程療法・フォーカシング指向心理療法」2436篇、「ベーシック・エンカウンター・グループ」1899篇、「その他」385篇）となった。

---

<sup>3</sup> 学会発表は合計に含まれていない。



お願い

リストに収録した文献の記述上の誤りを見つけられた方、また、該当する文献を執筆された方、もれている文献を御存知の方は、筆者まで御連絡願えれば幸いです。

連絡先 〒466-8673 愛知県 名古屋市昭和区山里町18  
南山大学 人文学部 坂中正義  
E-mail:sakanaka@nanzan-u.ac.jp  
Fax: 052-832-3110 (ダイヤルイン) 3955

Table 日本におけるバージョンセンタード・アプローチに関する発行文献数 (2021.02.12現在)

	50-54	55-59	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95-99	00-04	05-09	10-14	2015	2016	2017	2018	2019	2020	合計	
来談者中心療法	2	7	13	35	14	15	13	9	20	15	8	14	4	6	1	3	1	2	0	182	
バージョンセンタード・カウンセリング	3	5	9	27	47	43	48	20	111	118	53	35	44	1	0	0	2	2	2	570	
書籍：章	0	0	0	1	2	9	19	15	3	11	13	15	8	8	1	2	2	2	0	111	
論文：特集	0	5	91	68	67	114	149	229	186	317	348	281	252	46	17	37	22	16	6	2251	
論文：一般	1	3	3	8	5	1	3	4	1	0	10	12	4	0	0	0	0	0	0	55	
翻訳：単行本	0	0	41	106	3	6	8	7	6	13	59	1	6	1	0	0	0	0	0	257	
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	8	2	7	3	1	0	3	1	28	
海外文献紹介	0	0	1	2	0	2	9	4	6	15	13	57	22	3	0	5	2	3	1	145	
書評	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	9	11	2	3	3	3	3	2	1	48	
参考：発表	0	5	28	19	9	16	2	4	18	21	38	27	45	5	3	13	2	10	6	271	
参考：シンポジウム																					
合計 (学会発表は除く)	6	20	158	247	138	190	249	288	334	489	506	423	342	72	22	48	29	28	10	3599	
体験過程療法	0	0	0	0	0	0	2	0	3	8	6	8	5	3	3	0	0	1	0	40	
フォーカシング指向心理療法	0	0	0	0	2	5	4	5	17	37	18	7	29	0	0	0	0	2	0	126	
(含：体験過程の基礎概念)	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	5	21	2	0	0	3	2	0	0	37	
論文：特集	0	0	0	0	1	24	66	99	130	191	401	373	363	70	71	82	75	51	32	2029	
論文：一般	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	5	8	3	0	2	0	0	0	26	
翻訳：単行本	0	0	2	5	2	7	8	3	2	1	5	5	12	2	4	5	2	2	1	71	
翻訳：章	0	0	0	0	1	0	0	2	1	1	0	1	2	0	0	1	1	2	0	12	
海外文献紹介	0	0	0	0	1	0	1	0	5	6	16	21	13	17	5	8	2	0	0	95	
書評	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3	3	6	17	2	5	4	3	3	0	53	
参考：発表	0	0	0	0	0	5	11	28	41	41	45	60	139	117	4	14	32	5	10	564	
参考：シンポジウム																					
合計 (学会発表は除く)	0	0	2	7	6	37	81	116	159	266	461	436	433	80	88	93	88	71	45	2436	
バージョン・エンカウンター・グループ	0	1	0	1	0	1	2	1	4	3	2	4	6	2	0	0	1	0	1	29	
(含：グループカウンセリング)	0	0	1	1	4	19	16	15	30	29	14	4	10	1	0	0	1	1	0	146	
書籍：章	0	0	0	0	0	3	0	1	8	1	4	2	0	1	0	0	0	0	1	21	
論文：特集	0	0	3	0	37	121	247	206	283	155	216	145	113	36	8	19	13	14	13	1629	
論文：一般	0	0	0	0	0	3	4	2	0	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0	14	
翻訳：単行本	0	0	0	0	0	1	2	0	1	2	4	4	0	0	0	0	0	0	0	14	
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
海外文献紹介	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	44	
書評	0	0	0	0	2	0	1	2	13	3	6	7	5	4	1	0	0	0	0	28	
参考：発表	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	7	3	6	6	7	2	2	2	1	29	
参考：シンポジウム																					
合計 (学会発表は除く)	0	1	4	2	46	149	270	226	339	195	247	169	134	44	9	19	15	15	15	1899	
その他	0	0	0	4	2	2	0	0	3	1	5	7	7	2	1	0	0	0	0	1	35
(教育・経営など)	0	0	0	2	0	2	0	2	5	6	3	1	11	1	0	0	0	0	0	31	
書籍：章	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	5	
論文：特集	0	0	4	1	6	13	19	10	25	13	45	39	52	9	2	7	10	7	2	264	
論文：一般	0	0	0	0	1	1	0	3	1	0	3	1	1	1	0	0	0	0	0	12	
翻訳：単行本	0	0	0	4	1	0	1	0	1	0	9	0	1	0	0	0	0	0	0	17	
翻訳：章	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2		
海外文献紹介	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	5	2	4	3	1	2	0	0	0	19	
書評	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	6	0	2	1	2	1	18	
参考：発表	0	0	4	13	10	15	26	12	34	20	70	50	78	16	5	9	10	9	4	385	
参考：シンポジウム																					
合計 (学会発表は除く)	6	21	168	269	200	391	626	642	866	970	1284	1078	987	212	124	169	142	123	74	8319	
総計																					

注) データは坂中による一連の「日本におけるバージョンセンタード・アプローチに関する文献リスト」シリーズによった。

## ■ 2020年度人間関係研究センター事業報告

(2020年4月～2021年3月)

### I. センター員構成

#### [センター員]

中村和彦	(人文学部心理人間学科教授・センター長)
青木 剛	(人文学部心理人間学科講師)
畑山知子	(体育教育センター准教授)
池田 満	(人文学部心理人間学科准教授)
伊東留美	(人文学部心理人間学科准教授)
楠本和彦	(人文学部心理人間学科教授)
森泉 哲	(国際教養学部国際教養学科教授)
中尾陽子	(経営学部経営学科准教授)
大塚弥生	(教職センター准教授)
坂中正義	(人文学部心理人間学科教授)
土屋耕治	(人文学部心理人間学科講師)
宇田 光	(教職センター教授)

#### [公開講座担当者及び外部講師]

石田裕久	(南山大学名誉教授)
長濱文与	(三重大学教養教育院准教授)
大島利伸	(南山大学附属小学校教諭)
和田珠実	(中部大学人間力創成総合教育センター准教授)

#### [事務局]

藤田嘉子 山本佐知子 齋藤尚美 富安 南

## II. 活動報告

### ①人間関係研究センター定期研究会

〈第1回〉

日 時：2020年4月15日（水）15：00～

場 所：オンライン開催

ラウンドテーブル形式

題 目：本の構成を検討する

〈第2回〉

日 時：2020年7月13日（月）17：00～

場 所：オンライン開催

ラウンドテーブル形式

題 目：人間性豊かなオンラインでの学びの実現に向けて

〈第3回〉

日 時：2021年1月19日（火）17：00～

場 所：オンライン開催

ラウンドテーブル形式

題 目：ラボラトリー方式の体験学習の理論化に向けて

〈第4回〉

日 時：2021年3月15日（月）10：00～

場 所：オンライン開催

ラウンドテーブル形式

題 目：体験学習の基本概念について

### ②人間関係研究センター公開講演会

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、開催中止

### ③人間関係研究センター公開講座

**[コア講座]**

#### **第4回人間関係講座〈ベーシック〉[秋]**

開催期間：2020年10月4日（日）10：00～17：00

場 所：オンライン（Zoom）開催

参加者：18名

担当者：中尾陽子、池田 満

### 第114回人間関係講座（グループ）【冬】

開催期間：2021年1月11日（月）13：00～16：00

2021年1月23日（土）13：00～17：00

2021年1月24日（日）13：00～17：00

2021年2月5日（金）13：00～16：00

場 所：オンライン（Zoom）開催

参加者：22名

担当者：中村和彦、森泉 哲

### 第115回人間関係講座（コミュニケーション）

開講期間：2020年10月17日（土）10：00～18：00

2020年10月18日（日）9：00～17：00

場 所：オンライン（Zoom）開催

参加者：10名

担当者：伊東留美、大塚弥生

### 第1回グループプロセス・ファシリテーション

開講期間：2020年8月29日（土）10：00～18：00

2020年8月30日（日）10：00～18：00

2020年9月19日（土）10：00～18：00

2020年9月20日（日）10：00～18：00

場 所：オンライン（Zoom）開催

参加者：12名

担当者：中村和彦、土屋耕治

### 第11回組織開発ラボラトリー

#### 「クリア・リーダーシップ」

開講期間：2021年2月17日（水）9：00～13：00

2021年2月21日（日）9：00～13：00、14：00～15：00

2021年2月25日（木）9：00～13：00

2021年2月28日（日）9：00～13：00、14：00～15：00

2021年3月3日（水）9：00～13：00

2021年3月7日（日）9：00～13：00、14：00～15：00

2021年3月10日（水）9：00～13：00

2021年3月14日（日）9：00～13：00

2021年4月17日（土）9：00～13：00（フォローアップ）

場 所：オンライン（Zoom）開催

参 加 者：14名

担 当 者：ジャーヴァス・ブッシュ

[新型コロナウイルスのため、中止となった講座]

第3回人間関係講座（ベーシック）[春]

第113回人間関係講座（グループ）[夏]

Tグループ〔人間関係トレーニング〕

体験学習ファシリテーション〈アドバンス〉

協同学習ワークショップ〈ベーシック〉

協同学習ワークショップ〈アドバンス〉

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈ベーシック〉

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈アドバンス〉パー

ソンセンタード・リスニング

パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ ベーシック・エ

ンカウンター・グループ

ボディワーク・セミナー

## ■社会人公開講座／参加者統計（2020年度）

講座名	場所	担当者	期間	時間	曜日	参加者数	年代					
							20代	30代	40代	50代以上	無回答	
前年度までの総計						8,856	1,903	2,278	2,712	1,757	206	
コア講座	第3回人間関係講座（ベーシック）	中止	池田・土屋	2020/5/9	10:00～17:00	土	—	—	—	—	—	
	第4回人間関係講座（ベーシック）	オンライン	中尾・池田	2020/10/4	10:00～17:00	日	18	2	2	3	11	0
	第113回人間関係講座（グループ）	中止	楠本・中尾	2020/7/4、7/5	10:00～18:00 9:00～17:00	土日	—	—	—	—	—	
	第114回人間関係講座（グループ）	オンライン	中村・森泉	2021/1/11、1/23、 1/24、2/5	13:00～16:00 13:00～17:00 13:00～17:00 13:00～16:00	月 土 日 金	22	2	3	9	8	0
	第115回人間関係講座（コミュニケーション）	オンライン	伊東・大塚	2020/10/17、10/18	10:00～18:00 9:00～17:00	土日	10	1	1	2	6	0
	Tグループ	中止	楠本・中村	2021/3/2～3/7	5泊6日		—	—	—	—	—	
	グループプロセス・ファシリテーション	オンライン	中村・土屋	2020/8/29、8/30、 9/19、9/20	10:00～18:00	土日	12	0	0	4	8	0
	体験学習ファシリテーション〈アドバンス〉	中止	楠本	2021/2/14～2/17	3泊4日		—	—	—	—	—	
	第11回組織開発ラボラトリー	オンライン	ジャーヴェス	2021/2/17、2/21、 2/25、2/28、3/3、 3/7、3/10、3/14、 4/17	9:00～13:00 14:00～15:00 (2/21、28、3/7のみ)	水 木 土 日	14	0	1	5	8	0
関連講座	協同学習ワークショップ〈ベーシック〉	中止	石田・和田	2020/8/22、8/23	10:00～16:00	土日	—	—	—	—	—	
	協同学習ワークショップ〈アドバンス〉	中止	石田・長濱	2020/11/7、11/8	10:00～16:00	土日	—	—	—	—	—	
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈ベーシック〉	中止	坂中 青木 大島	2020/5/23、5/24	10:00～17:00 9:30～17:00	土日	—	—	—	—	—	
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ〈アドバンス〉パーソンセンタード・リスニング	中止	坂中 青木 大島	2020/10/24、10/25	10:00～17:00 9:30～17:00	土日	—	—	—	—	—	
	パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップベーシック・エンカウンター・グループ	中止	坂中 青木 大島	2020/8/11～8/13	2泊3日		—	—	—	—	—	
	ボディワーク・セミナー	中止	畑山	2020/9/26、9/27、 10/10、10/11	10:00～17:00	土日	—	—	—	—	—	
2020年度合計						76	5	7	23	41	0	
総計						8,932	1,908	2,285	2,735	1,798	206	

※参加者総数は、前身である南山短期大学人間関係研究センター公開講座（1977年～）参加者との累計で表示されています（人数は修了者数）。

## 2018～2020年度 コンサルテーション及び受託事業

(順不同)

研修・講座・企画名等	委託者・主催者
<b>2018年度</b>	
eラーニング教員免許状更新講習	一般社団法人教員育成研究機構
生徒指導連絡協議会第2回研修会	愛知県北設楽郡小中高等学校生徒指導連絡協議会
平成30年度東海地区公立小中学校学校事務研究会 学校事務研修会	東海地区学校事務研究会
50周年記念全国公立小中学校学校事務研究大会（千葉大会）	50周年記念全国公立小中学校学校事務研究大会（千葉大会）実行委員会
平成30年度静岡県教育研究会研究部 拡大研究推進委員会	静岡県教育研究会研究部
パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ ベーシックコース	人間性心理学会中部部会
パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ 清里ベーシック・エンカウンター・グループ	パーソンセンタード・アプローチ研究所
パーソンセンタード・アプローチのさらなる発展のための対話	日本心理臨床学会第37回大会
ランチョンセミナー：PCA、はじめの一步	日本人間性心理学会第37回大会
現職教育・心理教育 「パーソンセンタード・アプローチの視点から現職教育・心理教育を考えるープログラム構成のポイントー」	愛知県臨床心理士会SC部会
子育て支援グループ	南山大学附属小学校
PCAネットワーク東海 セルフヘルプグループ	PCAネットワーク東海
第2回PCAケースカンファレンス	PCAネットワーク東海
第5期企業内「組織開発（OD）」推進者養成コース	関西生産性本部
組織開発論	慶應丸の内シティキャンパス
ODNJ組織開発基礎講座	OD Network Japan
人間関係づくりトレーニンググループワークを通して私の関わり方を学ぶー	愛知県総合教育センター
<b>2019年度</b>	
中学生の学習支援事業運営責任者研修会「生徒への個別対応ー解決焦点化アプローチの立場から」	名古屋市
eラーニング教員免許状更新講習（選択領域）	一般社団法人教員育成研究機構
子育て支援グループ	南山大学附属小学校
PCAネットワーク東海 セルフヘルプグループ	PCAネットワーク東海
PCAケースカンファレンス	PCAネットワーク
パーソンセンタード・アプローチのさらなる発展のための対話	日本心理臨床学会第38回大会



研修・講座・企画名等	委託者・主催者
子育て支援講演会「傾聴の心理学—人間の尊厳のために—」	南山大学附属小学校
パーソンセンタード・アプローチ・ワークショップ はじめの一步	日本人間性心理学会第38回大会
心理臨床からの「こころ」へのアプローチ—さまざまな心理療法—パーソンセンタード・アプローチ	愛知県臨床心理士会研修部会
PCA乗鞍	人間関係研究会
平成31年度学級づくりに生かす教育相談講座	愛知県総合教育センター
教育相談基礎講座（教育臨床相談研修会）	名古屋市教育センター
愛知県総合教育センター看護科講座（高等学校看護科10年研）	愛知県総合教育センター
組織開発事例講座	OD Network Japan
組織開発基礎講座	OD Network Japan
組織開発論	慶應丸の内シティキャンパス
環境への働きかけの可能性—組織開発の観点から—	キャリアコンサルティング協議会
人間関係づくりトレーニング—グループワークを通して私の関わり方を学ぶ—	愛知県総合教育センター
<b>2020年度</b>	
組織開発論	慶應丸の内シティキャンパス
組織開発基礎講座	OD Network Japan
企業内「組織開発（OD）」推進者養成コース	関西生産性本部
子育て支援グループ	南山大学附属小学校
PCA Network カンファレンス	PCA Network
PCA Network 東海	PCA Network
南山大学フォーカシング研究会	南山大学フォーカシング研究会
子どもとかかわる専門職のためのフォーカシング研究会	子どもとかかわる専門職のためのフォーカシング研究会
愛知県看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル組織管理論Ⅱ 組織マネジメントの実際 組織の意思決定	愛知県看護協会
愛知県看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル組織管理論Ⅱ 組織マネジメントの実際 組織の変革	愛知県看護協会

# 南山大学人間関係研究センター規程

**第1条** 本学に南山大学人間関係研究センター〔Center for the Study of Human Relations〕（以下「センター」という）を置く。

（目的）

**第2条** センターは、広く学際的視野にたった人間関係研究を行い、その成果を積極的に公表するとともに、公開講座などの実践を通して、人間性豊かな社会の実現に貢献することを目的とする。

（事業）

**第3条** 前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

- 1 本学における人間関係研究の推進と調整
- 2 本学における人間関係研究分野の教育の推進
- 3 センターと目的を共通する学外の研究機関ならびに研究者・実務家との協力
- 4 研究会、公開講座、公開講演会等の開催
- 5 文献、資料の収集と利用
- 6 研究成果等の編集と刊行
- 7 その他センターの目的を達成するために必要と認める事業

（組織）

**第4条** センターに研究員を置き、そのうち1名をセンター長とする。

② センター長は、研究員のうちから学長の推薦する候補者について、大学評議会の議を経て、学長が委嘱する。

③ 研究員は、本学専任教育職員のうちから、学長が推薦する候補者について、大学評議会の議を経て、学長が委嘱する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

④ 必要に応じて、客員研究員、非常勤研究員を置くことができる。この採用については、別に定める。

**第5条** センター長は、センターの事業を掌理し、センターを代表する。

（センター会議）

**第6条** センターにセンター会議を設け、センターの運営に関する重要事項を協議決定する。

**第7条** センター会議は、次の者をもって組織する。

- 1 センター長
- 2 研究員のうちからセンター長の指名する者若干名

**第8条** センター会議は、センター長が招集する。

② センター会議は、構成員の3分の2以上の出席がなければ議事を行うことができない。

③ 議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

（事務）

**第9条** センターに事務職員を置く。事務職員は、センター長の指示をうけてセンターの事務を担当する。

(規程の改廃)

**第10条** この規程の改廃は、センター会議および大学評議会の議を経て、学長の承認を得なければ  
ならない。

附 則

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2006年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程の改正は、2016年10月1日から施行する。

## 編集規程

1. 本誌「人間関係研究」は、南山大学人間関係研究センター（以下、本センターと略記する）が編集し刊行する紀要であり、当面の間、1年に1号を発行する。本誌の英文表記は、“The Nanzan Journal of Human Relations”とする。
2. 本誌は、本センターの研究成果等を広く一般に紹介することを目的とする。
3. 本誌には、特集論文、Article、研究ノート、実践報告、実習集、資料の他、研究会・講演会等の報告などを掲載する。
4. 特集論文、Article、研究ノート、実践報告、実習集、資料は、本センターから寄稿を依頼する依頼論文と、本センター研究員からの投稿論文から構成される。Article、研究ノート、実践報告に関しては、本センター研究員以外の国内外の大学、公的機関または民間の組織に所属する研究者（大学院生も含む）も投稿することができる。
5. 本センター研究員以外の者が本誌に投稿する場合は、本センターの依頼した審査者2名による審査を経て掲載の可否を決定する。ただし、依頼論文はこの限りではない。
6. 本センター研究員からの特集論文及びArticleに対する投稿論文に、「査読あり」と「査読なし」の2つのカテゴリーを設ける。投稿の際にいずれかを選択し、「査読あり」の論文は査読対象とし、本センターの依頼した審査者2名による審査を経て掲載の可否を決定する。
7. 審査が必要な投稿論文は発行年度の10月末日を締め切りとする。提出は本センター事務局とする。依頼論文ならびに査読を行わない論文は発行年度の1月15日を締め切りとする。
8. 審査が必要な投稿論文の筆頭著者としての投稿数は、原則として1号に対し1人1件とする。ただし、本センター研究員はこの限りではない。
9. 本誌に掲載する論文等は、原則として未公開のものとする。
10. 社会通念としての倫理に抵触するような内容、表現を含むものは、これの掲載を認めない。
11. 本誌に掲載された論文等の著作権は、本センターに帰属する。
12. この規程の改正は、センター会議の議を経て行う。

### 附則

この規程は、2009年10月14日から施行する。

### 附則

この規程の改正は、2015年4月1日から施行する。

### 附則

この規程の改正は、2016年7月21日から施行する。

### 附則

この規程の改正は、2018年10月18日から施行する。

編集委員 森泉 哲・坂中正義・池田 満・青木 剛

表紙デザイン 濱本博司

---

人間関係研究 第20号  
2021年3月31日 発行

発行所 南山大学人間関係研究センター  
代表者 中村 和彦

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18番地

電話 (052) 832-5002

FAX (052) 832-3202

印刷所 ウサミ印刷株式会社

名古屋市西区児玉一丁目10番7号

電話 (052) 522-2361 (代表)